

博士学位論文

王安憶の都市小説
— 上海へのトポフィリア —

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

国際多元文化専攻

杉江 叔子

平成23年3月

「王安憶の都市小説——上海へのトポフィリア——」

目次

序章	1
----------	---

第一部 王安憶について

第1章 先行研究について

1 日本での先行研究	7
2 中国での先行研究	14
注	20

第2章 王安憶について

1 王安憶の生い立ち	21
2 作家になって	24
3 王安憶の転機	26
4 王安憶が描く都市	30
5 王嘯平	32
6 茹志鵬	34
注	38

第二部 王安憶のトポフィリア

第1章 『香港的情与愛』

1 はじめに	46
2 老魏の「臨時の家」	47
2.1 老魏の「臨時の家」	47
2.2 香港とサンフランシスコ	48
2.3 凱弟	49
3 「臨時の家」の引っ越し	50
3.1 逢佳	51
3.2 北角の「臨時の家」	52
4 老魏の「香港の家」	54
4.1 老魏とアメリカ	54

4.2 逢佳とオーストラリア	55
5 小結	57
5.1 老魏のトポフィリア	57
5.2 香港と上海	58
注	60

第2章 『長恨歌』

1 はじめに	64
2 弄堂の歴史	65
3 王琦瑶と弄堂	66
4 愛麗絲マンション	70
5 鄔橋	73
6 平安里	79
7 小結	84
注	87

第3章 『富萍』

1 はじめに	95
2 外来移民の歴史	96
2.1 租界の誕生	96
2.2 移民の歴史	97
3 上海人と外来移民	100
3.1 上海人	100
3.2 外来移民	101
3.2.1 南下幹部	101
3.2.2 保姆	103
3.2.3 埠頭苦力と棚戸区	106
3.3 『悲慟之地』と『好婆和李同志』	107
3.3.1 『悲慟之地』	108
3.3.2 『好婆和李同志』	110
3.4 上海人と外来移民	113
4 『富萍』	113
4.1 奶奶、そして李天華との断絶——蘇北から淮海路へ——	113

4.2 舅舅を探しに——淮海路から閘北区へ——	116
4.3 母子との出会い——閘北区で見つけた梅家橋——	121
5 小結	122
注	124

第4章 『我愛比爾』

1 はじめに	133
2 阿三と二つの西洋の邂逅	134
2.1 ビル	134
2.2 浦東新区	136
2.3 マルタン	138
2.4 阿三と二つの西洋の邂逅	139
3 阿三の脱獄	140
3.1 白茅嶺労改	140
3.2 阿三の脱獄——阿三が脱獄に携えた500元——	141
4 阿三のノスタルジア	144
4.1 阿三のノスタルジア——柏樹の意味すること——	144
4.2 王琦瑤の最期——映画撮影所の記憶——	146
4.3 『我愛比爾』と『長恨歌』の結末	149
5 小結	150
注	151

終章	156
----	-----

付論

1 王安憶『長恨歌』——ユゴー『ノートル=ダム・ド・パリ』の影響を中心として	161
2 インタビュー	169
3 地図	176

参考文献	198
------	-----

序章

本論の目的

トポフィリアとは、「場所愛」と日本語では訳される。地理学者イーファー・トゥアン¹によって提示された地理学の概念である。トポフィリアという言葉は、ガストン・バシュラールが『空間の詩学』の中で「幸福な空間のイメージ」に対する自分の研究をフランス語で“topophilie”「場所への愛」と名づけたのが始まりで、これをトゥアンが英語で“topophilia”と訳した造語である²。トゥアンはトポフィリアを、場所や環境と人間との情緒的なつながりをすべて含む言葉として解釈した。この情緒的なつながりは、結びつきの強さも、表現方法もさまざまであるが、トポフィリアが我々の心を動かす時、場所は感情に満ちた出来事を担い、あるいは象徴として知覚される³。

現実には我々は、特定の場所に否応なく関係しており、そこには自分の意志ではどうすることもできない感情がともなう場合もあるが、それとは反対に、自分の意志によって特定の場所が親密な場所となる場合もある。ならば、親密な場所とは具体的にどのような場所を指すのか。それは、自分の家であったり、故郷の町であったり、ノスタルジアを感じる過去の思い出であったり、個人的に解釈は異なる。しかし、親密な場所とは、特定の空間に親密で個人的な経験が結びついているところであることは確かであろう。エドワード・レルフは、特定の場所に根付くためには、その場所に深い精神的な愛着をもつことの重要性を説いている。

F・デーヴィスは、ノスタルジアを特別な性質のしみ込んだ過去である⁴と述べている。ある過去の出来事に対して、人が肯定する心情に満たされる時、あるいは、特別な好意的で感情的な想いが重なる時、単なる過去の出来事は懐かしさの感情をともなうノスタルジアとなると解釈することができる。

本論で扱う王安憶は、1954年に生まれ、一歳になった1955年、作家である母の茹志鵬の中国作家協会上海分会への転属にともない上海に転居した。王安憶は十五歳の1970年春から1972年秋まで安徽省蚌埠市五河县での下放生活と、1972年江蘇省徐州地区の文工団に移ってから1978年に上海に戻る約8年間を除いて、これまでの生涯のほとんどを上海で過ごしている。1978年上海に戻ると、王安憶は母と同じ作家として生きていくことを決意し、本格的に活動をはじめた。後に王安憶は、安徽省蚌埠市五河县の農場での体験を「そこでの生活は十

年にも二十年にも感じられた。」⁵と回想している。そして、「そこ（杉江注：安徽省蚌埠市五河县）での生活は私の人生で最も暗く、私は戻る気力もなかった。」⁶と発言していることから、農村での生活が非常に苦しい体験であったと推測することができる。葛城明子、荒木猛は「王安憶が生活を意識するようになったのは、農村に行ってから、生活の中に美しいものを認めることができるようになったのが、文工団に行ってからであり、その生活体験を『小院瑣記』に綴った。上海に帰ってから、生活の中に美しいものを求めようとして書いた作品が、さしずめ『雨、沙沙沙』⁷であると指摘している。つまり、上海を離れたこと、下放先での過酷な体験によって、王安憶にとって上海という場所が今までよりも思い出が詰まった親密な場所となったのではなかろうか。その一方、王安憶は南下幹部の家庭に育ったが故に、いつまでも自分が上海では外来移民であるという意識を、長年持ち続けてきた。外来移民には身分の違いこそあれ、王安憶が観察してきた、外来移民が上海人の偏狭さや差別に耐えていく姿を描いた『悲慟之地』と『好婆和李同志』は、『富萍』の布石となった作品であるといえる。

本論では、上海と王安憶、上海と作品に描かれる登場人物やその背景との情緒的なつながりを、王安憶の4編の都市小説『香港的情与愛』『長恨歌』『富萍』『我愛比爾』を通して、王安憶のトポフィリアという概念で論じていくことを主たる目的とする。なお、王安憶の意志によって、上海が親密な場所であることが前提にある。その背景にあるのは、王安憶が上海を離れた経験であり、上海に暮らしていても、自分は外来移民であると自覚していた生い立ちであり、作家となって小説の舞台として上海を選び、描き続けるという上海への愛着である。1992年に発表した『香港的情与愛』は、香港が舞台であるが、王安憶が都市を描く姿勢を見せたことで注目された作品である。その後、上海を舞台にした一連の小説『長恨歌』や『我愛比爾』、『富萍』を世に送り出すと、王安憶は「都市を描く作家」としての地位を確固たるものとした。李欧梵は、特に王安憶の作品の中でも『長恨歌』を高く評価し⁸、上海を描いたら王安憶に勝る作家はいないと述べている。

論文の構成

本論は全体を二部構成とし、本論の前後に序章と終章を付し、最後に付論で

結ぶ。

第一部では、主に王安憶の生い立ち、作家としての軌跡について述べる。第1章では、王安憶に関するこれまでの先行研究について、日本と中国にわけて論じる。日本での先行研究については、特に本論で扱う作品について詳しく述べたい。中国の最近の先行研究は、王安憶の「作家としての姿勢」を論じるか、「都市を描く作家」として論じる研究が多い。各作品についての論文は、各章で分析するので、ここでは、扱わなかった論文をいくつかあげるにとどめる。

第2章では、王安憶の生い立ちについて説明する。王安憶は現代の中国文学界を代表する1954年生まれの上海在住の作家である。父は劇作家の王嘯平であり、母は著名な作家である茹志鵬である。ここでは、王安憶が育ってきた環境が作品に描かれる場所に深く関係していることから、その環境の変遷を詳しくたどり王安憶の来歴を追っていききたい。そして、王嘯平と茹志鵬の来歴をあわせて、王安憶が両親からどのような影響を受けて成長したのかを論述したい。

第二部では、都市小説4編『香港的情与愛』『長恨歌』『富萍』『我愛比爾』を通して、王安憶の上海への愛着をトポフィリアの概念から検討し、作品の中にいかに表象されたのかを明らかにすることを目的とする。

第1章『香港的情与愛』では、最初に、老魏が生まれ育ったサンフランシスコと老魏が時々訪れる香港が、ともに移民の都市であることを確認する。そして、老魏の香港における「臨時の家」の変遷をたどりながら、彼が香港で知り合った二人の女性との関係をふまえて、老魏の「臨時の家」が最終的に彼の理想とした「香港の家」となりえたのか否かを、トポフィリアをキーワードに論じる。最後に、老魏の「臨時の家」と「香港の家」に託された王安憶の意図を解釈し、『香港的情与愛』がその後の王安憶の作品にどのような影響を与えたのかを述べたい。王安憶は『香港的情与愛』の中で、老魏の香港へのトポフィリアを掲げたが、王安憶自身のトポフィリアを描き出すことはできなかった。『香港的情与愛』以降の作品においては、王安憶は小説の舞台に上海を設定し意欲的に描いていくことになる。

『長恨歌』は一見、上海弄堂に生きる、主人公・王琦瑶の一生を表しているようにみえるが、王安憶は王琦瑶を上海弄堂の象徴としてとらえ、上海という都市の隠喩としての役割を担わせたのである。第2章『長恨歌』では、従来の解釈をふまえた上で、まず王琦瑶と弄堂との関係について述べたい。弄堂は上海という都市の生命として、上海という都市が存在し発達する基礎になっている

る。弄堂に集まったのはごく普通の市民であり、彼らこそ都市の根源であり精髓である。上海の歴史の変遷を経験した弄堂は、過去と現在の上海の結合点でもあり、この都市の底辺を形作る存在そのものである。続いて、王琦瑶の生活の拠点であった李主任に与えられた愛麗絲マンション、精神の療養のために王琦瑶が滞在した鄔橋、再生することを決意して戻った上海の平安里について順に論じる。最後に、王安憶が王琦瑶を通して、都市・上海の変遷を描き出した理由を提示したい。王安憶は『長恨歌』の中で、王琦瑶の生きる時代の終わり、王琦瑶の死を上海弄堂の消失に重ね合わせ、主人公・王琦瑶を通して上海という都市の経験を表象したのである。これ以降、上海へのトポフィリアは王安憶の作家活動の中で、不変の確固たる精神となったといえる。

第3章『富萍』ではまず、移民の歴史について租界の誕生を前提にその経緯を説明する。そして、『富萍』に登場する外来移民について「上海人」の概念とともに確認する。外来移民については、南下幹部、出稼ぎが目的である保姆、棚戸区に暮らしていた『富萍』の舅舅のような埠頭苦力をはじめ、各種の車夫、女工、幼年工等である都市雑業層に属する人びとを例にあげる。加えて、王安憶が『富萍』の前に上海あるいは上海人と外来移民の葛藤を描いた作品として、『悲慟之地』と『好婆和李同志』の二編について分析したい。最後に『富萍』の作品分析を試みる。『富萍』に登場する蘇北出身の外来移民は、それぞれ上海で異なった生き方を選択している。ここでは、富萍と奶奶に焦点を絞り、富萍の上海での生活拠点の変遷をたどりながら、奶奶と富萍の家をめぐる考え方の違いを明らかにし、二人の外来移民が最終的にどこに自分の根付く場所を求めたのかを「市中心——周縁」をキーワードとして考察する。富萍の上海での生活拠点は「蘇北から淮海路」「淮海路から閘北区」「閘北区から梅家橋」と分けて分析していく。

最後に第4章として『我愛比爾』について論じる。従来の『我愛比爾』研究は、王安憶が近代化に向かう中国に阿三を喩え、阿三が「政治上の西洋」の象徴であるビルと、「文化意義上の西洋」の象徴であるマルタンに認められなかった悲劇を描いたという見解で統一されてしまい、この域を出る解釈は現われなかった。本章では、このような従来の解釈をふまえた上で、改めて阿三とビルとマルタンとの関係を再解釈し、阿三の上海での生活の拠点をたどり、阿三がビルと連絡が途絶えた後も、絵を描き続けた場所が浦東地区であったことの意味を検討する。ビルの政治上の西洋もマルタンの文化意義上の西洋も、オリエ

ンタリズムの独りよがりの解釈であり、阿三は二人の西洋人に受け入れられることなく、破滅させられた。マルタンと別れた阿三は日ごと、ホテルで外国人とその場限りの出会いを楽しんでいたが、売春容疑で労改に送られる。ここでは、阿三が収容された白茅嶺労改について最初に説明し、阿三がなぜ労改に収容された後に脱獄するに至ったのかを論じる。加えて、これまで論じられることがなかった、作品中に合計 10 回登場する柏樹の果たす役割について、「上海——安徽省の白茅嶺労改」をキーワードとして阿三のノスタルジアについて考察する。ノスタルジアとは、過去の事物や時代に対する好意的で感傷的なまなざしや、空間的懐郷よりも時間的懐旧の念を意味するなつかしさの感情一般をさす言葉として日常に定着しつつある。一方、記憶とは、過去の経験を貯蔵あるいは保持して、なんらかの形でそれを再現して現在の経験や行動に影響を与える働きをいう。最後に、『我愛比爾』と『長恨歌』の結末を「ノスタルジア」と「記憶」をキーワードとして分析する。

本論終章では、第一部と第二部のそれぞれの論述を改めて整理し、今後の課題を考察する。なお、付論として、『長恨歌』について比較文学の観点から論じた拙稿「『長恨歌』——ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響を中心として」と 2004 年 11 月来日した王安憶に筆者が直接インタビューした内容、本論に関する地図を添える。

注

- 1 イーファー・トゥアンは、1930 年天津生まれの中国人地理学者である。父が外交官であった関係で、国外で育ち、英国のオックスフォード大学の学部、大学院修士課程を修了して、米国のカリフォルニア大学のバークレー校で博士号を取得している。いくつかの大学で教鞭をとった後、1983 年からウィスコンシン大学マディソン校の地理学の教授となり、現在に至る。
- 2 イーファー・トゥアン著 山本浩訳 1993 年 p.406。
- 3 イーファー・トゥアン著 小野有五・阿部一訳 1992 年 p.160。
- 4 F・デーヴィス著 間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳 1990 年 p.21。
- 5 佐伯慶子 1989 年 p.192。
- 6 深圳新聞網 2004 年 2 月 24 日。
- 7 葛城明子・荒木猛 1995 年 pp.147-164。
- 8 李欧梵 1999 年 pp.129-139。

第一部 王安憶について

第1章 先行研究について

1. 日本での先行研究

王安憶に関する日本の先行研究を作家論と作品論に分類し、特に本論で扱う『香港的情与愛』『長恨歌』『我愛比爾』『富萍』に関して詳しく紹介したい。

作家論に関して

高島俊男「王安憶のいる弄堂——あわせてこの美人作家のルーツについて」1986年は、王安憶のエッセイ「搬家」（初出1984年7月『城市文学』）を通して王安憶の子供の頃の弄堂の様子が述べられている。そして、小説『牆基』（初出1981年第4期『鐘山』）はフィクションであり、文化大革命の時代の上流階級と下層階級の人びとたちが弄堂で生活する姿が描かれていると論ずる。それに続いて、『我的来歴』（初出1985年第6期『上海文学』）を取り上げ、王安憶が浙江省を訪れ茹志鵬のルーツを探した体験や、王嘯平の来歴を紹介している。

釜屋修「夢追い作家の蛻変——王安憶の『小鮑莊』」1988年は、『小鮑莊』の考察の他に、『小鮑莊』を書くまでの王安憶の来歴を詳しく紹介している。『小鮑莊』については、王安憶が小鮑莊という貧しい村の仁義の集団を通して、中国革命の成功、文化大革命の虚妄と荒廃、その総括から改革への道程、それらの全てをも表層に漂わした民族の過去から未来に対する「反思」を描いたのだと考察している。

葛城明子・荒木猛「王安憶作品研究」1995年は、王安憶の1991年までの来歴と作品年表があり、1981年に発表した『雨、沙沙沙』について述べている。『雨、沙沙沙』の主人公・雯雯は王安憶自身を描いているという見解に、王安憶がこれまで歩いてきた過去を懐かしく振り返る。そして、この主人公の将来の幸福に願いをこめているのは、王安憶が文工団から上海に戻った後に平凡な日常生活の中にも美しいものを見つける姿勢が生まれたことによるものだと論じている。

松村志乃「王安憶と「尋根」」2008年は、王安憶が1983年に4ヶ月間アメリカ滞在したことが紹介されている。特に注目すべきは、王安憶の『小鮑莊』が「尋根文学」の代表的作品として位置づけられているが、これは、「尋根」創作のあり方の一部分でしかないと反論している点にある。当時の「尋根」の議論に感銘を受けた王安憶が再度自分の生活の場において命のルーツを探求し、人間が生きることや中国人としての自分の立場を掘り下げた結果、他の作家たちとは違う意識である「尋根」観を構築したことに意義があると提示し、その後の王安憶の創作する糧になったのだと論じている。

松村志乃「転換期における王安憶の文学観——『心霊世界 王安憶小説講稿』を中心に」2010年は『心霊世界』を中心に、王安憶がいかに文学者としてのアイデンティティを確立しようとしたかについて検討している。

劉小俊「王安憶の再評価——『我愛比爾』と『上種紅菱下種藕』を中心に」2007年は、王安憶が1983年アメリカで4ヶ月過ごしたことの意義を、各国の作家たちとの交流を通して、やがて中国も直面するであろう二大問題——「アイデンティティの問題」と「現代化と伝統的生存基盤との関係」について、多くの作家より一足先に認識を得ることができたと論じ、王安憶の滞在日記である『美国一百二十天』をとりあげ、王安憶の「国際創作計画」に参加した活動内容を紹介している。

最後に石井恵美子「沈之瑜と家族 ——王安憶の随筆から」2003年は、茹志鵬の長兄・沈之瑜について述べており、王安憶の母方のルーツがわかる。

作品論に関して

中山文、佐伯慶子、宮入いずみが「王安憶研究」においては先駆者であった。特に中山文は、王安憶の初期の作品である『雨、沙沙沙』、『本次列車終点』や『神聖祭壇』、フェミニズムの観点から論じた「三恋シリーズ」と呼ばれる『荒山之恋』『小城之恋』『錦繡谷之恋』についての多くの論文がある。

中山文「王安憶文学の原点——雯雯を追って」1984年は、王安憶の初期の作

品『幻影』『広闊天地的一角』『從疾駛的車窓前掠過的』『雨、沙沙沙』『一個少女的煩惱』『命運』『当長笛 solo 的時候』の主人公たちを詳細に分析している。この論文は、1978 年から 1980 年の作品の中に登場する「雯雯」は、時として名前を「小方」「桑桑」と変えても王安憶の分身であると解釈し、当時、王安憶が自分ばかりを描いて、他人を描くことができなかった創作上の欠点について言及している。1981 年以降、王安憶は自分と比較的距離の離れた人物を描くことを目指し、作品に雯雯は登場することはなくなり、王安憶の視野が変化し広がりをもせたことを提示している。

これ以外にも中山には『神聖祭壇』に関して、作品に登場する項五一の母、妻、項五一の愛人である戦卡佳の三人の女性に焦点をあてた、項五一の孤独と自立について論じた「王安憶「神聖祭壇」論——孤立と自立——」1996 年と「王安憶「神聖祭壇」の女性たち」1997 年がある。中山は、自分と向き合うことのなかった項五一が、自己の自立を拒む母、「誰も愛せないエゴイスト」である夫との関係を断念しても捨てなかった妻、最後は「自閉したエゴイスト」と項五一を見なして捨てた戦卡佳との関係を経て、最終的に「これからの行き方を自分で決める」と決意した項五一の成長物語であると作品を解釈している。

その他、「三恋シリーズ」に関する論文が三本ある。中山は「三恋シリーズ」の真価は、愛がないために不幸なのではなく、愛があってもなお不幸な女性を王安憶が描いたことにあり、現代の女性は男性に愛されさえすれば満足で幸福な人生を送ることができると考えていない。女性の人生にとって恋愛や男性が重要な部分を占めることを批判しているのではなく、それが重要な一部であっても全てではないと主張していることに意義があるのだと述べている。

佐伯慶子は『小鮑莊』の日本語翻訳を発表し、『小鮑莊』に関する論文がある。その他、『小鮑莊』執筆までの王安憶の年表があり、これには王安憶本人が訂正加筆している。

宮入いずみには「三恋シリーズ」の『荒山之恋』と『小城之恋』、『流水三十章』『叔叔的故事』や、作品の内容が難解だと評されている『紀実与虚構』に関する論文がある。

「王安憶『紀実与虚構——創造世界方法之一種』について」1996 年は、『紀実与虚構』には「収獲版」「浙江文芸版」「人民文学版」の三つの版があり、「人民文

学版」は他の二つの版より 3 割加筆されていることを最初に指摘している。加えて、全体の構成は十章と序と跋から成り立ち、奇数章が「わたし」の母方の祖先をたどった家族史、偶数章が「わたし」の来歴と交互に分かれて描かれている点を指摘している。この作品は『紀実与虚構』というタイトルながら、内容はほぼ茹志鵬と王安憶の自伝であることから、この作品は個人の体験の域を出ていないなど多くの欠点があげられ評価も低いと論じている。その一方、小説を書くことが「わたし」にとって児童期、青年期の孤独を解決する手段となり、作家となったと述べている。当時、文学界で起こった尋根文学にあつて、王安憶は「わたし」を通して孤独を起点にして自分は何者であるのかを考え、自分のルーツを探す尋根文学のあり方をみつけたのだと締めくくっている。

「王安憶の『叔叔的故事』」1994 年は、『叔叔的故事』を異なる世代の問題、親子の対立などを描いた作品であると解釈している。そして、加藤三由紀『『おじさんの物語（『叔叔的故事』の日本語のタイトル）』——王安憶の真摯な遊び』から、王安憶が「虚構の中で作家が作家について物語を編むという、自分より一世代下の作家たちが得意とするスタイルに挑んだ」という指摘を引用している。宮入は『叔叔的故事』が、これまでの王安憶の手法とは全く違うが、その姿勢がまだ身についていないと感じ、自分の経験を作品に織りこむという王安憶らしい手法によって作品世界を構築して欲しいと思うのはわたしだけだろうか」と結ぶ。

最近の研究では、阪本ちづみ、劉小俊、劉怡、松村志乃のものがある。

『香港的情与愛』に関する論文は、松村志乃「王安憶「香港的情与愛」論」2003 年がある。松村志乃は、王安憶がこの作品を、老魏の香港にもつ感情の空虚さを「虚」、人間味のある温かさを「実」というように対称的に描き、この対象性が老魏の二人の愛人である凱弟と逢佳に投影されているのだと論じている。

『長恨歌』に関する先行研究は、阪本ちづみ「王安憶『長恨歌』——可憐の上海小姐」1998 年と、劉怡「王安憶の描く上海——『長恨歌』を中心に——」2002 年がある。阪本ちづみ 1998 年は『長恨歌』のストーリーをたどり、王琦瑶の生涯と上海という都市の四十年間という時代を追って、「上海小姐」「弄堂」「美人画の月份牌〔カレンダー〕」「双妹商標のオーデコロン」などを古きよき時代

のモダン上海のキーワードとして、物語が繰り広げられたと述べている。そして、破壊されていく弄堂の象徴が殺されてしまった王琦瑶であるのだと論じているが、その根拠についてはふれていない。

劉怡 2002 年は『長恨歌』を「変貌する都市——上海」「弄堂の風景」「女性化した街——上海」の三部に分けて分析している。『長恨歌』は、王安憶の上海という都市が多くの人びとに自由と解放の空間を与えてくれる都市であるという認識の上から、王安憶が「女性」「都市」といったテーマを中心に創作したと考察している。

『我愛比爾』に関しては、劉小俊の「王安憶『我愛比爾』の意義」2002 年と、松村志乃「「西洋」の追求——王安憶『我愛比爾』試論」2006 年がある。劉小俊 2002 年は、この作品は 1990 年代の中国社会を大きく変えたグローバル化を背景として描かれており、阿三の悲劇の真の原因は、二人の西洋人男性に見捨てられたことではなく、彼らの愛を得るため、更にいえば、彼らのバッググラウンドになる文化や価値観に認めてもらうため、自分の中国人アイデンティティを否定したことにあると論じている。

また、松村志乃 2006 年は、この作品には、西洋人男性に執着する阿三を通じて西洋をイメージ化・理想化し追求することの歪みと破綻が表現されており、西洋と西洋人主導の世界に対するコンプレックスが、第三世界たる当時の中国の問題として描かれているのだと高く評価している。

その他、劉小俊 には「王安憶の再評価——『我愛比爾』と『上種紅菱下種藕』を中心に」2007 年があり、1983 年の王安憶のアメリカ滞在の意義、『我愛比爾』の分析に加え、『上種紅菱下種藕』について論じている。『上種紅菱下種藕』に描かれた華舍鎮という小さな町の新街と老街は、それぞれ伝統と現代化の象徴として、自然と調和した合理的で伝統的な生存基盤が現代化に伴い、伝統が侵食され現代化との矛盾を描き出したのだと解釈している。

『富萍』についての先行研究には、王曉明「上海はイデオロギーの夢を見るか？王安憶の小説創作の変化から」2003 年と、劉小俊「保姆たちの家への渴望——王安憶『富萍』と『鳩雀一戦』について」2004 年がある。

王曉明 2003 年は、『文芸評論』2002 年第 3 期に中国で掲載された「從“淮海路”到“梅家橋”——從王安憶小説創作的轉變談起」の千野拓政と中村みどりによる日本語翻訳版である。王曉明は『富萍』について、1960 年代の上海の人びとの日常を描き、底辺にいる人びとの日常生活に意識的に密着し、野蛮な辛い暮らしの中にある人情や情緒や活気を表現しようという努力が以前にも増して執拗に作品を貫いていると、高く評価している。

劉小俊 2004 年は、奶奶も富萍もともに自分の家を渴望し探し求めることは共通しているが、二人の理想とする家への考え方の違いから生じる衝突を王安憶が描いたことに注目している。

本論と関連する先行研究については、それぞれ関連する章であげていくことにする。

筆者はこれまで、王安憶の「特定の場所への深い精神的愛着」をキーワードに主人公の生活拠点の変遷をたどりながら、王安憶の四作品について考察してきた。以下年代が古いものからあげていく。

拙稿「王安憶『長恨歌』——ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響を中心として」『多元文化』第 6 号では、王安憶自身が言及している『長恨歌』へのユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響を、比較文学の観点から論じた。

拙稿「王安憶『富萍』における一考察——蘇北から上海の“周縁”へ——」『多元文化』第 8 号では、富萍と奶奶に焦点を絞り、奶奶と富萍の家をめぐる考え方の違いを分析し、二人の外来移民が最終的にどこに自分の根付く場所を求めたのかを「市中心——周縁」をキーワードとして論述した。

拙稿「王安憶『我愛比爾』における一考察——「柏樹」が喚起するノスタルジア——」『野草』第 83 号では、阿三とビルとマルタンの関係を再解釈し、阿三の上海での生活の変遷をたどり、阿三が労改で刑期を全うせずに脱獄した理由を提示している。そして、作品中に登場する「柏樹」の果たす役割について、「上海——安徽省の白茅嶺労改」をキーワードとして考察した。

拙稿「王安憶『香港的情与愛』における老魏のトポフィリア」『野草』第 85 号では、最初にサンフランシスコと香港が、ともに移民の都市であることを確

認し、老魏と彼が香港で知り合った二人の女性との関係をふまえて、老魏の「臨時の家」が最終的に彼の理想とした「香港の家」となり、香港が老魏のトポフィリアとなりえたのか否かを論じた。

2. 中国での先行研究

王安憶に関する中国の先行研究の最近の傾向として、王安憶の「作家としての姿勢」を論じるか、「都市を描く作家」とし論じる研究が多い。各作品についての論文は、各章であげるので、ここでは、そこで扱わなかった論文をいくつかあげるにとどめる。

「作家としての姿勢」について

陳思和「营造精神之塔 ——論王安憶 90 年代初的小説創造」1998 年がある。これは、王安憶の“四不要”宣言から論じ始め、王安憶の作家としての姿勢に及ぶ。“四不要”宣言とは、「一、特殊環境の登場人物は必要ない、二、作品の材料が多すぎる必要はない、三、言葉の風格化も必要ない、四、独特である必要もない」¹という王安憶独自の創作概念である。陳思和はこれを、王安憶が追求する新しい小説詩学とよび、王安憶が苦しい創作の実践を経験して、まさにこの理想が今、実現される時であると述べている。「精神の塔を建造する」という姿勢は、現実世界の素材を借用し、これまで王安憶が繰り返し述べてきた事実の記録を用いて虚構のストーリーを書くという王安憶の創作の姿勢そのものであるという。

この“四不要”宣言については、王徳威「記憶的城市，虚構的城市Ⅰ：海派文学，又見伝人」2003 年も言及している。王徳威は王安憶の生活拠点が上海であるため、多くのものを目にする機会が多く、特殊な出来事も日常の出来事に変化させ、小説の創作の材料になるのだと分析している。

王安憶が移り変わりの激しい上海において、主要な居住者と考える市民を作品の中に描く機会が多いのは、“四不要”宣言に掲げられている「一、特殊環境の登場人物は必要ない」と一致する。陳思和や王徳威の分析は、「どんな時代の変化の中にあっても、上海のもつ精神がばらばらにならなかったのは、上海には市民の実践的な生活があった。」²と考える王安憶の創作上の姿勢を裏付けていると筆者は考察する。本論では、王安憶が『長恨歌』で描いた弄堂は、変化する上海の中にある不変の存在であり、それぞれの異なる弄堂で日常生活を営む王琦瑤のような市民の生活を王安憶が描いたのだと論じた。

張浩「從私人空間到公共空間 ——讀王安憶創作中的女性空間建構」2001 年は、

まず王安憶作品の主題が二つに分けられることから論じはじめる。一つは人間の欲望を書いた作品として、女性と男性の愛情と性愛の関係や、女性がもつ欲望を描いた「三恋シリーズ」と『米尼』と『我愛比爾』を代表にあげる。もう一つは、王安憶が女性を日常生活の中で表現した代表作として『長恨歌』をあげる。王安憶が登場人物の女性を個人的な空間に押し込めることなく、更に広範な空間で女性を表現する姿勢は、90年代に及んで未来の女性文学の創作に深い影響を与えたと分析している。

李静「不冒険的旅程——論王安憶的写作困境」2003年は、王安憶の価値観を「東方の庶民の生存方式」の探求であるとし、作品では政治的な大きな歴史に関わらず、人物の日常生活を描くことに主題におき、流行を追うこともなく、庶民の生活の細かい部分を描いたことに注目している。

確かに『長恨歌』において、平安里の弄堂の場面では、1957年、外で大きな事件が起こっていても、王琦瑶の周辺には関係なく、平安里での暮らしぶりは一見すると平和にみえる。しかし、王琦瑶と彼女をとりまく人びととの関係を検証してみると、王琦瑶がこの時代にいかに翻弄されていたのかを、作品から読み取ることができるという見解を筆者は本論で示した。

呂芳「“心理劇本”中善与恶的研究——論王安憶近作対人性豊富内涵的探索」1997年は、1983年の王安憶のアメリカ訪問は思想や感情、人生観、芸術観に多大な影響を及ぼし、『小鮑莊』や『好姆媽、謝伯伯、小妹阿姨和妮妮』といった作品を発表するに至ったと述べている。『小鮑莊』に対する分析は、小鮑莊が仁義の里であるという認識であり、他の研究者たちと同じ観点である。『小鮑莊』は1985年に王安憶が発表した文革期の貧しい農村が舞台であり、中国人のアイデンティティをテーマとしている。本論では、王安憶はアメリカ滞在を通して、初めて自分が中国人であること、作家として中国を書いていくことを認識し、王安憶が『小鮑莊』を通して、この意識を体現したと分析した。

「都市を描く作家」について

王干「老遊女金：90年代城市文学的四種叙述形態」1998年があり、王干は王安憶の『長恨歌』を「老城叙述者〔古い都市を叙述する作家〕」としての代表作であると位置づけている。一人物を通して一都市を描くことは、一人物の精神

が一つの都市の精神に反映することだと考察している。

そして、高秀芹「都市的迁徙 ——張愛玲与王安憶小説中的都市時空比較」2003 年は、1969 年、わずか 15 歳だった王安憶が上海を離れ淮北農村に下放し、約 10 年見知らぬ土地に暮らしたことに注目している。この経験から、王安憶は上海を観察し探求する客体として、自己とこの都市や世界との関連を探求するようになったのだと述べている。続けて、王安憶は上海という都市の描写に、ある象徴の意味をもたせ、個人と都市の関連性を追憶するようになり、一つの大都市と一人の女性の間にある深刻な関係を確立したのだと論じる。これは、複数の研究者も指摘している。

筆者もこの見解を継承し、本論では王琦瑶が暮らした弄堂を上海の形象であるととらえ、新しい時代の到来とともに旧上海の象徴として消失していく姿を、王琦瑶の死に重ね合わせたのだという結論を提示した。そして、王安憶が『長恨歌』で成功した上海の緻密な描写の背景にあるのは、王安憶にとって上海を離れて経験した下放先での過酷な体験が、上海を今までよりもっと思い出が詰まった親密な場所と変化させたからだと述べた。つまり、このように全く異なる環境に身を置いた王安憶の経験を経て、王安憶は後に作家となって、自分の生活感を作品に表現するようになったと筆者は考察する。

『悲慟之地』や『鳩雀一戦』、『好婆和李同志』は、本論で扱った『富萍』を王安憶が発表する前に、上海人と外来移民にある衝突を描いた作品である。ここで語られるのは、外来移民たちは身分の違いこそあれ、上海人の偏狭さや差別に耐えていく意識であった。『富萍』の背景にも、こうした意識が存在していると考えられるので、これらの作品についての先行研究をいくつかとりあげる。

汪政・曉華「論王安憶」2000 年は、王安憶の 1990 年以降の作品について、順を追って論じている。王安憶が 80 年代に雯雯シリーズ³を発表した当時、王安憶は都市を描くといったことに関心はなく、作品の背景として都市を描くにとどまっていたが、『鳩雀一戦』『流逝』に至ってはじめて、都市を描くことを自覚したと述べている。

王向東「孤独城堡的构建与冲突 ——張愛玲与王安憶小説中的都市時空比較」2003 年では、農村と比較すると都市は比較的高度な文明の段階にあり、都市はある意義において現代化の象徴をなしていると論じる。特に『悲慟之地』は農

村からやってきた主人公にとって上海という都市は、挫折し自己を見失うという悲しみの局地であったと分析している。つまり、都市と農村は二つの対象として相反する文化形態にあり、『悲慟之地』の主人公は都市の生活に溶け込むことができなかった。こうした問題は中国文学の大きな主題にもなっていると警鐘をならす。

華霄穎「市民文化与都市想象——王安憶上海書写研究」2009 年 は、王安憶が描いた一連の上海作品『悲慟之地』『我愛比爾』『富萍』『長恨歌』について論じている。その中でも『悲慟之地』は、山東省の麻劉庄から出てきた外来戸〔よそのもの〕を見下す上海人のわだかまりと偏狭さから、『我愛比爾』では阿三を発展途上にある第三世界の立場にある中国、ビルやマルタンを西洋の強国の象徴という立場から分析している。『我愛比爾』に関する中国の先行研究の大半は、中国が発展途上の第三世界の立場にあることに問題を提起し、阿三がビルとマルタンに認められなかった悲劇が描かれたのだという考察が占めている。

筆者は『悲慟之地』に関して、主人公の上海体験の根底にあるのは、上海人の田舎ものへの理由なき偏狭さと差別の意識であるという見解を継承した。そして、本論では、主人公が追い詰められ、ビルにのぼっていく過程は、上海や上海人に対する無力な抵抗であり、主人公がビルの上から飛び降りて死んでしまうことは、抵抗する術がもう何もなかったことを意味すると論じた。

『長恨歌』に関しては、非常に多くの論文がある。

王艷芳「被複制的文化消費品——論『長恨歌』的文学史意義」2002 年は、王安憶が『長恨歌』を都市の「私生活の秘密」から着手し、激しい社会の変革の大きな歴史はさておき、緻密で長い「日常生活の歴史」を描いたと論じている。そして、王琦瑤はこの都市の代表者であり、王安憶が描いたのはこの都市の物語であると述べている。

王琦瑤が李主任との死別を経て、王安憶が再生の場として設定した鄔橋について分析した論文として、杜学霞「東方命運觀与悲劇意識 ——論仏教王安憶悲劇意識的影響」2004 年がある。この論文は、鄔橋には仏教精神の本質があり、鄔橋には日常生活があふれているが、世の中がどんな変化を遂げても、ここには永遠なる長い歳月をかけて生まれた真理、始まりと終わり、万物万事の基礎、大徳が存在すると述べている。

『長恨歌』を総括する目的から、陳思和「懷旧伝奇与左翼叙事：『長恨歌』

2003 年をあげたい。陳思和は王琦瑶を上海のイメージとして、彼女の身に起こることは、1940 年代から 1980 年代の上海市民の生活の場にある側面であり、何世代かにわたる上海の日常生活の追憶であると分析している。作品における鳩の出現は、非常に高い場所では神の目と類似し、その目を通して、弄堂に深く隠れて現れることがない罪悪を覗き込んでいる。鳩によって王琦瑶が引き出される章の構成は、王琦瑶が晩年、被害にあう結末を予感させると分析する。

筆者は、杜学霞の鄔橋に対する考察を継承し、王安憶がどのような目的で鄔橋を設定し、王琦瑶をここで再生させたのか検証したが、その際、この見解に加えて、王安憶が 1996 年に 1 ヶ月滞在し療養した紹興華舎での体験に基づき、「茹家漚」にも描いた紹興華舎が鄔橋のモデルになっているのではないかと考察した。そして、陳思和が述べている鳩の視点に関して、筆者は弄堂では誰にも目撃されることのない都市の全ての事実も鳩だけは俯瞰することができることから、王安憶が鳩に都市の精霊として役割を担わせたと本論では論じた。

『富萍』に関しては、王曉明「從“淮海路”到“梅家橋”——從王安憶小説創作的轉變談起」2002 年があり、本論でもとりあげた。ここでは、『富萍』について以下の二つの論文がある。

沈瓊「快城与快客——文学創作中的新上海人形象」2009 年は、上海を「外来戸〔よそのもの〕が集まってできた都会」であり、移民の歴史とともに上海は発展してきたのだと分析している。王安憶は比較的早い時期からこのテーマをとりあげ、80 年代の『鳩雀一戰』『好婆和李同志』『民工劉建華』から『富萍』に至るまで、徐々に淮海路の日常生活から移民の生活に注目するようになった。非常に明確なのは、王安憶が描く上海移民には、社会の下層にいる彼らの苦悩が描かれていると述べている。

また、王進「第三章『長恨歌』：双重“歴史”視野下的“上海”書写」2006 年は、保姆であった奶奶を中心に淮海路の労働者の生活圏を展開し、次に浮草のような富萍の移動の軌跡を通して、王安憶が上海周縁の棚戸区で第二の生活圏を提示したことに注目している。そして、王進は『富萍』の最下層の人びとが、上海に根付いて生活していく強靱さと生存の知恵を王安憶が描いたことを評価している。

筆者は本論で、富萍の上海での生活拠点を、奶奶と暮らした淮海路、舅舅と暮らした棚戸区と分けて分析した王進の論を継承した。それに加えて、淮海路、

棚戸区と富萍は自分の根付く場所を見つけることができなかったが、その後、夫となる青年とその母が暮らす梅家橋で、初めて愛着のある場所を見つけたことの意義を、エドワード・レルフの論を用いて説明した。

『香港的情与愛』についての先行研究は、王安憶作品の中でも評価の高い『長恨歌』や『我愛比爾』といった上海を描いた作品と比べると極めて少ない。これまで、『香港的情与愛』は『長恨歌』との比較で取りあげられることが多かった。ここでは、倪文尖「上海／香港：女作家眼中的“双城記”」2002年をあげたい。倪文尖は王安憶が香港を一つの象徴としてとらえ、香港ではなく実は上海に対する情緒から、香港を大いなる出会いの場所として表現したと論ずる。筆者は、倪文尖が『香港的情与愛』において、王安憶が香港を一つの象徴としてとらえたという点に注目し、この象徴を「香港とは大いなる偶然の出会いがある」という作品の冒頭が、王安憶の香港観であると述べた。本論では、この見解に加えて、先行研究では論じられることがなかった、作品の中で繰り返し登場する「臨時の家」と「香港の家」について検証した。

注

- 1 王安憶「從現實人生的體驗到敘述策略的轉型——關於王安憶十年小說創作的訪談錄」『王安憶說』 pp. 30-31。
- 2 前掲 注1「作家的壓力和創作冲動」 p. 241。
- 3 雯雯とは、王安憶が1980年に発表した『雨、沙沙沙』の主人公である。この作品の後に発表した1981年の『本次列車終点』や、1982年の『流逝』といった作品も主人公は作者の分身であるといわれており、これら一連の王安憶の初期の作品を総括して、雯雯シリーズという。本論のp. 9の中山1984年、同じく本論 pp. 40-41 にも雯雯シリーズについての記述がある。

第2章 王安憶について

1. 王安憶の生い立ち

王安憶は、現在の中国文学界を代表する上海在住の女流作家である。1954年3月6日、南京で生まれた。筆名はなく王安憶というのは本名である。父は上海人民芸術学院で演出を手がけていた劇作家の王嘯平(1919年～2003年)であり、母は著名な作家である茹志鵬¹(1925年～1998年)である。王安憶には3歳年上の姉・王安諾²(1951年～)と10歳年下の弟・王安槐³(1964年～)がいる。本章では、王安憶が育ってきた環境が作品に描かれる場所に深く関係していることから、その環境の変遷を詳しくたどりながら王安憶の来歴を追っていきたい。

王安憶は一歳になった1955年、中国作家協会上海分会に転属した母と共に上海・淮海中路に転居し上海の弄堂で育った。ここはかつてのフランス租界にあって、最も富貴な生活レベルの高い場所であり、宝昌路と呼ばれていた。この弄堂があった華やかな街の様子を王安憶は次のように描写している。

私たちの家は淮海中路の最も賑やかな場所にあり、弄堂の両側には益民デパート、百樂写真館、長春食品商店、大方綢布商店、世界靴店、上海西餐館、鳳凰食品商店、新世界服装商店などがあった。——この服装は、上海ファッションの新しい時流にのって先端をいていた。角を曲がったところに錦江ホテルがあり、この並木道は騒がしい繁華街にあって奇跡的な静けさを提供している。弄堂の入り口には小学校があり、そこは私の母校であった。前方には大きな街道花園が広がっている。弄堂の対面の直線の路は思南路で、弄堂の入り口には自動切手販売機がおいてある郵便局があった。(「搬家」『上海女性』所収 p.53)

王安憶の住んでいた弄堂は二列に並んでいて、全部で10世帯が住む造りをしていて、どの弄堂にも大きくも小さくもない花壇があり、新式の弄堂で部屋も古くはなかったが、すでにそれほど頑丈ではなく床はゆれ、階上でやや好き勝手に歩くと、震動によって階下の天井板から石灰が一欠けら落ちてきた⁴という。王安憶は1961年に淮海中路小学校に入学し、66年に文革が始まり授業が停止され、67年向明初級中学に入学はするものの、実際に学校で教育を受けたのは小学校の5年間だけであった⁵。淮海中路小学校は現在の淮海中路650弄3号⁶に

あり、今でも小学校の校舎の一部が現存しているが、元は孫文行館であった。1956年の地図⁷をみると、淮海中路と茂名南路の交差する角に国泰影院があり、その隣の錦江ホテルがこの辺りで一番目立つ建物である。王安憶がいう並木道とは今の茂名南路であろう。1956年の地図⁸では文化倶楽部となっている現在のフランスクラブに、この並木道は隣接していた。ここは緑の茂る広い庭園を備えていたので、この緑が静けさをもたらしたと考えられる。

王安憶は上述の通り 5 年間しか学校で学ぶことはできず、両親からも教育を受けていないと語っているが、両親の職業の影響からか王安憶の家にはたくさんの本があり、自分の教養の全てはその家庭環境から得たものであったという。王安憶の母・茹志鵬は工夫して王安憶に教育を受けさせようという思いはなかったが、毎日好きだった宋詩を一句書き写し枕元に貼り、王安憶と姉に吟唱して理解させた⁹。しかし、作家だった母は、作家の苦勞を深く理解していたので王安憶に作家になることを勧めることはなかった。反右派闘争や文革と両親が激しい批判にさらされたのはいうまでもなく、この政局に両親は非常に動揺し知識人であれば簡単に弾圧にあうこともわかっていたので、子供たちには理工系に進んで欲しい¹⁰と願っていた。王安憶の家族は、1955年から1974年の秋までの19年間、淮海中路に暮らしていた¹¹。当初、南京にいた父も1962年には上海人民芸術劇院に赴任し、1964年には弟も生まれているから、大きな部屋と小さな部屋の合計二部屋の住居では手狭になったようだ。ここに住んでいたのは王安憶が一歳から満二十歳までであった。1969年、王安憶は当初の予定では下放して三秋労働¹²に参加するつもりでいたが、林彪の戦争準備の命令¹³があって、この年の秋が深まる頃まで田舎にとどまった。王安憶は学校の宣伝隊¹⁴でアコーディオンを担当していたが、先生はホームシックになって意気消沈していた王安憶を、アコーディオンの修理も兼ねて上海に帰省させた。しかし、王安憶は、何度も汽車や船を乗り換え一人で上海に戻る過程は、救いを求めるような困難を極める帰途であったと¹⁵回想している。まだ14歳の王安憶には過酷な体験であっただろう。王安憶が夕方にやっと家にたどり着いた時、父母は五七幹校¹⁶に姉は安徽省に下放しており、家にはお手伝いさんと弟しかいなかった。その状況は極めて悲惨であったが、それでも家に帰宅すると王安憶は安心し、長い間に積み重なった多くの憂鬱が解消された。文革が始まると特に知識人の家族は一緒に暮らすことは不可能で、王安憶の家族も例外ではなく淮海中路の弄堂で家族と一緒に暮らすことはなかったようだ。

王安憶は母の反対を押し切って、1970 年春から 1972 年秋まで安徽省蚌埠市五河縣頭鋪公社大劉大隊に下放しており、その間 1971 年共產主義青年団に加入する。農村での生活は、家族からの束縛から抜け出すことはできたが、その厳しい生活が現実となった時、王安憶は家族や友達と離れた寂しさを埋めるために、手紙や日記を書いて自分の生活の体験を記録した¹⁷。しかし、それでも農村での生活が始まるとすぐに後悔し、とにかく上海に帰りたいと思うだけで、下放に反対であった母に手紙を書き、母が王安憶の下放を阻止してくれなかったことに抗議した¹⁸。「房子〔部屋〕」¹⁹によると、国から当地の生産隊〔人民公社の基礎となった農村の生産組織〕には、下放され農村にやってきた王安憶のような若者のために安家費〔支度金〕と物資が支給された。その代わり、生産隊は若者たちに家を提供することが規則であった。しかし、大劉大隊に払われた安家費は、当地の人民公社のトラック置き場の借金に当てられていた。王安憶は自分に与えられる部屋で、どのように暮らしていこうか期待して農村にやってきたが、実際には、いつまで経っても自分一人の部屋をもつことはできず、与えられたのは人民公社の幹部の家族が暮らす一部屋であった。ここには、幹部と彼の妻、5 人の子供たちの他に、王安憶と同じ下放してやってきた若者がおり、夫婦と乳飲み子の一番下の男の子を除いた 6 人が一つの部屋で暮らした。王安憶にとって、この部屋では下着を替えるのも一苦勞で、王安憶は人が寝静まるのを待って交換するというように生活は非常に不便で、自分のプライベートは一切なかった。また、上海にいる家族が生活を切り詰めて送ってくれた小包を見て、王安憶の家庭が裕福であると周囲の人びとは決めつけた。王安憶は生産隊長の父に 5 元貸し、続けて生産隊長に 5 元貸したが、彼らはこれを返金することはなかった。王安憶は後に同居していた幹部の妻の配慮によって、幹部の家の隣にある、彼らの親戚の家の一部屋を一人で暮らすために与えられた。王安憶は部屋をめぐるこれまでの苦悩の日々は、永遠に忘れがたい出来事であり、その部屋を与えられた時の感動は言葉に表現できなかったと述べている。後に当時を振り返り、「私は多くの人たちのように、親密な懐かしさを抱いて、下放生活を描くこと、農村をエデンの園に描くことはどんな方法をもっても出来なかった。」²⁰と述べていることから、16～17 歳の王安憶にとって安徽省での下放生活が過酷であったことが理解できる。

2. 作家になって

1972 年、江蘇省の徐州地区の文工団²¹に楽隊員として入団し、アコーディオンとチェロを担当していたが、1975 年から創作を始める。王安憶が作家になった時、家族は淮海中路の弄堂から愚園路にある、一時は焼失していたが 1881 年に再建された静安寺²²に近い場所に引っ越していた。「静安古寺」の額のかかる山門は 1946 年に造られたが、王安憶が引っ越してきた時²³には山門は閉められ、何々事務所と書かれた木製の看板が掲げられ、時折開いていることもあったという。それでも、静安寺はやはり賑やかな場所で、老大房点心店、老松盛酒家、緑村酒家があり、交通の便もよく多くのバスの路線が延びていた。しかし、静安寺は淮海中路から直線にしてたった 1.5 キロしか離れていない上海の中心であるのに、王安憶の目には、淮海中路より 10 年位時代に後れた田舎くさい場所に映ったのである。以下の引用から当時の王安憶の家の暮らしぶりがわかる。

私たちが暮らした弄堂は非常に大きな弄堂で、百いくつもの表札がかかり、弄堂の端は南京西路に、もう一方の弄堂の端は愚園路まで広がり、賑やかな中にも静けさがある住宅街であり、買い物に便利な場所であった。部屋のレベルは以前の弄堂よりもちょっと低く、木製の入り口と窓わく、前方に大きな部屋と後方に亭子間〔上海の二階建て住宅の中二階にある部屋〕、亭子間の窓から陰って冷たいジメジメした中庭が対面にある。その後、魯迅先生の大陸新村の故居を参観した時、魯迅先生の部屋²⁴が私たちの部屋の格式と全く同じであることに気がついた。我が家は抗日戦争以前に造られていて、長い月日が経っていたが、まだまだ丈夫で頑丈であった。床も非常に安定していて、その上を落ち着いて歩くことができる。しかし、ワックスは塗られていなかったもので、自分たちで床にワックスを塗った。住居は淮海中路よりもよく改善されていた。（「搬家」『上海女性』所収 p.58）

1975 年、王安憶の最初の散文「大理石」が上海文芸出版社編集の知識青年散文集『飛吧、時代的鯤鵬』に収められることになったが、文革中であつたために刊行されることはなかった。文革が終了した後の翌々年の 1978 年、6 年間勤めた文工団から王安憶はついに上海に戻り、かつて宋慶齡が創刊した児童向けの雑誌『児童時代』²⁵の編集部で 9 年間勤務したが、王安憶がここに入ったきっかけは不明である。しかし、茹志鵬が『児童時代』1962 年第 1 期に散文「水郷遊」を、1964 年第 6 期に散文「我們是革命的第三代」を、1976 年第 2 期にも「一支

特殊的筆」を發表している²⁶。この点から、おそらく茹志鵬が王安憶を『兒童時代』編集部に推薦したのではないかと予測することはできる。そして、王安憶が24歳の時、初めて作品『我的臉火辣辣的』（初出1978年第7期『兒童時代』）が刊行された。翌年に発表した『誰是未來的中隊長』（初出1979年第4期『少年文芸』）は、1979年全国兒童文學二等賞に輝いた。

1980年、王安憶は中國作家協會上海分会に加入が認められ、その年の4月から半年間、作家協會が新進作家養成のために定期的に北京で開いていた文學講習所²⁷に入った。王安憶と同期の第五期の講習生には蔣子龍、葉文玲、孔捷生、張抗抗、古華ら後に有名な作家となった面々がいる。「生活の中にあったある種の感想」²⁸を描いた最初の短編小説『雨、沙沙沙』²⁹（初出1980年第6期『北京文芸』）は優秀小説賞を受賞した。1981年中國作家協會に加入した後も『本次列車終点』（初出1981年第10期『上海文學』）は1981年全国優秀短編小説賞、1982年に発表した『流逝』（初出1982年第6期『鐘山』）も中國作家協會第二回全國優秀中編小説賞を受賞するというように、いずれの作品も高い評価を受け順調に執筆していたが、王安憶の中には様々な考えがあり、1980年から1981年までのある時期、執筆することを中断し過去を振り返ると満足できない思いがわきおこった³⁰。『雨、沙沙沙』や『本次列車終点』など、主人公は時に兒童であり知識青年であり、王安憶もいうように、それらは自伝小説であった。当時、王安憶は自身の創作を振り返って次のように述べている。

創作上の私の弱点は自分ばかりを描いて、別の人物を描くのが不得意なことである。そこで81年は自分の枠から跳び出して別の人物を描いていくつもりだ。これを主観世界から客観世界への移行という人もいる。理由をはっきり説明することはできないが、いずれにせよ自分と比較的距離の離れた人物を書くことができるようになるべきである。私はこうした試みをしてきたが、もちろん成功したとはいえなかった。（「感受・理解・表達」『王安憶研究資料』上 所収 pp.6-7）

1980年から1982年にかけて多くの賞賛を得た王安憶であったが、これに相反して作家としての創作方法を模索していた。このように王安憶は自分の領域から飛び出して別の人物を書きたいと決意し、1982年に「一人の人物を書くこと、この人物が見ることができる非常に多くの歴史や非常に大きな社会を書くこと」³¹を目指すようになった。そして、『神聖祭壇』（初出1983年第3期『北京文學』）

を発表した後の 1983 年 8 月、王安憶に転機が訪れた。

3. 王安憶の転機

1983 年 8 月末、母である茹志鵬とともに王安憶はアメリカにあるアイオワ大学で毎年定期的に行われている「国際創作プロジェクト」に招かれて参加し、初めて外国で 4 ヶ月を過ごした³²。この 4 ヶ月間、王安憶は尊敬する台湾の作家・陳映真をはじめ様々な国の作家たちと出会い、ここでの体験は王安憶に大きな影響を与えたが、アメリカ滞在中、手紙や日記を書くこと以外、特に小説の執筆などすることはなかった。この滞在中の日記は『母子漫遊美利堅』（初出 1985 年第 2、3 期『鐘山』、その時のタイトルは「美国一百二十天」）というタイトルで後に発表されている。アメリカ滞在中、王安憶は初めて中国人作家としての自分を客観視し、アメリカ人研究者の間で中国当代文学の評価がいかに低いものであるのかを知った。陳映真に「帰国されたら何を書くつもりですか。」と問われた王安憶は躊躇なく「中国です。」と答えたエピソード³³がある。アメリカから北京に戻り、北京から上海へ向かう車中、王安憶は中国に対して以前とは全く違う感情を抱いたと告白している。

ここは私たちの土地、これ（杉江注：東北地方の小唄を伝統音楽に改編した曲を車で聴きながら）は私たちの歌、これは私たちの……私は過去のいかなる時よりもはっきりと気づき、過去のいかなる時よりもすべてのことに敏感になっていた。〔中略〕4 ヶ月は非常に短い時間であったが、空間に時間の感覚が重なり、私は長い間出かけていたように感じた。非常に長い時間を経て、非常に遠い場所から、私がよく知る場所へ戻ってきたのである。〔中略〕私は再び自分の経験だけに基づいて生活することに甘んじることではない。私は幸運にも上海から離れて生活を見つめなおすことができたし、私は自分の経験が浅くて狭いものであったことを感じたのである。〔中略〕私は結局のところ小説を書いていくので、最後は私の感覚から立ち返り、その感覚は私に浸透するのである。そう、私は自分の小説を人びとが読んだ後に、「ああ、過去にこういった日々があったわね、こんな人生だったわね。」といってくれることを願うのだ。（「帰去来兮」『上海女性』所収 pp.72-75）

王安憶がアメリカから戻って間もない 1980 年代半ば、中国の文学界で自分たち

の文化のルーツを様々な角度から掘り起こしていく、紅衛兵世代の30歳代の青年作家たちが一斉に唱え始めたルーツ文学とも尋根文学とも呼ばれるルーツ探求の文学³⁴が起こった。これは1984年12月に6日間行われた杭州会議³⁵で韓少功³⁶（1953年～）が、優れた文学には必ず文化的なルーツがあると主張した「文学的“根”〔ルーツ〕」を発表し、この評論はルーツ文学のきっかけになったといわれている。ルーツ文学派の作家の多くは10代から20代の青年期を文革時代に過ごし、数年間の下放や放浪の体験があり、彼らは故郷や下放先の農村を舞台にして、土着の習俗や伝説を取り込んだ作品を書き始めたのである。

王安憶が1985年発表した文革期の貧しい農村が舞台である『小鮑莊』（初出1985年第2期『中国作家』）は、ほぼ同時期に発表した『大劉莊』（初出1985年第1期『小説界』）と同様、中国人のアイデンティティをテーマとしており、非常に高い評価を受けた。これらの作品を発表した直後、王安憶もルーツ文学派の一人とされたが、王安憶は韓少功らのルーツ文学派と自分は異なる³⁷と異論を唱えた。松村志乃も、「『小鮑莊』の発表は王安憶が尋根ブームにいち早く便乗したように見えるが、この作品は尋根文学の議論が本格的に始まる前年の1984年に、下放先の農村を再訪した王安憶がその印象を基に創作した作品であり、同年12月の杭州会議に彼女が出席していないことを考えても、文学の尋根を明確に意識して書かれた作品とは考えにくい」³⁸と考察している。

王安憶はルーツ探しが起こった原因を、文化の主流に対する反逆、あるいは反逆といういい方が強すぎるとすれば、文学の主流から距離を置くためであったと解釈している。確かにアメリカから帰国後の1984年前半、王安憶は作品らしい作品を書くこともなく、実に15年ぶりにかつて下放した農村の隣村を訪れている。この訪問の目的を王安憶は、次のように述べている。書くべき話をみな書いてしまったので、今と異なるものがあるかもしれない辺鄙な暮らしの中に、物語の材料を探しにいくしかなかった³⁹が、実際には解決することはできなかったと振り返り、自分のルーツ探しについて次のような見解を述べている。

私の創作は一貫して文学のルーツ探しと関係はあるけれど、この問題はずっと、私の文化のルーツはどこにあるのかと私を困らせてきた。〔中略〕私の生活の場は上海であり、当時私は上海図書館で夏の日を入り浸って資料を探したけれど、私の問題を解決させるには至らなかった。そして、本当に偶然農村へ出かけ、『小鮑莊』に行き、到着してから下放していた記憶が蘇ったが、私はまだ自分のルーツを見つけることができなかった。私

のルーツはまだ見つからなくても、上海という資料を私はずっと持ち続け手放すことはないから、私はひたすら上海について書いていくのである。このような意義があるから、ルーツ文学への思考は後の『長恨歌』の創作に影響を及ぼした。上海の生活は私にとって唯一の創作の資源であるというのも、私の下放体験は時間的にも非常に短かったので、深く創作していくことは不可能なのである。（「常態的王安憶 平常態的写作——訪王安憶」『王安憶説』所収 p.232）

南京で生まれたとはいえ、一歳の時には上海に移り上海で暮らしてきた王安憶にとって、他の作家たちのようにルーツを探しに行く故郷はない。王安憶は「插隊後記」⁴⁰において、王安憶が農村を書くことがあれば、下放していた風景が反映されることは避けられないが、知識青年⁴¹を題材として創作する考えはなくなったと述べている。その理由として、各農村に下放されて来た知識青年は一人か二人であり、滞在は、二、三年という短い期間であることをあげている。

松村志乃は、王安憶が鄭万隆の『異郷異聞』について書いた『『異郷異聞』読後』をあげ、この中で王安憶は、鄭万隆が郷土の文化から自身のルーツを探し求めたことを評価⁴²している。つまり、王安憶は自己の生活の場に自分のルーツを求め、それを通して人間が生きるということを描き出す鄭万隆に共感した。王安憶は1980年代半ばに中国文学界に起こったルーツ文学にただ同調するのではなく、中国人としてのアイデンティティの再認識を創作に結びつけ、自分のルーツは現実の自己の生活の場から見つけるという立場を確立し、アメリカ滞在によって、初めて自分が中国人であること、作家としてこれからも中国を書いていくのだと認識したのである。

王安憶の家族は1974年から愚園路の弄堂に住んでいたが10年後には、王安憶も結婚し、王安憶の姉も子供が生まれ愚園路の部屋が狭くなり、王安憶は愚園路と江蘇路に近い銅仁医院一帯の新しいアパート⁴³に独立して⁴⁴移ったのである。王安憶の夫は李章といい、音楽関係の仕事をしている⁴⁵。引っ越した当時、弄堂の対面の烏魯木齊路にあった上海賓館はすでに落成しており、その前の路は広げられ、錦江ホテルは現在のように整備されており、愚園路の周辺の環境も変わっていた。引っ越し先の新工房の周囲は賑やかではあったが、ここを拠点に二つの駅の範囲内には映画館もなく劇場もなく静寂な場所⁴⁶であった。当時の感想を王安憶は「2回の引越しを経る度に市の中心から離れ、だんだん都市の周縁へと自分の住まいも中心から遠ざかる。市中心の慣れた住居から離れる

のは未だに遺憾ではあるが、昔の住まいの狭さを思えば、現在の住まいは広くなったのだから遺憾に思う必要はない。」⁴⁷と幼い頃から親しんだ市中心から離れることへの感想を述べている。

1980年代後半、「三恋シリーズ」と呼ばれる『荒山之恋』（初出1986年第4期『十月』）『小城之恋』（初出1986年第8期『上海文学』）『錦繡谷之恋』（初出1987年第1期『鐘山』）を執筆した。中山文⁴⁸は「三恋シリーズ」の真価は、愛がないための不幸なのではなく、愛があってもなお不幸な女性を王安憶が描いたことにあり、女性の人生にとって恋愛や男性が重要な部分を占めることを批判しているのではなく、それが全てではないと主張した。この時期に注目する「三恋シリーズ」以外の作品として、上海市民と外来移民との間の衝突を描いた『鳩雀一戦』（初出1986年第5期『上海文学』）と『好婆和李同志』（初出1989年第12期『文化月刊』）があり、王安憶自身も上海人を描いた最も良い二編であるとその出来に満足している⁴⁹。

王安憶は1987年、上海作家協会の専業作家となる。1988年4月、初めて母の茹志鵬と共に来日し約2週間滞在した。その年の9月にも、当時西ドイツのハンブルク芸術祭「中国月間」に出席している。1988年『流水三十章』（初出1988年第1期『小説界・長篇小説專輯』）で、母と娘の疎遠な関係を描いた王安憶は、1989年には『崗上的世紀』（初出1989年第1期『鐘山』）で自我の核心に性を据える鮮烈な女性像をつくりあげている。この作品を描く前、王安憶は「自分の経験だけに頼っていたのでは書きたいことが書けない」という不満を感じ始め、叙述方法を模索していた。

1989年6月の天安門事件後、1989年7月から1990年6月まで断筆⁵⁰を経た、『叔叔的故事』（初出1990年第6期『收穫』）を発表し、第一回上海長中篇小説優秀作品二等賞を受賞する。この作品で王安憶は、異なる世代の問題や親子の対立問題を描き、後に「断筆後の最初に書いたこの作品は、私の多くの情感が蓄積されており、私が特別に強調したかったのは私が叙述することができることである。」⁵¹と述べている。しかし、この時期に作品を書かなかった理由を王安憶の著作からさがすことはできない。反右派闘争や文革の時代を生きてきた知識人である自分の両親が、中国共産党への幻想とその独裁権力への恐怖のため、ほとんどなすすべもなく残酷な弾圧を受け、人生にも大きな影響を及ぼした過程を、王安憶はよく理解していたであろう。天安門事件という民主化運動に参加した自分と同世代の作家の中には弾圧され、海外へ逃亡を余儀なくされ

たものもいた。当時、王安憶が執筆をやめ沈黙したのは、この時代に対する抵抗ではないだろうか。

1990年代に入ってから長篇作品も手がけるようになり、『傷心太平洋』（初出1993年第3期『収穫』）、『“文革”軼事』（初出1993年第5期『小説界』）などを世に送り出した。1992年に完成した『紀実与虚構』（初出1993年第2期『収穫』）は全体が十章にわかれ、序と跋からなる「わたし」の母方の家族史と「わたし」の体験が、奇数章と偶数章にはっきりと内容が分かれて綴られている。母方の歴史は茹志鵬の歴史であり、「わたし」の児童期・青年期における孤独感を中心とした回想、文革の時代の下放や文工団での生活、その後上海に戻り、雑誌の編集者を経て作家となつてからの創作経験談は王安憶の個人史であると解釈されている。しかし、この作品の評価は、世間の評判も高く王安憶もその出来に納得した『叔叔的故事』とは相反した。『紀実与虚構』について王安憶は、「これが大きな失敗となつたのは、この小説が自伝性のある作品であつたことである。私が強調するノンフィクションとは、私が採用する素材が真実であり、厳選されていることである。私が強調するフィクションとは、創造性のあるものであつて、現実にはこのような世界が存在しないことである。」と⁵²出版後に述べている。『紀実与虚構』が読者に茹志鵬と王安憶のありのままの自伝として解釈されてしまったことを、王安憶はフィクションのあるべき姿ではなかったと反省した。その後、王安憶は自伝小説と解釈される作品は描いていない。

4. 王安憶が描く都市

そして、1992年に発表した『香港的情与愛』（初出1993年第8期『上海文学』）は、王安憶がこれまでに描いたことがなかった中国以外の都市・香港が舞台であることが注目され、結果として王安憶は、この作品を境に都市を描く姿勢をみせるようになった。

『香港的情与愛』は、1997年の中国返還を前にした香港を舞台に繰り広げられる、50代のアメリカ人華人と、二人の30代の台湾、上海からの移民女性をめぐる物語である。王安憶が『香港的情与愛』を発表した当時、「都市を描く」姿勢はまだ明確ではなかった。王安憶がその後、上海を舞台にした一連の小説、『長恨歌』（初出1995年第2期～第4期『鐘山』）や、『我愛比爾』（初出1996年第1期『収穫』）を世に送り出すと、『香港的情与愛』は王安憶が都市・上海を描く

布石となった、最初に都市を描いた作品として改めて評価されるようになった。

『長恨歌』は2000年に第五回茅盾文学賞⁵³を受賞し、王安憶が「都市を描く作家」としての確固たる地位を築いた作品である。その時代は、抗日戦争が終わりを告げ、解放直前の1945年から始まり、1986年主人公・王琦瑶が殺されるところで幕を閉じる。『長恨歌』は壮大な上海の風景である弄堂の描写から始まる。一見、上海の弄堂に生きる王琦瑶の一生を綴っている物語のように見えるが、王安憶が『長恨歌』の中で王琦瑶を90年以降、取り壊しが進む上海弄堂の象徴としてとらえ、上海の隠喩としての役割を担わせ、都市・上海の変遷を描き出したのだと解釈されることが多い。

『我愛比爾』は文革が終わりを告げた1977年あるいは1978年、師範大学に入学した美術を専攻する大学生の阿三が主人公である。阿三は中国に駐在していたアメリカ人外交官のビルにも、フランスの田舎町の画廊の跡継ぎであるマルタンにも共に生きていくことを認められず、その後よく出入りしていたホテルで売春の容疑をかけられ労改農場に送られたが、そこでの刑期を全うせずに脱獄する物語である。この作品は、王安憶が発展途上の第三世界にある中国を問題にした作品であり、阿三にとってビルは一つの現代化、強国の象徴であると王安憶は明確に述べている⁵⁴。その後も二編の短編『文工団』（初出1997年第6期『收穫』）、『酒徒』（初出1999年第2期『鐘山』）を発表した。

『富萍』（初出2000年第4期『收穫』）は上海長中篇小説優秀作品大賞長篇小説二等賞を受賞するなど、同じく上海を描いた『長恨歌』と並び高い評価を得た。この作品の時代は1964年、65年の文革前であり、作品のタイトルにもなっている主人公・富萍が、蘇北の田舎から上海で保姆をしている奶奶によばれて上海にやってきて、上海中心やその周縁地帯を転々とし、生活の拠点を変えていき、新しい生活環境の中で成長し、最終的に自分自身で結婚相手をみつけ上海の貧しい周縁地帯に落ち着く物語であるが、富萍も奶奶も、富萍の上海で暮らしていた親戚も皆、蘇北から上海に出てきた移民として上海に根付いた人びとであることが特徴である。

『上種紅菱下種藕』（初出2002年第1期『十月』）は1996年に1ヶ月間、王安憶が療養のために訪れた紹興の華舍鎮が小説の舞台である。王安憶は華舍鎮の新街と老街を、伝統と現代化の象徴として描き、華舍鎮の現代化に伴い、自然と調和した合理的で伝統的な生存基盤が侵食される様子から伝統と現代化との矛盾を描き出した。そして、王安憶が中国の上海以外の場所を選んだことが

注目された。王安憶はその後も、『新加坡人』（初出 2002 年第 4 期『収獲』）、『桃之夭夭』（初出 2003 年第 5 期『収獲』）、『月色撩人』（初出 2008 年第 5 期『収獲』）と新しい作品を次々と世に送り出している。

王安憶は作家として作品を発表していくだけではなく、1993 年から 1994 年にかけて上海・復旦大学の中文系で「小説の目的」というタイトルで 13 回に及ぶ講義⁵⁵をもち創作以外の活動も始めた。王安憶は「小説の理想とは言葉という材料によって物語という形を作り、心の世界を構築することである。この世界とは我々が依存し生存している現実世界とは全く異なり、心の世界には独立した論理、原則、起源、結末があり、全てが非現実であり、合理性があるのだ。」⁵⁶と提起し独自の小説創作論を展開した。講義では王安憶が評価する優れた八編⁵⁷の小説を例にあげ、それらの作品を通して「心の世界」がいかに構築されているのかと解釈した。この講義は後に 1997 年に『心靈世界』というタイトルで出版された。これをきっかけに王安憶の後生への指導は上海だけにとどまることはなく、2005 年には香港・嶺南大学に招聘され、中文系の大学生、大学院生、そして卒業生や社会人に対して、王安憶が選んだ上海の若手作家の作品四編⁵⁸を解説した。これは 2006 年に『王安憶導修報告』⁵⁹として出版され、学生に課題として小説を創作させ、王安憶が指導した際のコメントが講義の内容以外に、最終章で掲載されている。2009 年、王安憶は創作以外の活動の場を広げ、復旦大学中文系教授、復旦大学中国当代文学創作与研究中心主任として現在も後進の文学創作のための指導にあたっている。

5. 父・王嘯平

王安憶は劇作家である父と、作家であった母が反右派闘争、文革の時代に批判の矢面に立たされている姿を見て育ったが、それでもなお、母と同じ作家になる道を歩んだ。ここでは、王嘯平と茹志鵬の来歴を紹介し、王安憶が両親からどのような影響を受けて成長してきたのか論述したい。

王嘯平は祖父の代に福建省同安からシンガポールに移った⁶⁰が、抗日戦争中はシンガポールやマレーシアで演劇活動に従事していた。1940 年単身中国に帰国し新四軍⁶¹に入り、文工団で演劇の演出を担当し戯曲を書いた。茹志鵬とは文工団で知り合い結婚したといわれている。王安憶の幼かった頃は、解放軍劇院の演劇主任であったが、茹志鵬が『百合花』を発表した頃に、反右派闘争に

巻き込まれ、弾圧された。当時は右派を生んだ家族に対する風当たりは強く、この恵まれた家族も苦境に立たされていたであろう。父は一時、江蘇映画製作所に左遷されていたが、1962年に上海人民芸術劇院の演出担当に就任した⁶²。

王嘯平は革命のために家族の暮らすシンガポールから中国へ踏み込み、自分の意志を貫き反右派闘争、文革を生きてきた。文革で危機的な状況に面していた時でも、人びとが王嘯平の元を相次いで訪れ、彼らが流してくれた情報によって、王嘯平は助けられた。その理由を王安憶は、「人びとや社会に対しても変わらない王嘯平の性格が仲間に受け入れられていたからである。そして、王嘯平はあらゆる時代を経ても、誰よりも自由であった。」⁶³と述べている。そして、「姉が憧れて紅衛兵となった頃、初めて我々が知った真相は、父がかつて右派分子として、当時極めてひどい弾圧を受けたということであった。父のような人が、一人の右派分子とされたことは絶対にあってはならない過去であった。」⁶⁴と、王安憶は当時を回想している。

王嘯平は、シンガポールにいる家族との付き合いはほとんどなかった。1969年に初めて王嘯平の親戚、王嘯平の父の妹の夫が広州交易会に来た折に一日だけ上海の王嘯平を訪ねた⁶⁵が、彼らが話す言葉は英語と福建語だけで、王嘯平がたどたどしく相手をしたことが王安憶の幼い頃の印象に残っている。文革が終わった1978年以降、王嘯平の弟、妹、さらにその子供たちが頻繁に上海へやってくるようになり、王嘯平のようなシンガポール出身者もシンガポールを訪問することができるようになったが、周囲の人たちがどんなに勧めても王嘯平がシンガポールを訪れることはなく、その後、王嘯平は妹や弟たちと話をすることもなくなった。王安憶は、茹志鵬から「王嘯平はお金に忠実な妹や弟たちの前で、これまで革命と芸術のためだけに生きてきた自分の人生を考えるとただ寂しく、それにも増して悔しい感情が起こり、これがシンガポールに帰省することがなかった理由である。」⁶⁶と聞いた。「読書が父の一番の趣味であり、中国、外国、演劇、文学などあらゆる作品を読むことは父にとって非常に勉強となり、父は別の静かな世界を開拓し、その中にある父は最も自由で幸福であり、父の知恵となって少しも取りこぼすことなく活用されていた。」⁶⁷と王安憶は「我的父親王嘯平」の中で述べている。茹志鵬は王安憶の作品を読むことはなかったというが、茹志鵬の著作にもあるように王安憶の一番の愛読者は王嘯平であった。茹志鵬が王安憶の作品に対して批評することをやめさせた王嘯平であるならば、茹志鵬と同じ姿勢で作家になった王安憶の発表する作品を見守ってい

たであろう。

6. 母・茹志鵬

王安憶の母・茹志鵬は 1958 年に発表した短編小説『百合花』が代表作として知られる著名な作家である。王安憶の家族と王嘯平の親戚との関係は薄かったが、母である茹志鵬は四人の兄たちと強い固い絆で結ばれていたため、王安憶の家族との付き合いは深く、王安憶の散文の中にも茹志鵬の兄弟が登場している。

茹志鵬の出身を浙江省杭州市とするものがあるが、茹志鵬が生まれたのは上海・永年路天祥里 3 号である。紹興市出身の曾祖父は、浙江省杭州市で興した繭を扱う家業により一代でかなりの財産を築き、浙江省杭州市で大きな屋敷も手に入れ非常に成功した人物であった。そのため、父・茹炳賢（王安憶の祖父）の姉妹は裕福な家に嫁ぎ、母・茹龐（王安憶の祖母）の姉妹は上海で一番裕福だといわれた朱家⁶⁸に嫁いでいる。しかし、茹家が絶頂期にあったのは、曾祖父の商売が成功したほんの短い期間⁶⁹であり、父の時代になって没落してしまい、茹志鵬が生まれる前に杭州市の家は人手にわたって一家は上海にやってきた。茹志鵬が 3 歳の時に母が死に、父も失踪し放浪の末、野垂れ死にしたといわれている⁷⁰。茹志鵬には 9 歳上の長兄・沈之瑜（1916 年～1990 年）をはじめとする四人の兄がいたが、母の死を期に兄妹は離散した。沈之瑜と三番目の兄は裕福な上海の朱家に、二番目の兄は別の親戚へ引き取られた。そして、四番目の兄と茹志鵬は祖母によって引き取られ極貧生活を送ること⁷¹になり、兄妹は引き取られた先の経済状況によって全く違う生活を送ったのである。裕福な朱家に引き取られたこともあって沈之瑜は、上海美術專科学学校西洋画系に進学できたが、居候の身分は肩身が狭く、それ以降は自活したため生活は苦しくなった。沈之瑜は本名を茹茹といい、両親を失った兄妹にとって父親代わりとして家族の未来を切り開いた人物で、後に上海博物館長として知られ、中国美術考及び古文字学者、博物館学者として有名であり、自分の専門に関する著作もある。茹志鵬は 11 歳でようやく小学校に入学したが、13 歳の時に祖母（王安憶の曾祖母）が 66 歳で亡くなり、上海の愚園路鎮寧路口にある以馬内利孤児院⁷²で暮らした後、雁蕩路⁷³復興公園門口にある上海市婦女補修学校や、清心女中旧舎⁷⁴である現在の第八中学にある聖誕学堂⁷⁵の寄宿舍を経て、1943 年学費免

除だった浙江省武康県の初級中学を卒業したが、学校に通ったのはわずか 4 年間であった。その年、日本占領下の上海で小学校教師となり『申報』紙に処女作「生活」⁷⁶を発表した。その年の年末、沈之瑜に伴われて蘇中革命根拠地へ赴き、新四軍に参加することになった。それは、行方不明だった父が、祖母や四番目の兄、茹志鵬たちが身を寄せていた知人宅を探し当て金の無心にやってきて、なけなしの金を持ち去った後に、借金の貸主に知人宅の場所を告げて自分は姿を消したからである。追い詰められた四番目の兄と茹志鵬はなすすべもなく、これを機に参軍することを決意した。同時に二番目の兄も軍に参加したが、三番目の兄だけは上海で就職することになった。茹志鵬は蘇中公学に学び、蘇中軍区前線話劇団（1945 年以降、華中・華東軍区文工団に改組）で女優、脚本や歌詞の創作など演劇・演芸関係の活動に従事した。茹志鵬はこの文工団を自分の家と呼び、それが作家活動の原点となった。

1947 年、茹志鵬は王嘯平と結婚し、1950 年から南京軍区文工団にいたが、1955 年に中国作家協会上海分会に転属し『文芸月報』の編集者となり、小説関係の編集に携わるようになりルポタージュ等を発表した。最初の短編集『関大媽』（初出 1955 年 10 月『関大媽』所収）を刊行し、1958 年に代表作となった短編『百合花』（初出 1958 年第 3 期『延河』）を発表すると茅盾に激励された。1959 年『高高的白楊樹』（初出 1959 年第 2 期『收穫』）『静静的産院』（初出 1960 年第 6 期『人民文学』）『阿舒』（初出 1961 年第 6 期『人民文学』）などは 1957 年、王嘯平が右派分子として批判される中、危機的な状況で書かれたものである。

文革中、茹志鵬は「文芸界の黒い線」の主要人物として批判され自由を奪われ、1965 年 6 月に発表した『頌戦斗的友情』（初出 1965 年 6 月『文匯報』）を最後に、1975 年の『涼亭漫話』（初出 1975 年 11 月『文匯報』）を発表するまでの十年間断筆した。1975 年に発表した『涼亭漫話』、『小小山歌大寨音』（初出 1976 年 2 月『文匯報』）、『大寨的…』（初出 1976 年 2 月 28 日『光明日報』）の三編は短編でひとりごとを文字に託したかのような印象を受け、茹志鵬の本意ではなく迫られて書いた印象を受ける作品であり、文革の影響がみられる。

茹志鵬はその後 1977 年に文壇に復帰した。1985 年に中国作家協会上海分会に常勤になって以降、仕事が非常に忙しくなり自分の定年を待って執筆を開始しようとした。しかし、茹志鵬は過去の自分の作品を読み返し、今の自分が過去のような作品を書くことができないこと、これ以上書き続けていくことが困難になったと感じた。その様子を見た王安憶が茹志鵬にそれでも継続して書くこ

とを勧めると、茹志鵬は非常に憤慨して、王安憶に自分の作家活動に関してのコメントを二度と口にさせなかった⁷⁷。その後、茹志鵬は中国作家協会主席団委員、中国上海筆会中心理事、中国作家協会上海分会常任副主席、『上海文学』の副主編と中国文学界の重要なポストを歴任した。亡くなる約半年前の1998年4月に掲載された散文『我能忘嗎？』（初出1998年4月17日『新民晩報』）が茹志鵬の最後の作品となった。

1998年10月茹志鵬の死後、王安憶は母の遺品を整理し、三万字に及ぶ『她從那條路上來』中巻⁷⁸（初出1999年第4期『收穫』）を見つけた。これは茹志鵬が1982年に発表した『她從那條路上來』上巻（初出1982年第4期『收穫』）の続編として、『我能忘嗎？』とともに所収され『她從那條路上來』として王安憶の編集によって茹志鵬の死後に出版されている。王安憶は『她從那條路上來』の出版にあたり、茹志鵬ゆかりの場所を王安憶自らが訪れ、現在の様子を撮影し巻頭に掲載している。『她從那條路上來』は茹志鵬の自叙伝として、主人公・也宝は茹志鵬だといわれているが、王安憶はこの点について、この作品が茹志鵬の完全な自伝ではなく虚構の部分もあるのだと次のように説明している。

『她從那條路上來』は母の真実の生活と関係はあるが、これはフィクションであると明らかにしたい。なぜなら私は母の娘であるから、いつでも母の歴史を理解しており、私は作家としてノンフィクションも又、作家の歴史の一部として理解しているし、これは私と母の共同の運命なのである。最後に私は再び、フィクションとノンフィクションの関係について少し説明するが、長篇の主人公“也宝”という名前について、母の幼名は“芬宝”であるが、行五〔五番目〕とは祖母が四人の男の子を産んだ後に生まれた唯一の女の子、最後の子供を意味する（杉江注：ところはノンフィクションであるといえる）。（『她從那條路上來』p.7）

茹志鵬は作家になった王安憶についてどのような思いを抱いていたのだろう。茹志鵬の「從王安憶説起」⁷⁹には、母であり作家である立場から、自分と同じ作家になった王安憶についての感想が述べられている。茹志鵬にとって王安憶は非常に自慢できる娘であり、母として生活面で精力的に尽くしてあげたいと思うが、作家としてはライバルでありプレッシャーを感じ、ある種の危機感もあるのだ⁸⁰と述べている。そして、王安憶が16歳の誕生日を迎えてすぐに安徽省に下放したが、茹志鵬は王安憶から届く手紙を読んで、文章の表現力によって

人に感動を与える裁量を初めて感じた。王安憶の日当が手紙一通の郵便代にし
か相当しない少ない収入であったので、茹志鵬は王安憶に 1 ヶ月 10 元仕送りし
ていた。この当時、王安憶の生きる心の支えとなっていたのは、茹志鵬に宛て
て文章を書くことであり、茹志鵬は仕事をしていなかったのもので王安憶に 1 週間
に 2 通手紙を送った。手紙の内容は王安憶の労働、生活、環境、農村の小さな
友達やおじさんおばさん、そして彼らの愛情や揉め事が描かれていた。茹志鵬
は王安憶が描く些細な日常生活の情景に、生き生きとした活気や親しみを感じ
た。その表現力は、描かれた人物が目に見え、声が聞こえてくるような、手
紙を見た人には忘れがたい印象を残すものであったと述べている。王安憶が書
く些細な出来事から茹志鵬は彼女の農村での生活を理解できたし、彼女の思考
や感情は、彼女の形象となって紙ににじみ出ている。そして、茹志鵬は編集の
経験のある友達に王安憶の手紙を見せると彼らも一様に王安憶の文才を認め、
茹志鵬の印象が正しかったことと述べている⁸¹。

他にもこんなエピソード⁸²がある。1980 年 4 月から半年間、王安憶が北京で
開かれていた文学講習所の講習に参加していた時に、王安憶は自分が書いた『幻
影』を茹志鵬に送り、茹志鵬はその意見を延々述べ王安憶宛てに手紙を送った。
その後、王嘯平に『幻影』を見せると、王嘯平は王安憶の作品には欠点がある
ことを認めつつも、茹志鵬のやり方には賛成せず、茹志鵬に対して「あなたが
王安憶を管理してはいけない、彼女自身が模索して、自分の道を進んでいくべ
きだ。」といった。茹志鵬はその時以来、基本的には王安憶の初稿を読むことは
やめ、その後はすでに発表されたものや賞をとった作品ですら目にするのを
やめたという。つまり、王安憶の忠実な読者は父だけとなり、「王安憶の作品に
口を出さず、自分で模索して自分の道を進ませる」姿勢が、おそらく王安憶の
創作の上で早い時期から自分の表現方法を形成したことに関係があるのではな
いかと茹志鵬は回想している。王安憶が学校で教育を受けることがなく文工団
に進み、雑誌の編集者を経て作家になるという茹志鵬と同じ道を歩むことにな
った背景には、茹志鵬と下放先に暮らす王安憶の間に交わされた手紙のやりと
りから、最初に王安憶の文才を見出した茹志鵬の母としての愛情があったから
だといえるだろう。そして、作家となった王安憶に対して、茹志鵬は先輩の作
家として王安憶の作品を読むことも批評することもせずに見守った結果、王安
憶が自由に自分の作品を描いていく過程を独自で確立させ、王安憶が早い時期
から作家として成功した大きな原因の一つであると考察することができる。

注

- 1 茹志鵬については後に詳しく叙述する。王安憶『上海女性』pp.141-162 所収の「茹家淩」には、王安憶が母方のルーツを探した経緯が描かれている。浙江省の東部にある、紹興市の東 13 キロ、杭州の西 50 キロに位置する紹興市紹興県柯橋街道が王安憶の曾祖父の出身地で、曾祖父は浙江省杭州市で事業を興して成功した人であった。
- 2 佐伯慶子 1989 年 3 月 p.212 によると、姉は 1988 年当時、上海石油化工廠第二中学校語文教師である。
- 3 王安憶は兼業作家であり、かつて『上海文学』『海燕』『萌芽』などに短編を発表していた。佐伯慶子 1989 年 3 月 p.212 によると、1988 年当時は上海教育科技文化智力發展公司に勤務している。茹志鵬「従王安憶説起」『王安憶研究資料』上 所収 p.391 に、文学好きな售票員であると紹介されている。售票員とは切符やチケットを売る人、あるいはバスの車掌であるが特定できない。
- 4 前掲 注 1「搬家」p.53。
- 5 佐伯慶子 1989 年 3 月 p.212 によると、王安憶の来歴を本人に確認してもらう際に、「上海向明初級中学卒業」を「上海向明初級中学結束〔打ち切られた〕」と王安憶が修正したという但し書きがある。そこには、上海向明初級中学ではほとんど勉強することができなかった、この時代に対する王安憶の抵抗が感じられる。
- 6 木之内誠 1999 年 p.14。
- 7 『上海 1956』中華地図学社。
- 8 前掲 注 7。
- 9 華霄穎 2009 年 p.53。
- 10 前掲 注 9 p.53。茹志鵬は「かつて王安憶に将来医者として、技術をもって分を守り病人を救って欲しいという希望があった。」とある。
- 11 前掲 注 1「搬家」p.57。
- 12 三秋とは、秋収、秋種、秋管の意味で秋に農作業をすること。
- 13 林彪による戦争準備の命令とは、林彪の「第 1 号命令」のことである。1969 年 10 月 17 日林彪は党中央には知らせず「戦備を強化し、敵の奇襲を防ぐ」という名目で、蘇州において緊急指示を口頭により独断で発令した。10 月 18 日、黄永勝らにより全部で 6 カ条ある「林副主席の第 1 号命令」として正式に下達

され、全軍を動員して緊急臨戦態勢に入った。それは「ソ連の交渉代表が 10 月 20 日に北京にやって来るが、これに対して警戒心を高めなければならない。ソ連が交渉を煙幕に利用して、わが方に奇襲をかけるのを防ぐため、全軍各部隊はただちに展開し、各種の重要な装備・設備および目標物は常時開かれた状態にし、国防工業は武器弾薬の生産に力を入れねばならない。第二砲兵も十分準備を整える必要がある。」とする内容である。この発令後、全軍がただちに緊急臨戦態勢に入ったが、都市の人口疎開も行われ全国で極めて大きな混乱を引き起こした。

14 宣伝隊とは、毛沢東思想宣伝隊ともいい、文革期間、自発的に余暇を利用して非営利で劇や舞踊などで革命闘争や生産活動を宣伝する小さなグループを指す。注 21 で述べる文工団が宣伝隊と異なるのは、政府の認可した職業的な営利目的のために活動している点である。

15 前掲 注 1「死生契闊 与子相悦」p.115。

16 五七幹校とは五七幹部学校の略であり、文革期間中、極左路線の下で、毛沢東が 1966 年 5 月 7 日に発表した「五・七指示」の精神を徹底的に実行するために、幹部を集中下放し、労働改造させた場所である。「五・七指示」とは、「多くの幹部の下放・労働は、幹部が新しく学習を行うための絶好の機会である。老人や身体障害者を除いて皆このようにやるべきで、在職の幹部も時期と人数を分けて下放・労働をすべきである」という方針であり、五七幹校の名前の由来となっている。1968 年 10 月 5 日『人民日報』で多くの幹部を下放、労働させていることを黒龍江省革命委員会が報道し、慶安県柳河農場における五七幹校の工作方法を伝えた。この後、中央から地方に至るまで、五七幹校が相次いで創設され、このため経験と専門知識を有する多くの幹部と知識人が単純な労働に従事し思想改造を行うため、貴重な時間を浪費した。実質的には、造反派の統制下にあった多くの部門の五七幹校は、幹部を迫害し知識人に懲罰を与える場所になり、四人組が打倒された後も 1978 年まで続いた。

17 前掲 注 9 p.55。

18 王安憶「兩個六九届初中生的即興対話——与陳思和対話」『王安憶説』p.6。

19 王安憶「房子」『茜紗窓下』pp.12-20。

20 前掲 注 9 p.54。

21 文芸工作団とは劇や舞踊などで革命闘争や生産活動を宣伝する地区や部隊所属の文芸団体のことであり、文工団、文工隊ともいう。1930 年代の紅軍宣伝

隊の伝統を受け継ぎ、街頭隊、舞踊、詩歌朗誦、映画上演など多様に革命宣伝活動を展開した。抗日戦争期から多くの地区や部隊でこの組織が成立し、大衆を動員して革命闘争や生産建設を進めるための宣伝工作をし、大きな役割を果たした。

22 王安憶「感受・理解・表現」『王安憶研究資料』p.4に『小院瑣記』で描いた文工団は地区団であり、王安憶はここに6年間所属し、家族用の集合住宅に暮らしていたので、その情景は非常に詳しいとある。木之内誠 1999年 p.10,11,87。

23 前掲 注1「搬家」p.57。

24 前掲 注6 p.230によると、魯迅は1927年10月～1930年5月まで閘北景雲里23号の石庫門弄堂、1930年5月～1933年4月まで内山完造名義で北四川路のラモス・アパート（四川北路2093号、現：北川公寓）の3階4号室に暮らしていた。そして、1933年4月～1936年10月まで内山書店店員の名義で施高塔路大陸新村9号に（現在の山陰路132弄9号）に移った。ここは亡くなるまでの3年半暮らした最後の家である。上海での3ヶ所の住居はラモス・アパートを中心に約500mしか離れていない。大陸新村9号の住居は1931年に大陸銀行上海信託部が投資して建てた赤煉瓦3階建高級テラスハウス住宅であり、煉瓦などの建材にはヨーロッパからの輸入品が使われ、ガス、浴室などの設備も整い、6列60戸あった。魯迅以外に茅盾も二度暮らしていたことがある。そこは現在「魯迅故居」として上海市文物保護單位に指定されており、王安憶が参観したのはこのアパートである。延べ床面積222㎡、1階は応接間と食堂、厨房。2階には寝室兼納戸、3階は子供部屋と来客の寝室として使用していたというが、王安憶の家と同じ間取りは、おそらく2階部分であろう。

25 王安憶著 佐伯慶子訳『現代中国文学選集 7 王安憶』p.230。宋慶齡が創刊した児童向けの雑誌である。ここで本格的に書き始める。王安憶の作家としてのスタートは児童文学であり、それらは児童小説集『黒黒白白』に収められている。

26 石井恵美子 1993年11月。

27 前掲 注19「回憶文学講習所」p.53には、王安憶が北京の文学講習所に学んだ様子が描かれており、文学講習所は今の魯迅文学院であると記述がある。

28 前掲 注22「感受・理解・表現」p.3。

29 『雨、沙沙沙』の主人公が雯雯である。中山文 1984年 p.70には、「1979年から1980年の作品の中で私達読者は何度も「雯雯」という名の少女に出会う。

時として彼女は名を「小方」や「桑桑」にかえる。だが、彼女らはみな幼なく、善良で、物事をよく考える。憧れと弱さを持った少女である。王安憶自身が「自分の持つなにがしかを雯雯たちに託した」といっているように雯雯と作者の距離はごく近い。そのために、そこに描かれる知識青年たちの姿は生き生きとしており、彼らの感情は真実味を帯びて伝わってくる。前掲 注 18「兩個六九届初中生的即興對話——与陳思和對話」 p.8 に 1988 年に行われた陳思和との対談で王安憶は「「三恋」シリーズの後に、再び「雯雯」に戻った」と述べている。

30 前掲 注 22「感受・理解・表達」 pp.6-7。

31 前掲 注 22「感受・理解・表達」 p.8。

32 アメリカ滞在時の様子は、劉小俊の 2007 年に王安憶のアメリカ滞在の意義を論じている。他にも、松村志乃 2008 年でもとりあげている。王安憶のアメリカ滞在についての記述は、王安憶『街灯底下』 pp.199-221 にもある。

33 松村志乃 2008 年 p.37 にも「アメリカから帰国した王安憶は、自分の意識の変化——自分は「確かに中国人である」と認識した——をどのように創作に反映すべきか模索していた」とある。

34「ルーツ文学派はしばしば、儒家の正統的文化に対抗し自らのルーツをかつて郷土に花開いた伝統文化に求めるのだと語った。この「儒教正統文化」というのは、人民共和国を支配している中共イデオロギーを暗喩しており、その独裁的体質が儒家一尊に通じるという意味で儒教の名が揚げられた」とある。ルーツ文学派とされる作家は、辺境への下放体験をもとに土俗性の追及を普遍性をもめざし、イデオロギーを突きぬけてユーモラスな独自の世界を創出した阿城（1949 年～）の『棋王』『樹王』『孩子王』の三部作や、鄭義（1947 年～）の中国山村の歴史を引きずった宇宙観、共同体神話と近代化の現実とを、生命の源であり男女の性の象徴で井戸を通して描いた『古井戸』などが代表とされる。

（藤井省三 大木康 1997 年 p.217）

35 松村志乃 2008 年に、杭州会議とは雑誌『上海文学』『西湖』の主催で 1984 年 12 月に 6 日間行われた会議であり、全国から集まった若手文学者が西洋の現代思想などについて意見を戦わせたのがルーツ探し議論の始まりで、やがて理論の中心とみなされた韓少功、阿城、鄭義らがルーツ派と呼ばれるようになったという記述がある。他に杭州会議に参加した多くは、現在もなお活躍している作家たちであると述べている。

36 韓少功は同世代の作家たちとともに中心的な役割を果たした。（『月刊 しに

か 中国現代文学案内』1998 年 4 月 p.51)

37 前掲 注 18「從現實人生的體驗到敘述策略的轉型——關於王安憶十年小說創作的訪談錄」p.31。

38 前掲 注 35 p.34。

39 和田知久、森岡優紀、上村香織、新谷秀明 2000 年 p. 54。

40 前掲 注 1「插隊後記」pp.68-69。

41 知識青年とは、かつて農山村に下放された中卒、高卒や失業中の中・高卒者を指す。

42 前掲 注 35 pp.36-39。

43 前掲 注 1「搬家」p.60。

44 前掲 注 1「我的父親王嘯平」p.166 に、1978 年の特別暑い夏の日、父が胆のう炎を患い手術する際に、母は冠狀動脈性心疾患と高血圧を患っており、弟は小さく姉は外地にいて、自分と婚約中の夫以外、家には父を看病する人がいなかったと記述している。このことから、結婚当初、王安憶は夫と、王安憶の家族と同居していたが、新工房に引っ越した際に家族から独立した。華霄穎 2009 年 p.63 が、具体的な地名は不明であるが、文章の断片から愚園路と江蘇路に近い、銅仁医院一帯ではないかと推測している。

45 前掲 注 1「關於家務」pp.42-45 には、王安憶が結婚した当初、二人で家事を分担して行っていた様子が描かれている。作家である王安憶は自宅で仕事を、夫は毎朝決まった時間に出勤し、買い物は夫の仕事であった。結婚して、二人はすぐに一緒に暮らしてはおらず、結婚後二年以内にやっと一緒に暮らしはじめたとある。

46 前掲 注 1「搬家」p.63。

47 前掲 注 1「搬家」p.64。

48 中山文 1993 年他 2 本。

49 前掲 注 18「從現實人生的體驗到敘述策略的轉型——關於王安憶十年小說創作的訪談錄」p.33。

50 前掲 注 18「從現實人生的體驗到敘述策略的轉型——關於王安憶十年小說創作的訪談錄」p.43。

51 前掲 注 18「從現實人生的體驗到敘述策略的轉型——關於王安憶十年小說創作的訪談錄」p.43。

52 前掲 注 18「我做作家，是要獲得虛構的權力——与台湾作家張灼祥對話」

p.45。

53 茅盾文学賞とは、1981 年茅盾の遺言により設立された中国の長篇小説に与えられる最高の文学賞である。4 年に 1 回ごとに選出される。

54 前掲 注 18「我眼中的歴史是日常的——与王安憶談『長恨歌』」p.155,「我是女性主義者嗎？」p.166。

55 松村志乃 2010 年は、「王安憶は 1989 年の天安門事件の後、価値観転覆の憂き目にあった自身の文学者としてのアイデンティティの再構築をめざしていた。そして、一人の文学者として以後どうあるべきかという問題意識を軸に、小説創作のあり方を検討し、復旦大学での講義を行ったのだ」と分析している。

56 前掲 注 18「復旦大学中文系小説学課程大綱」p.290。

57 ヴィクトル・ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』、トルストイ『復活』、ロマン・ローラン『ジャン・クリストフ』、エミリー・ブロンテ『嵐が丘』、ガルシア・マルケス『百年の孤独』、中国当代文学から張承志『心霊史』、張煒『九月寓言』、中国古典から曹雪芹『紅樓夢』。

58 四編とは、周宛潤『五妹妹的女兒房』、胡廷楣『生徒 1966』、李肇正『城市生活』、王李明『帶個男友回家過年』。

59 王安憶『王安憶導修報告』。

60 高島俊男 1986 年 p.62,65。釜屋修 1988 年 p.47 にも詳しい記述がある。

61 新四軍とは、国民革命軍陸軍新編第四軍の略称であり、日中戦争期、主に華南で活動した中国共産党系の軍隊。葉挺が軍長であった。1937 年 10 月蒋介石が一方的に葉挺を軍長に任命し、国共両党の交渉を経て、1937 年 12 月 25 日に、新四軍軍部が武漢に成立した。1938 年 4 月、新四軍軍部は安徽省南部の岩寺に移り、湖南、江西、福建、広東、浙江、湖北、河南、安徽の 8 省 13 地区の紅軍残存部隊を集中、華南での抗日戦争に参加した。1941 年安徽省南部で大打撃を受け〔皖南事件〕、新四軍は江蘇省北部から山東省で日本軍との遊撃戦および国民政府軍との摩擦を強いられた。その後 1947 年には八路軍などとともに中国人民解放軍に改編された。

62 前掲 注 25 p.230。

63 前掲 注 1「我的父親王嘯平」p.167。

64 前掲 注 1「我的父親王嘯平」p.164。

65 高島俊男 1986 年 p.66。

66 前掲 注 1「我的父親王嘯平」p.165。

67 前掲 注 1「我的父親王嘯平」 p.164。

68 茹志鵬著、王安憶編「從何而來，向何而去」『她從那條路上來』 p.308 によると、朱家は「上海道台〔上海知事〕の印よりも、朱葆三の紹介状の方が、価値が上」といわれる上海の名家であった。同じく p.5 によると、朱家は今の盧湾区少年宮にあった。王安憶がその場所を撮影のために訪れた際、そこで店を開いている従業員から昔と様子が変わっていないことを聞いた。その後、従業員は王安憶に撮影している理由を尋ねてきたので、王安憶は母がかつて暮らしていた場所である答えると、王安憶が朱葆三家の親戚であるのかと質問してきたというエピソードからも朱葆三家のかつての繁栄ぶりがうかがえる。盧湾区少年宮は、盧湾区の復興中路と瑞金二路が交差する場所にある。上海市婦女補修学校から直線で約 600m の場所にあり、王安憶が 1955 年から暮らした家からも約 500m の場所にある。

69 前掲 注 68「愛荷華小簡(一)」 p.294 によると、茹志鵬が生まれた時には祖父の家は売られていた。

70 前掲 注 68「從何而來，向何而去」 p.308。

71 前掲 注 68「我能忘嗎？」 p.286 によると、茹志鵬が杭州で過ごしていた頃、生活は非常に貧しく祖母は自分が食べるものがなくても孫のために奔走してくれたので飢えることはなかった。が、ある日全く食べるものがなかった時、大雑院の壁の隅に南瓜がなっているのを発見し祖母が採ってくれて、兄と茹志鵬は天からの贈り物だとすごく喜んだという。これを共同の台所に運び、茹志鵬は南瓜を手で上にあげてキャッチするという動作を繰り返した。祖母が柴を運び南瓜をゆでる準備を始めた時だった。落ちてきた南瓜が蓋をとっていた鍋の上でつかもうとした茹志鵬の左の小指にあたり、茹志鵬は南瓜の重さで怪我をし血が出て本当に痛かったが、南瓜が手に入った喜びの方がずっと勝ったという些細な日常生活の記述がある。同じく p.289 によると、祖母が亡くなって残された茹志鵬と二歳上の四番目の兄に、上海で朱家に引きとられていた三番目の兄が一ヶ月の理髪風呂代を仕送りしてくれ、そのお金で二人は二斗の米を買い、残りのお金で紅腐乳を買って一ヶ月分の食料となって満足していた。しかし、茹志鵬にとって唯一遺憾であったのは、学校へ通えなかったことであった。

72 前掲 注 68「愛荷華小簡(一)」 p.296 によると、茹志鵬を孤児院に連れて行ってくれたのは兄の友人であったが、茹志鵬は孤児院から脱走した。

73 前掲 注 6 p.14 盧湾区にある復興公園に入っていく入り口の通りが雁蕩路で

ある。復興公園の入り口から王安憶の卒業した淮海中路小学校まで直線にして 400 m 離れていない。

74 前掲 注 6 p.133 に清心女中について 1861 年に清心書院に付設して開校された清心女塾が前身。1921 年に独立、移転する。1953 年に市政府に接収され、上海市第八女子中学と改称。1968 年に男女共学となり、現称である南市区重点中学になった。陸家浜路 650 号。

75 前掲 注 68 「愛荷華小簡(二)」 p.301 によると、茹志鵬は聖經学堂での生活には満足していた。第一にお金がかからず、宿舍や食事も無料であったこと、第二に授業では聖書を読むが、それ以外の時間は読みたいものを読むことが許され、第三に日曜日は自由に行動できた。しかし、太平洋戦争が始まり、アメリカ人の女性の校長先生が帰国してしまったので、ここでの生活は 1 年にも満たないものであった。

76 石井恵美子 1993 年 p.50 によると、「生活」は女性の就職には大学の卒業証書よりも容姿端麗が求められる現実を描いている。これが茹志鵬の処女作なのであるが、この「生活」と、ある女子大生が生活苦から県知事の愛人になるよう追いこまれることを描いた『一個女学生的遭遇』（蘇中報 1944 年 3 月 7 日）は短編としてもあまりに短い。そのため、実質上の処女作といえるのは、解放戦争を部隊に、負傷した兵士と看護婦の恋愛を描いた『何棟梁和金鳳』（文匯報 1950 年 8 月 31 日、9 月 2、4、5、6、7、8、9、11 日連載）であるとしている。

77 前掲 注 68 「愛荷華小簡(二)」 p.306。

78 前掲 注 68 「編前語——写作者的歴史」 p.3 によると、『她從那條路上來』中巻は 1983 年 8 月末、茹志鵬は王安憶と共にアメリカのアイオワ大学で開催された「国際創作プロジェクト」に参加している時に執筆していたが、帰国後『她從那條路上來』中巻の執筆をやめ『愛荷華小簡』を執筆していたという。

79 前掲 注 22 「從王安憶説起」 p.391-398。

80 前掲 注 22 「從王安憶説起」 p.391。

81 前掲 注 9 p.55 と前掲 注 22 「從王安憶説起」 p.392-393。

82 前掲 注 22 「從王安憶説起」 p.397。

第二部 王安憶のトポフィリア

第1章 『香港的情与愛』

1. はじめに

本章で扱う『香港的情与愛』は、雑誌『上海文学』に1993年第8期に掲載された、1997年の中国返還を前にした香港を舞台に繰り広げられる、50代のアメリカ人華人・老魏、そして二人の30代の移民女性、台湾出身の凱弟と上海出身の逢佳をめぐる物語である。時間にも経済的にも余裕がある老魏は、アメリカの家とは別に「香港の家」を築こうと、香港で知り合った逢佳と香港で居を構える。が、アメリカの家庭を壊す気がない老魏と、強烈な渡米志向のある逢佳の関係は最後には破綻をむかえる。

王安憶が『香港的情与愛』を発表した当時、都市を描く姿勢はまだ明確ではなく、この作品自体の評価も分かれていた¹。しかし、王安憶が上海を舞台とした一連の小説、『長恨歌』（初出『鐘山』1995年第2期）や『我愛比爾』（初出『收穫』1996年第1期）を世に送り出すと、『香港的情与愛』は都市・上海を描く布石となった、最初に都市を描いた作品として後に評価されるようになり、王安憶はこの作品の後に発表した『長恨歌』によって都市を描く作家²としての確固たる地位を築いた。

『香港的情与愛』に関する日本の先行研究は、松村志乃³のものがあるが、非常に少ない。松村は王安憶がこの作品を、老魏の香港にもつ感情の空虚さを「虚」、人間味のある温かさを「実」というように対称的に描き、この対称性が老魏の二人の愛人である凱弟と逢佳に投影されているのだと論じている。

一方、中国での『香港的情与愛』に関しての先行研究も、王安憶小説の中でも非常に評価の高い『長恨歌』や『我愛比爾』といった上海を描いた作品と比べると極めて少ない⁴。これまで『香港的情与愛』は『長恨歌』との比較でとりあげられることが多く、王安憶が後に『長恨歌』をはじめとする都市を描くきっかけとなった作品だという見解で統一されてしまい、この域を出る解釈は現われなかった。

本章では最初に、老魏が生まれ育ったサンフランシスコと老魏が時々訪れる香港が、ともに移民の都市であることを検討する。そして、老魏の香港における「臨時の家」の変遷をたどりながら、彼が香港で知り合った二人の女性との関係をふまえて、老魏の「臨時の家」が最終的に彼の理想とした「香港の家」

となりえたのか否かを、トポフィリアをキーワードに論じる。作品の中で描かれる老魏の「臨時の家」とは、老魏が香港で常宿としていた ^{ハッピーバレー} 跑馬地のホテル、その後引っ越した逢佳と同居を始めた ^{ノースポイント} 北角のマンションを指し、「香港の家」とは、老魏が逢佳と二人で暮らすために買ったマンションであるが、「香港の家」の具体的な場所は不明である。最後に、老魏の「臨時の家」と「香港の家」に託された王安憶の意図を解釈し、『香港的情与愛』が後の王安憶の作品にどのような影響を与えたのかを述べたい。本章で引用する『香港的情与愛』の邦訳は筆者による。原文は『傷心』1995年1月第1版所収の版を使用する。

2. 老魏の「臨時の家」

この章では、老魏の「臨時の家」について検討し、香港とサンフランシスコがともに移民の都市であることを述べる。次に、老魏が香港で最初に知り合った女性・凱弟について分析していく。ここではまず、凱弟について説明し、何故、老魏が長年かけて見つけた「探し物」は凱弟ではなく逢佳であったのか論じる。

2.1 老魏の「臨時の家」

老魏は、香港島の跑馬地にあるホテルを、香港滞在中の常宿としていた。ここが香港の「臨時の家」である。彼は香港を訪れる度に、香港島から九龍の麗晶大酒店〔リージェントホテル〕⁵のバーにやってくる。酒を飲みながら眺める香港島の夜景を何よりも愛していた。麗晶大酒店は、尖沙咀地区の突端の海沿い、香港島を見渡すことのできる最高のロケーションに位置する。ここは老魏にとって、これまで積み重ねてきた香港での経験を認識する場所であった。老魏はこのバーで働く者たちとも顔見知りで、老魏を見ると「魏先生」とかしこまって呼ぶのではなく、「老魏来ていたのね。」と親しげに声をかける。このような老魏と香港との関係は、次のように描写されている。

老魏は一年に2度、仕事が忙しくない季節に香港へやってくる。時には、仕事が忙しい季節でもやってくる。彼は最ものんびりした、ゆったりした時間を香港で過ごす。彼は香港だけが、この良き時間を受け入れてくれるのだと思った。〔中略〕彼はまるで、この島にやってくる渡り鳥のごとく、自分

の季節に従って訪れる、飛行場、波止場に押し寄せてくる旅客の中の一人の固定客であった。〔中略〕香港は老魏の臨時の家であり、同時に香港は老魏に臨時の家が必要であることを気づかせる。臨時の家は、家と休暇を過ごす場所の中間で半島の性質を帯びている。〔中略〕ここは家でも、又、休暇を過ごす場所でもなく、老魏は「香港」と命名するのである。(『香港的情与愛』『傷心』所収 pp.2-3)

王安憶も香港に対して「香港の人びとは旅行者の表情をしていて、自分のすべきことを終えたら、いつでも出て行くことができるよう準備をしている。香港の街にはあらゆる国籍の肌の色が異なる旅行者が行き交い、まるで大きな波止場のようなのである。「港」であるここは、人を見送り迎えに行く場所であり、多くの物語が存在するのだ。」⁶と述べており、老魏の「臨時の家」を香港の、それも不特定の多くの人びとが滞在するホテルに設定した。

2.2 香港とサンフランシスコ

ここで、香港とサンフランシスコのチャイナタウンが、どういった人びとによって成り立つ社会であるのか確認しておきたい。1842年、アヘン戦争後の南京条約によって、イギリスは清朝から香港を割譲し、英領植民地政府による香港支配が始まった。その後、香港は1997年に中国に返還され「中華人民共和国香港特別行政区」となった特別な地域である⁷。英領植民地政府時代に遡ると、中国から香港への非合法入境に対しては寛容な政策がとられ、1950年から1972年までは、仮に中国大陆からの来訪者が英領植民地の領域に足を踏み入れ逮捕されても、入境者にはすべて香港への居住権が認められた。そして、1972年「抵壘政策」が実施された後にも、現実には香港は大陸からの新規流入者を受け入れ続けたといわれている⁸。1995年の香港の人口は、およそ615万人⁹、そのうち香港の全人口の実に98%が中国人で、広州、マカオや近隣の広東省各県出身の広東人のほかに、福建省に近い潮州人、四邑人¹⁰を含めて、広東系が香港の中国人の約80%を占める。そして、少数ながら上海人、客家、福佬、^{ホクロ}蜆民など広東省以外の出身者もいるが、香港は基本的に広東人社会である。

一方、老魏が生まれ育ったサンフランシスコのチャイナタウンは、東南アジアを除けば世界最大のチャイナタウンである。1846年にメキシコ領だった小さな港町が米国海軍に占領され、サンフランシスコと命名されたのとはほぼ同時期

にゴールド・ラッシュが起こった。この時、多くの中国人が一攫千金を夢見て移り住んだのがチャイナタウンの始まりで、当初は移民のほとんどが広東人だった。しかし、当時から黄禍論¹¹があり、1850年には外国人鉱山従事者税が課せられ中国人排斥運動も広がっていく、移民にとっては恵まれない環境であった。このようなサンフランシスコのチャイナタウンを、老魏は「英語はどもって、広東、閩南なまりが混じり中国語もうまく話せない。こうした地方性のある言語が、国家をなくした彼らの本籍となる」¹²と喩える。彼らの二世、三世は世代を追うごとに生活水準、教育水準が向上し、ここで成功した中国人たちは郊外へと出て行く。この点からも、サンフランシスコのチャイナタウンは、中国人受け入れの窓口であり出口だといわれている¹³。

老魏もこれまで、生まれ育ったサンフランシスコのチャイナタウンで、自分の祖先と同じように華人として苦労を重ねてきたが、今では仕事もそれなりに成功した。そして、香港は自分の故郷に似た中国人の受け入れに寛容な場所であり、自分の同胞である広東人の社会が成り立つ、他のどこの地域よりも馴染みの深い場所であったために、老魏の「臨時の家」となったのである。

2.3 凱弟

次に、老魏をめぐる凱弟と逢佳との関係が対照的に描き出されているくだりは、老魏が香港で長年の「探し物」を見つけ出す重要な過程であるので詳しく追ってみたい。老魏には、小櫛¹⁴に逢佳を紹介される前に、すでに香港で知り合った恋人・凱弟がいた。出会ったその日に、男女の関係になった凱弟は、老魏に移民としての自分の生い立ちを話す。

彼女は台湾で生まれ、幼い時から父がいなかったこと、その後、母がフィリピンの華僑と結婚したので、一家はアメリカに引っ越したと話した。彼女がニューヨークで愛した芸術家は、42nd で観光客の肖像画を描いていた。芸術家は彼女を愛してはいたが、彼は芸術を、彼女よりも深く愛していたので、彼女は香港にやって来たのだ。(『香港的情与愛』p.4)

老魏は凱弟と付き合ううちに、彼女の話が全て真実であることがわかった。男女の関係になれば、将来自分と結婚するつもりがあるのかなどと女性は自然と責任を追及するのに、凱弟は全くそういう素振りも見せなかった。が、老魏は私的なことには全く干渉しない凱弟に対して、精神的に自分を頼らない彼女の

強さに憐憫の情もあった。二人は何度か関係をもったものの、ある時点から恋人ではなくなった。

老魏は長年、限られた短い時間、時折訪れる「臨時の家」を心から愛していたが、「契約性のある何か」が足りないと探し続けていた。しかし、それは凱弟ではなかったことが以下の引用よりうかがわれる。

彼女たち（杉江注：凱弟と逢佳）は二人とも魅力ある女性であるが、それぞれの魅力は違った。凱弟は骨に宿る快感で、逢佳は肉に宿る快感である。肉は骨よりもっと敏感で感じやすく、とりわけはっきりとした現実である。一方、骨には記憶する性質があるので、後になって味わうことができるが、老魏には必要ではなかった。香港そのものが、彼に提供するので、彼は重ねて味わうことはできないのだ。香港は幻の中の幻の世界だ。彼が必要なのは、幻の世界を補ってくれる真心であり、現在形あるものが、この幻の世界に人間の姿を備えるのだ。（『香港的情与愛』p.5）

老魏のいう「契約性のある何か」とは、香港滞在の限られた時間、自分の「臨時の家」で一緒に暮らしてくれる人であり、たとえ利害の上に成り立つ関係でもかまわない「探し物」であった。しかし、老魏の「探し物」には一つだけ条件があった。長く苦しい人生を歩み、残りの時間も少なくなってきた老魏にとって、単純で付き合いやすい女性である必要があった。若い時なら、愛情にかける気力も体力もあったが、今では人との付き合いの全てがよくわかり、全ての真実を見極めることもできてきた。老魏にとって逢佳は真実であった。老魏は逢佳と絶妙なタイミングで知り合い、彼女こそ香港にいる自分を補ってくれる真実であり、「臨時の家」に足りなかった「探し物」なのだと確信した。逢佳は凱弟とは全く対照的な女性であり、老魏に話した生い立ちも真実ではなかったが、老魏にとって彼女たちの生い立ちの真偽は全く関係なかった。老魏は、逢佳と出会い何度かデートを重ね、サンフランシスコに帰国する前に結ばれる。老魏にとって逢佳との出会いは、香港の最初の「臨時の家」からの引っ越しを決断させた。

3. 「臨時の家」の引っ越し

凱弟と逢佳は二人とも中国人であるが、アメリカから来た凱弟は都会的であり、上海から来た逢佳は、時代の潮流に乗っている香港で一見して異国人とわ

かるやぼったい女性として、作品の中で二人は完全に対照的に描かれている。ここでは、まず老魏が付き合うことを決意した逢佳について述べる。続いて、老魏は跑馬地のホテルから逢佳の住む北角のマンションへ引っ越したが、ここが彼が理想とする「香港の家」となったかどうかを検討したい。

3.1 逢佳

老魏の恋人であった凱弟は、非常に都会的な女性である。老魏と出かける時の凱弟は全体を黒でまとめ、裾がレースになっている長いスカートをはき、肩までのびた長い髪、痩せて尖った額とほお、休憩に入ったコーヒーショップの暗いえんじ色の壁は凱弟の肌の透きとおる白さを更に引き立たせる。一方、逢佳は凱弟とは全く対照的であり、洗練されていない、香港に来て 1~2 年の 34 歳の上海出身の女性である。

彼女（杉江注：逢佳）は全身火のような赤で固めているが、風に漂う光がゆらゆら揺れる火のような赤ではなく、炉の中でしきりに突起する火花が四方に跳ね上がる火のような赤である。彼女が身につけている真っ赤なスーツはテトロン製で、折れたしわと線はピーンとはっていて、パーマをかけたばかりの髪に巻きつけているリボンも赤、巻いた髪はばらばらに広がっている。今回、彼女の服装は赤で統一されているが、大砲の火が発射されるような赤である。それに比べて、凱弟の装いは相手に譲歩しつつ、それでも主張するところもあるが、しなやかである。（『香港的情与愛』 p.26）

クリスマスに逢佳と一緒に過ごそうと、サンフランシスコから老魏が香港に到着したのは、クリスマスイブのわずか 24 時間前であった。彼は高まる気持ちを抑えることができず、ホテルへ向かう前の啓徳空港¹⁵ から逢佳に電話したが連絡がとれない。その後、小櫛にも電話したがつながらない。やっとの思いで小櫛を探し出したのは、クリスマスイブ当日昼のことであった。老魏がサンフランシスコに戻っている間に、逢佳は父と同居していた家から、半年留守にする友達の所有する北角にある、20 階建ての 1LDK のマンションに引っ越していたのである。その時、「逢佳にアメリカ行きを期待させながら、失望させることはして欲しくない。」と老魏は小櫛に忠告される。逢佳は老魏について、「アメリカ行きに関して、何も言わないずるい人間だ。」と小櫛に訴えていたのである。男女の関係になっても責任を求めなかった凱弟と比べると、逢佳の老魏への態

度は正反対である。老魏は久しぶりに逢佳とクリスマスイブに会う約束を、小櫛を介して取り付ける。逢佳にクリスマスプレゼントを渡そうとしたが、何をプレゼントするのが良いのかわからなかった老魏は、凱弟を呼び出す。そして、凱弟に選んでもらうのであるが、凱弟は誰のためのプレゼントなのか尋ねもしなかった。その時、老魏は突然、凱弟を逢佳とのデートに同伴させてはと思うつく。彼の中に二人に悪いという気持ちもあったが好奇心の方が勝り、彼はそれを実行する。凱弟を見た逢佳は動揺し、老魏の期待通り、自分を見失ってしまうほど「卑屈な態度」を二人の前でとった。

彼女（杉江注：逢佳）の顔はいたたまれない表情で、二杯飲み物を続けて倒し、三杯目の飲み物が置かれた時、彼女は老魏からの贈り物の包みをあけ、ブレスレットをコップの真ん中に落とした。そのブレスレットがコップに落ちる様子は少し情緒があり、音はしなかったがオレンジ色の泡が跳ね上がり、ついに沈んだ。この光景と老魏の心の奥底の深いさまざまな記憶の一連の全てが期せずして一致し、同情がわき起こった。（『香港的情与愛』 p.27）

クリスマスイブという特別な日に逢佳は老魏に会うために、突然の誘いでも、とびきりのお洒落をしてやって来た。しかし、老魏が都会的で年齢も自分と同じ位の女性を何のことわりもなく同伴したため、逢佳は混乱してしまう。

ところで、老魏にとって、逢佳の予想以上の嫉妬は何にも勝る快感であった。このように逢佳が自分の気持ちを隠すことができない点も、老魏にとって魅力の一つであった。また、最後に会ってから数ヶ月しか経っていないのに、蠟燭の炎の中で逢佳が老けて見えたことにも老魏は同情した。翌日、買い物に出かけた際にも、逢佳は前夜に会った凱弟の洋服のセンスの良さを明らかに意識していた。それは、凱弟が着ていたような地味な黒やグレーといった服に意識的に目を向け、黒いスーツ、黒い T シャツ、黒いストッキング、黒いリボンを逢佳が買い求めたことから明らかである。さらに、老魏に「凱弟とは男女の関係はなかったでしょう。」と断言した逢佳の態度に、凱弟のような冷静な女性とは正反対の、自分の都合にあわせて楽観的にものごとを考えるかわいい女性としての性質を感じたのである。

3.2 ノースポイント 北角の「臨時の家」

老魏は、逢佳のアメリカに移住したいという希望をかなえてやろうと決意す

る。そして、老魏は跑馬地の常宿から北角の逢佳のもとに踏み込んだ。

北角のマンションはやはり他人（杉江注：逢佳が不在中の友人の家を借りているため）の衣服だけれど、この衣服には逢佳のにおいがあり、老魏はこの点に留意した。〔中略〕以前の彼は、九龍から香港島を眺めていたが、今は香港島の中心へ踏み込んだ。（『香港的情与愛』 p.31）

跑馬地の常宿だったホテルの正確な位置は作品からはわからないが、跑馬地は銅鑼灣から山側へトラムに乗って 10 分あまりの地区である。そして、跑馬地から北角までは、直線にして約 4～5 キロの大変近い距離にある。北角は香港島北東部に位置し、住宅地区そして小さな商店が集まる商業地区として発展しており、この地域には香港人の住宅が広がっているので観光客はあまり訪れることはないが、地下鉄や路面電車、九龍と結ぶフェリー航路、空港行きのバスが発着するターミナルなどがあり、交通が至極便利な場所である。

二人の北角での生活は一日何があるわけでもないが、忙しく過ぎていった。二人の元に遊びに来た小櫛は、逢佳は以前と変わらないのに、老魏が全く別の老魏であることを発見した。ある晩、老魏は最も愛していた麗晶大酒店のバーに逢佳と飲みに行く。老魏はこの時、「対岸の香港島の明かりを見て、その明かりが自分とは切っても切れない関係にあるのだと突然思い、逢佳とは互いの利益が一致したから、その明かりは、自分に少し暖かく配慮もあるのだ。香港の物語には、こうした根拠があったので真実となったのだ。」¹⁶ と以前とは違う、現在の自分を確認した。この時の老魏にとって、互いの利益の上に成り立つ関係であるとはいえ、香港島の明かりは逢佳であった。老魏は自分の人生の最後となる「香港の家」を築くことと、逢佳がアメリカへ移住するための手助けを自分がするという二人の利害が一致したのだと解釈したが、それは老魏の独りよがりな勝手な思い込みであった。麗晶大酒店から戻った老魏は、過去と現在の自分を調整し自我を取り戻し、北角のマンションの生活にも少しでも適応していくように努めた。しかし間もなく、老魏は北角の「臨時の家」から、ホテルでも逢佳の友人の留守宅でもない、逢佳と二人で暮らす目的で買ったマンションへ引っ越したが、ここは老魏が理想とした「香港の家」とはならなかった。逢佳にとって、老魏からのこうした経済的な援助は自分の目的ではなく、アメリカへの移住が最終目的で、彼女にとってそれが全てであったのだ。

4. 老魏の「香港の家」

逢佳はアメリカへの移住を望むが、老魏は一向に逢佳のアメリカへの移住の話を進めない。逢佳にとって、移住の地は何故アメリカでなければならなかったのか、そして、老魏は何の理由があつて、それをひたすら拒み続けるのか。

4.1 老魏とアメリカ

逢佳の移住の目的は非常に打算的であつた。逢佳が香港に来たのは、夫と息子を上海から呼び寄せるためであつたのに、香港に来て一年目、思いがけず夫から離婚を申し出される。逢佳は先にアメリカへ行ってしまった夫を見返し、夫より何十倍も何百倍も幸せな裕福な人生を送るために、アメリカに行きたいという移住の目的を老魏に話した。

逢佳は香港を愛しつつも、香港で自分が移民であることを恨み、アメリカに移住することを望んでいた。しかし、いつまで経ってもアメリカへの移住について全く話題にしない老魏に、次第に猜疑心がつのる。それは、父にも夫にも捨てられ、次は誰に捨てられるのかと思いながら生きてきた彼女の不安に満ちた生い立ちに影響されている。そして二人の関係は、老魏が単身サンフランシスコに帰って一転する。逢佳がアメリカに移住するまで暮らす前提で買ったマンションであるにもかかわらず、逢佳は次から次へと新しい家具を買い足す。逢佳の行動は徐々にエスカレートし、サンフランシスコの老魏のもとに無言電話をかけるようになった。それは、逢佳のアメリカ行きを進めてくれない自分に対する彼女の忠告であり警告であると老魏は解釈し、結末はもう目の前にあると確信した。二人の関係は、香港という限定された場所で結んだ契約であるのに、サンフランシスコへの無言電話は老魏にとっては明らかに、逢佳が犯した契約違反なのである。自分の感情を隠さないで付き合う逢佳に魅かれた老魏は、自分との結婚以外の願いなら叶えてあげたいという覚悟で、誠意をもって手助けすることを決心した。しかし、逢佳の移住先はアメリカではなくてオーストラリアであつた。それでは何故、老魏は逢佳の移住先を変更したのであるのか。

彼（杉江注：老魏）が、逢佳をアメリカに移住させることが出来ないのは、最初は自分が逢佳と一緒に香港で暮らすためであつたが、今は彼女と将来一

緒になることが出来ないからだと思った。老魏は逢佳と結婚することが出来なければ、逢佳をアメリカへ移住させることは不可能なのだ。(『香港的情与愛』 p.48)

老魏は自分の家族が暮らすアメリカに、逢佳が来ることだけは避けたかったので、オーストラリアに移住させる準備を始めた。逢佳も突然、老魏から移住先の変更を打ち明けられて驚いたものの、一方でその可能性を予感していた。「外国に移住する予定であるのに、英語を話すことが出来ないのなら、学費は自分が負担するから、外国語学校を探して通うよう」に老魏に忠告された時も、彼の「アメリカ」ではなく、「外国」という微妙な言葉遣いも逢佳は聞き逃さなかった。そして、精神的に不安定であった時期に「私があなたの奥さんになってあげる」と老魏に対していいつつも、彼の気持ちを察してか、自分も夫に、母も父に捨てられた過去を老魏に打ち明け、「実際のところ、老魏と夫婦になりたいとか、そんなことはどうでもよいことなのだ。」「私はあなたを愛していない。」と強がってみせた。こうした逢佳の言動から、老魏の家族が暮らすアメリカへの移住は不可能であるかもしれないと、逢佳は自覚していたと解釈できよう。

4.2 逢佳とオーストラリア

逢佳がオーストラリアへ移住した時期はいつ頃であろう。この作品は 1993 年に発表されたが、作品中に年代が明示されていない。但し、作品の中で何度か登場する松坂屋¹⁷が香港から撤退するのは 1998 年であり、啓徳空港は 1998 年 7 月 6 日を最後に新空港に移行している。作品の中で、老魏が「香港ですら百年の時間を過ぎていない」と述べているので、中国に返還される 1997 年より前の設定であることは確かである。オーストラリアは、第二次世界大戦後の白豪主義から多元文化主義への転換に加えて、1980 年代から香港・台湾からの企業家移民とその家族の受け入れを認めたことを契機に中国系移民が増加した。香港からオーストラリアへの移民は、1991 年の 14,490 人がピークであり、その年のオーストラリアの全移民の 12.4%を占めた¹⁸。1980 年から 95 年までの 16 年間に 60 万人以上が香港を離れている¹⁹。

逢佳がオーストラリアへ旅立つ直前、利害の上に成り立った関係であったとはいえ、移住の手続きが遅くなり逢佳の 30 代の貴重な時間を無駄にさせたことを、老魏は逢佳に詫びた。しかし、「老魏との関係は、とても価値があったと思

うし損もしていない、もし、自分の力に頼っていたら、二年かかってもここま
で出来なかった。」²⁰と逢佳は心から老魏に感謝した。

逢佳をオーストラリアに見送った後の老魏は、一年余り逢佳と暮らしたマン
ションに一人で戻る気持ちにもなれず売りに出した。「ここには多くのものが残
っていたのに、逢佳が一切合財全て持ち去った。」と現在の空しさを、人が去っ
た後に感じる穴のあいたような空しさだと喻えた。逢佳を香港から移住させる
ことは二人の間の契約であったし、無事に移住させたことに安心感もあった。
が、逢佳がいなくなってしまった現実を受け入れがたく、老魏は自分の気持ち
を克服することができないのではないかと感じた。以上より、老魏と逢佳の出
会った当初からの契約であった、老魏が「香港の家」を築くことと、老魏が逢
佳を香港から移住させる手伝いをする事は、同時にかなえられる目的ではな
かったといえる。

老魏にとって香港での跑馬地の常宿、北角の家が自分の「臨時の家」であり、
ホテルでも逢佳の友人の家でもなく二人で暮らすために買ったマンションが
「香港の家」となる予定だったが、逢佳はオーストラリアへと旅立ち、老魏は
逢佳との別れを香港の歴史に喩える。

逢佳との別れの日を考えると、感傷的になることは避けられないが、ある
種の安心感があるのは、良心に基づいた責任が果たせたからである。時間の
流れは早いから、嘆き悲しむことはないし、世の中の出来事も長くは続かな
い。天や地だけは、いつまでも変わらない永遠であるが、永遠とは言葉だけ
であり、人はその瞬間を生きるのである。香港でさえ、百年という月日は過
ぎていないし、百年もあっという間に過ぎ去った。イギリス人が香港を百年
租借し、まるで永遠に統治するような計画を立てたが、百年も過ぎ去ったの
だ。百年の契約だってこんなものなのだから、自分と逢佳の関係など比べる
にたりないと老魏は思った。(『香港的情与愛』 p.63)

移民の出入りが激しい香港で、彼らに寛容な政策をとってきたイギリスから中
国に主人が変わっても、香港に暮らす人びとの中には香港そのものが「臨時の
家」であったといえよう。老魏と利害が一致したから付き合いしてきた逢佳も、
香港に留まることなく、「臨時の家」であった香港を足掛かりにオーストラリア
へと移住していった。老魏は「逢佳とは途中で出会い、途中で別れるだけなの
だ。出会いとは永遠などと語るものではない。始まりがないから終わりもない。
これは香港のめぐりあいの本質なのだ。」と振り返る。この老魏の言葉は、『香

『港的情与愛』の冒頭にあり、王安憶が掲げる「香港には大いなる偶然の出会いがあり、それは奇跡的な出会いである。」という都市・香港の象徴そのものであり、王安憶の香港観である。

5. 小結

最後に、王安憶が意図する『港的情与愛』における老魏の「臨時の家」と「香港の家」について解釈し、『港的情与愛』が後の王安憶の作品にどのような影響を与えたのかを述べたい。

5.1 老魏のトポフィリア

逢佳を見送った 3 日後、老魏はサンフランシスコに戻る飛行機の中で、偶然知人と会った。「香港なんて愛している人はいない。」と話しかけてきた彼に、老魏は「私は香港を愛している。」と答えた。「香港を行き来する人も、実は香港を愛しているのだ。香港はまるで、彼らに香港を愛する機会を与えているようだ。」とこらえきれず、老魏が涙を流す象徴的な場面で物語は終わる。

エドワード・レルフは、場所に愛着をもつことや、場所と強いきずなで結ばれたいと考えることは重要な人間的欲求であると、特定の場所に深い精神的な愛着をもつこと²¹の重要性を述べている。サンフランシスコのチャイナタウンは、1850 年代以降、多くの広東人たちが移住した後も、黄禍論と闘いながら必死で住み着いた、苦悩の歴史とともに歩んできた場所である。この場所に生まれ育った老魏ならば、最初から香港で自分が部外者であることは自覚していたはずである。

老魏は香港に家を構え、そこに逢佳と二人で一緒に暮らすことによって、「臨時の家」が「香港の家」となるのだと確信してきた。しかし、王安憶の意図する「香港の家」とは、老魏にとって香港での具体的な場所や、誰と一緒に暮らすかということを意味するのではない。つまり、老魏の「香港の家」とは、老魏にとって、特定の場所となるトポフィリアを意味する。老魏にとって香港は、逢佳と出会う前からプライベートで何度も訪れる、自分の故郷に似た場所であった。実はその時から、老魏にとって香港はすでに「香港の家」であったと解釈できないだろうか。老魏が逢佳と知り合い、香港に滞在し一緒に暮らしてい

た一時期が、老魏の「香港の家」が「臨時の家」であった限られた期間であろう。先述したが、老魏と逢佳が北角で暮らすマンションを、二人の友人である小櫛が遊びに来た際、逢佳は以前と変わらないのに、老魏が全く別の老魏である姿を発見している。

5.2 香港と上海

『香港的情与愛』における王安憶の都市・香港の描写は、啓徳空港や松坂屋といった固有の地名の他、香港の地名がいくつか出てくるだけで、仮にそれらがなければ、小説の舞台が香港であるのかわからない。先述したが、王安憶は安徽省での下放生活、江蘇省の徐州地区の文工団以外は、生涯のほとんどを上海で過ごしている。16歳から24歳まで暮らした安徽省や江蘇省での極貧の農村生活から脱出して、上海に戻ってすぐに作家となった喜びは、王安憶にとって何にも勝る出来事であった。都市・上海の描写は作家としての王安憶の表象そのものなのである。王安憶は香港という都市に対して、旅行で訪れる以上の認識はなく、自分が香港にもつ「大いなる偶然の出会いの場」というイメージ²²を前提に『香港的情与愛』を描いたのである。そのため、香港の描写に失敗した²³ことも、この作品が高い評価を得なかった原因の一つであるといえよう。こうした点から考察するに、『香港的情与愛』が王安憶の上海の描写と比較されること自体に無理があるといえる。王徳威は「王安憶は必ずしも香港通ではなく、別の中国の都会、上海の視点で彼女の独特な視覚を提供し、香港を欲望の象徴として解釈したのだ」²⁴と述べている。王安憶は『香港的情与愛』の中で老魏のトポフィリアを提示することはできても、王安憶の香港へのトポフィリアを描き出すことはできなかった。

『香港的情与愛』を発表した後、王安憶が初めて上海を舞台として描いた『長恨歌』は、壮大な上海の風景である弄堂の描写から始まる。一見、上海の弄堂に生きる主人公・王琦瑶の一生を綴っている物語のようにみえるが、王安憶は王琦瑶を90年代以降、取り壊しが進む上海弄堂の象徴として捉え、上海の隠喩としての役割を担わせ、都市・上海の変遷を描き出した。『香港的情与愛』では失敗した都市のイメージ化が、小説の舞台が上海弄堂となって成功した例であるといえる。そして、『富萍』（初出『収穫』2000年第4期）の主人公・富萍は、故郷である蘇州を捨て保姆をしている奶奶を頼って上海に移り、やがて上海周

縁地帯の中でも非常に貧しい梅家橋という場所で、夫となる青年とその母に出会いこの地に根付いた。王安憶はこのような富萍の選択を通して、特定の場所に精神的な愛着をもつことの重要性、富萍のトポフィリアを描いたのである。王安憶は『我愛比爾』において、上海の浦東新区で絵を描き続けた阿三が、売春容疑で労改に送られた後に、再出発が出来る場所を求めて脱獄する様子を描いている。脱獄は、特別な性質がしみこんだビルやマルタンとの過去を肯定した阿三の意志であり、阿三は労改で決して自分の罪を認めることがなかった。作品中にある柏樹の描写は、阿三の過去の回想と、阿三の労改での現実の時間の橋渡しに効果的に用いられ、この物語が阿三の回想であることを認識させる。このように、王安憶は以上の 3 作品をはじめ、その後も小説の舞台に上海を設定し、上海と王安憶、上海と作品に描く背景や登場人物を通して、王安憶のトポフィリアを意欲的に描いていくことになる。

注

- 1 倪文尖 2002 年では、老魏と逢佳の利害で成り立っていた関係が、出会いから 2 年の月日が経過し、やがて愛情に変わり、二人はその関係を惜しみつつも、出国のために逢佳が香港を離れた物語であると解釈している。加えて、『長恨歌』と比較し、『香港的情与愛』は優れた恋愛小説として評価することはできないが、この時、王安憶が都市・香港を背景に小説を発表した経験が大きなきっかけとなり、後に王安憶に上海を表現するのだという焦燥や希望、そして想像力をもたらしたと論じている。
- 2 李欧梵 1999 年 pp.129-139 は、「上海を描いたら王安憶に勝る作家はいない。」と特に王安憶の作品の中でも『長恨歌』を高く評価している。
- 3 松村志乃 2003 年。
- 4 張新穎 金理編 2009 年下巻には、陳思和らの王安憶に関する 28 本の論文が収められているが、『香港的情与愛』に関する論文は 1 本も掲載されていない。呉義勤主編 2006 年にも、王安憶に関する 31 本の論文が収められているが、8 本の論文は張新穎 金理編 2009 年下巻と同一である。残り 23 本のうち『香港的情与愛』に関する論文は、前掲注 1 の倪文尖 2002 年以外、呉義勤主編 2006 年 pp.379-383 にも収められている王苹の「由欲到義：情愛的昇華」がある。王苹は当時の香港では、若い女性が出国するために香港のビジネスマンと肉体関係をもつという交際が多く、『香港的情与愛』は香港の世情を反映している作品であると解釈している。逢佳も自分の出国のために老魏と肉体関係をもち、老魏の逢佳に対する情がやがて父のような愛情と変化したので、老魏は逢佳を出国させたのだと論じている。
- 5 九龍の麗晶大酒店〔リージェントホテル〕は、新世界發展有限公司が経営していたが経営悪化により四季酒店集団にわたり、今では香港洲際酒店〔インターコンチネンタルホテル〕となっている。
- 6 王安憶「香港是一個象徵」『上海女性』pp.80-82。
- 7 現在では、中国本土の社会主義制度を適用せず、一国家二制度などの基本法則を 50 年間は変えない五十年不変方針を貫いている。
- 8 日本経済新聞社編 1981 年 p. 127 には、「1972 年に執行された抵墨政策では、境界線で拿捕された場合、中国大陸に強制送還されることになった。しかし、香港では密入国しても 7 年間いれば市民権をとれる。出入国管理事務所には「密

入国者用」の窓口がある。家賃の領収書など 7 年間香港に居住した申請書を窓口に出せば、住民登録され、身分証明書の交付を受けることができる。これも香港がシンガポールのような独立国ではなく、自由な植民地だからである。」と詳しい説明がある。

9 戸張東夫 劉文甫 1996 年 pp.150-151, pp.190-191。

10 四邑とは、四県を指し、四邑人は四邑方言を話す新会、台山、開平、恩平人のこと。大修館書店 1991 年 p.27。

11 黄禍論については、ハインツ・ゴルヴィツァー 1999 年に、詳しい記述がある。同書によれば、「黄禍とは中国人や日本人が白色人種に与える脅威」(p.19)であり、黄禍論とは、白人労働者による中国人排斥論である。破格の低賃金で働き、世界の労働市場を席卷していく中国人苦力たちとの競争を、白人労働者が恐れていたことに始まり、その競争は最終的に白人の労働組合やカリフォルニア住民の大多数が望むような成功をおさめた。実際、移民たちは、鉱山労働者以外に、日常生活に不可欠で、しかも規制を受けにくい大工、飲食業、洗濯業などの分野への進出を足掛かりにして住み着いた。

12 王安憶『香港的情与愛』『傷心』所収 p.18。

13 前掲 注 8。

14 香港に住み新聞社に勤めている老魏の上海出身の友人。老魏に逢佳を紹介した時点で、小櫛は香港に移民して 3 年が経ったという記述がある。逢佳がオーストラリアに移住する時、小櫛の香港での暮らしも 5 年になり、その間に小櫛は妻と子供を香港に呼び寄せ、家族とともに狭いアパートで暮らすことができるようになった。

15 小柳淳・田村早苗 2007 年 p.169 に、「何啓と区徳の二人の実業家が九龍湾を埋め立て、不動産開発を試みたが、会社は倒産し埋立地だけが残った。啓徳の名前はこの二人からとった。1930 年頃の開港初期は 2 本の短い滑走路があっただけで、1960 年以降、周辺地域に開発が進展して林立するビルの中に降下する有名な市街地空港になった。1 時間に 30 便の離着陸機をさばき、1997 年には 2830 万人が利用した多忙な空港だったが、1998 年 7 月 6 日を最後に 70 年の歴史に幕を閉じた」とある。

16 前掲 注 12 p.38。

17 『週刊東洋経済』4737 号 p.64 に、香港松坂屋は、^{コーズウェイベイ}銅鑼湾の百德新街恒隆中心にあった本店は 75 年 4 月、支店の^{アドミラルティ}金鐘は金鐘廊にあり 81 年 9 月にオープ

ンした。香港には2店があったが、『週刊東洋経済』5486号p.60によると、1998年を最後に香港松坂屋有限公司は清算に踏み切り、香港の2店を閉店したとある。

18 関根政美 1995年 p.101。

19 中野謙二他 1996年 p.162。前掲注9 p.191に、香港の人びとの移民先について、1990年から1994年までの5年間では、1位がカナダの14万4400人、2位がシンガポールの9万人、3位がアメリカの6万9000人、4位がオーストラリアの5万6000人であり、シンガポールへの移住が増加している傾向にあると論じている。1984年に香港の中国への返還が決まっても、オーストラリアへの香港からの移民数は急激に増えることもなく、年間2万人前後で推移していたが、返還まで10年を切ってから3〜4万人に増え、1989年の天安門事件の後、一気に6万人に増えた。香港から移住した人びとは、思い通りの仕事が見つからないという理由で再移住したり、一旦海外に移住したが、移住先でパスポートを取得した後、再び家族で香港に戻ってくるUターン組も多い。前掲注18 p.124に、「オーストラリアへの中国系移民は、英語系オーストラリア人の職場を奪っていることから反感をかう。そして、「宇宙飛行士家族」と呼ばれる人びとの存在もある。彼らは「太空人」家族とも言われ、「夫は空の人」「妻は空の家の人」という意味で、中国系移民が家族でオーストラリアに移民してきても、家長である夫は、オーストラリアで条件の良い職場が見つからないと帰国し、その後、家族のいるオーストラリアとの間を通い続け、不慣れな社会で妻や子供のストレスは高まり、結局は一家で帰国する、又は再移住するケースも多く、1990年代初頭はオーストラリアの不景気と重なり深刻な問題となった」とある。

20 前掲注12 p.63。

21 エドワード・レルフ 1999年 p.101。

22 濱田麻矢 2010年 pp.135-137。拙稿「王安憶『香港的情与愛』における老魏のトポフィリア」『野草』第85号の合評でも濱田は『香港的情与愛』の香港とは「大いなる出会い」であり、「もっともよい酒杯」であり、「夜通し流れるジャズ」であり、「小さなコーヒーテーブルを挟んで真夜中まで語り合った後、握手をしてそれぞれの家路につく男女」である云々、さまざまな比喻をまとって語られる。ここからは確かに『長恨歌』に描かれる上海弄堂のイメージ化を想起することができ、その意味ではたしかに小説『香港的情与愛』は、のちの上海ものへの序曲として読めるかもしれないと述べている。

23 前掲 注 22。当該論文は続けて「王安憶の描く香港はいかにも平面的で、厚みのないもののように思われる。」と指摘している。

24 王徳威 2003 年 p.91。

第2章 『長恨歌』

1. はじめに

『長恨歌』は王安憶の長編作品の中でも、最も力を入れて創作した代表作であると評価され、2000年には第五回茅盾文学賞を受賞した。作品に描かれている時代は、抗日戦争が終わりを告げ、解放直前の1945年から始まり、1986年主人公・王琦瑶が殺されるところで幕を閉じる。

『長恨歌』に関する日本での先行研究は、阪本ちづみ、劉怡、中森志乃¹のものがあるが、あまり多くはない。阪本ちづみは、『長恨歌』のストーリーをたどり、一人の女性と上海という都市の四十年間を、王安憶の策略、意図を通して分析することを試みている。劉怡は『長恨歌』を、「変貌する弄堂——上海」「弄堂の風景」「女性化した街——上海」の三部に分けて分析している。劉怡は、上海という都市が多くの人びとに自由と解放の空間を与えるという認識の上から、王安憶が「女性」「都市」といったテーマを中心に、この作品を創作したのだと考察している。そして中森志乃は、『長恨歌』が中国の最先端をいく都市上海の近代の歩みに対する悲劇的な視点から描かれ、王安憶は代表的な上海のイメージである「オールド上海ノスタルジー」という幻想を否定し、現在、拡大周縁化していく上海の荒廃に警鐘をなげかけているのだと論じた。

これら日本の研究に対して中国での王安憶に関する先行研究ははるかに多く、最近の傾向としては、王安憶を「都市を描く作家」として論じるか、王安憶の「作家としての姿勢」について論じる研究が多い²。特に『長恨歌』に関しては、王安憶の描く上海の弄堂は上海の象徴であり、その弄堂の象徴が王琦瑶であるという考察が主流であり、李欧梵は、特に王安憶の作品の中でも『長恨歌』を高く評価し³、上海という都市を舞台に描いたら王安憶に勝る作家はいないと述べている。その他、第一部第一章の「弄堂」「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」の後に、上海の形象として王琦瑶を登場させる『長恨歌』の冒頭部分の分析⁴について、あるいは弄堂を俯瞰する鳩の『長恨歌』での果たす役割⁵について論じているものなどがある。いずれの論文も、王安憶の上海への執着を、いわば前提として論じはじめている。

本章では、従来の解釈をふまえた上で、まず、弄堂の歴史、王琦瑶と弄堂の関係について言及する。続いて、これまで論じられることのなかった王琦瑶の生活拠点について、李主任に与えられた愛麗絲マンション、精神の療養のため

に滞在した邬橋、再出発することを決意して戻った上海の平安里と区切って、各場所が王琦瑤にとって、どのような意味をもたらしたのか分析する。最後に、王安憶が王琦瑤を通して、都市・上海の変遷を描き出した理由を提示したい。なお、本章で引用する『長恨歌』の邦訳は筆者による。原文は、南海出版公司『長恨歌』2003年8月第1版を使用する。

2. 弄堂の歴史

弄堂は上海という都市の生命⁶として、上海というこの都市が存在し発達する基礎になっている。弄堂に集まったのはごく普通の市民であり、彼らこそ都市の根源であり精髓である。上海の歴史の変遷を経験した弄堂は、過去と現在の上海の結合点でもあり、この都市の底辺を形作る存在そのものである。それでは、弄堂はいつの時代から上海の人びとの居住空間となったのであろうか。『長恨歌』は一貫して弄堂を背景として描かれているため、ここで弄堂の歴史について記しておきたい。

弄堂とは北京でいう胡同、路地の意味である。北京の伝統的な家屋である四合院に対して上海の伝統的住居は里弄⁷、北京のいくんだ路地である胡同に対して上海は弄堂という。里弄とは、1860年代末から1870年代にかけて盛んに建築されるようになった、上海独特の庶民用の住宅で、当時は、イギリス人に「rowhouse」と呼ばれていた。この建築は後に大量に造られ、狭い土地を最大に活用するために同一タイプの住宅が連結、集合して建築されている。アヘン戦争による上海開港の二年後に租界が成立したが、当時、中国人が住む場所はなくまでも現在の人民路と中華路に挟まれた旧上海県城であった。

1853年に小刀会の上海県城占拠⁸、1862年の太平天国軍による蘇州、南京の占領によって、租界に多くの難民が押し寄せた際に、租界当局が家屋を建築して中国人に貸し出せば大きな利益が獲得できると考え、それに注目したイギリス人の不動産業者が投機の目的で、難民向けに賃貸するために建築した簡易木造住宅が最初の里弄である。それまでは「華洋分居」〔中国人の居住の禁止〕、つまり中国人と西洋人との居住地分居の規定があったが、1854年7月に改定された第二回土地章程では、この規定がはずされ、「華洋雜居」〔中国人と外国人の雜居〕が実質的に認められた。占拠以前わずか500人だった租界内の中国人居住者は、大量の難民たちが租界へと避難してきたために、一挙に二万人へと

ふくれあがった⁹。木造の初代の里弄である「rowhouse」は1870年、火事に弱いとの理由で租界当局の命令で全部撤去され、1870年以降、建築された里弄はレンガ造りに改良された。

二代目里弄は石庫門里弄と呼ばれ、浙江、江蘇、福建、安徽など江南地区の民居の特徴を濃厚に残したものであった。こうした里弄は、租界外から流入した江南の避難民のために供給されたものであったため、彼らは以前から慣れ親しんできた起居様式を採用した。天井住居と命名されるこの形式は、大家族制、外敵からの防衛、湿潤な気候に対してすこぶる都合よくできている。石庫門里弄は、時代が下るに従って天井の面積が小さくなり、コンパクトな平面のものが出現するようになった。19世紀末、虹口地区一帯に多数建てられた広式里弄がこれにあたる。その他、新式里弄、公寓里弄、花園里弄といった異なる特徴をもつ里弄が誕生し、そこで暮らす住民の生活レベルもそれぞれの弄堂で異なっていた。上海の人口が膨れ上がるに伴い、里弄はスラム化していく。中華人民共和国成立後は住環境の改善は行われてこなかったために、里弄も老朽化が進み、狭い里弄内に何世帯もの住民が雑居するようになった。住民は家族が増える度に部屋を苦勞して仕切り、快適に暮らそうと努力し工夫を重ねてきた。しかし、里弄は大都市上海における都市建設の後進性を象徴するものと見なされ、近年、老朽化を理由に取り壊される運命に直面している。

このように弄堂は当初、避難民を受け入れるための住居であった。避難民たちは弄堂に集中し生活を始めた。その後、弄堂は時代を経て、住民のレベルやその需要に応じて異なる性質をもつ形式が生まれた。そして、上海は他の都市と異なった人口急増が起きた。これは安全と繁栄を求めて市外から流入してくる避難民たちによる求心的な人口圧力が作用したためであり、弄堂は上海人の代表的な居住空間となった。

3. 王琦瑶と弄堂

ここでは、最初に王琦瑶と弄堂について述べ、典型的な弄堂の女の子であった王琦瑶が映画撮影所でのカメラテストがきっかけとなり、ミス上海第三位に選ばれ、愛麗絲マンションに移るまでの過程を追いたい。

王安憶にとって弄堂は、上海という都市の背景そのものである¹⁰。王安憶は『長恨歌』の中で、「弄堂」という一つの章を立てて弄堂を描いている。『長恨

歌』は、壮大な上海の風景である弄堂の描写から始まる。

高い見晴らしの利く場所に立って上海を眺めると、上海の弄堂は壮大な風景である。それは、この都市の背景そのものである。通りと建物は弄堂からつき出していて、これは点であり線である。しかし弄堂のほうは中国画の山や岩を描くのに用いるタッチで、空白をいっぱいにうめている。(『長恨歌』 p.3)

このように俯瞰する視点から描くことによって、弄堂が上海という都市を辺り一面に埋め尽くしている様子がわかる。『長恨歌』は、冒頭の「弄堂」に始まり、「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」という描写の後に、主人公・王琦瑶が登場する。

王琦瑶は典型的な上海弄堂の女の子だ。毎朝、弄堂の裏口がガタンと開くと、そこに模様のついたかばんをさげているのが王琦瑶である。午後、隣の部屋の蓄音機にあわせて、「四季調」を口ずさんでいるのが王琦瑶である。連れだって映画館でヴィヴィアン・リー主演の「風と共に去りぬ」を見に行くのが王琦瑶たちであり、写真館に写真を撮りに行くのが特別に仲良しの二人の王琦瑶である。どの厢房〔正房(母屋)の前方の両側の部屋〕、又は亭子間〔上海の二階建て住宅の中二階にある部屋〕のどこにでも王琦瑶は坐っている。(『長恨歌』 p.19)

この章で登場した王琦瑶は、上海の弄堂なら誰もが目にすることができる典型的な女の子であり上海の雰囲気である。

劉怡は、「王琦瑶を上海の典型的な上海弄堂の娘に設定したのは、恐らく彼女に都市の換喩としての女性という役割を担わせているからだ」¹¹と述べている。そして物語の冒頭について、陳思和は「一般の読者が皆注意すべきは、この小説の本格的な物語は第一部の第二章から始まっていることである。比較してみると、第一章はまるで極めてしつこく、ひいては障害物のように、最初から読者に読む忍耐を試している。作者はこの一章に多くの華美なこまごまとした言葉を用い、一つ一つ上海のいくつかの日常にある市民の生活の場面を描いている。それは、「弄堂」「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔未婚の女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」と「弄堂の王琦瑶」である。一見すると、このいくつかの部分は物語の中でまるで何のつながりもないようにみえるが、もし、全部の行程を我慢強く読むと、

これらは相互に孤立したイメージであることを発見し、実はある論理が隠されており、これらがつながるとある特定の小説の構成をしている。つまり、第一部の一章はこの物語の全体の骨組みを導き、我々はそれが『長恨歌』の重点であると討論すべきだ。」¹²と解釈している。つまり、王安憶は『長恨歌』の第一部の第一章の導入部分を、上海の生活空間である「弄堂」「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」に続けて、上海の雰囲気として「王琦瑶」という章をもうけた。それは、この物語の主人公である王琦瑶が、ごく普通の家庭の出身、典型的な上海の弄堂ならどこにでもいるような女の子であることを強調するためである。そして、続く第一部の第二章の冒頭、「40年の物語は全て映画撮影所のこの一日から始まった。」と始めることによって、物語の結末を暗示した。

第二章で、王琦瑶は高校の同級生・呉佩珍¹³に連れられて、彼女の親戚が働く映画撮影所によく遊びに行った。ある日、そこで働く映画監督からカメラテストをされるのであるが、自分が思い描いたほどカメラ映えしない王琦瑶に監督は落胆する。王琦瑶が殺害された瞬間にフラッシュバックしたのも、この時のカメラテストであり、これは王琦瑶の人生の転換点となった。監督は王琦瑶の美しさは芸術的な美しさではなく、生活観のある日常的な、道行く人に注目されるような写真館に飾られる美しさであると考え、王琦瑶に26歳のカメラマンの程先生¹⁴を紹介する。王琦瑶を撮影した程先生の作品は「滬上淑媛」というタイトルで『上海生活』という本に掲載され、その後、王琦瑶は程先生と同級生の蔣麗莉¹⁵の勧めで1946年に開催されたミス上海コンテストに応募することになった。

程先生は心から王琦瑶にミス上海に応募するように勧めたのも、この大会は王琦瑶のために開催されるようなものだと感じたからであった。もし、王琦瑶は程先生の勧めだけなら、まだ本気で応募しようという気持ちにならなかったのも、王琦瑶は程先生とは違い自分に自信もなかったし、その渦中にいるわけでもない程先生と自分の立場は異なるし、自分にとって得るものより失うものの方が多く、たとえ成功しても失敗しても心の傷になると思ったので、簡単に行動を起こすことはできなかった。しかし、程先生の勧めが確実に彼女の気持ちを動かしたのは事実だった。〔中略〕程先生の勧めは彼女の心に光を灯したけれど、この光はまだ曖昧の光であった。
(『長恨歌』 p.46)

このように、当初、ミス上海に応募することに積極的でなかった王琦瑶が最終的にコンテストに参加することになった理由を検討したい。

実際に 1897 年開催されたミス上海の目的は新聞の発行部数の増刷にあり、応募者も売春婦たちであったが、半世紀後の 1946 年のミス上海は、上海難民救済協会による蘇北で起きた水害によって住む家を無くした 300 万人もの被災者を救援するために開催された¹⁶。このコンテストの入場チケットは 1 枚 5000 元(旧紙幣)で販売され、得られた収益の全てが義捐金として当てられると公表されると、ミス上海は上海の各新聞社をはじめ、上海全市民の関心を大いに高めた。そして、名優と称された言慧珠、童芷苓、歌手の韓菁清など有名人をはじめ、多くの名家の子女たちもコンテストに参加した。江寧路新仙林ダンスホールで 1946 年 8 月 20 日に開催されたミス上海は、大いに盛り上がり、黒山のような人だかりで盛りあがったといわれている。

この盛況ぶりは作品の中でも、王琦瑶が予選を勝ち抜き本選に進むことになった際、その混乱から王琦瑶が自宅に待機することが難しくなり、本選終了までは蒋麗莉宅に身を寄せていることからわかる。コンテストの本選に進むことが、その勝敗に関わらず参加者たちにとってすでに名誉なことであるのだ。その証拠に王琦瑶の元にも上海で営業している古くからの名店から、本選で着用する衣装を無料で提供させて欲しいと申し出があったし、新聞記者からの取材を受けるなど多くの人びとから注目された。その反面、もうすでにミス上海の座はお金で買収されているなどという噂が街を飛び交い、このコンテストは本選まで異様な盛り上がりを見せた。仮にミス上海に選出されれば、その後の自分の人生が一晩にして変わり、これまで普通の女の子であるなら望むこともなかった優雅で贅沢な生活も現実になるかもしれないという希望も、18 歳の王琦瑶にとって魅力的だったであろう。しかし、王琦瑶がコンテストに参加することになった一番の原因は、以前、撮影所でカメラテストされ王琦瑶が屈辱を受けた映画監督からの忠告であった。

ミス上海で優勝することは、一片の浮雲のようなもので、人びとから注目されるように見えるけれど、あっという間の出来事で瞬く間に消えてしまう煙のような風景にもとどまらない、箆で水を汲むようなものであるのに、月桂樹の冠はあなたを迷わせるばかりか、あなたが眼を覚ました時には何もかもが消えている。撮影所で長いこと働いている私の経験から、これまでもこうした栄光は見てきたけれど、その栄光は盆をひっくり返す

ような大雨の、十二級の大風のように一時は盛り上がっても、結局はただの一枚の透明の黒白の、事実とは全く違うフィルム紙のようなもので、この虚しさといったら他に勝るものはない。（『長恨歌』 p.54）

上述の通り、この映画監督はカメラテストの際、レンズの中の王琦瑶の美しさを認めなかった。当初、自分の意志ではなく程先生たちの勧めによって王琦瑶はミス上海に応募したが、すでに本選まで勝ち進んでいるこの期に及んで辞退するように忠告にやってきた映画監督の話に、王琦瑶が耳を貸すことはなかった。このように王琦瑶はこれまで、ミス上海に参加する自信もやる気もなかったが、ここまで勝ち残ったのも自分の実力と考えるようになり、参加することに積極的になった。それはミス上海が開催されることになった上海の盛り上がりでミス上海に選出されることへの注目の高さに加えて、映画監督への反発からだとも考察できる。結果、この大会で王琦瑶はミス、準ミスには選ばれなかったが、ミス上海第三位に選ばれた。

王安憶は作品の中で、上海がモダンの代名詞なら、ミス上海はさらにモダンな代名詞で、ミス上海よりもモダンなものなど上海には存在しないと述べている。どこの弄堂にもいる普通の女の子であった王琦瑶のその後の運命をミス上海は一夜にして変え、その日を境に王琦瑶は上海市民の憧れの対象として、注目される存在となった。王琦瑶はミス上海第三位としてデパートの開店のテーブルカットに呼ばれ、その席で国民党幹部の李主任¹⁷と出会い、1948年春、19歳になった王琦瑶は、彼の愛人として愛麗絲マンションを与えられる。

4. ^{アリス}愛麗絲マンション

愛麗絲マンションは、王琦瑶が生まれ育った弄堂を初めて離れ、自分の将来を決意して踏み込んだ重要な場所であるため、その物語内での位置づけについて詳しく追ってみたい。

王琦瑶が与えられた部屋は一階にある 3LDK のマンションで、非常に大きなリビングに寝室や書斎にもなる二つの南向きの部屋があり、北向きのお手伝いさんの部屋もあった。王琦瑶の生活の場は、生まれ育った上海の弄堂から、静安寺の愛麗絲マンションの閉ざされた内的空間へと移り、ここに足を踏み入れた瞬間から王琦瑶の愛人としての生活が始まった。

愛麗絲マンションの場所は、南京西路と華山路の交差点辺りの市街西部の交

通の中枢である静安寺に作品では設定されている。静安公園¹⁸は1898年に外人墓地としてスタートし、1954年公園として一般開放された。具体的に愛麗絲マンションは、百楽門舞庁〔パラマウント〕¹⁹の斜め向かいの静かな大通りにある短い路地に並ぶいくつかあるマンションの一つであり、騒々しい環境にある静かな一角にあり、その存在を知る人はごくわずかであった。実際、百楽門舞庁は愚園路と万航渡路の角にあり、この愚園路は閑静な高級住宅街である。

しかし、ここで注目すべきは、愛麗絲マンションが固有の地名ではないということである。なぜなら、王安憶はこの都市には愛麗絲マンションのようなマンションがいくつかあるのかわからない、愛麗絲マンションは都市の世外桃源〔世外の桃源、桃源郷、俗世間を離れた別天地〕²⁰であり、このマンションで暮らす生涯のすべてが秘密であるため、多くの人に知られることがないと述べているからである。

愛麗絲マンションは一体誰がどのような思いを心に秘めて名づけたのかわからない。「愛麗絲」この三文字を耳にすれば、美しい人の愛情物語を感じる。愛麗絲マンションは私たちの平凡な世界にあるが、まさに特別な場所であり、私たちのすぐ近くにありながらも、極めて遠い距離にあり、誰も目にすることができない。私たちはそのように低く垂れているカーテンの後ろに何があるのかも、どんなことが起きているのかもわからない。こうした物語はこの都市の上空にある、まるで美しい噂話のようで、知らなければ驚くこともないが、知ったらびっくりするだろう。それらは全て女性の危険な冒険の物語で、愛情は船のいかだとなり女性をはるか遠くへ流し、愛麗絲マンションそのものが、はるか遠くの場所である。愛麗絲マンションは騒々しい環境の中にある最も静寂な場所にあり、この静寂は風もなければ波もたたない静寂ではない、それは、望夫石²¹〔待ち人が戻るのをずっと待ち続けて岩と化してしまった伝説〕のような凝り固まった静寂である。（『長恨歌』p.88）

つまり、王安憶は愛麗絲マンションを「王琦瑶」という章と同様に上海の雰囲気として描き、「愛麗絲マンション」という章をもうけたのである。

王琦瑶が愛麗絲マンションに引っ越した事実は家族以外知ることではなく、王琦瑶の居場所を尋ねてやってきた程先生にも王琦瑶の家族は、「娘は蘇州の母方の田舎に行ったのだ」と真実を告げることはなかった。騒々しい環境の中にあるが最も静寂な空間、そして、誰からも知られることがない愛麗絲マンション

で、王琦瑶はひたすら李主任を待ち続けた。王琦瑶が食事し睡眠をとる目的はただ一つ、李主任を待つためであったし、王琦瑶は李主任以外の人間との接触を避けていた。

しかし、蔣麗莉は王琦瑶を探し当てた。愛麗絲マンションで暮らし始めた王琦瑶の少女から女性へと変貌した様子は、蔣麗莉が不意に訪問した場面から想像することができる。蔣麗莉が久しぶりに会った王琦瑶は、床までつくネグリジェをはおり伸びた髪はウェーブがかかり、自分の知る高校時代の同級生ではなかった。蔣麗莉は王琦瑶の寝室を案内され、王琦瑶がもう少女ではないことに気付いた。そして、蔣麗莉は自分たちの間には境界線が引かれ、一回り大人になった王琦瑶が隔てられた河の向こうにいる存在のように感じたが、蔣麗莉は李主任の愛人となった王琦瑶に対して軽蔑するのではなく、大人の女性へと美しく変貌した王琦瑶にむしろ憧れたのである。

上海の弄堂なら誰もが目にすることができる王琦瑶のような女性が、どんなきっかけであれチャンスをつかんで、社交界の花²²が囲われる愛麗絲マンションで暮らすことを決意した人生の選択を、王安憶はさげすむのではなく、作品の中で愛麗絲マンションを「まるでテントのような雨よけであり、衣食住を与えられる」場所として設定し、王琦瑶を保護している。なぜなら愛麗絲マンションは極めて美しい場所であっても、ここで一日待つ辛さは百年の時間にも値し、普通の人びとには到底理解することはできない辛さに耐えることができる選ばれた女性でなければ、愛麗絲マンションで暮らすことはできないからだ。彼女たちは最初、この都市の社交界の花として生きていくことで、確かな身分を捨て、ここにやってきたのに、ここでは自分で自分を閉じ込めてしまう。つまり、愛麗絲マンションでの生涯は自分を犠牲にし、人目を避けることを余儀なくされ、自由の女神に自由という祭礼を捧げるような人生だと王安憶は述べている。そして、王安憶が百樂門舞厅の近くの非常に騒々しい環境の静かな一角に愛麗絲マンションを設定したことは、愛麗絲マンションで暮らす彼女たちが、華やかさも犠牲も心の中に抑えこんでいるため、愛麗絲マンションの静寂は表面的な本来の姿ではないことを強調するためではないだろうか。作品の中で語られる百樂門舞厅と愛麗絲マンションの対比から、愛麗絲マンションで暮らす彼女たちの真実の姿がうかがえる。

斜めの百樂門舞厅の賑わいはずっと開放されているが、愛麗絲マンションの賑わいは隠されているから真実はわからない。百樂門舞厅の賑わいは

表向きだけで、踊り子たちは実際どのような暗いみすばらしい路地に暮らしているのかわからない。しかし、愛麗絲マンションはそこまでの賑わいはなくとも、彼女たちの言葉と心は一致していて裏表はない。百楽門舞厅の賑やかさは、一度流れたら元に戻らない水の流れのように客たちは戻ってこないが、愛麗絲マンションの賑やかさは待ち人を川岸で待っている。百楽門舞厅の歌舞は夜が明けるまで続くが、実際のところはったりなので後に何がおこるかわからない。しかし、愛麗絲マンションでの暮らしは気持ちも安定し生活もしっかりとしているので、きちんと順序よく過ぎてゆく。(『長恨歌』 p.91)

王琦瑶は外の世界で何が起きているのかも知らず、新聞も見ることもラジオも聞くこともなく、愛麗絲マンションで李主任をひたすら待ち続け、やっと会うことができた時間は長い間苦楽を共にしてきた夫婦のように過ごした。

1948年11月から1949年1月、人民解放軍が遼瀋、淮海、平津三大戦役²³に勝利し、国民政府軍は崩壊の瀬戸際に追いつめられていた。当時の物価の上昇²⁴は、国民政府統治下の経済の完全な破綻を意味し、1948年12月、中国海軍爆撃機から落ちた爆弾が貨客船江亚号に命中し1000人余りが死亡するといった大事件²⁵が上海でも起きていた。

王琦瑶は愛麗絲マンションに閉じこもり外部との接触を絶ち、直接、このような事件を知ることはなかったかもしれない。しかし、李主任を通して王琦瑶は自分たちのその後の運命を予感していたであろう。愛麗絲マンションの静寂は、これから王琦瑶が歩まなければいけない過酷な運命の嵐の前の静けさであり、まもなくこの予感が的中し、李主任の乗った北京から上海へ向かう飛行機は墜落し、李主任との死別によって、この王琦瑶の愛麗絲マンションでの短い暮らしは、あっけなく終わってしまうのである。『長恨歌』では「愛麗絲マンション」「愛麗絲マンションに別れを告げる」の後に「鄔橋」が続く。李主任の死後、愛麗絲マンションに滞在することが不可能になった王琦瑶は鄔橋で療養することになった。

5. 鄔橋

鄔橋とは実際に存在する固有の地名ではない。王安憶が作品の中で設定した、江南地方の水路の発達した人びとに避難する場を提供する癒しの場所である。

李主任と死別し傷心癒えない王琦瑶は初めて生まれ育った上海を離れ、母方の親戚宅のある鄔橋へ身を寄せ、この場所でその後の人生の再生を図る。ここでは、王安憶がどのような目的で鄔橋を設定し、王琦瑶をここで再生させたのか検証していきたい。

鄔橋は動乱が去った昔の出来事をただただ追想し気持ちを整理し、再出発させるような場所であり、鄔橋は万事万物も引き受け、それを停止させ休止させる場所なのだと紹介される。

鄔橋は病気を治療し傷を治す良い場所であり、よそから来た人びとは皆、傷が良くなると病気の苦しみを忘れてしまう。これは鄔橋の特徴で、鄔橋の哲学が徹底していないからであり、余裕があり実直で人情深い態度は失ってはいない。さらにこれも鄔橋の特徴なのであるが、鄔橋の哲学は独断的ではなく、いつでも相談にのってくれる口ぶりをしている。よそから来た人びとの病気は根元が断ち切れない重くて手の施しようがないので、どんな場合でも表面は治っても内面は治すことはできないのだ。しかしこれはさておいても、鄔橋はそれでも休息を与え慰めてくれる。(『長恨歌』p.118)

この江南地方の水路はまるで木の枝のように、その枝が枝分かれし、枝分かれには葉がつき、その葉の葉脈のように数え切れない水路が交錯し集まり、この場所を鄔橋というのだ。この交錯した水路を船で運ばれて、病を抱えた人びとがやっとの思いで鄔橋にたどり着く。ここに来る人びとの表情は悲しく不安な様子を浮かべ心も傷つき、自分ではどうすることもできないほどの重病を抱えているのである。王琦瑶もその一人であった。王琦瑶は祖母が用意してくれた船で午前蘇州を出発し、迎えに来てくれた母方の祖母とともに午後には鄔橋に到着した。その時期は 1950 年 6 月の頃²⁶である。

蘇州から鄔橋への船の中、藍色の長めの厚いチーパオを着た王琦瑶は、カシミアのスカーフで顔を覆い、両手をそれぞれの袖の中にしまい船の覆いの下に座っていたが、橋の下を一つ一つ船で通過する度に、まるで一枚一枚の扉が開かれるような気がした。橋は人間を狭い一本の道の上に立たせるという意味から、「人間が不可避免的に選択を迫られることの象徴であり、その選択しだいによっては、地獄落ちもすれば救われもする。」²⁷ という解釈がある。ならば、鄔橋に療養にやってくる人びとは、藁にも縋る思いを抱き非常に弱った状態で、鄔橋にかかるいくつかの橋の下を船で運ばれたのだと考察することができる。ま

だ 20 歳にも満たない、心に大きな傷を負った王琦瑶を、徐々に鄔橋が受け入れてくれるような光景である。王琦瑶はこの光景を見て、悲しみの中にありながらも感動したのである。

「茹家漚」²⁸は王安憶がかつて母方の曾祖父のルーツ探しの体験を綴った作品である。とりわけ、鄔橋に登場する烏篷船が「茹家漚」の中でも象徴的に描写されていることから、「茹家漚」について考察し、鄔橋の背景にその影響が見られるか否か検討したい。「茹家漚」の舞台は柯橋²⁹であるが、鄔橋で病人を乗せるために使われた烏篷船は、柯橋のある紹興の有名な風物である。王安憶の曾祖母は、子供だった王安憶の母に「私はあなたたちを柯橋から 40 里の場所にある茹家漚に連れて行き、あなたたちのおじいちゃんに、ひざまづき札をささげたい。私のおじいちゃんは藁草履をはいて、二つのつるしたお金を携え、烏篷船に乗って杭州に行ったのよ。」と語った。茹志鵬はこの言葉を、まるで詩を語りかけるように今度は幼かった王安憶に何度も話して聞かせ、この言葉は王安憶の心に刻み込まれ、王安憶が後に自分の母方のルーツを探し出すきっかけとなったと考察することができる。王安憶の曾祖父は少年の頃、一隻の烏篷船に乗って茹家漚から杭州に行き、弟子入りし商売を習い自分で商売を始め独立した。烏篷船とは、黒い烏の色をした屋根で覆われている小さな足こぎ船であり、今では江南水郷の名物として観光に利用されている。船体が黒いのは漁の際に魚が逃げないようにするため、船の形状が細長いのは細い水路にかかっている橋の下を通るためである。ここでいう柯橋とは浙江省の東部にある、今の紹興市紹興県柯橋街道を指す。柯橋街道は紹興市の東 13 キロ、杭州の西 50 キロに位置し、交通が発達した現在では滬杭甬鉄道や滬杭高速道路が通り、上海から車で滬杭高速道路を使って約 2 時間半で到着する、上海から比較的近い場所にある。王安憶はこの少年であった曾祖父こそ自分の生命であると考え、そのルーツを探し出した。「茹家漚」の「漚」とは、水郷である紹興では河の流れの行き止まりを意味する。紹興の人びとはこの行き止まりとなる場所に暮らす人びとの苗字をつけて、例えば姚という苗字の家族が住んでいる場所を「姚家漚」という地名にする習慣³⁰があり、王安憶は柯橋から 40 里圏内にある茹家漚、つまり苗字が茹という三家族を探し出し一軒一軒たずねた。

私は石橋の下で烏篷船を探し、その烏篷船こそ、すでに私の歴史的な意味があるのだと思った。そして、私は阮社で親戚の茹英姑を探し、茹継生の最後についてたずねた後に柯橋を通り過ぎた。私はここに、こんなにた

くさんの烏篷船があるとは思っても、その数は紹興に現存する全ての烏篷船が柯橋に集合しているのではないかと思うほど数多く、多くの船が我先にと争っているように、非常に高いアーチ型の橋の下を通り過ぎていく。河の流れの兩岸には木造の平屋が並び、その木造はすでに黒くなっていて遙か昔の記憶を留めているようである。どの烏篷船の先頭にも老人か若者が座っていて、両手でこぎ両足は同時に木のペダルを踏み、のんびり行き来し、船の後ろにはかっこよく一本の雨傘がさしてある。私は柯橋の有名なアーチ型の橋の上に立つと、私をめがけて烏篷船がやってきて、瞬く間に私を通り過ぎた時、まるで私の生命に隠されていた記憶を呼び起こされたように感じた。（「茹家漣」『上海女性』所収 pp.159-160）

王安憶は仕事の疲労が原因で原稿を書くことを休み、1996年の1年間仕事から離れていた時期がある³¹。その頃、紹興華舎で1ヶ月療養した。王安憶にとって、これまでも江南地方は交通の便もよく言葉の問題もないので、毎年決まって訪れる場所であった。その理由は、江南の人びとのユニークな面でもあるが、彼らがたとえ親身であつても距離をおいて接してくれる態度が自然と生活にとけこんでいることに趣があると王安憶が感じていたからである。そして、王安憶は江南の人びとの意志の強さにもひかれ、この風土や人情に触れることは上海で疲れた自分を癒すことができると考え、自分にとって特別な場として愛着を感じていた。

『長恨歌』が発表されたのは1995年の療養する前年であるから、王安憶にとって紹興が病を癒す最適な場所であるという意識はすでにあつたとも考察できる。こうした点から、王安憶は実際に訪れた母方のルーツである紹興市紹興県柯橋街道の茹家漣をモデルに、鄔橋を描いたと考えられるのではないか。

その根拠が『長恨歌』の中にいくつかみられる。第一に、鄔橋に向かう王琦瑤が船から眺めた風景は江南であるが、王琦瑤が午前に蘇州を船で出発して、午後に到着する鄔橋が浙江省の紹興市紹興県柯橋街道の辺りであれば時間も距離も合致する。第二に王安憶が柯橋で見た多くの烏篷船は江南水郷の風物であるが、毎年ひどく苦しんで傷ついた人びとが鄔橋を訪れる際に利用する船も烏篷船である。彼らが乗った烏篷船がかきわける水流は、全て彼らが落とした涙であると王安憶は述べている。第三に鄔橋では、水路にかかる橋は最も多く目にする光景である。王安憶は仏教の教えにある橋は「彼岸」と「引き渡す」という意味³²を引用し、江南の水の古里が大徳であるなら、鄔橋は徳が行われる

場であると解釈しており、鄮橋にある橋のすべてが病気を治しにここを訪れる人々の外婆橋「おばあちゃんの橋」であり、鄮橋は彼らの心の古里なのだと次のように述べている。

鄮橋は我々の母なる母、つまり祖母であり、我々と血縁関係を一世代隔てているので、鄮橋は我々に対して知らないふりをしてくれる。だから、血縁が入り混じっていても、我々と鄮橋は立場が異なるので、見ず知らずの人よりも関係は薄い。実際、我々は皆どこからやってきても、鄮橋の橋はすべて外婆橋である。このことがよそから来る人びとが途絶えない理由である。よそから来る人びとには色々な人がいるが、最後は一つこのような場所を見つけることができる。よそから来る人には誰も一つの鄮橋があるのだ。（『長恨歌』 p.118）

鄮橋の親戚宅で療養している王琦瑶の元に、豆腐屋の次男である阿二が毎日豆腐を届けにやってきた。阿二は王琦瑶に対して初恋のような感情を抱いていた。阿二が豆腐を届けに来る道のりに三つの橋がある。王琦瑶に会いに行くために一つ一つ橋を渡る時、阿二の嬉しさは徐々に増していくのであるが、帰り道の橋を渡る時、阿二の気分は憂鬱になるのだ。

先ほど、橋には人間が不可避免的に選択を迫られることを象徴すると解釈したが、他にも「二つの世界の、あるいは本質的に異なった二つの存在の結合を意味し、この中には人間と神を結ぶもの、目に見える世界と目に見えない世界を結ぶ橋、そして二つの時代を結ぶもの」³³という別の解釈がある。近い将来、鄮橋を出て進学を希望している阿二にとって、王琦瑶は自分が憧れる上海から来た人で、この三つの橋を渡れば彼女に会うことができるのだ。阿二は王琦瑶を通して上海を知ることができ、阿二にとって王琦瑶は上海の形象であった。一方、王琦瑶にとっても阿二は自分に憧れてくれる弟のような存在であっただけではなく、王琦瑶が鄮橋にいても上海を感じさせてくれる、上海に戻るきっかけをつくってくれた存在であった。阿二は時折、王琦瑶が何もない鄮橋で気分を晴らすようにと、上海にゆかりのある『拍案惊奇』『施公案』、張恨水の『夜深沉』や他にも何冊かの雑誌や『小説月報』『万象』³⁴を届けてくれた。王琦瑶は阿二のこのような優しさにふれ、徐々に元気を取り戻していくのである。しかし、ある冬の夜、阿二は王琦瑶に南京師範学校に進学するという事実を告げることなく鄮橋を去った。最後に阿二は王琦瑶が決して忘れられない存在であ

ることと、上海の大通りでは誰も自分のことを気づいてくれないだろうとだけ言い残した。王琦瑶は後に阿二が鄔橋を去った事実を知った時、たとえ自分に都合のよい解釈で真実でなくても、阿二は南京ではなく上海に行ったのだと思い、それも他の目的で鄔橋を去ったのではなく自分を上海で待つためなのだと理解した。王琦瑶にとって阿二は、鄔橋でも上海を感じさせてくれた、鄔橋にいても王琦瑶が戻る場所は古里である上海なのだと確信させてくれた人物となった。王琦瑶も体調が徐々に回復し、鄔橋の日常の暮らしの中で何気なく目にした光景の中に、上海を以下のように感じ始めた。

鄔橋は完全に上海と隔絶していたわけではなく、少しずつ上海の便りが入ってきた。(杉江注：鄔橋の地で目にした) 虎商標の萬金油のポスターは上海から来たもの、美人画の月份牌〔カレンダー〕も上海の産物、雑貨屋には上海の双妹商標のオーデコロン、老刀商標の煙草、上海の歌は、鄔橋の人も口ずさむことができる。気にしなければそれまでなのに、いったん意識し出すと、これらのこまごましたものが王琦瑶をたきつけた。王琦瑶の心はこれ以上耐えることはできなかった。鄔橋のどこにいても上海のよびかけが聞こえてくるようになった。(『長恨歌』 p.132)

王琦瑶にとって上海という都市は辛い経験をした場所であったのに、上海を離れてまもなく上海に対する懐かしい思いがこのようにわきおこり、どうしても上海に戻りたいという強い思いを抑えることができなくなってしまう。

彼女(杉江注：王琦瑶のこと)は日めくりを一枚めくった。上海も歳をとったのだ。上海は本当に思うに想えず、想えば心が痛むのだ。そこでの毎日には、限りないよしみがある。……〔中略〕……上海は本当に不可思議な場所であり、その光り輝く姿は人に一生忘れさせることはない、すべてが過去になり、泥、灰に変化し、ヤモリに変化しても(杉江注：上海の過去となって大自然の中に消えてしまっても)、その輝き続ける光は、ずっと照り輝いている。(『長恨歌』 p.131)

これは上海に戻る直前の王琦瑶の心境であるが、王安憶が下放先から上海へと戻った時の喜びにも重なる。

王安憶は人生の大半を上海で暮らしてきたが、初めて上海を離れた安徽省蚌埠市五河県での約 2 年間、江蘇省徐州地区文芸工作団の楽団員として過ごした約 6 年間と上海以外の場所で暮らした経験をもつ。特に、安徽省での農場体験

は王安憶にとって非常に過酷なものであった。「もし、私もそこ（杉江注：安徽省蚌埠市五河县）に戻ったら、おそらく涙が出るだろう。そこでの生活は私の人生で最も暗く、私はそこに戻る気力もなかった。」³⁵と当時を振り返った。

わずか16歳であった王安憶にとって、貧しい土地で暮らす農民たちが、一年中、飢餓に苦しむ姿に心が乱れ受けた衝撃は、王安憶の「不思量，自難忘」³⁶にみられる。一年労働しても一人分の食糧でさえ確保できず、国から人民公社に援助される食糧の提供を自ら申請しなければならなかった農民の顔には、収穫の喜びが見られることはなかった。春爛漫の日にも、家の穀物入れは空っぽで、田畑での労働の休憩時は、手元に残っているわずかな食材をいかに調理するのかという話題がのぼった。王安憶には、農民の憂鬱な表情と貧しい土地の重苦しい当時の記憶だけが残っている望みのない青春であり、二度と振り返りたくないと言っている。

王琦瑶が鄮橋での療養を経て再び上海へ戻ることを決意した背景には、王安憶の下放先での苦しかった体験から解放され、上海に帰ることができた喜びの心情がある。そして、王琦瑶が上海に戻って人生をやり直そうとした決意には、王安憶が上海に戻った後に作家として生きてきた自信に裏付けされているのではないだろうか。王琦瑶が辛い体験をした上海を離れ、鄮橋で療養した選択は結果として、上海で再び新しい出発を決意するまでに王琦瑶を回復させた。蘇州から上海へ戻る汽車の中、再び上海に帰ることができる喜びで、王琦瑶の顔は嬉し涙であふれたのである。

6. 平安里

ここでは、まず王安憶にとっての弄堂の意味を論じ、王琦瑶が平安里の弄堂でどのように生きたのかを、王琦瑶と彼女をめぐる周囲との関係を中心に分析したい。そして、なぜ王安憶がこのように壊れていく弄堂を王琦瑶の再出発として選択したのかを論じ、最後に王琦瑶が弄堂で殺害された理由を検証したい。

王琦瑶は上海に戻った1951年から殺害される1986年までの約35年間、55年間の人生の大半を平安里39号3楼の弄堂で過ごした。21歳の王琦瑶は看護学校に3ヶ月間通い看護師の資格をとって、この場所で開業し生活の糧とした。王安憶は「上海にはどんなに少なくとも百もの平安里があり、平安里と聞くと目の前に複雑に入り組んで深くて長い、不潔で汚らしい弄堂が出現するのだ」と

平安里を描写していることから、平安里も鄔橋や愛麗絲マンションと同様に実在する場所ではないことがわかる。そして、どの交通機関を指すのか作品では不明であるが、平安里は結婚した蔣麗莉が暮らしていた淮海坊から駅でたった二つしか離れていないという記述から、淮海坊からほど近い場所³⁷であることは確かである。

王安憶も上海の人びとの基盤となる上海の弄堂で暮らしてきた。かつて王安憶は、『長恨歌』の中で弄堂を描いた理由を、弄堂は上海の典型的な居住地であり、大部分の市民はここで生活し、王琦瑤のような中流家庭の人びとがここで生活している、彼らこそが我々が小市民³⁸と称する人びとであるからだと述べている。小市民とは王安憶が考える上海でもっとも主要な居住者である。華霄穎は「王安憶の上海を書いた作品においては、実際に存在する空間として描かれた大部分が弄堂である。〔中略〕上海の外在と内在を際立たせることで相互が密接な関係となり、歴史と現実も相互に引き立てあい、都市の風貌となっている。弄堂は普通の上海市民の日常の住居であり、この都市の背景でもあり、王安憶にとって、この下地を構成しているのは弄堂の「壮観な風景」である。」³⁹と論じている。華やかなモダン上海の象徴である外灘^{バンド}に建ち並ぶきらびやかなビル群や、旧フランス租界の高級住宅街、大世界界限など国際都市の最先端の娯楽文化など、上海はヨーロッパの刻印を押された都市であり、様々な施設がある歓楽都市というイメージも強い。しかし、それとは対照的な弄堂は租界時代に建てられた摩天楼と、昨今建てられた高層ビルの間にはりつくように並んでいても、上海の平凡な日常的な生活を反映しており、王安憶は王琦瑤のような小市民の生活の場所として弄堂を描いたのである。

王琦瑤は様々な人びとと関わりながら、かつてのミス上海であったことを公にすることはなく、平安里の弄堂でひっそりと生きていくことを選んだ。王琦瑤が平安里で仕事を始めると、よく来る患者の一人に嚴家師母⁴⁰という資本家の妻がいて、公私にわたり親しくなった。やがて、彼女の甥で毛毛娘舅⁴¹という愛称で呼ばれていた康明遜や、その友人である薩沙⁴²を加えた四人は王琦瑤の部屋でお茶を飲んだり食事をしたり、トランプをして楽しむようになった。

1957年の冬、外の世界では大事件が起こっていたが、このストーブの周りの小さな世界とは無関係であった。この小さな世界は世界の片隅、隙間にあり、どこからも忘れられた安全な場所であった。窓の外は雪が舞い、部屋の中にはストーブがあり、なんと暖かい夜であろうか。彼らは必死に

なってストーブで色々なことをしようと考えていた。干し魚を焼こうか、餅を焼こうか、それとも、鍋をかけてしゃぶしゃぶをし、麺も食べようか。彼らは午前中に来て、来るとすぐにストーブのそばに座り、おしゃべりしながら飲んだり食べたりした。それが昼ごはん、おやつ、夕ごはんへと続くのである。(『長恨歌』 p.163)

質素であるが、非常に幸せな王琦瑶の平安里での暮らしぶりがうかがえる。1957年、外では大きな事件〔反右派闘争〕が起こっていたが、彼らには全く関係なく、王琦瑶の平安里の部屋は実に安全な場所であるようにみえた。

かつて王安憶は、『長恨歌』が多くの現実社会の重大な歴史の事件を避けていると解釈されることに対して「私は避けているのではない。私自身の考えにおいては、歴史の真相とはいくつかの重大な事件で構成されているのではなく、歴史は日々の積み重ねであり、些細な生活の変遷なのである。」⁴³と反論した。この点について、陳思和は「第二部の物語の構成では、王琦瑶は一貫して中心にあり、どんな人物も全てこの人物を取り囲み登場しては退散していく。しかし、作者は彼女の叙述に対して現実生活の環境と時代の歴史の大きな叙述の枠組みから断ち切っている。なぜなら、仮に現実の世界においては、王琦瑶は基本的に社会生活において厳密に一番下層にあって容認されることがない存在で、これは王琦瑶が現実世界の外の虚構の人物であるからだ。」⁴⁴と論じている。つまり、作品では、1957年、1966年といった大きな歴史の事件が直接語られることがないのは、王琦瑶の今の立場が世間から認められないことがない、最も低い身分の階層であるからだと述べている。しかし、平安里の日常生活は一見平和にみえるが、王琦瑶と彼女をとりまく人びととの関係を検証してみると、王琦瑶がこの時代にいかに翻弄されたのかを知ることができる。

王琦瑶は平安里で自立して生きていくことを決意し、やがて、康明遜と恋におち妊娠する。かつて社交界の花だった王琦瑶と資産家の跡取りの一人息子である康明遜との結婚は周囲から認められることはなかったが、王琦瑶は康明遜との間に出来た子供を墮胎することができず、将来一人で育てていくことを決断し、1961年、王琦瑶は薇薇⁴⁵と名づけた女の子を出産した。王安憶は、「王琦瑶はこのような曖昧な状態で康明遜と出会ったのです。王琦瑶と康明遜の恋愛は最も正常で健康的で、男女の年齢など全てがぴったりにしていたので、彼らは普通に妊娠して子供ももうけましたが、王琦瑶の人生が曖昧なので康明遜と実を結ぶことは不可能でした。」⁴⁶と二人の関係についてこのように述べている。

曖昧な状態とは、かつて愛人として李主任に囲われ贅沢に暮らしていた王琦瑶の生活を指す。その生活が李主任との死別で急変し、この現実を受け入れるしかなかった運命を指すのであろう。

王琦瑶が薇薇を出産する 1961 年より少し前、王琦瑶は程先生と 12 年ぶりに淮海路で偶然再会した。王琦瑶が 30 歳の頃である。二人は再会後も男女の関係に発展することはなかったが、程先生は金銭的にも精神的にも王琦瑶に誠心誠意つくしてくれた。しかし、1966 年、程先生は特殊技術をもつ情報特務の嫌疑をかけられ、自殺してしまう。

王安憶は王琦瑶にとって程先生が非常に重大な人物であった理由を二つあげた⁴⁷。第一に、程先生の勧めがなければ王琦瑶はミス上海にならなかったこと、第二に、程先生は王琦瑶と同じ時代を生きていた良き理解者であり、程先生の死は、王琦瑶がたった一人で新しい時代を生きていくことを意味するのだと述べた。王安憶は続けて、王琦瑶が李主任の愛人となって、普通の女の子としての人生を離脱したのだ⁴⁸と述べている。李主任は不測の事態を考慮し王琦瑶に残した金塊は、王琦瑶への遺産であったが、結果的に王琦瑶が殺害されてしまう原因になった。つまり、程先生は王琦瑶にミス上海になる栄冠を与えてくれた人であり、李主任はミス上海になった後の贅沢な生活を与えてくれた人であったが、この二人の死は王琦瑶にとって共に生きる理解者を失うことを意味した。程先生は文革によって死に、国民党の幹部であった李主任の死は飛行機事故によるものであったが、当時、国民党政府は壊滅状態にあった。王琦瑶は過去のミス上海の栄光だけではなく、その人生を歴史上の事件にも影響されていたのである。そして平安里で出産した薇薇は 23 歳になって結婚し、王琦瑶の元からアメリカに行ってしまった。

上海では 50、60 年代、英語のクラシックを語源とする「老克腊」とよばれる古いおしゃれを再現する人びとが流行っていた。1980 年代中期、上海にノスタルジーブームがおき、その再現でかつてのミス上海である王琦瑶も注目された。1985 年、王琦瑶には 26 歳の老克腊⁴⁹と呼ばれる友人がいたが、二人の関係が深まるうちに、老克腊にとって王琦瑶はただの年老いた女性で、彼の懐古趣味を満たす旧物ではなく、老克腊は王琦瑶の元から去る。その後、王琦瑶が金塊を持っていると噂に聞いた長脚⁵⁰は強盗目的で王琦瑶の家に侵入し、その場を目撃していた王琦瑶の首を絞め殺害してしまう。

王安憶は、「王琦瑶こそ上海であり、彼女の形象こそ私の心の中の上海なので

ある。私の目の中にある上海はある女性の形象なのだ」⁵¹と語っている。『長恨歌』は一見、上海の弄堂に生きる、主人公・王琦瑶の一生を綴っている物語のように見える。この点について、陳思和は「王琦瑶の身に起こることは、1940年代から1980年代の上海市民の生活の場にある側面であり、何世代かにわたる上海市民の上海の日常生活の追憶である。」⁵²と解釈している。王安憶は王琦瑶が殺された直後の弄堂をこのように描写している。

新しいビルが聳え立つ上海の中であって、こうした弄堂はまるで沈没した一艘の船のようだ、海水が引いた後のただの残骸である。（『長恨歌』pp.349-350）

新しい時代の変革によって、旧上海の時代遅れの象徴として次々に消失していく弄堂は、同時にそこで生きた王琦瑶の時代の終わり、王琦瑶の死を意味した。薇薇と同世代の老克腊や長脚との出会いは、上海の新しい時代の変革の象徴だといえよう。王安憶が弄堂を王琦瑶の再出発としたのは、王琦瑶を90年代以降、取り壊しが進む上海弄堂の象徴としてとらえ、上海の隠喩としての役割を担わせ都市・上海の変遷を描き出したからである。

そして、最後に『長恨歌』の中で一つの章として語られる鳩の果たす役割について述べたい。第一部第一章には「弄堂」「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」と続き、鳩を上海の背景の一部として位置づける王安憶の意図がうかがえる。こうした王安憶が描いた上海の日常的な生活空間は、王琦瑶を弄堂で暮らす典型的な女の子として導く。王安憶は鳩を弄堂の全ての秘密を俯瞰することができる都市の精霊として、鳩の視点から見た弄堂の景観を次のように描写している。

鳩はこの都市の精霊である。毎朝、どれだけの鳩が波のように連なった屋根の上から天空に飛んでいくのだろうか。彼らが唯一、この都市を俯瞰できる生き物で、この都市の鳩ほど誰がこの都市をはっきりとつまびらかに見ることができるだろうか。迷宮入りの事件でも、彼らはすべてその証人なのである。彼らの目に映るものには、いったいどれだけの秘密があるのだろうか。（『長恨歌』p.15）

王安憶は鳩を、この都市の最も奥深く隠れて現れることがない罪と罰、そして禍と福もすべて鳩の目をごまかすことはできない⁵³、無神論の都市における神の

全知全能⁵⁴と作品の中で位置づけている。王琦瑶を殺害した長脚が部屋から出て行く様子も、鳩だけは見ていた。王琦瑶が薄れゆく記憶を必死にたぐりよせ、最後の息をひきとるその瞬間、王琦瑶の家のカーテンを力強くかすめ、巢から天空へ飛び立ったのは、王琦瑶の死を見届けた鳩であった⁵⁵。王安憶は弄堂を彼らの家である⁵⁶と述べている。つまり、弄堂では誰にも目撃されることがない全ての事実も鳩だけは俯瞰することができたのだ。王安憶は時代の推移とともに消失していく弄堂を、同じ時代に生きた王琦瑶の死に重ねあわせ、その全てを鳩に見届けさせたのである。

7. 小結

王安憶は、上海は世間でよく言われるような華やかなイメージがあるだけではなく実務に励む都市で、上海の小市民の生活は決して贅沢ではないが、人びとが生活していくための衣食には事欠かない都市である⁵⁷と述べている。そして、上海で育った王安憶は、20、30年代のモダン都市、魔都として小説や戯曲、映画などのメディアで語られてきたオールド上海の時代に対して懐旧的な幻想など抱いてはいない。中華人民共和国成立後の1954年に生まれた王安憶は、現代上海へと向かった時代を駆け抜け生きてきた。そして、時には悲観的に上海を傍観することもあった。

20、30年代の昔の夢に対し懐旧の情を抱いていけません、あれは舞台の灯火にすぎず、幕の後ろはぎゅうぎゅう詰めの蜂の巣や蟻の穴のように、中に潜んでいるのは、歯ぎしりしながら、手ぐすね引く決心であります。この場所にはほんとうにどれほどの詩情があるといえるのでしょうか、歌はある種の地突きの作業歌なのです。（「上海的女性」『尋找上海』所収 p.85）

外面がどんなに朽ち果てようとも時代を乗り越えて、これまで生きてきた弄堂は、90年代に入って時代遅れの象徴として消えつつある。

王安憶は、弄堂の外面がどんなに変化しても弄堂の内なる精神は変わらないと叙述した。それは、変化する上海の中にある不変の存在であり、それぞれの異なる弄堂で日常生活を営む小市民を描くことにある。つまり、上海という都市にあって、弄堂は小市民と一体なのである。上海の弄堂にはそれぞれ異なった表情や声があり、小市民の生活の中にあつて小市民と共に感動も共有する。

とりわけ、平安里の古い弄堂を例にとっても、どうして倒れないのか驚くだろう。……〔中略〕……弄堂は形がばらばらになっても、精神はばらばらにはならず、押さえつけられている心の声がする。この心の声は、この都市の騒ぎで沸き返る中にあっては、たいしたものではない。……〔中略〕……この心の声は何だろう。それは二文字“活着”〔生きている〕』ということだ。(『長恨歌』 p.322)

王安憶は弄堂の庶民的な風景の中に生きる人びとを『長恨歌』の中で描き出した。王琦瑶は、李主任に与えられた愛麗絲マンションで愛人生活を送っていたが、李主任との死別によって愛麗絲マンションにすることが不可能になり、上海を離れて傷心を癒すために鄔橋で療養した。鄔橋は万事万物も引き受け、それを停止させ休止させる場所であった。王琦瑶にとって上海は辛い経験をした場所であったのに、鄔橋の暮らしの中で上海に対する懐かしさをおさえきれなくなり、上海で再出発する決意をするまでに回復した。そして、王琦瑶は上海に戻り、その後の人生の大半を平安里の弄堂で、様々な人びとと関わりあいながら、殺害されるまでひっそりと暮らしたのである。

王琦瑶は上海そのもの、王安憶の心の上海であり、大きな目標の決意にあたっては妥協することなく、目の前に道がなくとも生きていく道を探して歩いていくことができる⁵⁸人物として描かれている。そんな王琦瑶であったが、60年代の程先生の死は同じ時代の理解者の消失、つまり、新しい時代を一人で生きていかなければならないことを意味した。40年代、古き時代のミス上海だった王琦瑶は、80年代に入り、恋人であった老克腊には共に生きていくことを拒否され、物語の最後では長脚に殺されてしまう。上海という都市は、王琦瑶にとって愛すべき場所であったのに、王琦瑶は今の上海を生きる若者たちとともに生きていくができなかったのである。90年代へと向かう時代、上海も古い時代から新しい時代への容赦ない変革を経験し、王琦瑶も暮らした小市民の住処であり、上海の形象であった弄堂は、旧上海の時代遅れの象徴として次々に取り壊されていくこととなった。王安憶は『長恨歌』の中で、王琦瑶の生きる時代の終わり、王琦瑶の死を上海弄堂の消失に重ね合わせ、主人公・王琦瑶を通して上海という都市の経験を表象したのである。王安憶は『長恨歌』以降の作品においても、小説の背景として上海を選び上海を書き続ける。これは、彼女の上海に対するトポフィリア、場所愛の表現といえよう。上海へのトポフィ

リアは王安憶の作家活動の中で、不変の確固たる精神となった。

注

- 1 阪本ちづみ 1998 年、劉怡 2002 年、中森志乃 2001 年。
- 2 「都市を描く作家」として論じられているものには、王干 1998 年があり、王安憶の『長恨歌』を「老城叙述者〔古い都市を叙述する作家〕」としての代表作であると位置づけ、一人物を通して一都市を描くことは、一人物の精神が一つの都市の精神に反映することだと考察しているが、その理由については言及していない。「作家としての姿勢」については、陳思和 1998 年の他、先行研究は多数ある。
- 3 李欧梵 2000 年 pp.129-139。
- 4 陳思和 2003 年 p.384 は『長恨歌』の物語は第一部第二章から始まるが、その前の第一部第一章は、この物語の骨組みを導く作品の重点であると論じている。
- 5 陳思和 2003 年 p.384 では、鳩は非常に高い場所にあつて、神の目と類似し、その目で弄堂の中の多くの深く隠れて現れることがない人の罪惡を覗き込む、これは本編の王琦瑤が晩年の被害にあう結末を何となく示唆しているのだと述べている。
- 6 この部分の記述については以下の二つの論文、羅曉静 2002 年と俞潔 2002 年を参考にした。

羅曉静は「弄堂は上海という都市の生命の拠り所である。弄堂の存在は上海というこの都市が存在し、発展することができる基礎である。それは都市が空中に楼閣を築くような事物ではなく、都市がにぎやかで浮ついていても、非常に静かなものが下地となっていることが必要であり、それに弄堂に集合してくるのは、都市の大多数の人びと、彼らは普通の全く目立たない人びとであるが、時折栄光をつかむこともある、彼らこそまさに都市の基礎的な根源であり、都市の精髓なのだ。」と述べている。

一方、俞潔は「歴史上、上海は主に弄堂によって構成された。そこは、かつてこの都市の大部分の人口が集中し、普通の市民の住処であった。上海の文化の生活、市民、通俗、ほとんどすべてがそろって弄堂に集中したのである。上海という都市の形象、文化の気質の変遷を表現するなら、弄堂は実際、最も良い観点となる。それは、最下層から日常生活のレベルから上海の歴史の変化を最も反映させることができるからだ。」と論じている。

- 7 里弄に関しては、李江 2000 年 p.40 と村松伸 1991 年 p.92 を参考にした。

8 丸山昇 1987 年 p.28 に、小刀会は当時民間に勢力をもっていた秘密結社の一つであり、会員は小刀をかくしてもって会員のしるしにしたという。1853 年には会員 5 千人を擁するまでになっていた。1853 年 9 月 7 日、孔子廟の祭礼の日、小刀会は参詣や見物の群集に混じって上海城内に入り、あらかじめ潜入していた部分と合流して蜂起、道台呉健彰を捕えて殺し、上海城内を占拠した。小刀会の県城占拠は 1855 年 2 月まで、17 ヶ月間続いた。1855 年 2 月、ついに上海を撤退したが、現在の虹橋で清軍と戦闘、一部が逃れて太平天国軍に合流したものの、指導者の劉麗川をはじめ多くが戦死または捕えられて斬殺された。

9 渡辺浩平 1997 年 p.24 に 1853 年の小刀会の乱ではその県城が乱の拠点となり、ひとびとが租界に流出、租界内の中国人の人口は小刀会の乱以前は五百人足らずであったのが、二年後の 55 年には 2 万人以上に増えたと記録されている。

10 王安憶『長恨歌』 p.3。

11 劉怡 2002 年 p.155。

12 陳思和 2003 年 p.384。

13 呉佩珍は王琦瑶の高校時代の同級生。家庭環境も良く、細かいところに気がつき誰からも愛される、明るい単純な性格であるが、自分の容姿が醜いことに劣等感をもっている。しかし、この劣等感が彼女に謙虚さをもたらし、他人の長所を認め、いつでも自分の真心で接することができる人間に成長させた。王琦瑶がミス上海になってからは、ふとした誤解から付き合いがなくなった。王琦瑶が愛麗絲マンションに暮らしている時に、結婚して香港へ移り住むことを報告しに訪れた。

14 程先生は王琦瑶が高校生の時に、映画監督から紹介された。昼間は外国企業で働き、夜はカメラマンをしているモダンでおしゃれな 26 歳の青年である。多くの女性から好意をもたれていたが、初めて王琦瑶に会った時からずっと、王琦瑶のことが好きだった。しかし、その思いは最後までかなわなかった。1965 年 43 歳であるので、1922 年の生まれだと仮定すると王琦瑶より 8 歳年上である。王琦瑶が身重の時に 12 年ぶりに再会して後、王琦瑶を全面的に支援するが、1966 年の夏に自殺してしまう。

15 蔣麗莉は王琦瑶の高校時代の同級生。父は工場長で、クラスで一番金持ちの家庭に育った。目が悪く酒のビンの底のような眼鏡をかけている。王琦瑶は彼女の誕生会に呼ばれたのをきっかけに仲良しになり、以後、程先生のことを好きな蔣麗莉と、王琦瑶が好きな程先生との三人の関係が始まったが、王琦瑶が

ミス上海になってからは、この関係も終わる。後に蔣麗莉は、共産党員になり革命に参加し大学も中退し、山東省出身の紡績工場の軍代表だった夫と知り合い、結婚し三人の子供をもうけた。その当時、大楊浦の新村から淮海坊に引っ越しており、この地は王琦瑶が暮らしていた家から駅でたった 2 つしか離れていなかった。程先生が自殺後は、彼に王琦瑶のことを託されていたので、王琦瑶の面倒を見たが、癌を患い若くして死んでしまう。

16 戴雲雲 1999 年 pp.72-77。1946 年のミス上海は、芸能部門と一般部門が分かれていた。演劇部門の第一位が言慧珠、第二位が曹慧麟、歌手部門の第一位が韓菁清、第二位が張伊雯、ダンス部門の第一位が管敏、第二位が顧麗華であった。一方、一般部門の第一位は上海商工業界と関係があった王韻梅、第二位は化学工業の企業家謝子初の娘で復旦大学の卒業生であった謝家驊、第三位は弁護士劉適魁の娘で、官庁で事務員として働いていた劉徳明である。

17 李主任は国民党の幹部。王琦瑶が 18 歳でミス上海に選ばれた時、李主任は 40 歳で、ミス上海の選考委員であり、本選では王琦瑶に投票した。王琦瑶がテープカットによばれたデパートの株主で、王琦瑶をデパートの式典にゲストとして呼んだのは李主任であった。李主任は親によって決められ結婚した正妻が自分の故郷におり、北京にも上海にも愛人がいる。解放前夜の北京から上海へ向かう飛行機事故によって死んでしまう。

18 木之内誠 1999 年 pp.86-87。

19 前掲 注 18 p. 87。百樂門舞厅〔パラマウント〕は、数あるダンスホールの中でも東洋一の豪華ホールといわれ、共同租界西部、愚園路と万航渡路の角（愚園路 218 号）に 1932 年オープンした。2 階、3 階をあわせて 1000 人が踊ることができるという広いフロアが評判だった。新中国成立後は映画館「紅都影劇場」と改称した。

李欧梵 2008 年 p.30 によると、外国人やお金持ちの中国人はいつも舞厅〔ダンスホール〕や、歌舞〔レビュー〕を上演しているキャバレーや〔淮海中路近くの〕華懋マンション（Cathay Mansions）の最上階、〔人民広場近くの〕国際飯店の屋上、百樂門劇場や舞厅、〔旧上海の四大ダンスホールの一つである〕大都会花園舞厅、〔南京西路にある〕聖安娜（St. Anna Ballroom）、〔同じく人民広場近く 1934 年当時未完成だったサッスーン財閥の建てた〕仙樂斯（Ciros）、洛克塞、維娜斯珈琲館、維也納花園舞厅、小俱樂部など、そういった伝奇のような評判の中国文学の想像の中でも永遠の痕跡となった場所に通っていたが、

その中でも人びとに最も忘れられないのが百楽門舞庁であると述べている。

20 前掲 注 10 p.91。世外桃源とは、晋の陶淵明の『桃花源記』に描かれた、俗世から隔絶し、戦禍に見舞われることもなく平和に暮らせる美しい土地、後世、外界の影響を受けない土地、または想像中の美しい世界の喩えとなった。

21 望夫石の伝説は中国全土に存在する。ここでは、代表的な二例をあげる。一つ目は誠実な漁師の妻の伝説である。漁師は海で溺れて死んでしまったが、妻は息子を背負って海に見える丘に立って、夫の帰りをひたすら待った。やがて、妻の誠実さが海神に認められ妻は岩となり、夫の魂と結ばれたというのが、今の香港の沙田区の獅子山郊野公園にある岩にまつわる伝説である。二つ目は中国湖北省武昌にある伝説であり、昔、貞女が戦争に出かける夫を山の上で見送り、そのまま岩になったという。いずれも、待ち人が来るのをひたすら待ち続けることを意味する。

22 前掲 注 10 p.92。王安憶は作品の中で、「社交界の花」を、この都市に限って生涯を送ることができる、良家の子女でもなければ娼婦でもない、妻でもなければ妾でもない、形式にこだわることがない、名分よりも現実を重視する立場にある人びとであると述べている。

23 高橋孝助・古廐忠夫 1995 年 年表 p.34。

24 前掲 注 23 p.232。上海史 p 232 には「国民政府はまず幣制改革を実地して、崩壊に瀕した財政と経済をすくおうとした。法幣の兌換価値は下落の一途をたどり、1948 年夏にはその原価をさえ下まわっていた。政府は 8 月 19 日に幣制改革の実地を宣言し、新たに金円券を発行するとともに、物価を 19 日の水準で凍結しようとした。経済の中心上海には蒋介石の長男蔣経国が派遣され、強圧的な手段で幣制改革を成功させようとした。しかし、物質的な裏付けのない金円券の価値を維持できるはずがなかった。11 月 1 日、政府は物価凍結の解除を宣言し、物価は前にもまして猛烈な勢いで上昇しはじめた。国民党政府統治下の経済は完全に破産したのである。」と説明されている。

25 前掲 注 23 年表 p.34。しかし、王安憶は『長恨歌』 p.112 では、この事故では 2685 名が海に沈んだとしている。この数字は王安憶が故意に創作しているか、事件の詳細を誤って認識しているのか不明。

26 李主任の死後、王琦瑶が愛麗絲マンションに留まることは不可能だと考えられるので、王琦瑶が鄔橋へ移るのは 1950 年であろう。その季節は梔子の花が咲きほこり、その香りが一面に漂う六月であったと『長恨歌』 p.115 にある。

- 27 金光仁三郎他 1996 年 p.771。
- 28 「茹家淩」は、王安憶『上海女性』所収 pp.141-162。
- 29 『中華人民共和國省級行政單位系列図浙江省』中国地図出版社 2009 年 4 月。
- 30 前掲 注 28 「茹家淩」 p.142。
- 31 王安憶「王安憶箴言：仮想的上海」『王安憶説』 pp.251-252, p.262。
- 32 前掲 注 10 p.116。大徳とは、だいとこともいい、仏という意味の他、長老など徳行のある者を敬っている語、一般に僧侶や法師を指す。
- 33 山下主一郎他 1984 年 p.84。
- 34 『拍案惊奇』『施公案』、張恨水の『夜深沉』や他にも何冊かの雑誌『小説月報』『万象』は王琦瑤に上海を思い起こさせた。王琦瑤が目にした『小説月報』がいつ発刊されたものか不明であるが、1940 年 10 月以降発行のものであれば、上海聯華広告会社の出版であり、ここであげられた張恨水といった鴛鴦蝴蝶派の作家が多く執筆していた。『万象』も 1941 年 7 月上海で発刊され、1945 年 7 月に廃刊となった。
- 35 深淵新聞網 2004 年 2 月 24 日。
- 36 王安憶「不思量，自難忘」『茜紗窓下』 pp.69-71。
- 37 前掲 注 10 p.219 に程先生が王琦瑤と会わない決心をし、王琦瑤の面倒を蒋麗莉に頼んだすぐ後に、蒋麗莉が大楊浦の新村から淮海坊に引っ越してきた記述がある。
- 38 小市民とは日本語では中産階級や、プチ・ブルジョワを意味し、これは、中国語の小市民の解釈とは異なる。中国語では、教養もなく理想や品格に欠け、暮らしに関わることには勘定高く噂話が好きで、平々凡々な日常を送る人びとを指す。前掲 注 31 「王安憶説」 p.207 で、王安憶は、上海でもっとも主要な居住者は小市民〔小市民〕であり、上海という都市は小市民の実践的な生活の上に成り立ってきたのだと一貫して認識している。王安憶も幼い頃から上海の弄堂の中で育ち、小市民の魂の中で成長した。そして、王安憶本人も小市民という言葉を好んでよく使用する。本章では小市民のままの原文で示す。
- 39 華霄穎 2009 年 p.83。南帆 1998 年 p.67 にも、『長恨歌』の第一章はいくつかの典型的な都市の断片である、弄堂、流言、閨閣、鴿子、王琦瑤——これらが一つになって、ある都市の肖像となった。この都市を舞台にして、王琦瑤が生き生きと真に迫った主人公として描かれていると分析している。
- 40 嚴家師母は王琦瑤が開業している診療所の開業当時の客だった。当時、

36 か 37 歳であった彼女は平安里にある一戸建ての家に住んでおり、毎週月曜、木曜日に風邪の予防のために王琦瑶の元に栄養剤を注射するために訪れていた。

41 毛毛娘舅は嚴家師母の甥。毛毛娘舅というのは愛称で本名は康明遜という。北京の大学を卒業後、分配されて甘肅省に行かされたが、すぐにやめて上海に戻り親のすねをかじっていた。工場主であった彼の父には正妻と妾がいて、毛毛娘舅は妾との間にできた、父にとってはたった一人の息子であったので、家族の期待を背負いながら非常に甘やかされて育てられた。年齢も王琦瑶とほぼ同世代である。王琦瑶と恋におちるが、ミス上海であった王琦瑶との交際は家族に反対され、結婚することはできなかった。しかし、王琦瑶は康明遜の子供である薇薇を産み一人で育てた。

42 薩沙は王琦瑶や康明遜より年齢は 4～5 歳年下のハーフ。康明遜の友人であった。薩沙の父は延安からロシアに留学して、そこで薩沙の母と知り合った。二人の子供として生まれた薩沙は、共産党幹部の父とロシア人の母をもつ、いわば革命の落とし子であった。彼の母がロシアに帰ってしまったために、彼は上海の祖母の家で育てられていたが、身体も弱く大学にも合格できず、ずっと家にいた。しかし、王琦瑶は康明遜との間に子供ができた時、お腹の子供の父親は薩沙であるとだまし薩沙もその事実を疑いつつも認めたが、王琦瑶から逃げるように立ち去った。

43 前掲 注 31「我眼中的歴史是日常的——与王安憶談『長恨歌』」p.155。前掲 注 31「『長恨歌』，不是懷旧」p.121 にも、「私（杉江注：王安憶）にとって、歴史とは事件によって成り立っているのではない、事件はただ変遷し完了した後の転換点にすぎない。〔中略〕だから、私は結局、歴史は人によって綴られるのであると思うのだ。」という記述がある。

44 前掲 注 12 p.395。

45 2004 年 11 月、来日した王安憶に直接、筆者がインタビューした。拙稿 2005 年 1 月 名古屋大学大学院修士学位論文『通過女主人公身体所表現出来的都市経験——王安憶「長恨歌」』で、王安憶は王琦瑶の娘・薇薇の果たす役割の重要性を説いた。薇薇の誕生は、彼女が連れてくる若い世代の友人と王琦瑶が最も自然に知り合うためであるのだという。

薇薇は王琦瑶が 30 歳か 31 歳の 1961 年に産んだ娘。1976 年 15 歳になった薇薇は淮海路の典型的な女の子。勉強は嫌い、政治にも興味がない女の子であったが、23 歳の時に三歳年上の小林と結婚し王琦瑶の元を離れアメリカへ行って

しまう。

46 前掲 注 45。

47 前掲 注 45。王安憶のインタビューから第二の理由を補足すると、王安憶は程先生が精神面、物質面に渡って王琦瑶の面倒を見続けてきたことについて言及した。続いて、程先生は王琦瑶と違い、ひたすら前に進んでいく性格ではなかった。しかし、とても冷静で自分がどの時代に属するべきか、どの時代に属するべきではないかを知っていたので最後は自殺してしまったのだと王安憶は解説した。

48 前掲 注 45。王安憶は「李主任の存在は、王琦瑶が老克腊と出会うため、老克腊を出現させるために設定したのです。李主任は彼女に贅沢な生活を与え、王琦瑶は普通に育ってきた女の子の生活から離脱したのです。これは身分がなく命名することすらできない生活で、王琦瑶の愛人としての曖昧な人生が始まったのです。」と述べている。

49 老克腊は英語のクラシックを語源としている。1980年代、皆がCDを聞くのに、古いレコードを聴き、ミノルタやニコンなどのオートフォーカスが流行っている時でも、ロレックス 120 の手巻きの旧型腕時計を身につけ、珈琲は自分でこして飲み、シェービングクリームをつけてひげを剃り、古い形のライターを使い、舟形の牛革の靴をはくのが絶対なのだと主張する人びとを称して「老克腊」と呼んだ。『長恨歌』に登場する男・老克腊とは愛称で26歳の時、50代半ばの王琦瑶と交際していた。老克腊が王琦瑶の部屋を訪ねた時、王琦瑶の枕元に毛染めの液がついているのを目にし、その部屋の夜の腐敗したにおいては彼を落ち込ませ、老克腊は王琦瑶の元から去っていく。そして、前掲 注 43 の中で、王安憶は筆者に、王琦瑶の李主任や康明遜との出会いは老克腊と出会うための準備であったこと、王琦瑶の本物の悲劇は老克腊と出会ったことであり、『長恨歌』は王琦瑶と老克腊の悲劇の物語なのだと語った。

50 長脚は薇薇の女友達である張永紅の元恋人であり、仕事もしていないチンピラ。経済的に貧窮していた長脚は、噂に聞いた王琦瑶が持っているという金塊を盗みに王琦瑶の家に侵入したが、その現場を王琦瑶に見られてしまい、衝動的に王琦瑶の首をしめて殺害してしまう。

51 前掲 注 31「形象与思想——关于近期長篇小説創作的對話」p.89。向心韵 2007 年 p.268 には、王琦瑶という女性の一生を通して展開し上海の40年の歴史の浮き沈みの中にある繁栄と荒涼を王安憶が描いたとある。

52 前掲 注 12 p.378。そして、p.387 には「王琦瑶はまるで上海のイメージのようで、ある種の象徴の意義を備えている。彼女は時が流れている上海にあって、歴史と現状共同の構成されている上海の古い夢の神話なのである。」という記述がある。

53 前掲 注 10 p.17。

54 前掲 注 10 p.18。

55 前掲 注 10 pp.349-350。

56 前掲 注 10 p.17。

57 前掲 注 31 「王安憶説」 pp.207-208。

58 前掲 注 31 「形象与思想——关于近期長篇小説創作的対話」 p.89。

第3章 『富萍』

1. はじめに

本章で扱う『富萍』は、雑誌『收穫』の2000年第4期に掲載された、同じく上海を描いた『長恨歌』と並び、高い評価を得ている。その時代は、1964、65年の文革前であり、作品のタイトルにもなっている主人公・富萍が、蘇北の田舎から上海で保姆¹をしている奶奶²によばれて上海にやってきて、新しい生活環境の中での体験に感化され、上海市中心やその周縁地帯³を転々とし、生活の拠点を変えていく。しかし、最終的には、奶奶の孫養子・李天華との婚約を破棄し、自分自身で結婚相手を見つけ、その家族の一員となることに安らぎをおぼえ、上海の周縁地帯・梅家橋に落ち着く物語である。王安憶自身は、この作品では、上海の周辺の田舎から上海に移り住んできた人びとが、どのように上海に集まり住みつき、生活を営んでいるかを描きたかった⁴と述べている。

『富萍』に関する日本語に訳された先行研究は、王曉明、劉小俊のものがあがるが、あまり多くはない。王曉明⁵は、王安憶は『富萍』において1960年代の上海の人びとの日常を描き、底辺にいる人びとの日常生活に意識的に密着し、野蛮なつらい暮らしの中にある人情や情緒や活気を表現しようという努力が以前にも増して執拗に作品を貫いていると、この作品を高く評価している。劉小俊⁶は、奶奶も富萍もともに、自分の家を渴望し探し求めることは共通しているが、二人の理想とする家への考え方の違いから生じる衝突を王安憶が描いたことに注目している。これに対して中国での『富萍』に関しての先行研究は、日本よりも多いが、1995年に書かれた『長恨歌』との比較を通して論じられる⁷か、あるいは、富萍が上海での生活拠点を変えていく場所ごとに、富萍に関係する人びとに焦点を当て、彼らがどのようにして上海に移り住んできたのかを論じる研究⁸にとどまる。

これらに対し、本章ではまず、上海への移民の歴史について租界の誕生を前提にその経緯を説明する。そして、『富萍』に登場する外来移民について上海人の概念とともに検討し、『富萍』の前に発表された上海、あるいは上海人との葛藤を描いた『悲慟之地』と『好婆和李同志』について説明する。最後に『富萍』の作品分析を試みる。ここでは、富萍と奶奶に焦点を絞り、富萍の上海での生活拠点の変遷をたどりながら、奶奶と富萍の家をめぐる考え方の違いを分析し、二人の外来移民が最終的にどこに自分の根付く場所を求めたのかを「市中心

——周縁」をキーワードとして考察する。なお、本稿で引用する『富萍』の邦訳は筆者による。原文は、『悲慟之地』と『好婆和李同志』は文化文芸出版社『文工団』2001年9月第1版を使用し、『富萍』は湖南文芸出版社『富萍』2000年9月第1版を使用する。

2. 外来移民の歴史

2.1 租界の誕生

江蘇省に属する沿海の一都市で過ぎなかった上海は、南京条約によって正式開港し、租界の出現によって近代都市として「華洋交錯」〔中国と外国の交錯〕する「五方雜処」〔各地からやって来た人々が雑居する〕な移民都市⁹を形成し、国際都市上海が誕生した。

1840年にアヘン戦争が勃発し、1842年6月イギリス軍は上海を占領すると続いて南京を侵攻し、1842年8月29日南京条約の締結によって、上海は五港（北から上海、寧波、福州、厦門、広州）の一つとして開港されることが決まった。1843年11月イギリスはいち早く上海に領事を送り込み、1845年11月7日上海道台〔上海知事〕¹⁰の決定をもって開港した。そして、第一次土地章程によって、洋涇浜以北、李家庄以南、黄浦江以西の区域を¹¹イギリス租界として設置することが認められた。同時に「永租」〔永久租借〕と「華洋分居」〔中国人の居住の禁止〕も決められ、1854年頃まで有力商人からなる道路埠頭委員会が租界建設にあたった¹²。その後、イギリスに次いで1848年にアメリカ租界が呉淞江左岸に、1849年にフランス租界が呉淞¹³とイギリス租界の間に設置され、租界の面積は土地章程の改定により増大していった¹⁴。1863年、アメリカ租界はイギリス租界と合併し、英米租界は共同租界となる¹⁵。こうして一つの都市が、共同租界、フランス租界、華界〔租界に対して中国側領域をこう呼ぶ〕という三つの管轄に分かれ¹⁶、租界の発展に従い都市の中心は呉淞から租界、特に共同租界の旧イギリス租界へと移った。

和田博文は、「共同租界には高層ビルが建築され、大部分の道路にはコンクリートが敷かれた。上海第一の街路・南京路にはデパートが立ち並び、競馬場から西の静安寺路を歩くと、領事館や外人墓地と共に高級住宅が目立った。蘇州河以北の虹口方面には日本人が多く住むようになる。1934年の共同租界の外国人口約4万8000人のうち、日本人は1万8000人を数え、6200人のイギリス

人を大きく引き離していたが、共同租界の力は、イギリスがはるかに上だった。バンドではためく国旗の大部分はユニオンジャック、黄浦江に浮かぶ汽船の三割以上は英国籍、上海税関の高級スタッフはほぼイギリス人であった。」¹⁷と租界の様子を紹介している。しかし、1937年に日中戦争が勃発すると上海は日本軍に占領され、1941年の太平洋戦争の勃発により、租界を含む全上海が日本軍の占領区となったが、1945年8月の終戦をもって租界は中国政府に接收された。

2.2 外来移民の歴史

租界は当初、中国の主権下におかれた外国人居留地に過ぎなかった。しかし、1853年9月の小刀会の呉淞占領により、呉淞内外の中国人の難民が租界に流入し多数の中国人が居住するようになった。1853年初め、中国人の租界内居住者はわずかに500人であったが、一年後には一気に2万人を超えた。租界当局は、家屋を建設して中国人に貸し出せば大きな利益を獲得できると考え中国人を入れることを許可した¹⁸。この利益目的によって1854年7月第二次土地章程では、租界の拡張、「華洋雜居」〔中国人と外国人の雜居〕の黙認（「華洋分居」〔中国人との居住の禁止〕の規定の廃止）などを主な内容とし、更に翌年には中国人居住租界条例を公布し厳しい制限をつけながらも、租界における中国人居住が承認される¹⁹。これに加えて、工部局を組織し警察制度を作り、租界内の中国人からも徴税するようになった²⁰。そして、1854年の第二次土地章程は1869年に改定されると、清朝政府の伝統的行政システムとは異なる権力機構が租界に成立することになった。

その後も1857年の江浙一帯の飢饉の発生、1862年の太平天国軍による蘇州、南京の占領によって²¹、蘇州や浙江一帯の人びとが租界へ一挙に流入した。太平天国が鎮圧されると故郷に帰る者もいたが、そのまま上海に留まった者も多かった。つまり、租界の人口急増は難民の一時的な避難ではなく、過剰人口の都市定住を目的とする人口移動となり、「華洋雜居」であった租界は「五方雜處」へと変化²²し、これが第一次人口増加である²³。こうした租界内における「華洋雜居」は偶然的契機をもって始まった²⁴が、結果として上海の中国人社会は、さまざまな目的と思惑を抱き国内各地から流入した雑多な身分・階層からなる人びとによって成り立つことになり、上海という都市形成のあり方をますます複雑なものとした²⁵。

その後も 1923 年から 1925 年まで上海の近郊で起こった地方軍の戦争により、25 万人の難民が租界に避難してきた²⁶。更に、1932 年 1 月 28 日の日中両軍の武力衝突に始まった第一次上海事変から²⁷1945 年 8 月の太平洋戦争の終結までの期間に、第二次人口増加といわれる難民の急増がおこった。なかでも、1937 年 7 月 7 日、再び北京郊外の盧溝橋にはじまった戦火は、1937 年 8 月 13 日に上海に飛び火し²⁸、上海は壮絶な市街戦の戦場となり、特に中国人の工場が密集し、鉄道交通の中心であった上海北駅のある閘北一帯は、日本軍の爆撃にあって廃墟と化した。この時、中国側の受けた被害は莫大であり中国人避難民は 120 万にも及び、戦闘地区以外の租界や南市方面に避難して市中にあふれ出した光景は悲惨を極めた²⁹。すでに上海戦の勃発前から、戦場となることが予想された地区に居住する中国人たちは、情勢の悪化にともなって安全と思われる共同租界やフランス租界へと押し寄せる難民が急増した。1937 年 8 月 13 日以降は、更に多数の難民が戦火をのがれて租界に避難し、租界の人口は戦前の 350 万人から 400～500 万人にふくれあがった。難民の進入をおさえきれない租界当局は、難民収容所の設置や難民の本籍地への移送などの対策をとったが、膨大な難民の前には無駄であった。多くの難民は住む家も頼る親戚・知人もなく、街頭に野宿するものも多かったといわれている³⁰。

1945 年太平洋戦争が終結し、中国政府に租界は接收され、百年にわたる租界の歴史はここに幕を閉じ、上海市全域は初めて中国の下に統一された。戦後、上海の面積は 617.99 キロ平方キロメートル、人口は 391 万人、農村の崩壊により、上海への激しい人口流入がとどまることなく増加し³¹、1949 年、上海市区の人口は 418.94 万人、1 キロ平方メートル当りの人口は 50,842 人という超過密状況にあった³²。

上海の都市形成は、従来なかった本格的な出稼ぎ先・働き場所の誕生を意味した。租界に隣接していた農村地域では、都市化の拡大により農民は離農し、それゆえ、農村地域の過剰人口が上海へ流動しはじめることとなった³³。特に、江北³⁴に属する蘇北³⁵といわれる江蘇省の長江以北の地からの人口流出は、江南地方の方が裕福であるという一般的な理由に加えて、上海の商・工業の発展という要因によっても促進されたが、また、地方独自の流出要因もあった。それは第一に、運河輸送から海運への変化であり、これによって例えば揚州などは従来の商業や交通の要衝としての重要性を失ってしまった。第二に、運河輸送の意義の低下によって水路の管理がずさんになり、水害の発生率が上昇する

と、元々、土地の生産性の低かった江北地方に新たな問題の発生が、貧窮民を南に押し出すことになった。こうして上海に流入した江北出身者の就業先は、男性の場合は、主に熟練を要しない肉体労働である埠頭苦力、人力車夫、屑拾い、綿屑の選別、羽毛の洗浄、養豚などに従事し、女性の場合は、保姆として働くもののほかに、娼婦になるものも相当いたという³⁶。

『富萍』の舅舅〔母方のおじさん〕³⁷は12歳の時に、貧しい故郷の村から大伯〔父方の伯父、父の兄〕について上海にきて、埠頭苦力〔埠頭での肉体労働する者〕となった背景には、舅舅の田舎は農業をするには土地が痩せており、村を出て上海の埠頭で働く伝統があったからである。このように、埠頭苦力は人力車夫と同様、重要な就業先の一つであり、揚州は主な出身地であった³⁸。

1958年以降は上海市に組み込まれることになる江蘇省の宝山・嘉定・青浦・松江・上海・川沙・南匯・金山・奉賢の諸県から、農民が上海に出稼ぎにやってくる。また、上海の開港前「天下第一」であった蘇州を含む江蘇省中部から、長江の対岸に広がる江浙地域から、近接する浙江省から、そして遠隔地からも、人びとは上海に仕事を求めてやってきたのである³⁹。

しかし、1949年以前の上海は人口流動率が極めて高い都市であったが、1958年に施行された戸口登記条例により大きな転換期をむかえた。この条例によって上海では戸口制度〔戸籍制度、戸籍と住民登録を一体化したもの〕によって、農民の都市への盲目流入〔やみくもに流入する〕を厳しく制限し、過剰人口を含めた農村居住者には農村戸口〔農村戸籍〕が与えられるようになった。一方、都市戸口〔都市戸籍〕を認めた者には、国家が就職・食品配給・住宅供給・医療や年金など各種の社会保障・教育などの保証を与えたが、農村戸口の者には、各人民公社が保証を自弁することになり、都市戸口と農村戸口の格差がうまれた⁴⁰。この制度によって、農村と都市という異なる社会空間は人為的に隔離され、農村住民と都市住民には全く異なる社会的身分が付与された。また、都市と農村の上下関係を定着・強化しただけでなく、都市住民の子女は都市住民に、農村住民の子女は農村住民にと、社会的身分を制度的に固定してしまった⁴¹。

『富萍』の奶奶が戸籍をいつ取得したかはテキストからは不明である。しかし、こうした状況から察するに1958年を境に上海で戸籍を取得するのは困難になっており、奶奶は1930年代半ばから上海で保姆をしているので、戸籍を取得できたが、富萍が上海にやってきたのは1964年以降であるため、戸籍を取得するのが困難であったと思われる。実際に、1958年の戸口登記条例以降、1964年

8月国務院は公安部關於处理戸口遷移的規定（草案）を公布して、農村から都市へ、または集鎮〔非農業人口を主とする町〕から都市への戸籍移動を原則的に禁止するなど、都市と農村とを厳格に隔離する法的措置が取られた⁴²。富萍の母が亡くなった後、舅舅が上海では富萍の戸籍の取得が難しいというので、結局、富萍は叔叔〔父方のおじさん〕の家に引き取られた⁴³という記述からも戸籍の問題が人びとの生活に大きく影響したことが裏付けされる。

3. 上海人と外来移民

上海人と外来移民の関係は、王安憶の上海作品において、主要なテーマである⁴⁴。2.2で述べたように、上海への移民は当初、一時的な避難のために租界に逃げてきた難民であり、これが租界の人口急増を招いたが、その後、特に江北とか蘇北といわれる江蘇省の長江以北に位置する地からやってきた移民は、本格的な出稼ぎ先・働き場所として上海に根付くようになった。男性の場合は、主に熟練を要さない肉体労働をして、『富萍』の舅舅のように棚戸区に暮らし、女性の場合には、奶奶や富萍のように淮海路などで保姆として働くものもいたが、娼婦となるものも少なくなかった。彼らは上海の都市形成において外来移民と称され、上海人から軽蔑されることも多かったが、条件が悪い都市雑業につくことで上海に根付いた。ここでは、上海人と上海に暮らす人びとの多くを占める外来移民について考察し、『富萍』を発表する足がかりとなった『悲働之地』と『好婆和李同志』について述べたい。

3.1 上海人

上海人とはどのような人びとを指すのであろうか。華霄穎は、上海は移民の都市であると定義した上で「上海人」とは共通の文化の特徴を有する地域社会の集まりの総称である。この概念には二つの側面がある。第一に上海という場所に居住、あるいは長期にわたって生活をしている人びとである。第二に「上海」という文化的特徴に共通点をもつ点である。この文化的特徴とは、生活方式、行動方式、審美的習性、価値概念などを指す。そして、別の地域の集団と異なる点は、「上海人」というこの名称であり、この地域が内在しているもの、あるいは文化の特徴に関わることなく、まず先に「上海」が地域概念を形成

するのである。これが移民の都市の特徴を形成しているのだ。」⁴⁵と提示し、「我々が何人とか、どこの地方の人という時、一般的に総称すると、この地域で生まれ育った土地の人を意味するが、「上海人」はこの概念に決して当てはまらない。移民社会の特徴として、「上海人」の概念は広く、この地に祖先から三代暮らししていなければいけないという制限もない。ただ、上海に暮らし生活し仕事をし、自覚があるなしに関わらず、上海人と共通の価値概念があると認めている人びとを称して「上海人」とする。」⁴⁶と補足する。

祖父母の時代から、あるいは父母の時代から上海に暮らしている人、上海生まれの両親をもつが、上海に生まれ育つことなく、別の都市に暮らしている人でも上海人と共通の価値概念があると認識している人であれば、第三者に上海人と認められなくても、本人は上海人であると自覚しているのではないだろうか。後に考察する王安憶の『悲慟之地』と『好婆和李同志』では、上海に暮らす上海人がもつ外来移民への偏狭さや差別の意識が描かれている。

3.2 外来移民

3.2.1 南下幹部

中国語の移民とは国内外問わず、別の地へ移転する住民を指す。外来移民とは農村や地方から都市へ移転してくる住民を意味する。外来移民には外来工とよばれる、出稼ぎ目的で上海に移民してきた人びとも含まれるが、彼らとは身分が全く異なる、王安憶の両親のように南下幹部として権力をもって上海にやってきた人びとも同じく外来移民と称される。

解放戦争末期、北方が全て解放され人民解放軍が軍隊を指揮して南下した後、南方の各省を占領したが、江南地方は歴史的に国民党の統治地区であったため、深刻に幹部が不足していた。このような状況下にあって、共産党の軍隊と北方の解放地区から優秀な幹部の一団を選抜し、南方に派遣し勝利の成果を強固なものとするために、南方の指導者として選抜された一団を南下幹部という⁴⁷。南方とは、今の江浙〔江蘇省と浙江省〕、両広〔広東省と広西チワン自治区〕、雲南、貴州、四川等の省である。十万人に及ぶ南下幹部たちの多くを山東省出身が占める。なかでも 1947 年 6 月から 1949 年 4 月までに行われた合計 8 回の派遣が大規模なものとして知られているが、この派遣以外にも、小規模の派遣も多々あった。

先述したように王安憶の父・王嘯平は 1940 年に新四軍に入り、文工団で演劇の演出を担当していた。一方、母・茹志鵬は 1945 年以降、後に華中・華東軍区文工団となる蘇中軍区前線話劇団で女優、脚本や歌詞の創作など演劇活動に従事し、1947 年に王嘯平と結婚した。二人は 1950 年から南京軍区文工団に所属し、1955 年に南下幹部として上海へ移住した。

茹志鵬と王安憶の自伝的小説として解釈される『紀述与虚構』の冒頭で「我々は上海というこの都市において、外来戸〔よそもの〕であった」⁴⁸と王安憶は述べている。一歳の時から上海で暮らしていた王安憶がこうした感想を抱く背景には、たとえ上海の淮海中路の最も賑やかな弄堂で暮らしていても、両親が南下幹部であった王安憶の家庭と上海人の家庭の間には、大きな隔たりや衝突があったことを推測させる。以下の引用は幼いながらも王安憶であると考えられる「わたし」が、上の階に暮らす同じ歳の女の子と親しくなり、自分がよそものであると自覚した場面である。

彼女の服装や食事は、上海という都市の豊かさと優雅さの典型である。彼女と一緒にいると、自分はまるでよそもので、服装は品がなく、食事也大味で、上海語も生粋ではなかった。両者を比較すると、「わたし」は自分がよそものであることを認める苦境に直面したのである。（『紀述与虚構』 p.96）

『紀実与虚構』の「わたし」の母は「わたし」が上海語を話すことも、弄堂の子供たちと一緒に遊ぶことも禁じ、普段の生活では標準語を話させた。その後も上海語を理解することができるようになった「わたし」が、弄堂の子供たちと同じ小学校に通うようになって、放課後に「わたし」が他の子供たちと遊ばないように、母は英語の家庭教師をつけた。母が与えた環境にいる「わたし」のよそものであるという意識は消えることなく、弄堂の子供たちと接する機会が増え、上海での暮らしが長くなっても、ますます「わたし」を孤独にさせた。

王安憶は幼い頃のこうした体験からか、南下幹部が上海にやってきて、上海人と衝突しながら奮闘する姿を作品の中によく描く。例えば『富萍』の奶奶が現在働いている家庭の主人は、やはり政府関係の機関で働く南下幹部であり、江蘇省や浙江省一帯の出身者であった。

かつて、奶奶は虹口にある軍事区域の建物に暮らす山東省出身の解放軍司令官の家庭を紹介され、働く条件も良かったが、その仕事を引き受けることはなかった。なぜなら、彼らの家庭はまるで政府機関の会議室のように奶奶の目に

映ったからである。その上、彼らは食事も外の食堂で済ませ、司令官である主人、軍人である司令官の妻、彼らの子供が通う食堂は別々で、奶奶にとってこの家族は理想の姿ではないと感じた。奶奶はこのような兵營の環境が好きになれず、自分のような保姆を高みから見下ろしている別世界に映り、長年の仕事のキャリアもプライドもあったため、自分から先方に保姆になることを断ったのである。しかし、今働いている南下幹部の夫婦も司令官の家庭と同じく政府関係の機関で働いているが、仕事を引き受けたのには次のような理由があった。

彼らは非常に上海の生活に適応しており、奶奶の保姆としての指導の下に、彼らは衣食住ともに非常に早い段階で上海人と違いがなくなっていた。しかし、彼らが上海の一般の家庭と違うところは、非常に開放的で、地域に対する偏見もないところである。奶奶がいうことを彼らは全て信じたのである。
(『富萍』 p.15)

この家庭は奶奶に家事の管理を全て任せ、奶奶を彼らの家族の一人として受け入れ、奶奶は親しくても普通は口にするものがない生活の上での問題点も、彼らには臆することなく伝えた。奶奶は彼らの寛容さが大好きだったので、上海人家庭でしか働かないというポリシーがあったが、南下幹部である彼らが上海で暮らしていくために保姆として仕えたのである。

後述する『好婆和李同志』にも、上海にやってきた南下幹部が、同じ弄堂で暮らす世話好きな上海人との間に生じる葛藤が描かれている。

3.2.2 保姆

次に、南下幹部と同じ外来移民ながらも、出稼ぎが目的である保姆について述べたい。沈瓊は保姆について、「彼らは知り合いもない、知らない土地である上海にやってきて、新しい社会環境に向き合い、目新しさに興奮し、不安もおぼえ、いかに早く上海人に適応し融け込むかということが、こうした移民の当面の急務であった。移転は居住する地点の変化を意味するだけではなく、よく知る田舎や人間関係から離れることを意味し、彼らに必要な適応は、空間の変化だけではなく、更に重要な心の調整が整うと、まさに上海に融け込むのである。他に価値ある注目すべき点は、こうした移民が上海にやってきて生活していく過程で、自分が上海に順応する以外に、彼らは多少なりとも上海人にも

生活と概念を変化させ、順応できる主観的な精神構造を抱かせるように、客観的に一定の改善作用を果たしているのだ。」⁴⁹と述べている。この意識は『紀述与虚構』の「わたし」の家庭に仕える保姆にもみられる。

隣近所の人びとは父母のことを「同志」〔同志、理想を同じくする人〕と呼び、丁重な態度で接するので、我々と彼らには違いがあるのだと私は思っていた。この呼びかけは延々と長いこと続いていたが、後に我々の家に新しくやってきた保姆によって変わった。彼女は来てすぐに父を「先生」〔先生、成人男性に対する尊称〕、母を「師母」〔先生の奥様〕と呼び、母がどんなに矯正して「同志」と呼ぶように頼んでも、彼女は「私はそのようにお呼びしない。」といった。〔中略〕彼女は17歳の時に上海にやってきて保姆になり、この時すでに40歳になっており、雇用のすべてと雇用されることの規則をわかっていた。この点において、彼女が知らず知らずのうちに母に影響を与えていたというのも、最初の呼びかけに関係している。我々が上海という都市にやってきて生活する上で、彼女には否定することができない功績があるのだと私は感じた。（『紀述与虚構』p.2）

保姆が雇い主の意志に全て従うのではなく、雇い主の方が保姆の考えを聞き入れる場合があることが上の引用から理解できる。王安憶も茹志鵬同様にこの保姆からは大きな影響を受けた。例えば、弄堂の子供たちと遊ぶことを母に許してもらえず、幼い頃から孤独だと感じていたよそものである「わたし」を、保姆は意識的に以前仕えていた雇用主の家庭に連れて行き、その家庭の子供と遊ばせ、別の家庭を体験させた。保姆が「わたし」の家庭を去った後も、保姆は新しい雇用主の子供を「わたし」の家庭に連れて遊びにきた。

このように『紀述与虚構』には、王安憶と推測させる「わたし」やその家族が、保姆から受けた影響が多く描かれている。王安憶が主人公を保姆、民工、南下幹部などに設定し、上海の身分階層への注目を市民から移民へ向け、社会の下層階級の観点から作品を描くようになった⁵⁰背景には、この保姆から学んだ実際の経験が生かされている。しかし、現実の社会では、このように保姆の経験や知識が仕えた家族に保姆の希望通り受け入れられ、保姆が家族の一員と認められ歓迎されるケースばかりではなかった。

例えば『鳩雀一戦』は、上海で保姆として13歳の時から30年以上、張家に仕えている小妹阿姨〔お手伝いさん〕が主人公である。小妹阿姨は張家の娘の結婚に伴い、自分も娘の嫁ぎ先に保姆としてついていくが、長い月日が経ち、

主人である娘とその夫が死んでしまう。小妹阿姨は保姆として仕えている家庭の戸籍に入っているが、娘の4人の子供の1人である大弟との関係がうまく行かず、家も追い出され彼らの戸籍からも抜かれる。小妹阿姨のような保姆は、保姆としての多くの経験やプライドがあるので、年老いて今さら故郷に帰ることもできない。かといって上海で仕事がなくなれば留まることもできず、暮らす家もない。小妹阿姨は老後の対策を探るべく、友人の57号阿姨〔57番地に住んでいるお手伝いさん〕とともに奔走するが、最後は病気になってしまい、なす術もない。後述するが、『富萍』の奶奶も同じような将来の不安を抱えており、上海の戸籍を持っていたとしても、保姆ができなくなった老後の対策として周囲の反対を押し切り、李天華を養子にもらい富萍と結婚させ、自分の面倒を二人に見てもらおう予定でいた。つまり、故郷から出てきて上海で保姆となり、長い上海生活によって深く上海に融けこんでも、保姆は上海人になることはできない。保姆は保姆であり、老いて働くことができなくなったら上海で暮らしていくことも、故郷に帰ることも不可能なのである。保姆たちは、将来の大きな不安を抱えていても、その解決方法が見つからないのが現実なのである。

保姆は本当に上海という都市の一般の人物の使者であるが、少し悪賢いところもある。彼女たちは主人の家族が暮らす部屋に深く入り込み、彼女たちの独特な敏感な嗅覚と、わずかな手がかりを余すところなく経験に組み込み、その後、再びこの経験を仲介するように、この家からあの家へと伝え、お互いに行き来がない家庭を精神的に橋渡しする。（『紀述与虚構』 p.3）

これは、『紀述与虚構』に描かれたある保姆の姿である。南下幹部は政府に後押しされた権力のある外来移民であるが、保姆は彼らとは全く違う立場にあり権力もなければ生活の保障もない。そして、将来的にも経済的にも大きな不安をかかえている。沈瓊は保姆について、「彼女たちの生活は上海本土の家庭の周囲にあり、雇用主の言行と挙動をうかがって判断するので、知らず知らずのうちに早い時期からすでに上海人の生活の方式が習慣となっており、上海の骨髓に徹し融け込み、上海の熟知度は本地人〔地元の人〕に劣らず、一つの言葉、行いは更に完全に上海化している。」⁵¹と述べている。つまり、保姆は上海人家庭に仕える場合には、これまで身につけた上海式生活スタイルに雇用主の意見を取り入れながら、気に入られるように仕える。そして、上海人ではない南下幹部のような家庭に仕える時は、上海式生活スタイルを伝承することを心がけて

いたのではないかと考えられる。

次は同じ外来移民ではあるが、故郷の生活形式をそのまま持ち込んで暮らしている、埠頭苦力たちのような都市雑業層⁵²の人びとについて論じる。

3.2.3 埠頭苦力と棚戸区

『富萍』の舅舅のような埠頭苦力をはじめ、各種の車夫、女工、幼年工等のような都市雑業層に属する人びとは、上海の中でもとりわけ貧しい棚戸区に暮らしていた。

棚戸⁵³というのは廃船の木材等を支柱とし、それを草やぼろ布で覆っただけの住居の名に値しない小屋である。棚戸の建ち並ぶ地区は棚戸区といわれ、スラム街の様相を呈し、上海の経済発展とともに形成された。

特に『富萍』の舅舅が暮らしていた閘北区⁵⁴の棚戸は、人びとに江北草棚〔江北の藁葺き小屋〕といわれていたように、棚戸区の住民の多くは本籍に従って集まって生活しており、都市にあっても別のグループと相対的に距離をおいて、世代が変遷してもなお、習慣や言語は長きに渡って郷土の特色を保持していた⁵⁵。例えば、日常生活で使う言葉に関しては、一定の年齢以上の住民は、特に老人はみな、強烈な蘇北の言葉を話し、上海語は聞いてわかるが話すことはできなかった⁵⁶。そして、都市雑業層の人びとに対する職業的偏見が根強く上海には存在していたため、結婚に関しても、同じ職業の家庭の中で結婚相手を探すことが多かった。『富萍』の舅舅は船のゴミ運搬をする仕事についていたが、結婚相手となった舅媽⁵⁷の家庭は同じく船のゴミ運搬を生業としていた。

それでは、いつ頃、棚戸区は出現したのであろうか。徐華龍による⁵⁸と、第一次世界大戦（1914年～1918年）の前後、上海の工業発展と同時に、都市の発展が促され、ビルや道路や橋梁、市政府施設が大量に増加し、建築労働者、市政労働者及び、大八車、人力車、三輪車の車夫の集団の力が強大になった。が、彼らが上海で暮らす家はなかったので、荒れた墓地や瓦礫や臭い河岸の傍らに藁葺き小屋を建てただけの場所に暮らすようになったのが棚戸区のはじまりであるという。1920年前後、蘇州河沿岸に日本の紡績工場や民族資本家の紡績工場、製薬工場、製粉工場が相次いで建設されると、多くの出稼ぎの農民が工場で働くようになり、彼らが蘇州河岸の荒地に小屋を建てて暮らすようになった。その後、一千数百戸の大棚戸区となり、これが有名な薬水弄棚戸区となった。

その他、特に早い時期に棚戸区が出現した地域は、滬西工業区と楊樹浦を中心とする東部の工業区の付近、それに浦東の埠頭・倉庫区の付近であり、次いで閘北区に出現した⁵⁹。こうした地域は元々、租界に近接した周囲の工場や鉄道の貨物駅、埠頭、倉庫が多い場所であった。棚戸区の衛生状態は極めて悪かった。1913年に外国人によって開かれた車夫救済のための会合の報告によると、棚戸には10から15人が一緒に雑居し、一つの部屋で雑魚寝している状態であり、日常的な火災の危険も重大な問題であった。特に1913年10月に発生した閘北区の棚戸での大火災⁶⁰は、江北からの住民が住んでいた棚戸2,3千戸が消失し、約二万人が家を失った⁶¹。度重なる火災の結果、閘北区の行政はようやく棚戸区を多少安全な場所に移転させるなど対策を施すようになった⁶²。

その後、1937年8月に日本軍の攻撃が開始されると、住宅地にも工場が移転しはじめ、1949年、全市の半数以上の工場が住宅と混在するようになると、再び工業区に隣接して棚戸区が形成された。例えば、閘北区の蕃瓜弄棚戸区の場合、5ヘクタールの土地に1500余のバラックが建ち並び、16,000人以上のひとがひしめき合い、このような棚戸区は上海だけで300か所余り、人口約100万人にのぼった⁶³という。

当時、上海の住宅建設はかなり遅れていたが、1952年に初めての労働者・職員住宅として、規模1002戸の曹楊新村〔曹楊の住宅団地〕の建設にはじまり、1963年～1965年になって、蕃瓜弄の棚戸区をはじめとする棚戸区の改造が重点的におこなわれた⁶⁴。そして先に述べたように、1958年になると戸籍の取締りが急に厳しくなり、上海に外来移民が自由に移住してくることが許されなくなった。階級闘争が深まり、流動人口が取り締まられ追放されると移民の流入は減り、新しい棚戸区が再び出現することはなくなったのである⁶⁵。

3.3 『悲慟之地』と『好婆和李同志』

王安憶は「私が上海人を書いた最も良い二編は『鳩雀一戦』と『好婆和李同志』であり、この二編は上海人と外来移民の衝突を描いている。」⁶⁶と述べ、更に『悲慟之地』『鳩雀一戦』について「私はこの作品は上海の現代集落にやってきた外来者が侵入者とみなされ、反撃や攻撃されることに意味がある。」と論述している。ここにあげた三編の作品の他にも、『逐鹿中街』『民工劉建華』『紀実与虚構』『富萍』が、上海あるいは上海人と外来移民との関係を描いた作品とし

てあげられる⁶⁷ことが多い。

『鳩雀一戦』は、13歳の時から上海で保姆として30年以上働いている小妹阿姨が主人公である。筆者はこの作品を、1950年代、上海で起こった小妹阿姨のような保姆が老後について不安を抱え、悪戦苦闘した末に将来安心して暮らす場所を確保できなかった悲劇が主題であると考え。この点から、王安憶が『富萍』の前に上海あるいは上海人と外来移民の葛藤を描いた作品として『鳩雀一戦』については論じず、ここでは『悲慟之地』と『好婆和李同志』の二編をとりあげ分析したい。

3.3.1 『悲慟之地』

『悲慟之地』（初出 1988 年第 11 期『上海文学』）は山東省の農村に暮らす青年・劉徳生が主人公である。劉徳生は上海の市場で生姜が売られていないと思い込み、故郷の仲間 5 人を誘って、上海で生姜を売って大もうけをしようと計画する。しかし、上海到着後すぐに、劉徳生は上海の市場や道路、弄堂の入り口など至るところで、劉徳生の田舎のように生姜を一束ごと売のではなく、一塊ごとに形状を変えて売られている現状を知る。そして、生姜が上海の路上で子供たちのままごと遊びに使われている光景を劉徳生が目にした描写から、ほんの短い上海滞在であるが、劉徳生がいかに無知のままに上海にやってきたのかがわかる。劉徳生にとって初めての上海体験であったが、劉徳生は上海人に「田舎もの」と軽蔑される。その後、劉徳生は仲間のリーダー・九哥と外出した際、上海の繁華街で九哥とはぐれてしまう。劉徳生はあわてふためいて高いビルに逃げこむと、上海の警察や市民に追い詰められ、怖くなって最上階から飛び降りて死んでしまうところで物語は終わる。

筆者は劉徳生の刺激的な上海体験が綴られていく過程で、劉徳生が上海人から受けた度重なる差別によって、上海は決して良いところではなかったと悟り、劉徳生が上海の群集に追い詰められビルの屋上から飛び降りてしまうという 3 つの場面の展開が、『悲慟之地』を構成していると考察する。華霄穎は「『悲慟之地』には二つの筋があり、一つは生姜を売ること、もう一つは劉徳生たちの都市の体験であるが、生姜を売することは本筋ではなく、都市での体験がこの小説の重点なのだ。」⁶⁸と指摘している。そして、『悲慟之地』は都市と田舎の隔たりと差別の概念⁶⁹であり、この根源にあるのは、弄堂に暮らす上海市民の偏狭

さと田舎の人を含む外人への差別である⁷⁰と論じている。

上海に到着後すぐに、劉徳生は九哥から仲間とはぐれないように、財布が盗まれていないか随時確かめるように忠告され、劉徳生が何度も注意深く確認している様子は読者に滑稽な姿として映る。しかし、仲間とはぐれ混乱したことが原因で、ビルから飛び降りてしまう結末は、劉徳生のような田舎ものが上海ではなす術もなく、上海人の助けも得られなかったことは、上海という都市が外人を軽蔑し、決して受け入れない閉塞的な社会であることを意味する。例えば、劉徳生は持っていた生姜の入った麻袋の中身について、上海人に質問されても上海語が理解できず、麻袋をつま先で何度も蹴ってきた青年には理由もなくののしられ、上海の子供からも「田舎ものだ」と罵声をあびせられる。ひたすら恐れ、大きな決意をもって、上海での成功を信じてやってきた劉徳生であったが、「上海での日々はまるで商売のようで、これは良くない」と心を感じるのであった。

劉徳生は短い上海滞在中、九哥とはぐれ気が動転し、上海の群集に追い詰められビルへ逃げ込み、ビルの階段を一步一步必死にのぼっていく。劉徳生は階段が果てしなく続いているように感じ、息を切らす自分の声が聞こえた。まるで自分は逃走犯であり、階段の下が大騒ぎになっていることに気づく。手すりを持って更にのぼりながら下を見ると、混乱している群集が非常に滑稽にみえ、悪ふざけしたくなって大きなつばを吐き、更に急いでのぼり屋上にたどりついた。劉徳生が下を見ると、一つ一つ並ぶ建物の間に、車はカブトムシのように建物と建物の間をはって、蟻のような群集はわきかえり、非常に美しい上海の景色が目にはいった。劉徳生のつばを吐くという抵抗は全く無意味をなさず、劉徳生の視点から憧れてきた上海という都市が徐々に縮小され、全体を見渡すように描写されていく場面が『悲慟之地』のクライマックスとなる。

上海の全体を見渡したのは、劉徳生の生まれて初めての経験であった。しかし、この美しい光景を胸に刻む間もなく、劉徳生の目に入ってきたのは自分を指差す群集であり、ここから劉徳生の群集への逆襲が始まった。

劉徳生は突然怒りにふるえ、腰をかがめて割れた瓦を一欠けら拾い、彼ら（杉江注：下で見ている群集）に向かって投げつけた。群集はひとしきり大混乱して、四方へむやみに逃げ出した。劉徳生が又、割れた瓦を一欠けら投げると、瓦は空中に飛んで美しい曲線を描いた。〔中略〕彼は身体の向きを変えて、多くの小石や木片を集め、上着を脱いでこれを包んで平屋根におき、

一つずつ彼ら(杉江注：群集)に向かって投げた。〔中略〕とうとう、彼は割れた瓦を見つけることができなくなり、全く武器がなくなった絶望のその時、手にしていた衣服を投げたのである。(『悲慟之地』『文工団』所収 pp.208-209)

この行為は、劉徳生の上海人に対する怒りであり、上海への最後の抵抗であったが、劉徳生を追ってきた三人はすでに二十メートルのところまで詰めより、全く動かず手を広げ、腰をかがめている姿勢は、まるで怯えている劉徳生という鶏を捕まえようとする動作であった。最後に劉徳生は一步後退すると彼らの前から姿を消した。これは、劉徳生が上海や上海人に抵抗する術がもう何もなかったことを意味している。

3.3.2 『好婆和李同志』

『好婆和李同志』(初出 1989 年第 12 期『文化月刊』)は上海の同じ弄堂の建物の上の階に暮らす上海人・好婆⁷¹と、下の階に暮らす山東省出身で南下幹部・李同志⁷²の日常生活を描いた作品である。李同志は好婆の家庭を「老百姓」〔庶民〕とよび、好婆は李同志の家庭を「下面」〔下〕とよび、お互いを軽蔑していたが、李同志の家で働いている保姆は、わからないことがあると何でも好婆に気軽に相談をもちかけ行き来していた。やがて李同志は保姆を通して好婆と親しくなる。決しておしゃれといえなかった李同志の服装が、世話好きの好婆のアドバイスの甲斐あって日々垢抜けていき、服装や食事などの日常生活での振舞いが理想の上海人に近づいていくが、好婆と李同志の間に些細な行き違いが生じ、急に付き合いをやめる。しかし、反右派闘争が始まり、李同志が右派分子として批判の矢面に立たされ田舎に帰ることが決まると、好婆は李同志の不幸な運命に同情し、二人が和解するという物語である。

華霄穎は『好婆和李同志』において、「南下幹部・李同志が特殊な権力の象徴として上海にやってきて、たまたま老市民〔古くから住みついている市民〕を代表する好婆のお節介に遭遇する。上海は彼らの上海であると好婆は認識していて、彼らだけが上海市民の文化の枝葉末節までも理解し、伝承する重大な任務を担うことができると考えている。好婆は李同志に文化外来者の地位にあることを悟らせ、李同志はこうした枝葉末節の事情まで、上海の生活の知識を学ぶことになるとは思ひもしなかったが、徐々に李同志は上海化されていった。」⁷³と論述している。

この論述のとおり、『好婆和李同志』では、上海に暮らす好婆には理解できない、李同志の野蛮な生活スタイルを、好婆が極めて辛抱強く多くの豊富な経験と知識によって、李同志や李同志の保姆を指導し改革することで、李同志が上海で変貌していく様子が滑稽に描かれている。

まず生活面では、李同志は在宅時にドアを開け放ったままにし、ワックスをかけた床を水拭きする⁷⁴、李同志の家のシーツは一枚しかないので洗っても替えがない⁷⁵ことは好婆には到底理解できない。そして、お金があるなら、家庭用品を購入すべきだ⁷⁶と好婆は李同志に忠告すると、李同志は最初にピアノを、続けてソファ、大きなたんす、五段の引き出し、テーブルや椅子まで買い揃える⁷⁷。すると、部屋の中ばかりか、そこを訪ねる人びとまで変貌していき、その様子⁷⁸は、近所に暮らす人びとの噂の種になる。

山東省出身の李同志の家の饅頭〔中国の蒸しパン〕には具が入っていないことを聞きつけた好婆は、ワンタンの具にはひき肉や、干したむき海老、しいたけ、野菜をすりつぶしたものを調合して料理するように教え⁷⁹、魚は醤油煮込み以外、蒸し料理にするのもいい⁸⁰と、李同志の保姆に上海流の食文化を伝承する。

そして、好婆は李同志の服装もいちいち干渉する。李同志が上海に来て間もない頃、普段から好んでよく着ていた灰色のダブルボタンのレーニン服と、ズボンの裾が広がり足の甲まで伸びている非常に大きなズボン⁸¹を軽蔑し、女性にとって服装は非常に重要であり、ワンピースと旗袍〔女性用のワンピース式の中国服〕が女性に最もふさわしい服装である⁸²と好婆は忠告する。こうして自分のアドバイスによって、李同志が美しく変貌していく姿に対して、好婆はこのような感想をもった。

「李同志、あなたは本当に変わったわ。あなたが来たばかりの頃、灰色のレーニン服を着て、髪型はおさげをしていた。でも、今は完全に上海人よ。」李同志は決まりが悪そうに笑った。「上海人のどこが特別なの？」好婆は厳しい顔つきで「上海人は全く違うわ。同じ服でも、上海人が着るのと他の人とは違うの。でもね、李同志、今はもうあなたは上海人よ。」好婆は李同志が頭を下げて立ち去る姿を見て、「本当に上海人と見分けがつかない。」と続けていった。李同志は心の中でむっとして「見分けがつかなければつかないでいいわ。」と思ったけど、心の中に留めることなく、これまでどおりの日々を過ごした。(『好婆和李同志』 pp.229-230)

華霄穎は、好婆がこのように李同志の垢抜けていく姿を「人をこんなにも変貌させる上海という都市は素晴らしい。」と感嘆しているが、李同志は、「共産主義が人びとの生活を日々素晴らしいものにしてくれる。」⁸³と解釈したのだと述べている。

つまり、李同志自身は、自分の変化を上海のおかげだと考えてはいない。しかし、近所に暮らす人びとは、李同志が上海に来てから歳をとらず、かえって日ごと若返っていく様子を見て、「やはり上海にいるから、上海の風土が人をそうさせたのね。」と、あくまで上海の暮らしが李同志を変えたのだと、上海を賞賛する⁸⁴のであった。そして、彼らは李同志が垢抜けていくことへの皮肉からか、李同志の生い立ちを山東省の貧しく落ちぶれた田舎で生まれ、軍隊に入って戦争をしていたと勝手に推測する⁸⁵様子は、李同志が南下幹部として上海にやってきたことへの差別であると考察することができる。

最後に李同志は右派分子の汚名をきせられ、約2年過ごした上海から田舎へ戻る。次の引用は、好婆がこの噂を聞きつけ心配し李同志を訪ねた時の場面である。

好婆が「李同志、袁同志、夕飯は食べたの？」と尋ねると、李同志は「食べたわ。好婆は食べたの？」と返答した。好婆は「我が家の夕飯の時間は遅いから、李同志の家庭のように早くないけど、もう少ししたら食べるわ。」といった。李同志は微笑んで「我々には田舎ものの習慣があって、日が出ると働き、日が沈むと休むの。外が暗くなったら夕飯を食べて、食べ終わって別のことをするの。」と答えると、好婆はすぐに「李同志はおもしろいことをいうわ。ご飯を食べる時間が早い遅いということに、田舎も都会も関係ないわ。」といった。(『好婆和李同志』p.237)

これまで、李同志のあらゆる生活面に世話をやいてきた好婆であるが、残酷なこの時代の局面にある李同志に、他の上海人のように右派分子であることを中傷するのではなく、一人の友人として李同志を心配し同情している。そして、いつもなら何かにつけて、李同志に上海で暮らしていることを自覚させ、好婆が思う理想の上海式スタイルを李同志に伝承するのであるが、ここでは一切そういった忠告はしない。それは、李同志が南下幹部として上海にやってきて暮らしていても、上海人の差別に屈しなかった生き方と、右派分子として時代に翻弄されても真摯に現実に向き合ってきた生き方を、好婆が最後になって認め

たのだと解釈することはできないだろうか。そして、李同志が将来、どこの場所にどのような立場にあっても李同志が変わることのない強さを持ち合わせていることを、この場面は推測させる。

3.4 上海人と外来移民

王安憶は上海人と外来移民の対立を多くの作品の中で描いてきた。移民都市である上海において、何代にも渡って上海に暮らしている上海人は非常に少なく、多くを外来移民が占める。この外来移民とは、南下幹部や、出稼ぎ目的の保姆、埠頭苦力をはじめとする都市雑業に携わる人びとを指す。南下幹部は身分や権力を保証されているが、保姆は仕える家庭に住み込むことが一般的で将来への保障はなく、一方、都市雑業に携わる人びとは上海の中でもとりわけ貧しい棚户區に暮らしていた。

王安憶は『悲慟之地』と『好婆和李同志』の中で、外来移民たちは身分の違いこそあれ、上海人の偏狭さや差別に耐えて生きていく姿を描いたのである。『富萍』では、南下幹部の家庭に保姆として仕える奶奶と主人公・富萍、船でゴミを運搬する仕事をしている富萍の舅舅など、登場人物は皆、蘇北から上海に出稼ぎにやってきた外来移民である。作品では直接、上海人の偏狭さや差別は描かれていないが、上海で暮らしていく外来移民の背景には、こうした意識が存在していたことは確かである。

4. 『富萍』

4.1 奶奶、そして李天華との断絶——蘇北から淮海路へ——

早くに両親を亡くした富萍は、叔叔のもとで暮らしていた。自分の将来について考えていた富萍であったが、叔叔によって決められた李天華との結婚話を自分で拒否する権限はなく仕方なく受け入れた。その後、富萍は叔叔のもとを出て、奶奶が暮らす上海に行くのであるが、それは、李天華からの結納品の中に、富萍が上海へ行く旅費が含まれていたからであり、富萍はその機会を得て初めて蘇北を出て、奶奶が暮らす上海・淮海路の弄堂にやってきた。奶奶が保姆として暮らす家で、自分も保姆として上海での生活を始める。16歳の時に上海に出てきた奶奶は、若くして夫を、そして、二人の息子も相次いで亡くし、

たった一人の娘は嫁に行き、すでに 30 年もの間、淮海路で保姆をしてきた。奶奶の人物像は、冒頭でまず次のように紹介される。

奶奶の話すなまりもすでに変化しており、完全な田舎の言葉でもなければ、上海語でもなく、上海語のなまりが混じっていた。(『富萍』 p.4)

上海生活は、30 年であったが、奶奶は一人の都会の女でもなく、一人の田舎の女のようにもなく、半分半分であった。この半分に半分が加わり、ある種の特殊な人間に変化した。(『富萍』 p.5)

このように、奶奶が 30 年の歳月を上海の暮らしを経てもなお、完全な上海人になっていない様子がうかがえる。

劉小俊⁸⁶は奶奶について、「30 年間の都会での暮らしは彼女たちを故郷の生活から遠ざけたが、かといって都会の人間にもなりきれない、一種の特殊な人間に変えた」と述べている。奶奶の故郷である揚州の田舎には、昔から女性は上海で保姆として働く伝統があった⁸⁷。奶奶のようにベテランの保姆になると、保姆の身分でも上海の戸籍⁸⁸を持ち、正式な居住民となる者も存在し、自分からどこの家庭の保姆になるか選び、保姆の仕事にも自信を持っていた。しかし、実際長い期間上海に住み着くと、その間に故郷に帰る家もなくなり、常に働けなくなったら落ち着く場所がなくなるという不安を抱いている。たとえ恵まれた環境で働き、上海の戸籍を持っていたとしても、保姆はしょせん保姆でしかない。事実、奶奶は将来に不安を抱いていたために、周りの強い反対を押し切っても、父方の兄弟の孫である李天華の初中学の学費負担までして、彼を孫養子として迎えた。更に、親戚からのお金の無心があると断わらなかったのは、自分の恩を受けた人びとは、決して自分の恩を忘れることはないだろうと考えていたからであった。奶奶は、いずれ李天華と富萍を結婚させ、李天華を親から独立させ、彼に自分の老後の面倒をみてもらえば、田舎に残っている家も返さなくてすむ⁸⁹し、その家を保姆ができなくなって故郷に帰った時の住処にしようと考えていた⁹⁰。そんな奶奶の将来像について、富萍は次のように考えている。

ただ、将来はこの日からまだ遠く、これより以前にどんなことが起こるのかなんてわからない。これは富萍と他の女の子との違う点で、富萍はどんなことでも事態は変化するものであり、一定の決まりはないと信じていた。(『富萍』 p.30)

これは、幼くして父を、その 3 年後には母を亡くして一人ぼっちになり、舅舅にはその貧しさ故に引き取られず、同じように貧しかった叔叔に仕方なく引き取られ、家族の幸せなど味わったことがない富萍であるからこそ、心に抱いた感想である。富萍の故郷の様子について作品の中では、これ以上のことは描かれていない。

保姆として自立して生活している奶奶が「将来は李天華に世話になり、面倒をみてもらうのだ」とはばかり話すのを、富萍は決して理解することができなかった。そして、李天華との結婚を受け入れることは、18 歳の富萍にとって、孤独で辛かった自由のない生活の延長であることが予測できた。なぜなら、李天華の家庭は貧しく、養うべき父母と多くの弟妹、親戚がいたからであるが、富萍にとって親戚は、ただの煩わしい存在でしかなかった。

幼い時から家族でない人びとに囲まれて生活をしてきた富萍は、人に対して一貫して周到かつ慎重な態度であり、彼女は人間を見極めることができた。彼女は一目で、李天華が従順な人間であることがわかった。現在、この従順な人が奶奶の語りではっきり見えてきた。彼が養うべき父母、弟妹、大勢の親戚と多くの争いが、富萍の目の前にたちはだかる。富萍は親戚というものとはどんなものか誰よりもよく知っている。親戚なんてただ煩わしいだけだ。だから、富萍には非常に煩わしい将来が見て取れたのである。(『富萍』p.91)

李天華はまだ、18 歳になっていないが、すでに父母や幼い弟妹たちを養っている。将来、もし経済的援助の申し出など、家族や親戚の間で厄介な問題が生じたら、李天華のおとなしくて従順な優しい性格からおそらく断ることなどできず、この性格が時には欠点となることもあるだろう。

富萍は非常に多くの欲望があったわけではなく、ただ、特別に欲しいと思ったのは、自分の家庭であった⁹¹と王安憶は述べている。李天華と富萍の結婚を自分の老後の住処の確保のためと考える奶奶と、結婚が人生の始まりであり、家庭が自分の身を寄せるだけの場所ではなく、自分を必要としてくれる家族がいる安らぎのある場所だと考える富萍との間には、家をめぐる大きな違いがあり、衝突するのは当然のことであった。

4.2 舅舅を探しに——淮海路から閘北区へ——

上海に来てから、なかなか蘇北に帰る気配もない富萍に奶奶は不安を感じ、もうすぐ正月という時期に富萍を帰省させ、結婚の準備を始めさせようと決意する。そして、奶奶は富萍を田舎へ帰すために、李天華を田舎から上海に呼びつけたのであるが、富萍は知らされていなかったもので、入り口に立っている李天華を見て驚いた。

富萍は一瞬躊躇したが、固い決意をもって「私たち二人で生活してゆこう。」といった。李天華は「私の父母はどうするの。」と非常にすばやく返答し、まるで他には考えがないようであったが、彼は書面上の「父母」という語を使った。つまり、厳粛な意味があるのだ。(『富萍』 p.206)

この李天華の一言で富萍の決意は揺るがないものになった。富萍は蘇北に帰る気持ちなど全くなり、とうとう奶奶の家を飛び出した。奶奶の家にいれば間違いなく田舎に送り返されるのだ。しかし、この広い上海の中では、一人として身を寄せる人間も場所もないと、富萍は悲しみに打ちひしがれる。

その時、ふと、12歳で蘇北から上海に出てきて、船でゴミを運搬する仕事をしている孫達亮という舅舅がいることを思い出した。富萍は、舅舅と母の葬式で会ったのを最後に音信不通で、舅舅が閘北区に住んでいるという情報以外ほとんど何の手掛かりもなかった。しかし、結婚のために田舎に連れ戻されるのなら必ず舅舅を探し出そうと、何度か淮海路の奶奶のところから徒歩で、閘北区の中でも蘇北出身者が多く住む地域を人づてにたどり、やっとの思いで舅舅を探し出した。富萍は、親戚など煩わしいだけの存在だと考えていたが、唯一、血のつながりのある舅舅を探し出せば、奶奶から逃れるきっかけとなるかもしれないとわずかなチャンスに望みを託した。

実際、テキストからは、舅舅の家が閘北区のどの辺りにあるのか正確なことはわからない。ただ、富萍は舅舅の家を見つけるまでには何度となく迷い、数日かかっている。この富萍の足取りは、富萍と上海との関係を象徴的に表すくだりであるため、詳しく追ってみたい。

最初の二日間、富萍は2、3駅分の距離を歩いてもとに戻り、あえて前に進まなかった。しばらくして、路線にだんだん詳しくなり、勇気もわいて、徐々に遠くへ行くようになった。彼女は時々、ご飯を食べる時間すら忘れる

こともあり、ついには真っ暗になって、ようやく引き返す。この時、弄堂には誰一人としていない。富萍は、明日もまた駅へ行こうと思い、奮起するのであった。(『富萍』 p.103)

舅舅の家を見つけ出した時は、まず、親戚の人びとが話していた「棚戸区」「閘北区」「上海東駅」⁹²「陸橋」をキーワードにして、淮海路から蘇州河にかかる橋を渡り、上海東駅付近のそれらしき陸橋の上に立ち、その下に広がる一大棚戸〔スラム街〕を眺めた。「この広い棚戸は、バラックの家々がぎっしり詰まっていて、何の手がかりもない舅舅を探し出すことは、極めて困難なこと」であった。しかし、この時の富萍にとって、「この大きな棚戸区は、まるで一つの大きな網のようにも思え、ここで暮らす人びとはお互いのことを知っている」ように思えた。自力で舅舅を探し出そうと実行したことは、これまでの不幸な人生からの脱却にかける富萍の想いと、新しい将来に対する期待を意味する。舅舅の家を見つけ出した日は、正午には閘北区の陸橋に着き、それから約 2 時間人から人へ訪ね歩き、やっとの思いで目的地にたどりつくことができた。テキストには、富萍が進んだ方向など具体的に書かれてはいないが、いくつか手がかりがある。富萍が、後に舅舅と家の近所を散歩する場面では、舅舅が先に陸橋を降りて、狭い道を歩いていくと、道の前方は行き止まりで、踏み切りの赤い信号がチカチカ点滅していて、貨物列車がもうじき通ると富萍に話していることから、舅舅の家付近に線路がある⁹³ことがわかる。他にも、奶奶が舅媽に芝居に招待され、芝居が終わって奶奶が富萍を家に連れ帰る場面では、舅舅の家の近くのバス停から奶奶の住む家まで、最終のトロリーバスに約 30 分乗って帰る⁹⁴場面もある。仮に、舅舅の家の場所を上海東駅からほど近い閘北区の線路沿いではないかと想定する。富萍が初めて舅舅の家を探し出した時、奶奶の住んでいた淮海路から舅舅の家のある閘北区まで、バスなどの交通機関はあったが、富萍はバスに乗らずに徒歩で探しだした。その距離は 18 歳の女性でも歩くことが可能な範囲である。地図から計算すると約 3 キロ、淮海路からもっとも遠い閘北区に舅舅の家を仮定しても約 5 キロ圏内であったと推定することができる。

上海語には上只角、下只角⁹⁵という言葉があり、上只角とは居住条件の良い地域を意味し、下只角はその逆であり、文化程度が高い地域と低い地域という意味にも使われている。市区⁹⁶で見えてみると、黄浦、盧湾、静安、徐匯区などが上只角にあたり、閘北、普陀、南市区あたりが下只角と考えている人が多い。黄浦、盧湾、静安、徐匯区は、以前の共同租界やフランス租界と重なり、そこ

に住む人びとは間違いなく自分達の住む地区を他区と比較して上只角だと認識している。閘北、普陀区は蘇州河の北側にあり、棚戸区がもともと多い場所であった。特に舅舅が暮らす閘北区の蘇北出身の人数の多さは知られている⁹⁷。閘北区は多くの工場の他に、蘇州河に沿って埠頭や上海東駅があるので、多くの蘇北人が埠頭での運搬の仕事に集まり、他にも工場での下働きなどの肉体労働者のグループもあるため、今日でも非常に多くの閘北住民の中には、依然として多少なりとも蘇北の生活習慣は留めているという⁹⁸。南市区も租界ができる以前から人びとが住んでいた旧県城を中心とした一帯を指すのであるが、旧租界外は閘北、普陀区同様、棚戸区が多かったために、上只角に住む人びとは閘北、普陀、南市区の下只角の人びとを見下す傾向にある。『富萍』にもこの意識が描かれている。

奶奶は、自分自身も蘇北出身であり、富萍の舅舅が住んでいた閘北や、普陀といった地区には、彼女と同じ故郷の人びとが集中して住んでいる⁹⁹のに、華やかな市中心に住んでいる居住民と同じような偏見¹⁰⁰もあって、こうした周縁地帯を荒涼たる田舎であると見下し、彼らと行き来することもなく、「ただ淮海路だけが、「上海」と称される」¹⁰¹と認識し、そしてそれは奶奶だけではなく、周縁地帯とはいえ同じ上海で暮らしている舅媽や、舅媽の近所の人びとでさえ、奶奶の暮らす淮海路こそが、上海であると確信していた。

舅媽は新しい青い布で作った上着をはおり、中に着ているチェックの柄の襟が襟元から出ていた。舅舅の新しい綿でできた靴を履き、この靴の上の部分は黒いコールテンで、周りは白で縁取りされ、風通しがよい、ひもでしばるタイプであった。肩には灰色の合皮でできたファスナーのついたバッグを持っていたが、これは小君¹⁰²から借りたものである。髪はくしでとかし耳にかけ、見たところは幹部のようであった。舅媽にとって奶奶に会うことは一大事で、非常に厳粛なことなのである。奶奶の住んでいる淮海路は、彼ら閘北に住んでいる人間にとっては、本物の上海なのである。
(『富萍』 p.157)

富萍の事情を全く知らなかった舅媽は、富萍に結婚相手として、自分の甥である光明¹⁰³を紹介する承諾を得るために、奶奶のもとを突然訪れる。舅媽は夫の靴や小君のバッグを借り、できる限りのおしゃれをして上海に暮らす奶奶に初めて会いに出かけた。棚戸の間の横丁を通り抜け、出会った人に「どこに出かけるのか」と尋ねられると舅媽は「上海に行くのだ」と朗らかに答えた。舅媽

にとって、淮海路に行くということは特別なことだった。舅媽の誠実な態度に心を打たれ、舅媽の招待を受けて閘北にやってきた奶奶を、舅媽の近所の人びとも上海に住んでいる奶奶がやって来たと、わざわざ見に来るのであった。

かつて、奶奶は息子を亡くした直後、妻があつたが子供に恵まれなかった修理工の戚師傅と男女の関係にあつた。戚師傅は浦東出身で、大工になる勉強をし、浦西の徐家匯に出てきて、4歳年上の女性と結婚し淮海路の程近く八仙橋に住んでいた。奶奶は戚師傅の子供を妊娠した時点で、おそらく、彼が離婚し、上海で新しい家庭を築くことが出来ると期待した。しかし、戚師傅は奶奶が妊娠した子供を、自分と妻の子供とし、しばらくは遠縁の女性に育てさせると決意したと奶奶に告げ、それを聞いた奶奶はすぐに子供を墮胎した。その後も、奶奶は淮海路から出ることはなく、淮海路にある雇い主の家を探して働き続け、働くことができなくなるまで上海に暮らし、その後は、李天華とその妻となる予定の富萍に故郷に帰って老後を見てもらおうと考えていた。奶奶が、どんなに上海に対して緊密な愛着があつたとしても、仕事ができなくなったら、上海から離れなければいけないと自覚し、故郷に帰る準備をしたのも、奶奶は保姆の立場から上海を深く経験していた¹⁰⁴からであり、故郷に固執し、故郷に帰る以外に方法はなかったのである。

一方、舅媽や棚戸区の人びとも、奶奶の暮らす淮海路こそが上海なのであると考えていた。舅媽は、舅舅と同じ職業の船のゴミ運搬を生業とする家庭の出身で、舅舅に嫁いだ。このような船上労働者は一般に偏見の目で見られることが多く、同じような職業の人と結婚することが多かった。上海にあつて上海ではない閘北区が、舅媽の生まれ育った故郷なのである。陳思和は、「棚戸区の人びとが上海市中心を特別に上海であると称するのは、上海周縁に暮らす人びとの謙虚な意識であるが、こうした現代都市の排泄物の運搬を生業としている者たちも、無視され対立し排斥されていると感じることはなく、彼らは自分たちの民間の世界で実務に励み、楽しく賑やかに生きる活力を維持していた。」¹⁰⁵と指摘している。

テキストでは、奶奶がホームシックになると蘇州河を渡って、閘北区付近の四川北路、海寧路付近¹⁰⁶へ向かう路を歩き、故郷の風景を思い出したが、閘北区や普陀区に多く住む同じ故郷の人びとと付き合うことはなかった様子が描かれている。なぜなら、奶奶の故郷の人びとである蘇北人は江北人ともよばれ、本来は、長江の北、主に現在の江蘇省あたりの出身者を意味するのであるが、

実際は、飢餓や生活の必要に迫られて、貧しい農村から上海へ出てきた人を指し、それに加えて、彼らは棚戸で暮らし肉体労働に従事していたので、上海では蔑視され、粗野、無教養などのイメージで語られることが多かった¹⁰⁷ ことが原因として考えられる。しかし、彼らのような非熟練・単純肉体労働に従事する人びとが、実のところ、大都市上海の生活の中心となって底辺で支え続けたのであり、近年の市場経済化の進展の原動力となった都市雑業層であった。滕朝軍は、「開港以来、上海は一貫して外地人が集まった都市なのである。こうした外地人——上海移民が、特殊なグループをつくり、彼らが上海の発展してゆく過程で重要な役割を果たし、誇張していうのではないが、百年に及ぶ上海の華やかな移り変わりは、確かに、1 ページ 1 ページが移民の歴史であり、上海移民が上海の迅速な発展を遂げた重要な原動力であった。」¹⁰⁸ と述べ、王安憶も、舅舅のような下層民が暮らす周縁地帯こそが、実はこの都市の核心であると次のように述べている。

この都市の地理上の周縁地帯は、実は都市の核心であり、多くの劇的な要因も、すべてここが発端となる。上海の中心地帯の華やかさと繁栄、わずかな架空の物事の本質、人物、出来事もまた全てがうわべで、変化にとんだ話も作り話であり、冷たく傍観してしまうのも避けられない。だから、その周縁の広々とした天空の下で、苦しみの人生も経験したその土地の人びとの労働こそ、人生であり暮らしとなる。（「主人的天空」『尋探上海』所収 p.123）

富萍の舅舅のような都市雑業層は貧しい棚戸区に住んでいたもので、差別されることも多かった。そのため、蘇北人をはじめとする農村からの移民が上海で職を得るには、地縁・血縁など様々な縁が必要であり、職を続けるにあたっても、帮といわれる非常に強いギルドの結束に守られる。『富萍』では、舅舅の故郷が、農作物がとれない貧しい村であったため、村を出て働く伝統があり¹⁰⁹、舅舅は12歳で、蘇北から上海で排泄物の運搬業に従事している大伯を頼って出てきた。この村の出身者の大半が、地縁、血縁によって舅舅と同じ排泄物の運搬業に従事するようになると、上海の蘇州河を往来する排泄物の運搬船で話される言葉は、舅舅の出身である蘇北の村の方言であった。こうして、同じ故郷の出身者たちは、実際の故郷よりも上海での結束が強く、互いに助け合いながら暮らしていた。舅舅のような移民たちは、上海にあって上海でない場所に自分たちの故郷を築いていたのである。

4.3 母子との出会い——閘北区で見つけた梅家橋——

婚約を破棄し、奶奶の働く雇い主の家から飛び出してきた富萍に、「人に後ろ指をさされる、先祖までも罵られる行為だ」と舅媽は責めたが、富萍は、「私には生んでくれた母はいても、育ててくれた母はいないので、先祖なんて私とは関係ない」といった。富萍は、生まれ育った故郷を完全に捨てたのである。どこにも根付く場所がない、自分の家に居座る富萍を、舅舅は珍しく散歩に誘った。

池の近くを通りかかると、池に水草が覆っていた。舅舅は、「水ヒョウタンは、水草の一種だけど、これは富萍の名前と同じ、浮萍〔浮き草〕とも言ってね、音は同じだけど、字が違う。」と言い、木の棒切れを探し、地面に書いて、富萍に見せた。「この「浮萍」の「浮」が、「富萍」の「富」だ。」と富萍に教えた。(『富萍』p.223)

王安憶が作品のタイトルを主人公・富萍の名前としたことは、「富萍」と「浮萍」が同音であることから、まず読者は、根っこがない浮き草のような、自分の落ち着く場所がない人生を富萍が歩むのであろうと連想し、『富萍』というタイトルが、読者の指標となっている。

劉小俊も、富萍という名前については、「水面に浮き、あてもなくさまよい漂う浮き草のように、富萍には根をはる地盤——家がない。」¹¹⁰と論じ、陳思和も、「人びとはよく萍水相逢〔赤の他人が偶然の機会に知り合うこと〕を用いる。そして、人生とは縁の偶然であり、往事を思い出させる出来事も、大上海にいる平々凡々なたくさんの人びとの中においては、一片の浮き草のようにとるにたりない。しかし、時には、浮き草が水面にとどまると、川床をさらに厚く覆う、深くて予測不可能な神秘である。」¹¹¹と指摘する。富萍は舅舅の家以外、どこにも身を寄せる場所がなく、作品のタイトルのイメージ通り浮き草のようにあちこちをさまよう。

エドワード・レルフは、ヴェイユの著書『根付くことの必要』から「根をおろすということは、おそらく最も重要であるけれども最もわずかしき認識されていない人間の魂の欲求である。」の一文を引用し、「根付くことに対する欲求は、秩序や自由、義務、平等、そして安全に対する欲求と少なくとも同等の価値をもつ。そしてある場所に根付くことは、おそらく他の精神的欲求のために

必要な前提条件である。ある場所に根付くということは、そこから世界を見る安全地帯を確保し、また物事の秩序の中に自分自身の立場をしっかりと把握し、どこか特定の場所に深い精神的心理的な愛着をもつということである」¹¹²と述べている。この主張に即して富萍の身の振り方を解釈すると、蘇北から上海の周縁にある梅家橋へと、苦しくとも富萍がたどった道のりは、根付くことができる愛着のある場所探しのステップであった。

富萍は、以前、舅舅たちと一緒に見た芝居の会場で、たまたま隣同士になった障害のある青年とその母¹¹³に、舅舅の家の裏の方向にある梅家橋で偶然出会う。梅家橋は、かつてゴミ捨て場があった場所であり、舅舅の住んでいる地域と比べると棚戸も狭く、更に貧しい地域であった。彼らは、障害者年金をもらいながら、紙の箱をつくる内職をしており、その後、富萍はちよくちよく、この家庭に遊びに行き、内職の仕事も覚えて彼らを手伝った。この母子の過ごしてきた境遇は誰よりも過酷で貧しかったが、暮らしは非常に穏やかであり、富萍も彼らと一緒に過ごしていると安らぎを覚え、自分が生まれて初めてかけがえのない存在として受け入れられることに幸せを感じた。最終章では、富萍がこの母子と家族になり、妊娠していることがほのめかされ、富萍の新しい生活が梅家橋ではじまる。

5. 小結

蘇北から出てきた外来移民は、それぞれ上海で異なった生きる道を歩んでいる。故郷を捨てた富萍は、これまで、苦しかった蘇北の叔叔の家、淮海路の奶奶の雇い主の家、やっと探し出した閘北区の舅舅の家と、どこにも根付くことができない浮き草であったが、夫となる青年と、その母に梅家橋で出会い、この場所に深い精神的心理的な愛着を感じ、自分が根付くことのできる新しい故郷となる場所を見つけることができた。そして、舅舅や舅媽のように閘北区に住んでいる、富萍や奶奶と同じ故郷の人びとは、故郷を離れ棚戸での暮らしがどんなに貧しくとも、実際の故郷よりも固い結束で結ばれ、この場所に愛着をもち、自分たちの故郷を築いていた。一方、奶奶は30年、上海の淮海路で保姆として暮らしてきたが、閘北区に住んでいる同じ故郷の人びとに対しては、上海人と同じように見下し、彼らと付き合うことはなかった。しかし、奶奶も上海に住んでいる昔からの上海人からみれば、閘北区に住んでいる故郷の蘇北人

と同じように、偏見の目で見られていたのではないか。

エドワード・レルフは、特定の場所に根付くためには、その場所に愛着を持つことが最前提であるという。奶奶は長年保姆として暮らした上海に愛着はあっても、生まれ育った故郷である蘇北に愛着はなかった。しかし、保姆を辞めた場合、どんなに上海に愛着があっても、学費援助までした孫養子と、その妻となる富萍に、自分の老後を託し蘇北に帰る以外方法がなく、奶奶だけが愛着のある場所に根付くことができなかったのである。それに対し、富萍は蘇北を捨て、上海周縁地帯の中でも非常に貧しい梅家橋を新しい故郷とし、幸せな家庭を築いていくことが結末で暗示される。王安憶はこのような富萍の選択を通して、ある特定の場所に愛着をもち、そこに根付くことの重要性を描いたのではないだろうか。この背景にあるのは、一歳から上海に住んでいたが、南下幹部の家庭に育ったが故に、いつまでも自分が上海では外来移民であることを意識し続けてきた王安憶が持つ、上海人に対する偏狭さや差別意識への疑問であろう。

注

1 保姆とは、日本語では家政婦、お手伝いさんと訳す。劉小俊 2004 年、2006 年では、保姆とは現代中国語で「育児や家事の手伝いを目的に家庭に雇われる女性」を指し、共働きが非常に多い中国の都市部では、人件費とくに農村からの出稼ぎの人件費が安いこともあって、一般の家庭でも保姆を雇うのは珍しいことではない。従来、保姆は雇い主の家に住み込み、その家族と生活をともにしながら、家事を担っていたが、1990 年以降は、従来の住み込みに加え、もともと都会に生活基盤がある保姆たちは、自宅から通う鐘点工、又は小时工〔パートタイマー〕の新しい形態で働く保姆が現れたと解説している。本論では以降、原文で示す。

2 奶奶とは日本語でおばあさん、父方の祖母、年取った婦人と訳すことが一般であるが、本章では以降、原文で示す。

3 周縁とは、中国語で辺縁であるが、本章では日本語訳の周縁と表記する。前田愛 1992 年では、周縁とは都市論において、都市の中心と相対して、そこから隔てられた地域を周縁とするという二つの空間の差異を表すコードとして用いられている。そして、前田は、アンリ・ルフェーヴルが説いた、都市空間から発信されるおびただしいメッセージを解説するコードとして、シンボルの次元、パラディグムの次元、サンタグムの次元によって構成される三次元図式の提案を引用している。具体的に示すと、シンボルの次元は一般に記念物にあり、その結果、その次元は過去と現在の諸イデオロギー・諸制度にかかわり、パラディグムの次元は対立の総体あるいは体系であり、サンタグムの次元は、連鎖（行程）であると解説している。『富萍』における「市中心—周縁」は、パラディグムの次元の具体的な指標としてアンリ・ルフェーヴルが挙げている「都会—田舎」「内—外」「中心街—周辺部」「周囲—門口」といった対立項の一つとすることができないのではないかと筆者は考察する。先行研究として、田広文 2005 年では、『長恨歌』は上海の中心を、『富萍』は上海の周縁を小説の背景とし、それぞれの主人公の人生を、その都市の市中心と周縁の両面の象徴としてとらえ、上海という都市を描いたと述べている。

4 王安憶「感受土地的神力——關於文壇和王安憶近期創作的對話」『王安憶說』p. 119。

5 王曉明 2003 年 pp.36-79。

6 劉小俊 2004 年 pp.251-273。

7『長恨歌』との比較から論じられる、いずれの論文も『長恨歌』が上海市中心、『富萍』は上海周縁部が作品の背景であることが前提である。陳思和 2003 年は、『富萍』が書かれた 2000 年前後は、都市の懷古ブームが全盛期であり、王安憶は旧き上海への幻想を抱くこともなく、上海の文化に対しての深刻な危機感と痛烈な風刺から、弄堂に暮らす主人公・王琦瑤が殺害されてしまった惨状に託して『長恨歌』を描いたと解説する。一方、『富萍』では都市文化の流行のあらゆる要素をすべて拒絶して、最も下層の社会にある上海周縁地帯、蘇州河上に漂う船上生活者や、棚戸地区で暮らす人びとに目を向け、主人公・富萍が閘北区の棚戸地区でもさらに貧しい梅家橋で、自分の幸せな家庭を築くことが暗示される作品であり、『長恨歌』とは結末が相反すると述べている。他には田広文 2005 年などがある。

8 先行研究の多くは、富萍が移り住んだ蘇北から淮海路、淮海路から閘北区、閘北区から梅家橋と三段階に分けて分析しており、筆者も本論において、これを継承する。吉素芬 2004 年でも、この点をまず指摘し、富萍は故郷からは離れ都市へと近づくにつれて、自己の実現に近づいたと解説している。『富萍』に登場する上海に移り住んできた人びとに関しては、奶奶を代表とする保姆と、舅舅を代表とする棚戸地域で生活する船上労働者に分類される。陳思和 2003 年では、この二つのグループに、上海の新しい「主人」として、奶奶の雇い主の解放軍出身の幹部夫婦も挙げているが、いずれも、老上海人にとって彼らは外地人でしかないと述べている。しかし、富萍の移り住んだ各場所について考察された先行研究はない。

9 李洪華 2008 年 p.337。

10 高橋孝助他 1995 年 p.36 に、清朝の地方官であり、上海の行政を司るとある。

11 大阪市立大学経済研究所編 1986 年 p.211。

12 前掲 注 10 p.37。

13 和田博文他 1999 年 p.185 によると、県城とは、日本の城郭のイメージとは異なり、城壁とそれにより囲われた内部を指す。周囲約 6 キロメートルの上海県城は、1553 年の明の時代に度重なる倭寇に備えるために建築された。その後、300 年間は防備という城本来の役割を果たしてきたが、1840 年勃発のアヘン戦争後、小刀会の乱や太平天国の乱でその無力ぶりを露呈し、むしろ城内の発展を妨げる障害物視されるようになる。そこで 1912 年の中華民国成立と前後して

撤去された。丸山昇 1987 年 p.67 によると、1912 年 1 月から城壁のとり壊し作業が開始され、1914 年までに完成、城壁の跡は北半周が民国路、今の人民路、南半周が中華路の環状道路となったとある。

14 前掲 注 13 p.187。

15 前掲 注 10 p.39。

16 前掲 注 11 pp.24-25。

17 前掲 注 13 p.187。

18 前掲 注 11 p.56。

19 前掲 注 10 p.38

20 前掲 注 13 p.187。前掲 注 10 p.38 には、第二次土地章程には、三国領事のもとに三租界における道路、埠頭、建物等の建設、衛生、燈火、下水等の設備費、租界警備費の徴収・支出、などを審議する外国人の借地人会議（のちに納税人会議とよばれる）を招集し、執行機関として参事会を設置することを定め、道路埠頭委員会は廃止されたとある。

21 太平天国軍の第一次上海攻撃は 1860 年の 8 月、第二次が 1862 年の 1 月から 6 月、第三次が 1862 年の 8 月から 11 月までであった。

22 前掲 注 10 p.43。

23 前掲 注 10 巻末の年表より。

24 前掲 注 10 p.38。

25 日本上海史研究会 1997 年 p.3。

26 1924 年 9 月江浙戦争が勃発している。前掲 注 13 p.211。

27 第一次上海事変は 1932 年 3 月 3 日まで続く。

28 前掲 注 10 p.202。

29 前掲 注 10 pp.130-131, pp.198-199。

30 前掲 注 10 p.204。

31 前掲 注 11 p.30。

32 前掲 注 10 p.255。

33 前掲 注 10 p.4。

34 長江下流の北岸の地、江蘇省・安徽省の北岸沿いを指す。江北には輕蔑の意味も含まれる。

35 江蘇省北部の略称、広義では、蘇北は長江の北側、狭義では徐州、連雲港、淮安、塩城、宿遷の 5 つの省轄市を指す。

<http://203.209.253.250/snap/wikicache.php?title=%E8%8B%8F%E5%8C%97&sig=f0a3f65332393232b76b9e7f23af280b>

36 前掲 注 10 p.76。

37 母の兄弟、母方のおじを意味する。『富萍』では舅舅は母の弟を指す。以降、本論では原文で示す。舅媽はその妻。

38 前掲 注 10 p.76。

39 前掲 注 10 p.4。

40 前掲 注 10 p.7。

41 應雋 2009 年 p. 125。

42 前掲 注 41 p. 128。

43 叔叔とは父の兄弟、父方のおじを意味する。本論では原文で示す。王安憶『富萍』 p.102。

44 華霄穎 2009 年 p. 33。他にも、沈瓊 2009 年 p. 69 は、創作において王安憶は比較的早い時期から移民を題材にし、80 年代の『鳩雀一戦』、『好婆和李同志』、『民工劉建華』から始まり 21 世紀初めの『富萍』まで、徐々に淮海路の日常生活から離れ、別の側面の移民の生活に注目しはじめたと述べている。

45 前掲 注 44 p.23。

46 前掲 注 44 p.23。

47 <http://www.tianya.cn/publicforum/content/no05/1/150069.shtml>

48 王安憶『紀述与虚構』 p.1。

49 沈瓊 2009 年 p.71。

50 前掲 注 49 p.71。

51 前掲 注 49 p.71。

52 菊池敏夫・日本上海史研究会編 2002 年 p.157。都市雑業とは、「三百六十行」といわれ、大都市上海の生活を裏で支える、ありとあらゆる職業を総称したい方で、この中でも中心となるのが、非熟練・単純肉体労働に従事する人びとである。

53 根橋正一 1999 年 pp.139-142 に、棚屋には上海の下層民である埠頭苦力、各種の車夫、女工、幼年工等の多くが住んでいたとある。

54 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%98%E5%8C%97%E5%8C%BA>

上海市中心部を形成する上海市九中心区の北部で蘇州河に隣接し、南東に黄浦区、南に静安区、河を挟んで隣接して北に宝山区、東に虹口区、並びに西には

普陀区が隣接している。面積は 29.2 キロ平方メートルで人口は 810, 211 人（2003 年）である。

木之内誠 1996 年 p.123 によると、名前の由来は蘇州河の水門の北側を意味する。

55 張笑川 2009 年 p.276。

56 前掲 注 55 p.277。

57 舅媽とは舅舅の妻。ここでは、富萍の母の弟の妻である。以降、本論では原文で示す。

58 徐華龍 2009 年 p.174。

59 前掲 注 10 p.78。

60 前掲 注 55 p.278 から、この火事は 1913 年 10 月 16 日、閘北華界の市場付近一帯で藁葺き小屋から発生した大火事であると推測できる。張笑川 2009 年によると、1918 年 2 月、1921 年 11 月、1922 年 3 月、1925 年 4 月、1926 年 3 月、1926 年 8 月、1926 年 12 月と火事は何度となく発生した。

61 前掲 注 10 p.78。

62 前掲 注 55 p.279。

63 前掲 注 10 p.255。

64 前掲 注 10 p.258。

65 前掲 注 55 p.284。

66 前掲 注 4「從現實人生的體驗到敘述策略的轉型——關於王安憶十年小說創作的訪談錄」 p.33。

67 前掲 注 49 p.69。

68 前掲 注 44 p.119。

69 前掲 注 44 p.116。

70 前掲 注 44 p.122。

71 好婆は今では隠居生活をしている夫と一緒に暮らしているお節介な上海人。かつて、夫は曾家花園で職務に忠実な門番をしていた。買弁をしていた曾家は上海灘では有名で、フランス式の庭付きの西洋住宅に暮らしていた。そこは数百人の収容可能なパーティーができるような大邸宅であった。好婆は曾家で暮らした誇りから、上海人としての素養を身につけたと自負している。1949 年、曾家は香港へ行ったが、好婆たちは上海に残って今の弄堂に引っ越してきた。

72 李同志は本名を李明華という。顔立ちが美しい若い女性で、田舎は山東省の胶東、父について新四軍の第三野戦軍に参加し文工団にいた。彼女は澄んだ心

地よい特別な美声の持ち主であった。その後、上海にやってきて昼間は被服工場で女工たちと一緒にミシンを踏み、綿を打ち、夜は会議や家を訪問し群衆の前で歌った。一年が過ぎて、部隊に伴って南京に行き結婚して子供を産んだ。間もなく上海に戻ると歌劇場で人気のある歌手となり、時にはソ連に遠征に出かけるほどの活躍をするようになった。李同志には袁という夫がいて、一緒に上海にやってきて、夫は政府の文化機関で働いていた。上海の生活が 2 年を過ぎた時、二人は右派分子の汚名を着せられ田舎に帰ることになった。

73 前掲 注 44 p.69。

74 王安憶『好婆和李同志』 p.212。

75 前掲 注 74 p.212。

76 前掲 注 74 p.218。

77 前掲 注 74 p.228。

78 前掲 注 74 p.229。

79 前掲 注 74 p.213。

80 前掲 注 74 p.219。

81 前掲 注 74 p.214。

82 前掲 注 74 p.212。

83 前掲 注 44 p.69。

84 前掲 注 74 p. 222。

85 前掲 注 74 p. 215。

86 前掲 注 6 p.256。

87 保姆になる人は、若い時に夫と死別して、その後、再婚しなかった者や、夫に収入がなかったり、夫がふしだらであったり、息子がいない人が多かった（王安憶『富萍』 p.5。）

88 前田比呂子 1996 年 p.67 に、「中国語の「戸口」は「戸籍」という日本語に訳されることが多いが、中国語の「戸口」と日本語の「戸籍」の概念とは大いに異なる。日本では戸籍は夫婦と氏を同じくする子を単位として編成されるが、中国では個人単位で登記表が作成される。これを「戸」ずつに集めたものが「戸口簿」である。また、日本のように結婚と分籍が連動しておらず、夫婦であっても「戸口」が別々の場合もある。中国の「戸口」は地理的・社会的な移動は行政的制約を受ける。」と「戸口」をめぐる日本語と中国語の差異について述べている。

89 一人娘が嫁いだ後、本来跡継ぎのない奶奶は家を父の兄弟に返さなければいけなかったが、李天華を養子としたことで、家は相変わらず父の兄弟の名義ではあったが、奶奶が暮らす権利は残されたとある。(王安憶『富萍』 p. 11)

90 前掲 注 6 p.261。「孫」と養子縁組をしたのは、家が欲しいという切実な思いから生み出された奶奶の知恵なのである、そして、この養子縁組によって、彼女は老後「名義上正しく」住む家を確保することができたのであると分析している。

91 前掲 注 4「探視城市変動的潜流——王安憶談長篇新作『富萍』及其他」p.111。

92 木之内誠 1996 年 p.125 に、当時の上海東駅の場所は現在の上海駅となっている。

93 王安憶『富萍』 p.223。前掲 注 88 p.77 にも、棚戸区が出現した地域は、租界に近接した周囲で、埠頭や工場が多い場所や貨物駅があるので、舅舅の住んでいた棚戸区の近くに、貨物列車が通る線路があった可能性はある。

94 前掲 注 93 p.163。

95 渡辺浩平 1997 年 p.154。

96 上海市の市域は、中心部の市街地とその周辺の市区と郊県からなる。前掲 注 11 p. 3 に、『富萍』の舞台である 1964 年当時、上海は工業体系の変更のため、呉淞、閔行両区が廃止され、それぞれ楊浦、徐匯区に編入されていた。これにより、上海市は黄浦、静安、盧湾、徐匯、南市、虹口、閘北、楊浦、長寧、普陀の 10 市区と上海、嘉定、宝山、川沙、奉賢、南匯、松江、金山、青浦、崇明の 10 郊県であった。2007 年 9 月現在は 18 市区と 1 郊県。

97 前掲 注 55 p.207。

98 前掲 注 55 p.208。

99 前掲 注 93 p.6。

100 前掲 注 52 p. 157, p. 160。後述するが、蘇北出身の人びとは、非熟練・単純肉体労働に従事することが多く、閘北区の棚戸、バラックに住み、上海では粗野、無教養などのイメージで語られ、下層民の代名詞とされ犯罪者扱いされることもしばしばあり、蔑視される対象であった。

101 前掲 注 93 p.6。

102 小君とは、舅舅の家の隣に住む小学校を卒業したばかりの活発な性格の女の子で、よく舅舅の家に遊びに来て舅媽の手伝いをし、富萍とも親しかった。

103 光明は舅媽の甥である。今年 23 歳になるのに結婚相手がいない光明を心配

した舅媽は、舅舅の元に突然現れた姪の富萍がその相手としてふさわしいと考え、奶奶の許可をもらって話を進めようとした。光明は革靴を履き、腕には時計をし、西洋風のズボンを履き、綿入れの上着をはおることはなく、毛糸の服の上に赤みがかったオレンジ色のゴム製の船乗りが着るチョッキを着ている非常にモダンな青年であった。蘇北の方言は話さず上海語を話していたが、その上海語も蘇北のなまりがあった。富萍は彼に好意を持ったが、彼は後に小君と結婚する。

104 エドワード・レルフ『場所の現象学』pp.128-130 では、場所の本質とは、「外側」とは異なる「内側」の経験にあるという。仮に興味の焦点が自分の家ならば、家の外にあるものはすべてが「外側」になり、もし、自分の関心が自分の所属する地域にあるなら、その地域の外にあるものはすべてが「外側」になるというように、「内側」と「外側」の境界は、自分の意図によって変化する。そして、場所に対して「内側」になることはそれに属することであり、深く「内側」になればなるほど場所に対するアイデンティティは強まると論じている。つまり、奶奶にとっての上海は淮海路付近であり、それ以外の上海は上海にあつて上海でない場所なのである。奶奶は上海にこだわり保姆として働き続け、上海に対する愛着は非常に強かったが、保姆ができなくなったら上海に住み続けることが難しいことは、その長年の経験からも理解していたと考察する。

105 陳思和 2003 年 p.403。

106 海寧路は閘北区と虹口区を東西に横断しており、四川北路は閘北区に近い虹口路を南北に横断し、海寧路に交差する。

107 前掲 注 52 p.157, p.160。

108 滕朝軍 2004 年。前掲 注 49 p.68 にも同じことが述べられている。

109 前掲 注 93 p.115。

110 前掲 注 6 p.262。

111 前掲 注 105 p.401。

112 前掲 注 104 pp.101-103。

113 青年と母の本籍は安徽省であるが、故郷は江蘇省六合である。父は中国銀行の平社員で、一家三人は万航渡路にある貧しい社宅に住んでいたが、青年が幼い頃に父は腸チフスを患い亡くなり、一夜にして息子と母の運命は一転する。二人は六合に戻ったが、息子は小児麻痺を患い、それが原因で足が不自由になってしまう。息子が学校に通う年齢に達した時に、母は周囲から足の不自由な

息子が進学することを反対されたので六合を出ることを決意する。二人は上海に戻り、上海の戸籍を得た。息子は成績も良かったが、身体的な理由で高中〔高等学校、中学校は6年生であり、前3年を初中、後3年を高中という〕への進学は不可能で、職場も見つからず家で過ごしていた。

第4章 『我愛比爾』

1. はじめに

本章で扱う『我愛比爾』（初出『収獲』1996年第1期）は文革が終わりを告げた1977年あるいは1978年に、師範大学に入学した美術を専攻する大学生の阿三が主人公である。阿三は、中国に駐在しているアメリカ人外交官のビル¹と出会い恋人同士になったが、ビルの休暇を期に連絡が途絶える。その約7年後、フランスの田舎町の画廊の跡継ぎであるマルタンと知り合い、阿三はマルタンと共にフランスに一緒に行くことを望んだが拒否される。マルタンが去った後、阿三は、外国人の出入りが多いホテルに入りびたり、多くの外国人男性と肉体関係をもった。そして、売春容疑で拘束され、労改農場²〔以下略称の労改と称す。〕に送られる。そして、阿三は労改での刑期を全うせず脱獄し、その脱獄が成功したのか否かは描かれることなく、この物語は終わる。

『我愛比爾』に関する日本の先行研究は、劉小俊、松村志乃のものがあるが、非常に少ない。劉小俊³は、この作品は1990年代の中国社会を大きく変えたグローバル化を背景として描かれており、阿三の悲劇の真の原因は、二人の西洋人男性に見捨てられたことではなく、彼らの愛を得るため、更にいえば、彼らのバックグラウンドになる文化や、彼らがもつ価値観に認めてもらうため、自分の中国人アイデンティティを否定したことにあると論じている。また、松村志乃⁴は、この作品には、西洋人男性に執着する阿三を通して、西洋をイメージ化・理想化し追究することの歪みと破綻が表現されており、西洋と西洋人主導の世界に対するコンプレックスが、第三世界たる当時の中国の問題として描かれているのだと高く評価している。一方、中国での『我愛比爾』に関する先行研究も、その前年に書かれた『長恨歌』研究とは全く対照的に、非常に少ない。この理由は、王安憶自身が『我愛比爾』の主題を、愛情や性ではなく、ジェンダーの立場から描いたわけでもなく、自分の小説の中でも特別な例外の一つと位置づけたからではないかと筆者は考える。つまり『我愛比爾』は、中国が発展途上の第三世界の立場にあることに問題を提起した作品であり⁵、阿三にとってビルは、一つの現代化、強国の象徴なのである⁶と作者自身が明確に述べていることが原因であると考えられる。このため、従来の『我愛比爾』研究は、王安憶が近代化に向かう中国に阿三を喩え、阿三が「政治上の西洋」の象徴であるビルと、「文化意義上の西洋」の象徴であるマルタン⁷に認められなかった悲

劇を描いたという見解⁸で統一されてしまい、この域を出る解釈は現われなかった。

本章では、このような従来の解釈をふまえた上で、改めて阿三とビルとマルタンとの関係を再解釈し、阿三の上海での生活の拠点をたどり、阿三がビルと連絡が途絶えた後も、絵を描き続けた場所が黄浦江を渡った浦東地区であったことの意味を検討する。そして、白茅嶺労改について説明し、阿三が労改で刑期を全うせずに脱獄した理由を述べたい。加えて、これまで論じられることがなかった作品中に合計 10 回登場する「柏樹」⁹の果たす役割について、「上海——安徽省の白茅嶺労改」をキーワードとして阿三のノスタルジアについて考察する。最後に、『長恨歌』の王琦瑶の記憶錯誤について言及し、『我愛比爾』と『長恨歌』の両者の結末をノスタルジアと記憶をキーワードとして論じる。なお、本章で引用する『我愛比爾』の邦訳は筆者による。原文は、南海出版公司『我愛比爾』2000 年 1 月第 1 版を使用する。

2. 阿三と二つの西洋

ここでは、阿三をめぐる二人の西洋人、ビルとマルタンについて考察し、ビルと別れた後も阿三が浦東新区で絵を描き続けた意味を論じる。

2.1 ビル

主人公・阿三は、美術専攻の大学二年生の時、アメリカ人の外交官・ビルと恋人同士になった。二人の交際が始まると、ビルは阿三によって、これまで中国女性の性に対して抱いていたイメージを全く覆される。阿三の外見は完全な中国人の女の子であるのに、その開放的な性が、自分たち西洋人にかなり近いことにビルは戸惑った。しかし、それは、ビルの表面的な解釈であった。ビルが、そう感じたのは、阿三がビルに気に入られるために、自分の貞操を捨ててまで、性を楽しむことができる女性として見られるように、演出しているからであった。

彼女はビルに自分を中国人の女の子として見られたいなかったが、ビルが彼女に惹かれるのは、彼女が中国人の女の子であるからなのだ。この矛盾が、彼女の行動を不安定な状態に揺り動かすのだ。そして、彼女は必死になって

中国と西洋の合流する一点を探し出そうすることで、矛盾した境遇を調和させるのだった。(『我愛比爾』 pp.17-18)

二人は週末、阿三の宿舎で関係が続けていたが、外国人のビルが宿舎に出入りすることを学校側に注意され、阿三は華涇村¹⁰に部屋を借りた。菊の花を栽培する農家が多い華涇村の各家庭の入り口には、乾燥させるための白菊が花棚に広げられている。阿三の部屋も太陽の光がさしこみ、苦くて渋い花の香りが空中に充満し、ビルはこの感覚に酔いしれた。自分の未発達な身体に自信がなかった阿三は、その場の雰囲気づくりに注意をはらった。華涇村のアパートは自分の望み通りの演出ができる、ビルと気軽に会うために借りた場所であった。しかし、次第に二人が会う回数は減った。それは、道のりの遠さと、辺鄙な場所に外国人が来ると目立つことが原因であった。そして、ビルに自分の魅力を謙虚さであると言われた阿三は衝撃を受ける。中国人の「謙虚さは高尚な美德である」と考えるビルの発言に、中国人でない自分を演じている阿三だからこそ、無意識に涙を流したのであろう。ビルにとって、阿三は中国人であるから魅力があるのだ。「ビルのことを愛しているの。」と話す阿三に、ビルは続けて言った。

「我が国の外交官として、共産主義国家の女の子との恋愛は許されないのだ。」(『我愛比爾』 p.26)

ビルが全てであった阿三は、やがて学校も中退し、その後、ビルから紹介されたアメリカ人の子供の家庭教師をしながら収入を得ていたが、阿三は華涇村を出て、市街区にある古いマンションの一ユニットの一室を借りた。この引っ越し先は、非常に便利な場所にあり、以前より阿三がビルに会う回数は増えた。しかし、ビルは外交官であり、阿三との将来についての考えはなく、阿三とは今だけを楽しむ関係だと割り切って付き合っていた。阿三はただ、性においてはアメリカ人の平等観念に添い、「私はビルを愛している、これだけで充分だ。」と自分自身に言い聞かせた。ビルは阿三に強国の立場と姿勢を押し付けたのである。

阿三の過ごしている時代を特定できる記述は少ない。美術を専攻する阿三は、授業以外の時間にも絵の練習をすることがあり、自分の年齢より約10歳年上の「お兄さんたち」と一緒に学ぶ場面がある。彼らの絵画は「文革時代に青春時

代を過ごしてきたため、憤懣の気持ちがぶちまけられており、批判の精神も存在している」。文革のために中断されていた大学入試が再開されたのは、1977 年になってからのことである。阿三が「お兄さんたち」と呼ぶ人びとは、おそらく労農兵学生¹¹であり、彼らが推薦で大学に入学したと仮定すると、阿三が大学に入学したのは 1977 年か 78 年である。従って、阿三が生まれたのは、大体 1960 年から 62 年と判断できる。更に、大学二年生の阿三がビルと出会って間もない頃、兌換券¹²しか使えないホテルのカフェに二人が一緒に入る場面がある。兌換券は 1979 年に導入され、1995 年 1 月 1 日に正式に廃止されているから、大学二年生の阿三が 1979 年頃に、ビルと知り合っていれば時代背景が一致する。1978 年末、中国では改革開放政策への転換をとげて再び咲いた鄧小平体制がスタートした。文革が終結し、人びとが自由と希望に向かって歩みだした時を同じくして、阿三は文革後の難関入試を突破して大学へ進学したのである。

大学を中退した後の阿三にとって、ビルが全てであったのに、ビルは休暇で中国を離れることを期に連絡を絶ち、阿三の前から去った。それから 2 年後、阿三は知り合いの女性作家から、ビルが韓国に赴任したことを聞くのである。

阿三は、二人の関係が終わったのだと自覚し、一人の外交官としてのビルの前途に彼女が影響することはなかったのだと思った。そして、多少の犠牲になった快感もあったが、すぐに、私とビルの間に何があったというの？何もなかったじゃない。だから、犠牲も何もなかったと思うのであった。(『我愛比爾』p.38)

ビルと別れた後、阿三は絵を描くことに専念した。阿三が少し有名になると、アメリカ領事館が開催するイベントの招待状が何度か届いた。しかし、阿三はこうしたイベントに参加することはなく、時には招待状を燃やしてしまうこともあった。

2.2 浦東新区

「ビルが去って間もなく」という以外の記述は作品には表れていないが、おそらく 1980 年代の初めに、ビルと別れた阿三は、市街区の古いマンションから、今の浦東新区の新規格区域で最も早くできたアパート群の一棟に部屋を借りて移った。阿三はこの新しい部屋で絵を描き、作品が一枚、一枚と積み重ねられ

ていった。この一棟は、阿三が引っ越してきた時分、まだ4、5世帯しか居住しておらず、アパートの廊下は更に静まりかえっていた。

当時の浦東は、上海の市街区に住む人の言葉を借りれば下只角¹³にもなり得ない郷下〔田舎〕¹⁴であり、今や浦東新区の中心にある陸家嘴金融貿易中心区も、旧国営工場が建ち並ぶ荒地であったといわれている。浦東新区は今でこそ、21世紀の中国の発展を担う一大開発地区であり、中国最先端の開発センターがあり、ハイテク産業の誘致、育成が行われている。しかし、浦東地域開発計画¹⁵が上海市によって策定され、国務院によって承認されるのは1990年4月18日である。2009年4月24日、浦東新区と上海市南匯区の合併により、面積も人口も約2倍に拡大し、2010年現在、面積1210平方メートル、人口約268.6万人を要する新浦東新区¹⁶が誕生した。この20年間で、経済、社会環境は一新され、日本を含む全世界の注目を集め、世界各国地域から多くの多国籍企業、中小企業が相次いで浦東新区に進出した。

今から約30年前の1980年代初め、まだ開発も始まっていない浦東で、大学を中退しビルと別れても阿三は絵を描き続けた。中国人の若手画家が海外で注目され始めたこの時代、阿三の絵も香港画商によって購入された。時には、阿三の絵が中国で中国人によって描かれているのに、西洋絵画との違いがないとアメリカ人画商に指摘され、購入してもらえないこともあった。が、「両極端〔中国と西洋〕の間には、必ず、通じあう箇所があるにちがいない。」と、自分の作品が、多様な価値観の存在する世界で、必ず認められる日が来ることを阿三は信じていた。世界の絵画市場に若い中国人画家が注目されているという『我愛比爾』の時代背景は、中国政府が開発に力を注いだ結果、全世界の注目を集め、経済的に発展し、揺るぎない自信を勝ち得た浦東新区の今日の姿そのものである。王安憶は浦東の未来に、阿三が新進画家として将来必ず成功して欲しいという希望を託したのである。

1980年代半ばに延安路のトンネルが開通するまでは、浦西と浦東を繋ぐ交通は黄浦江¹⁷を渡る舟だけだった¹⁸。阿三は仕事の打ち合わせで和平飯店を訪れる際も浦東から黄浦江を渡り、浦西に住んでいる友人の女性作家の自宅で行われたパーティで夜を明かした朝も、渡し場から、黄浦江を渡って浦東の自宅へ帰っていくのであった。黄浦江の往来は、浦東で描いた阿三の作品が、世に紹介され認められる基盤をつくるルートであり、阿三は画家としての将来の活躍を信じて、黄浦江を往来していたであろう。

2.3 マルタン

1980 年代初め、阿三が浦東で絵を描いていた頃、香港の画商は近い将来、中国の若い世代の画家の作品が非常に大きな世界市場に進出すると予測し、まだ有名にならない画家の作品を専門に先行投資として購入することを計画していた。しかし、実際は次の引用の通り、中国人画家の実力が評価されているというわけではなかった。

画商たちが必要なのはすべて西洋画であり、中国の伝統画というわけではなかった。これは推測するに、中国画や中国民間技法の作品の今のブームはただ一時的なもので、これは中国人画家が世界の大市場にまさにつき進んでいくことを示しているわけではなかった。（『我愛比爾』 p.44）

若手の中国人画家が世界で認められる地盤はまだ確立されていなくとも、ビルと別れた阿三は、絵を描き、絵を鑑賞することに打ち込んだ。阿三は絵画展や友人の画室を忙しく走り回り、彼らの新しい作品を見て、彼らの新しい考え方を聞いた。学生時代の阿三はクラスで平凡な生徒であったが、美術評論家との付き合いや自分の絵が売れたことによって、彼女自身が自分の才能を見出したのである。当時、阿三は美術評論家に絵を描く理由を尋ねられた。阿三は絵を描くことは快樂なのだと答えると、彼はすぐに阿三の絵には苦痛があふれ出ていると指摘した。しかし、阿三は快樂と苦痛は本質上同じものであり、すべての境地に瀕した感情であるといった。つまり、絵を描くことは、阿三にとって自己の存在を表現することであり、阿三が生きていることの証であったといえよう。

1980 年代の後半、27 歳になった阿三は、23 歳のフランス人のマルタンと知り合った。マルタンの故郷はフランスの東部の小さな寂れた町であり、祖父の代から画廊をしていた。マルタンはアメリカの大学で広告を学んだ後に、将来は故郷の画廊を継ぐことを決めた。阿三がマルタンを紹介され、彼のアテンドをして 3 日目、マルタンなら自分の絵に共感するに違いないと、自信を持って自分の作品を見せたが、マルタンは「絵とはこういうものではない。」と阿三の作品を否定し、次のようにいった。

「フランスは中国と同じ古い国家で、ずっと、故郷を離れない人びとがいる

から、我々は故郷の意識を持ち続けてきたのだ。〔中略〕我々は皆、田舎ものだから、元々存在するものが好きなのだ。」(『我愛比爾』 p.66)

マルタンがフランスへと帰国する最後の 3 日間で二人は恋人同士になった。阿三は、マルタンと一緒に中国を出てフランスへ行くことができるのなら、自分の絵画に対する考え方がマルタンによって打ち砕かれ、二度と絵を描くことができなくなっても良いとさえ思ったが、阿三の願いはかなわなかった。マルタンは自国の文化に自信と誇り、故郷に根付こうという意志を持っていた。故郷に芸術を広めるために、自分の先祖に敬意を払い画廊を継ぐことを決意したマルタンは、フランスと同じ古い国家に生まれながら自国の文化を簡単に捨てる阿三を、決して受け入れることができなかったのである。

2.4 阿三と二つの西洋の邂逅

ビルと一緒にいる時の阿三は、演じることによって、本来真実ではない行いをすべて真実に変えたのである。阿三があらゆる手立てを使っても、ビルを引きとめなければならなかったのは、ビルを落胆させることなく、自分から離れさせないためであった。この行為にビルは、東洋人の性を感じ受ける能力が、西洋人よりも更に敏感で緻密であると理解した。しかし、その原因は、阿三が限りなく自己を、阿三にとって鏡である他者としての西洋人に近づけ、ビルの基準で自己を測定するという立場を選択したからである。阿三はビルが自分に興味をもつのは、自分が中国人であるからだということも理解しており、阿三のビルに対する振る舞いに矛盾が生じたのである。

ビルと別れた後も阿三は絵を描き続け、中国と西洋の間には、中国や西洋の域を超えた世界、つまり多様な価値観が存在する場において、必ず通じあう接点があること、そして、自分の作品がその場で認められることを信じていた。しかし、マルタンは阿三の作品を一瞬見ただけで、自己の解釈において否定した。絵画作品を通して、作者の人となりまで、解釈することは難しい。たとえ、作者の背景を知る人であったとしても、作者の思惑が作品にどのような影響を及ぼしているか、また、作品を世に送り出す作者の奮闘を、第三者が理解することはできないだろう。マルタンの中に阿三の全てを否定したつもりはなくても、阿三にとって自分の作品を否定されることは、自己を全否定されることに変わりはなかったのではなかろうか。マルタンの一言によって、その後、絵を

描くことが出来なくなってしまった阿三は、中国を捨てマルタンについてフランスへ一緒に行くことを懇願する。が、その瞬間、マルタンは冷静になり、それでも阿三に対して非常に誠実に、「中国人の女性と一緒に暮らしていくことを、考えたことはないし、自分には不可能なのだ」と即答した。自分と同じ古い国家に生まれながら、自国を簡単に捨てる阿三を決して受け入れることはできなかった。この点に関して、王安憶は「私がいいたかったことは、一人の女性の身体と精神が、西洋に依存する過程で破滅し自滅したことだ」¹⁹と論じている。

一方、阿三と二つの西洋の邂逅は、上海にかつて存在した租界の構図に似ている。1842年8月29日南京条約の締結にはじまり、1845年のイギリス租界、次いで、1848年にアメリカ租界、1849年にフランス租界が設置され、1863年、アメリカ租界はイギリス租界と合併し共同租界が誕生する。こうして上海という都市が、共同租界、フランス租界、華界という三つの管轄に分かれた。華界以外の土地は、「永租」〔永久租借〕と「華洋分居」〔中国人の居住の禁止〕が敷かれ、上海であるのに、全ての権力は外国人によって行使されるという独特な租界のシステムがうまれた。『我愛比爾』における阿三をめぐるビルとマルタンの関係は、こうした租界の、自国のシステムを都合よく被支配国に強要する支配国の構図を踏襲している。

サイードが「オリエンタリズムとは、オリエントを支配し、再構成し威圧するための西洋の様式なのである」²⁰と述べるとおり、ビルもマルタンも自分たちの頭の中だけのイメージを固定したまま、他者の住む異空間に、自分の主張を押し通した。ビルの「政治上の西洋」も「文化意義上の西洋」も、オリエンタリズムの独りよがりの解釈であり、阿三は二人の西洋人に受け入れられることなく、破滅させられたのである。

3. 阿三の脱獄

マルタンと別れた阿三は日ごと、ホテルで外国人とその場限りの出会いを楽しんでいたが、売春容疑で労改に送られる。ここでは、阿三が収容された白茅嶺労改農場〔以下略称の白茅嶺労改と称す。〕について最初に説明し、阿三がなぜ労改に収容された後に脱獄するに至ったのか論じる。

3.1 白茅嶺労改

南海出版公司版『我愛比爾』の本編の後には、王安憶が実際に白茅嶺労改を取材した『白茅嶺紀事』が掲載されており、阿三が収容された労改は白茅嶺がモデルになっていると考えられる。

白茅嶺労改²¹は旧第8労改隊であり、安徽省にある。王安憶は取材の際²²、昼頃に上海から車に乗って出発し、15時近くに到着していることから、上海から車で約3時間の比較的近い距離にあることがわかる。白茅嶺労改は、メディアの取材に応じる公開された労改であるから、他の労改よりも恵まれた環境にある可能性もある。王安憶が取材した白茅嶺労改は、1958年にスタートした女性労改大隊〔女性労改農場大部隊〕で、文革の間は閉鎖されていた。再開された1972年、その規模は中隊〔中部隊〕であったが、1984年に大隊〔大部隊〕になると、受刑者は多い時で最多700名、王安憶の取材時は334人が収容されていた。収容受刑者の内訳は売春が87.6%、窃盗が9.7%、詐欺が1%、その他が1.4%を占める。この労改には、上海婦女教養所に最初に送られ出所し、再犯で白茅嶺労改に収容されている受刑者や、夫以外の男性との交際を摘発され、子供の処遇をめぐって離婚に応じず収容されている受刑者もいた。王安憶が白茅嶺労改を取材した理由は、こうした物語性のある人生を歩んでいる女性が、ここに集まっている²³と考えたからであった。実際の労改は、厳しい生活環境であり、管理体制が敷かれていると予測することができる。が、王安憶が白茅嶺労改で取材していた際、ちょうど、受刑者が脱獄する事件も発生²⁴していた。この点と受刑者の収容内訳から考察すると、比較的罪の軽い女性が収容される労改であると考えられる。王安憶は、この白茅嶺労改を「ここには別の世界の出来事と法則があり、この世界を我々が理解することは永遠に難しい」²⁵と述べている。ならば、阿三はなぜ、これまで生きてきた世界とは別世界の、一生抜け出すことできない可能性すらある白茅嶺労改に売春容疑で収容されなければならなかったのか。

3.2 阿三の脱獄——阿三が脱獄に携えた500元——

阿三とマルタンの出会いから別れまでは、20日間の非常に短い期間であったのに、阿三はマルタンの一言で、上述の通り絵を描くことが出来なくなっ

まった。

ビルが去っても阿三は絵を描くことが出来たが、マルタンが去った後、彼女は絵を描くことが出来なくなった。阿三はビルほどマルタンのことを愛していなかった、これは阿三が二人を比べて出した結論であるが、マルタンはビルよりも更に阿三の生活を破壊した。(『我愛比爾』 p.78)

絵が描けなくなった阿三は日ごと、外国人の出入りが多いホテルで、その場限りの出会いを楽しんでいた。時には相手からお金をもらうこともあったが、マルタンが去った後、阿三が外国人と関係をもつのは、売春が目的ではなかった。

阿三は寂しさを紛らわす目的のためだけに、帰宅せず外国人とホテルで自堕落な生活を送っていたのだろうか。外国人にとって阿三は、自国の女性と比べると正反対の魅力を兼ね備えており、阿三は外国人を夢中にさせた。彼らの阿三に対する賞賛と激情はビルと同じで、阿三は彼らと一緒に過ごす時間、ビルを思い起こすことができた。しかし、マルタンと別れた後に、ホテルのロビーで出会う外国人は互いに似ていて、阿三の心には何の印象も残らなかった。こうした外国人との付き合いにおいて、阿三は相手に愛されることがなくても、自分は相手をそれ以上に愛することはないという決意があった。そして、誰も愛することができなくなってもいい、マルタンに対しても同じであるが、自分はビルだけを愛しているのだと自答した。つまり、阿三がホテルのロビーを訪れ、外国人と逢瀬を重ねる目的は、ビルの幻をひたすら追いかけることであつたのではないか。しかし、運悪く彼女は売春容疑で捕まり労改に送られてしまうのであるが、王安憶は阿三に刑期を全うさせず、労改から脱獄させる。仮に脱獄が成功したとしても、途中で失敗し連れ戻される可能性も高く、脱獄が失敗すれば、更に長い刑期が科せられる。阿三はなぜ労改に収容され、失敗することを恐れず脱獄したのだろうか。

これまで自由奔放に生きてきた阿三にとって、労改の生活が耐え難かったという理由で、阿三は脱獄したのではなかろう。なぜなら、阿三は労改に送られて来て間もない頃、単調な機械労働と規則正しい生活を送るように管理され、何も考えずに暮らす生活に、時には快感さえ覚えることもあった。また、阿三は事件の担当者に売春はしていないとはっきり述べており、たとえ労改にいても、自分は罪を認める理由がないし、自分は他の受刑者とは違うのであるという確固たる自負があった。更に阿三は仕事の面でも機転がきくので、特別に刑

務官には気に入られていたし、他の受刑者との間に争いもなかった。だが、同じ受刑者である陽春面の「相手が中国人であろうと外国人であろうと、お金をもらう、もらわないに限らず、売春は売春なのだ。」という一言が、阿三のここに至るまでの人生を全て否定した。阿三は労改で外国人相手の娼婦を意味する「白倣」と呼ばれ、一方、陽春面〔陽春麵〕は、売春相手が蘇北出身の船工²⁶であり、その値段が陽春麵一杯分であることから、「陽春面」と呼ばれていた。労改でも問題児であった陽春面は、他の受刑者とは違う阿三に興味を持ち、阿三に近づいたが相手にされなかった腹いせと嫉妬から、こういい放ったのである。この瞬間、阿三は陽春面に殴りかかり、その場は何とか周りに収められても、その後、阿三は生きていくことの意味を見失い、断食し入院するのであるが、献身的な大隊長の看病に感謝して、断食は 6 日で止め退院した。しかし、労改の生活に戻った阿三は、どうしても、この生活に耐えられなくなった。そして、阿三の変化を素早く感じとった陽春面に、阿三は脱獄を勧められる。

阿三は労改に送られる前の収容所で、知り合いの女性作家²⁷に葉書を出し、日用品の調達や寝具の手配を頼んでいた。その後、女性作家は阿三の面会に訪れた際に、部屋に残されていた阿三の絵を売った 500 元を、こっそり阿三に渡した。阿三は当時、この 500 元を労改に報告せずに、自分の枕の芯に縫い付けて隠し、脱獄を決意した深夜、この 500 元を枕のカバーから取り出した。

彼女（杉江注：阿三）は、この（杉江注：500 元）使い道を思いつかなかったが、多くの考えがあって、大隊〔大部隊〕に報告しなかった。今、彼女はこの札束を手に握り、何に使わねばならないかを知った。彼女は気持ちを抑えることができず、暗闇の中で、くすりと笑った。（『我愛比爾』p.146）

作品の最後は、この脱獄が成功するのか否かは描かれていない。しかし、「阿三のような女の子は、どんな困難も克服することができるので、私は、ある日、ニューヨークの街角で、実際、偶然に再会できると思うのだ。」²⁸と王安憶は述べている。王安憶が物語の中で、阿三にこの 500 元を脱獄時に与えた²⁹ことは、何を意味するのか。阿三は二人の西洋人に否定され、売春容疑で労改に送られた後も、奈落の底に突き落とされる可能性すらあった労改から格闘しつつ、本来の自分を取り戻し、這い上がった。王安憶は、阿三が生きていくのに困らないように、この 500 元を与えたのである。そして 500 元には、阿三が脱獄した後、必ず再生して欲しいという王安憶の希望も託されている。阿三が将来、ど

この世界でも、再生していくことができる強さをもっていることは、我々も予測することができる。

4. 阿三のノスタルジア

ノスタルジアとは、過去の事物や時代に対する好意的で感傷的なまなざしや、空間的懐郷よりも時間的懐旧の念を意味する、懐かしさの感情一般を指す言葉として日常語の中に定着しつつある³⁰。一方、記憶とは、過去の経験を貯蔵あるいは保持して、なんらかの形でそれを再現して現在の経験や行動に影響を与える働き³¹をいう。ここでは、『我愛比爾』と『長恨歌』の結末をノスタルジアと記憶をキーワードとして論述する。

4.1 阿三のノスタルジア——柏樹の意味すること——

『我愛比爾』は、労改に送られた阿三が、窓の外に広がる柏樹を見て、「全てはビルを愛したことから始まったのだ。」と10年前を回想する場面から始まる。柏樹³²とは、一般に柏科の植物の通称をいう。葉は小さく、樹皮は鱗片状に剥離する、常緑針葉高木である。果実は卵状の球形、寒さには強く、建築や造船に用いられている。

緩やかな丘陵の前方に、一本の柏樹が出現した。視野に入る景色を長い時間、左を、そして右を見渡す。他には低い茶畑があるだけで、人影はない。
(『我愛比爾』p.1)

この冒頭に続き、阿三はビルとの思い出を回想し、阿三は丘陵に立つ孤独な柏樹を眺め、心の中で、「この出来事が今ストップしてくれたら、この先に進まなかったらよかったのに。」と労改にいる現実に戻る。この後、ビルの場合と同様、阿三のマルタンとの出会いから別れまでの回想が再び入り、労改に向かう車の中の現実の阿三に戻る。そして、阿三がホテルで売春容疑をかけられ、拘束された前半部分の最後の回想の後にも、「柏樹がついに視界に入ってくると、車が停まった。車のドアが開けられ、その若い女性警官が最初に降りた。」とあるように、王安憶は「阿三のビルやマルタンとの過去の回想」と「阿三の労改での現実」の時間差の橋渡しに、効果的に柏樹を登場させ、この物語が労改に収容された後の、阿三の回想で綴られていることを読者に認識させる。つまり、作

品の合計 10 箇所、柏樹の描写は、「上海」と「安徽省の白茅嶺労改」という場所と、「10 年前の過去」と「現在」という時間の双方の隔たり³³を埋めているのである。

阿三は頭をあげると、まつげから水滴がしたたり落ち、彼女の目に流れこんだ。ぼんやりと、果てしない丘陵地帯が目に入り、柏樹のかすかな影がそびえていた。その影が突然、人になった。ビルなの？それともマルタン？ビルね。ビルのことを思い出すと、阿三は心の中で、悲哀のような喜びが浮かんだ。ビル、私が今どこにいると思う？彼女はビルを思い出し、自分を信じるのだと奮いたたせ、これら全てが平凡でないのだから、決して、普通の結末にはならないのだと自分を信じた。（『我愛比爾』 p.148）

これは、阿三が労改から脱獄し山を下る場面であるが、柏樹が目に入るとビルを思い出し、今の自分を奮い立たせ、必ず脱獄が成功することを信じているのである。

社会学における初期のノスタルジア研究で知られる F・デーヴィスは、「ノスタルジアの題材となるものは、個人的に体験した過去に由来するのではなく、我々がノスタルジアを感じるきっかけとなる要因はやはり現在のなかに存在している。」³⁴と述べている。ならば、柏樹は唯一、苦しい現在の阿三に、過去を回想させるきっかけとして、現実存在する、ノスタルジアを引き出すキーワードであることは確かである。

阿三にとって、ビルとの出会いから、労改に送られるまでの過去は、「単なる過去」ではなかった。実際、労改に送られた後、阿三は一貫して売春容疑の罪を認めなかったのも、自分にとって「特別な性質がしみ込んだ過去」を肯定するためであった。それが、「現在の生活のある」労改で、阿三ができる唯一の手段であったからではないだろうか。しかし、阿三は陽春面の一言で、自分の意志を全否定される。阿三は自分の意志を貫くために、ひいては、「特別な性質がしみ込んだ過去」を肯定するために、労改から脱獄することを決意したのだ。

つまり、柏樹の描写は、「阿三のビルやマルタンとの過去」と「阿三の労改での現実」という、「上海」と「安徽省の白茅嶺労改」という場所の隔たり、「10 年前の過去」と「現在」という時間の隔たりを埋めているだけではない。柏樹は、「現在の過酷な生活」にある阿三に、「特別な性質がしみ込んだ過去」を思い出させ、ノスタルジアを抱かせるのである。

そして、労改から脱獄し、農家の軒下で雨宿りしている阿三は、産み落とされて間もない鮮血のついた鶏卵を見つける。それを、阿三が手にして涙するという、非常に象徴的な最後の場面で物語は終わる。

これは処女卵だと阿三は思った。突然、彼女は手に温もりを感じ、それは母鶏の柔らかい純潔な恭しい体温であった。神様、なぜ、母鶏はここに処女卵を隠したの。隠したのは誰に見せたくなかったの？阿三の心は刺すように痛み、少しの思いが心の中に浮かび上がった。彼女は卵を手で握って、ひたすら泣いた。（『我愛比爾』 p.151）

王安憶はこの場面に関して、「この鶏卵は『処女卵』であり、ビルと出会うまで男性経験がなかった阿三の初めてのビルとの関係、そして、卵の殻についていた鮮血は、阿三が初めての男性経験で流した鮮血である。大人になっても男性経験がなかったことを恥ずかしがった阿三は、その事実をビルに知られたくなかったために毛布で自分の鮮血を隠し、ビルを惹きつけるために自分の性を演じてみせたことを意味するのだ」³⁵と解説した。そのため、最後の阿三の涙は、背伸びをして、中国人の性を演じてみせた時の痛みの象徴であり、精神的に大切なものを失った悔恨と反省の涙であると指摘される³⁶ことが多い。確かに、阿三がビルと出会うまで過ごしてきた、美術を学ぶことに専念できた環境は非常に恵まれた、まるで処女卵がうみ落とされる前の保護されてきた環境に重ねあわせることができる。ところが、阿三はビルとの出会いを境にすべてを失った。つまり、阿三の涙は、「特別な性質がしみこんだ過去」を失った悔恨や反省を意味するという解釈もできる。一方、阿三は脱獄を決行した時点で、悔恨や反省から一步踏み出し、現在の自分を勇気づけ励まし、将来どこかの世界で必ず生きていくのだという決意も感じ取ることができよう。

4.2 王琦瑶的最期——映画撮影所の記憶——

自分の意志を貫くために脱獄を決行した『我愛比爾』の阿三の結末と比較すると、『長恨歌』の王琦瑶の結末は極めて悲劇的である。

1986年、55歳の王琦瑶には、歳の離れた26か27歳の老克腊と呼ばれる恋人がいた。が、間もなく老克腊にとって王琦瑶はただの年老いた女性でしかなく、老克腊は王琦瑶の元から去っていく。この頃、以前から王琦瑶と親しかった長

脚は、王琦瑶が金塊を持っていると噂を耳にし、深夜、王琦瑶の家に侵入した。しかし、その場を王琦瑶に見られ、長脚はとっさに王琦瑶の首を絞め殺害してしまう。

王琦瑶のまぶたに浮かんだ最後の光景は、ゆらゆらと揺れて止まることがない電灯であり、長脚が長い腕でそれを高くはねのけると、電灯は再びゆらゆらと揺れ始めた。この光景はよく熟知しているようで、彼女は必死に思い起こした。最後の一秒間に、考えが迅速に時間のトンネルを通りぬけ、目の前に出現したのは四十年前の撮影所であった。そうだ、この撮影所の一間に三面の壁のセットがある部屋に大きなベッドがあり、一人の女性がベッドの上に横たわり、頭の上の電灯はゆらゆら揺れていて止まることがなく、三面の壁には水の波と同じような光と影が反射していた。彼女は初めて、このベッドの上の女性は彼女自身であり、彼に殺されたのだと理解した。その後、光は消え、暗黒に陥った。(『長恨歌』 p.350)

この引用は、殺害された王琦瑶が薄れゆく記憶を想起³⁷する場面である。王琦瑶はゆらゆら揺れている電灯が目に入ると、一瞬にして「40年前の映画撮影所」の情景を思い浮かべ、記憶を手繰り寄せ、この瞬間、ベッドに横たわる女性は自分なのだと誤って断定している。確かに王琦瑶には、「40年前の映画撮影所」でカメラテストをした経験がある。しかし、王琦瑶が想起した場面は、王琦瑶のカメラテストの様子ではない。この場面は、自分のカメラテストより以前に、王琦瑶が実際に見学した以下の別の俳優の撮影風景である。

王琦瑶がその映画のセットの電灯に注意すると、本物の光を発し、ハスの花の形状をしている電灯のかさが、三面の壁のセットに波紋の暗い影を射していた。これは、まるで古い情景を再現しているようであるが、いつのどこの昔の情景なのか思いおこすことができない。王琦瑶は再び視線を電灯の下に女性に移すと、突然この女性が死人を演じていることはわかったが、自殺であるのか他殺であるのかは、わからなかった。不思議なことに、この情景はぞっとして怖いというものではなく、むしろ、何度も目にしたことがあるようだ。王琦瑶はこの女性の顔がはっきりと見えなかったが、ただ、パーマのかかったふわふわした女性の頭が、ベッドの足の方にあり、彼女は足をベッドの頭の方に、頭をベッドの足の方にして反対に横たわり、スリッパはバラバラにおかれていた。(『長恨歌』 pp. 26-27)

この引用からわかるように、女性の顔は見えなくても、カメラテストをされているのは王琦瑤ではなく、死人を演じているのは俳優であり、殺害された王琦瑤は過去の経験を正確に想起できていない。こうした記憶錯誤を称して既視感³⁸というが、いかなる精神状態で、この既視感は起こるのであろうか。フロイトの主張³⁹によれば、私たちは不愉快な苦痛な記憶を意識しないようにすることがある。思い出したくないことを忘れる傾向は、動機づけられた忘却、またはフロイトの用語を使えば、これを抑圧という。つまり、抑圧とは苦痛となる思考や感情を無意識の領域に迫りやることを意味する。

『長恨歌』の第二章「6.映画撮影所」は「40年の物語はすべて映画撮影所に行ったこの日から始まったのである。」という冒頭から始まるように、「40年前の映画撮影所」のカメラテストが王琦瑤のその後の運命の転機になった。確かに王琦瑤はこの時、自尊心の傷つく不快な体験、精神的な抑圧を経験している。

当時、高校生であった王琦瑤は、映画撮影所で映画監督に勧められるまま、カメラテストを受けたが、思い描いたほどカメラ映えしない王琦瑤に監督は落胆する。この時、監督はレンズに映る王琦瑤の美しさ、王琦瑤の俳優としての素質を認めなかったのである。その後、王琦瑤がミス上海の本選に残った時、監督はわざわざ王琦瑤を訪ねた。監督は王琦瑤に、ミス上海に選ばれる栄光がもたらす悲劇的な運命を説き、ミス上海を辞退するように忠告したのである。しかし、この忠告に王琦瑤は耳を貸すこともなく、その自尊心を傷つけられた悔しさからか、王琦瑤はこれを境に以前より積極的な決意で本選に進み、ミス上海第三位に選ばれる。

ミス上海に選ばれた後の王琦瑤は、李主任の愛人として愛麗絲マンションを与えられたが、李主任の死によって離れる。そして、鄔橋での療養生活を経て再生する力を取り戻し、平安里に移った。平安里の弄堂での暮らしは、程先生の自殺、康明遜との叶わなかった結婚、薇薇の出産、老克腊との別離、長脚に王琦瑤が殺害される最期まで続き、次から次へと降りかかる困難に王琦瑤は一人で対処して生きていかなければならなかった。この点に関して、王安憶も、王琦瑤にとって李主任の死、程先生の自殺は共に生きる理解者を失ったことを意味する⁴⁰と述べている。こうした王琦瑤の運命は、「一片の浮雲のような、瞬く間に消えてしまう煙のような」監督がミス上海を辞退させようとした忠告通りであった。その間、王琦瑤は決して自分から、過去の栄光を公にすることはなかった。が、ミス上海であった過去は、李主任との死別から殺害される瞬間

まで、王琦瑶の一生に負の影響をもたらした。そして、殺害された瞬間に王琦瑶が手繰り寄せた記憶は、40年前の映画撮影所の別の俳優のカメラテストであった。

つまり、王琦瑶が精神的な抑圧から既視感を起こした原因となるのは、一つの出来事に限定することはできない。先述した40年前の映画撮影所での不快な体験がきっかけとなり、ミス上海となってから殺害されるまでの全ての出来事が、王琦瑶の人生の精神的な抑圧となったのであろう。なぜなら王琦瑶を精神的に支えてくれる人びとは現れても、すぐに消えていなくなり、娘の薇薇がアメリカに旅立ってから、王琦瑶は一人で生きていかなければならなかったからである。

4.3『我愛比爾』と『長恨歌』の結末

F・デーヴィスは、ノスタルジアと過去との特別な関係について、「第一に、ノスタルジックな感情は、過去を肯定する心情に満たされ⁴¹、第二に、過去と比較すると、現在の状況や条件は例外なく過去よりも荒涼としていると論証される⁴²ことが多い」と強調している。

『我愛比爾』に現れる柏樹の描写は、「阿三のビルやマルタンとの過去の回想」と「阿三の労改での現実」の時間の橋渡しに効果的に用いられ、この物語が労改に収容された後の阿三の回想であることを認識させる。柏樹は、阿三に「特別な性質がしみ込んだ過去」を思い出させ、ノスタルジアを抱く役割を果たしている。

一方、『長恨歌』の王琦瑶は殺害された瞬間、薄れゆく記憶の中でゆらゆら揺れている電灯を目にすると、一瞬にして「40年前の映画撮影所」のカメラテストを想起する。この時、王琦瑶は死人を演じている俳優を自分であると誤って認識している。これは精神的な抑圧を受けている場合に見られる、記憶錯誤の一種・既視感であると考察できる。確かに王琦瑶は「40年前の映画撮影所」で、自分の美しさを認めなかった映画監督に、ミス上海を辞退するように忠告されるという不快な体験をしている。王琦瑶は生涯、ミス上海の栄光を公にすることはなかったが、王琦瑶が殺害されるまで精神的な抑圧となった。死にいく王琦瑶が目にしたゆらゆら揺れている電灯は、普通の女の子であった王琦瑶が決意をもって臨んだミス上海への参加、つまり「特別な性質がしみ込んだ過去」

を肯定する、現実に存在するノスタルジアを引き出すキーワードであろう。

このように、阿三の脱獄で終わる『我愛比爾』と王琦瑤の殺害で終わる『長恨歌』の結末は全く相反する。阿三のいる労改、王琦瑤のミス上海以降の生涯は、ともに厳しい現実の世界を意味する。しかし、両者は現実に存在する柏樹とゆらゆら揺れている電灯をきっかけに、「特別な性質がしみ込んだ過去」を肯定する心情に満たされている。そして、阿三は「ビルやマルタンとの過去」に、王琦瑤は「ミス上海としての栄光」に、今ある現実の世界で抱く感情こそノスタルジアである。

5. 小結

『我愛比爾』はこれまで、中国の象徴とされる阿三が、「政治上の西洋」の象徴であるビルと、「文化意義上の西洋」の象徴であるマルタンに受け入れられなかった悲劇が描かれたのだという見解で統一されてきた。これは、1990年代に始まった中国のグローバル化に伴い、突然中国に投げかけられた、欧米の一方的な価値観の押し付けであると解釈され、王安憶の発した、当時の中国の社会問題に対しての警鐘であると論じられた。

本章では、こういった見解に加え、ビルが去った後の阿三が、浦東で絵を描き続けたことの意味と、阿三が労改を脱獄した理由、そして、柏樹の描写の果たす役割について考察した。売春容疑で拘束された後の阿三の目に映る柏樹は、「上海」と「安徽省の白茅嶺労改」という場所と、「10年前の過去」と「現在」の時間の双方の隔たりを一瞬にして埋めた。そして、労改に拘束された後に回想する、阿三の「特別な性質がしみ込んだ」ビルやマルタンとの思い出は、阿三のノスタルジアである。阿三は、労改でも決して罪を認めることがなく、脱獄するのであるが、作品中に、この脱獄が成功するか否かは語られることはない。しかし、脱獄はビルやマルタンとの過去を肯定した阿三の意志であり、労改に送られても阿三は、自分の過去に対して反省することはなかった。最後に『我愛比爾』と『長恨歌』の結末の比較を試みた。両者は互いに、今ある厳しい現実の世界から、「単なる過去」以上の「特別な性質がしみ込んだ」過去を肯定する心情に満たされている。その際、過去を回想しノスタルジアを感じる要因となるのは、現在の中に存在することを、F・デーヴィスの理論を用いて検証した。

注

- 1 本章では、中国語表記の比爾はビル、馬丁はマルタンと表記する。
- 2 労改とは日本語では労改農場と訳される。しかし、中国には労働を通じて精神改造する労改の他に、労働を通じて再教育する労教、強制労働配置の就業の三段階の収容所があり、この 3 つを合わせて労改と称することもあるので、本章では以降、中国語の原文のままの労改と表記する。労改については、自らの労改での体験をつづり、アメリカに渡った後も何度か現地を強行的に取材したハリー・ウーの『労改』1996 年が詳しい。
- 3 劉小俊 2002 年や、劉小俊 2007 年。
- 4 松村志乃 2006 年。
- 5 王安憶「我是女性主義者嗎？」『王安憶說』p.166。
- 6 前掲 注 5「紀実与虚構—專訪大陸作家王安憶」p.264。
- 7 松村志乃 2006 年は、「ビルに「政治上の西洋」、マルタンに「文化意義上の西洋」、二人の男性を阿三の關係に西洋と「第三世界」の格差を見、この小説の主題は「第三世界」の「グローバル化時代における自己アイデンティティ」の問題である。」と論じている。本章でも二つの西洋を論じる上で、鄭国慶 2005 年のビルを「政治上の西洋」、マルタンを「文化意義上の西洋」と喩えたキーワードを用いる。
- 8 中国において『我愛比爾』は、『長恨歌』『富萍』『米妮』といった王安憶の別の小説と比較されて論じられる場合があるが、その時も別の小説が主として論じられる。
- 9 柏樹については本章 p.144 を参照のこと。なお、柏樹には、コノテガシワ、イブキ、ビャクシン、台湾コノテガシワ、シダレイトスギ、モミ等、いくつか日本語訳があるが、どの訳を採用するのが適当であるか、作品から断定することができない。そのため、本章では以降、中国語表記の「柏樹」で統一する。
- 10 華涇村については、現在の徐匯区の徐浦大橋近く華涇新村の華涇村を指し、実際に存在する場所であると思われるが、作品の中だけでは特定することはできない。
- 11 労農兵学生とは、工農兵学生、工農兵學員ともいい、文革時の労働者、農村に定住していた知識青年・農村青年、解放軍兵出身の学生を指す。1970 年 6 月に、文革で中断していた大学生の募集が再開されたが、推薦制度による労農兵

学生のみが対象であった。1977 年になり、正式に大学統一試験が 10 年間のブランクを経て復活し、大学は機能と生氣を取り戻した。文革で教育の機会を失ってきた 1977 年、78 年入学の学生にとって、入試は困難を極めたが、難関を勝ち抜いたエリートたちが大学に集まった。1977 年は 570 万人が受験し、27 万人が合格した。合格率は 4.7%である。

http://edu.ce.cn/young/sound/200705/29/t20070529_11522732_1.shtml

12 <http://www1.ttcn.ne.jp/kozzy/china/fec.htm>

外貨兌換券のこと。中国語で兌換券という。1979 年から 1995 年、中国では外国人が観光や商用で外貨を両替すると渡される外貨兌換券 (FEC) と一般の中国人が使用する人民幣 (RMB) の 2 種類の通貨が流通していた。外貨兌換券は再び外貨に両替できたが、人民幣は外貨に両替することができなかった。額面の価値は同じだったが、外貨兌換券は人民幣で買えない外国製品が買える等の理由で、中国人が外貨兌換券を入手しようと、闇両替が多かったという。闇両替のレートは FEC 1 元=RMB 1.5~1.8 元程だった。

13 渡辺浩平 1997 年 p.154 に、「上海語には、上只角^{サンザヨ}、下只角^{ウツザヨ}という言葉があり、上只角とは居住条件の良い地域を意味し、下只角はその逆であり、文化程度が高い地域と低い地域という意味にも使われる。市区で見えてみると、黄浦、盧湾、静安、徐匯区などが上只角にあたり、閘北、普陀、南市区あたりが下只角と考えている人が多い」とある。黄浦、盧湾、静安、徐匯区は、以前の共同租界や仏租界と重なり、そこに住む人びとは、自分たちの住む地区と他区と比較して上只角だと認識した。上只角に住む人びとは、閘北、普陀、南市区の下只角の人びとを見下す傾向にあった。

14 前掲 注 13 p.169。

15 松丸道雄他 2002 年 p.505 に、上海浦東地域計画について詳しい記述がある。

16 <http://japanese.pudong.gov.cn/>

17 黄浦江は、上海市内を流れる長さ 97 キロの川。太湖から流れた川が注ぎ込む淀山湖に源を発する。蘇州河は黄浦江の支流にあたる。

18 前掲 注 13 p.169。「1980 年代半ばに延安路のトンネルが開通するまでは、浦西と浦東を繋ぐ交通は舟だけ。和平飯店の前、南京路と中山路の交差点から、中山東路を南に下がり、5 分ほど歩いた金陵東路に浦東の陸家嘴までの渡し船の乗り場がある。自転車も載せられる。浦東のひとびとが南京路に来るためには、この渡し船に乗らなければならなかった。」と当時の黄浦江をはさんだ往来につ

いて述べている。『上海史』巻末 p.21 によると、黄浦江最初のフェリーが浦東塘工善後局により運航を開始したのは、1911 年 1 月のことである。

19 前掲 注 5「我是女性主義者嗎？」 p.166。

20 エドワード・W・サイード 1999 年 p.21。なお、本橋 哲也 2005 年では、「サイードのオリエントという「心理地理」は、すなわち西洋人の頭の中で考えられたイメージを、他者の住む異空間として表現することである。そのためには二つの前提が必要となる。ひとつは、東洋人が西洋人より劣った存在であるという想定。よって東洋は西洋による支配の対象とされ、東洋の人種や性格、文化、歴史、伝統、社会などが西洋的知識によって解明されるべきであるとされる。もうひとつは、オリエントと概括して呼びうる地域は、インドであろうとエジプトであろうと、アフリカであろうと中国であろうと、だいたいどこも同じなのだという決めつけである。この二つの発想、つまり他者の主体性を無視し、他者同士の違いに目を向けようとしない姿勢がオリエンタリズムの根本にあるのだ。」と解説する。

21 恵谷修 2007 年 pp.5-7。

22 王安憶『我愛比爾』 pp.152-153。

23 王安憶『白茅嶺紀事』『我愛比爾』 p.152 所収。

24 前掲 注 23 p.169。

25 前掲 注 23 p.163。

26 船工の日本語訳には、船乗り、水夫の他に、船大工もある。船大工は、上海の交通運輸業、造船業、輸出入貿易のために重要な貢献をしてきた。しかし、作品の中で、どの訳が適当か断定することができない。そのため、中国語表記の船工とする。

27 女性作家は阿三の友人であり、上海市西区の庭を備えた洋館の 1 階に住んでいた。歳は若く、化粧も垢抜けており、おしゃれである。英語も堪能、阿三に親しい友達を紹介してくれることもあった。二人は出会った頃は打ち解けられなかったが、すぐに友達になった。女性作家は絵の売買もしていたので、阿三が労改に収容された後、気を利かせて阿三の絵を売ってお金にしてくれた。

28 前掲 注 5「我是女性主義者嗎？」 p.167。

29 前掲 注 5「我是女性主義者嗎？」 p.170。『長恨歌』で、主人公・王琦瑤は、若くしてミス上海になり、李主任の愛人として囲われる身分になった。李主任は自分の緊急事態に備え、金の延べ棒が入ったスペイン製の彫刻された木製の

小箱を王琦瑶に贈る。この点に関して、王安憶は「私は終始、私の創作する人物に余裕を与えます。李主任が亡くなった時、彼女に金の延べ棒を残したのも、女性が路頭に迷うのが好きではなく、それは見た目にもよくないので、物語にもならないし、彼女にほんの少し条件を与えたのです。」と解説している。

30 添谷育志 1985 年 p.42。

31 二宮克美他 2008 年 p.20。

32 日本林業技術協会編 2001 年と、邑田仁 2004 年。

33 本論第 3 章 p.124 注 3 を参照。筆者は、『我愛比爾』における「上海一労改」の場所の対立は、前田愛 1992 年にある、アンリ・ルフェーヴルが説いた、都市空間から発信されるおびただしいメッセージを解読するコードの一つであるパラダイグムの次元を引用し、都市を解読するコードの手掛かりとした。

34 F・デーヴィス 1990 年では、ノスタルジアの体験の材料は過去であると定義しているが、厳密に、過去がノスタルジアの体験の動機づけの源泉や誘発要因そのものであると主張しているのではないことを前提としている。そして、われわれが過去を意識すること、過去を呼び起こすこと、それが過去であるとわれわれが知っていること自体が、現在の体験以外の何ものでもないため、ノスタルジアを感じるきっかけとなる要因はやはり現在の中に存在するのだと定義する。

35 前掲 注 5「我是女性主義者嗎？」p.167。

36 劉小俊 2002 年と、松村志乃 2006 年。

37 金城辰夫他 1990 年 pp.141-142 に、「記憶にはおおまかにいって、〈記銘〉と〈保持〉と〈想起〉の 3 つの過程が含まれている。経験したことを頭の中に保存する過程を〈保持〉という。保持がなされるには、とにかくまず、経験し、知覚し、認知されたものが、頭の中に刻み込まれて残らなければ、後になって思い出すべき材料ができない。この覚え込む過程が〈記銘〉である。そして、思い出す過程を〈想起〉という。最近では、〈記銘〉を^{エンコーディング}〈符号化〉、〈保持〉を^{ストレージ}〈貯蔵〉、〈想起〉を^{リトリバール}〈検索〉と呼びかえられる。」とある。

38 前掲 注 31 p.25。既視感とは、事実ではないのに、今現在置かれた状況は過去のある時点で見たり体験したと感ずることである。

39 西本武彦他 2009 年 p.220。

40 2004 年 11 月、来日した王安憶に直接、筆者がインタビューした。拙稿 2005 年 名古屋大学大学院修士学位論文『通過女主人公身体所表現出来的都市経験

——王安憶「長恨歌」』

41 前掲 注 34 p.21。第一の点は、ノスタルジアの対象である過去の片鱗をその人が後でどのように再評価しようと——つまり、この点、別のいい方をするなら、彼がノスタルジアの体験そのものの意味をどのように解釈しようとかかわりなく——ノスタルジックな感情は、過去の美しさ、喜び、満足、幸福、愛、等々の思い、要するに、特定の、ないしは存在したいくつかのものを肯定する心情に満たされている。

42 前掲 注 34 pp.23-24。第二の点は、この体験が現在の状況や条件に対して投げかける比較的あざやかな対照と関係がある。過去と比較すると、現在の状況や条件は例外なく過去よりも荒涼としている、厳しい、惨めな、醜い、なにかを剥奪されている、満たされない、恐ろしい等々と感じられるばかりか、事実そうだと論証されることも多い。

終章

本論は、王安憶の4編の都市小説『香港的情与愛』『長恨歌』『富萍』『我愛比爾』を通して、王安憶の上海への愛着をトポフィリアの概念から検討し、作品の中にいかに表象されたのかを明らかにしてきた。

第一部では、主に王安憶の作家としての生い立ち、作家としての軌跡について論じた。王安憶は安徽省で1970年春から1972年秋までの下放と、江蘇省の文工団に入団してから、1978年に上海に戻るまでの約8年間を除いては、これまでの生涯の大半を上海で暮らしている。王安憶にとって上海を離れ経験した下放先での過酷な体験が、上海を今までよりもっと思い出が詰まった親密な場所と変化させたのであろう。このように全く異なる環境に身を置いた王安憶の経験が、過去の大切な経験と結びつき、王安憶は作家となって、自分の生活感を作品に表現するようになった。

王安憶が作家となって1980年に発表した『雨、沙沙沙』や、その翌年の『本次列車終点』は多くの賞賛を受け、その作風は、王安憶の自伝小説であるといわれている。その後、自分の領域から離れて別の人物を書きたいと模索していた王安憶に、1983年8月、アメリカで開催されたプロジェクトへの参加は転機をもたらした。この体験を通して、王安憶は初めて中国人作家である自分を客観視し、中国を書いていく決意をした。

王安憶がアメリカから戻って間もない1980年代半ば、中国文学界ではルーツ文学が起こった。この時、王安憶は自分のルーツは現実の自己の生活の場から探求し創作するという立場を確立した。1985年に発表した『小鮑莊』は、貧しい文革期の農村が舞台であり、非常に高い評価を受けたが、まだ都市を描く姿勢は表れていない。

1980年代後半、『荒山之恋』『小城之恋』『錦繡谷之恋』が注目されたために話題にならなかったが、王安憶は上海市民と移民との間に存在する葛藤を描いた『鳩雀一戦』を1986年に、『好婆和李同志』を1989年に発表している。この二作品は、『富萍』や『上種紅菱下種藕』の布石といえる作品であろう。しかし、王安憶が『香港的情与愛』を1992年に発表した当時、都市を描く姿勢はまだ明確ではなかった。王安憶がその後、『長恨歌』や『富萍』といった上海を描いた作品を世に送り出すようになってはじめて、『香港的情与愛』は、最初に都市を描いた作品として評価されるようになった。

第二部では、王安憶が都市を描いた4作品『香港的情与愛』『長恨歌』『富萍』

『我愛比爾』について、王安憶の上海への愛着をトポフィリアの概念から検討し、「特定の場所への深い精神的愛着」の重要性が、作品の中にいかに表象されたのかを明らかにすることを目的とした。

『香港的情与愛』の冒頭は、「香港には大いなる偶然の出会いがあり、それは奇跡的な出会いである。」という王安憶の香港観ではじまる。老魏が時折訪れる香港は、故郷に似た馴染みの深い場所であり、香港滞在中の常宿のホテルは老魏にとって香港の「臨時の家」であった。しかし、老魏は長年、「臨時の家」には「契約性のある何か」が足りないとし探し続けていた。老魏の「契約性のある何か」とは、「臨時の家」で一緒に過ごしてくれる人であり、たとえ利害の上に成り立つ関係でもかまわない「探し物」であった。老魏は香港で出会った逢佳と一緒に暮らすことによって、「臨時の家」が「香港の家」になることを期待したが、老魏が望んでいた「香港の家」にはならなかった。なぜなら、逢佳の最終目標はアメリカへ移住することであり、二人の利害は一致することはなく、最終的に老魏は逢佳をオーストラリアへと移住させる。老魏は香港の歴史を顧みて、香港の百年の契約もあつという間に過ぎ去ったのだから、自分と逢佳の関係などとるに足らないと振り返った。

ならば、王安憶が意図する老魏の「臨時の家」と「香港の家」は何を指すのであろう。老魏の故郷であるサンフランシスコのチャイナタウンは、1850 年以降、移民たちの苦悩の歴史とともに歩んできた場所である。こうした環境で育ってきた老魏ならば、最初から香港で自分が部外者であることは自覚していたであろう。王安憶が意図する老魏の「香港の家」とは、老魏にとって心の拠り所となるトポフィリアを意味するのではないか。つまり、老魏にとっての香港は、逢佳と出会う前から何度も訪れていた自分の故郷に似た場所であり、その時からすでに、香港は老魏の「香港の家」であったと考察できる。一方、逢佳と知りあって、一緒に暮らすことを前提に香港に滞在していた一時期こそ、老魏の「香港の家」が「臨時の家」であった限られた期間であったと解釈したい。

『香港的情与愛』を発表した後、王安憶が初めて上海を舞台として描いた『長恨歌』は、壮大な上海の風景である弄堂の描写から始まる。上海の歴史の変遷を経験した弄堂は、過去と現在の上海の結合点でもあり、この都市の底辺を形作る存在そのものである。

『長恨歌』の主人公・王琦瑶は上海の弄堂なら誰もが目にする典型的な女の子である。しかし、王琦瑶の運命はミス上海第三位に選ばれたことで、一夜に

して変わった。王琦瑶は李主任の愛人となり、愛麗絲マンションを与えられる。王琦瑶のような普通の女の子が、社交界の花となり愛人として生きていく勇気ある決意を、王安憶はさげすむことはなく、むしろ、王安憶が愛麗絲マンションを、王琦瑶を保護する場所として設定したと解釈した。やがて、李主任との死別によって王琦瑶は上海を離れ、傷心を癒すために鄔橋で療養する。鄔橋は万事万物も引き受け、それを停止させ休止させる場所であった。王琦瑶にとって上海は辛い経験をした場所であったのに、上海で再出発しようと決意するまでに回復した。王琦瑶は上海に戻り、その後の人生を平安里の弄堂で、様々な人びとと関わりあいながら、殺害されるまでひっそりと暮らすことになる。

王安憶は「王琦瑶こそ上海であり、彼女の形象こそ私の心の中の上海である」と述べている。王安憶が弄堂を王琦瑶の再出発の地として選択したのは、王琦瑶に上海という都市の隠喩としての役割を担わせ、都市・上海の変遷を描き出したからである。新しい時代の変革によって、上海の形象であった弄堂は、旧上海の時代遅れの象徴として次々に取り壊されていくこととなった。王安憶は『長恨歌』の中で、王琦瑶の死を上海弄堂の消失に重ね合わせ、上海という都市の経験を表象したのである。王安憶は『長恨歌』以降の作品においても、小説の背景として上海を選び上海を書き続ける。これは、王安憶の上海に対するトポフィリアの表現といえよう。

王安憶が『富萍』の前に発表した『悲慟之地』と『好婆和李同志』は、上海に暮らす上海人がもつ外来移民への偏狭さや差別の意識を描いている。この背景にあるのは、これまでの生涯の大半を上海で暮らしてきた王安憶であるが、南下幹部の家庭に育ったが故に、いつまでも自分が上海では外来移民であることを持ち続けてきた意識であり、王安憶がもつ上海人に対する偏狭さや差別意識への疑問であろう。

『富萍』では、まず上海の移民の歴史について、租界の誕生を前提にその経緯を説明した。王安憶は上海人と外来移民の対立を多くの作品の中で描いてきた。移民都市である上海において、何代にも渡って上海に暮らしている上海人は非常に少なく、多くを外来移民が占める。この外来移民の中でも、南下幹部や、出稼ぎ目的の保姆、埠頭苦力をはじめとする都市雑業に携わる人びとについて本論では分析した。南下幹部は身分や権力を保証されているが、保姆は仕える家庭に住み込むことが一般的で将来への保障はなく、一方、都市雑業に携わる人びとは上海の中でもとりわけ貧しい棚戸区に暮らしていた。

『富萍』に登場する蘇北出身の外来移民たちは、それぞれが上海で自分の生き方を模索する。『富萍』では、南下幹部の家庭に保姆として仕える奶奶と主人公・富萍、船でごみを運搬する仕事をしている富萍の舅舅など、登場人物は皆、蘇北から上海に出稼ぎにやってきた外来移民である。作品では直接、上海人による偏狭や差別は描かれていないが、上海で暮らしていく外来移民の背景には、こうした意識が存在していたことは確かであろう。作品の中で富萍は故郷を捨て、蘇北の叔父の家、淮海路の奶奶の雇い主の家、やっと探し出した閘北区の舅舅の家と、どこにも根付くことができなかった。しかし、富萍は夫となる青年とその母に梅家橋で出会い、この場所に深い精神的心理的な愛着を感じ、新しい自分の故郷を上海周縁地帯の中でも非常に貧しい梅家橋で見つけたのである。エドワード・レルフは、特定の場所に根付くためには、その場所に愛着を持つことが最前提であるという。王安憶はこのような富萍の選択を通して、ある特定の場所に愛着をもち、そこに根付くことの重要性を描いたのではないだろうか。

『我愛比爾』に関しての先行研究は、王安憶が近代化に向かう中国に阿三を喩え、阿三が「政治上の西洋」の象徴であるビルと、「文化意義上の西洋」の象徴であるマルタンに認められなかった悲劇を描いたという見解で統一されており、この域を出る解釈は現われなかった。本論では、阿三とビルとマルタンの関係について、再解釈することから論じはじめた。

王安憶は、ビルが去った後の阿三が新進画家として成功する希望を、中国政府が開発に力を注いだ浦東新区の未来に託したのではないか。阿三は、中国や西洋の域を超えた、多様な価値観が存在する場において、自分の作品が認められることを信じて絵を描き続けていた。しかし、マルタンは阿三の作品を一瞬見ただけで、自己の解釈において否定した。ビルの「政治上の西洋」もマルタンの「文化意義上の西洋」も、オリエンタリズムの独りよがりの解釈であり、阿三は二つの西洋に受け入れられることなく、破滅させられたのである。マルタンと別れた阿三は日ごと、ホテルで外国人とその場限りの出会いを楽しんでいたが、売春容疑で労改に送られる。阿三は労改で決して自己の罪を認めることがなく、脱獄するのであるが、阿三の脱獄は、ビルやマルタンとの過去を肯定した阿三の意志であると本論では解釈した。

そして、『我愛比爾』に現れる柏樹の描写は、阿三のビルやマルタンとの過去の回想と阿三の労改での現実の時間の橋渡しに効果的に用いられ、物語が労改

での阿三の回想であることを認識させる。柏樹は、上海と白茅嶺労改という場所と、10 年前の過去と現在の時間の双方の隔たりを一瞬にして埋め、阿三に特別な性質がしみ込んだ過去を思い出させ、ノスタルジアを抱く役割を果たしている。

最後に『我愛比爾』と『長恨歌』の結末の比較を試みた。両者は今ある厳しい現実の世界から、単なる過去以上の特別な性質がしみ込んだ過去を肯定する心情に満たされている。その際、過去を回想しノスタルジアを感じる要因となるのは、現在の中に存在することを、F・デーヴィスの理論を用いて論じた。

上述のとおり、本論では、王安憶の都市小説 4 編『香港的情与愛』『長恨歌』『富萍』『我愛比爾』を通して、王安憶が抱く上海へのトポフィリアが、作品の中にいかに表象されたのかを分析してきた。上海へのトポフィリアは王安憶の作家活動の中で、不変の確固たる精神となり、王安憶は小説の背景として上海を選び、上海を書き続ける。

本論で扱うことができなかったが、王安憶が 2002 年に発表した『上種紅菱下種藕』は、人と都市との共存をテーマとしている。9 歳の秧宝宝が父の仕事の都合で両親と離れ、沈楼から華舍鎮の李老師の家庭に約 2 年間預けられることになり、華舍鎮に暮らす人びとと戸惑いながらも親密な関係を築き成長していく物語である。この小説に描かれている華舍鎮は、王安憶が 1996 年に 1 ヶ月間、病気療養のために滞在していた浙江省の紹興市の西北に 15 里〔約 7.5km〕離れた都市であり、王安憶には珍しく上海が舞台ではない。呉芸茜¹は、上海の故郷といえる、上海のルーツを見出すために、上海の周辺に位置する華舍鎮は、上海では既に消失した、旧き上海を回顧する哀悼の気持ちが存在していると述べている。現代化によって華舍鎮という都市が大きな変化を遂げても、それでも変わらない人びとの姿を、王安憶は秧宝宝的成長を通して『上種紅菱下種藕』に描いた。1985 年に王安憶が発表した『小鮑莊』との比較を通して、人と都市が共存することの重要性について論じることを、次の機会の課題としたい。

注

1 呉芸茜「与時間対峙——論王安憶の小説哲学」『王安憶研究資料』pp.393-406。

付論 1

王安憶『長恨歌』——ユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響を中心として

1. はじめに

本稿は、王安憶自身が言及している『長恨歌』へのユゴー『ノートル＝ダム・ド・パリ』の影響について明らかにすることを目的とした。『長恨歌』を執筆するにあたり王安憶は、『ノートル＝ダム・ド・パリ』に大きな影響を受けているので、ここに付論として掲載したい。王安憶はかつて、ユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』について、以下のように、この作品を非常に高く評価している。

実際、長恨歌は誰に似ているのかと言うのなら、それは本当にほんの少しユゴーがパリを描いたのをまねているのです。私は『ノートル＝ダム・ド・パリ』が大好きで、特に好きなのは、パリを高い建物の上に立って見る場面で、それほど長い描写ではないけれど、非常に素晴らしく、広々として雄大な様子で、ロマンチックなのに、人びとが全くユゴーのことなど考えもしないのは、今の人はユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』を読まないからです。（『王安憶説』『王安憶説』p.206 所収）

王安憶は『レ・ミゼラブル』の解説をした際にも、ユゴーが描くパリを「ユゴーは非常にパリにほれこんでいて、彼のパリの描写は非常に美しく、非常に雄大で、この都市の性質を描き出している。ユゴーが描いたパリは、なんと素晴らしいのだろう。」¹と絶賛している。小説とは人物を書くが、人物には背景が必要であると、背景を非常に重視してきた王安憶らしいコメントである。王安憶はかつて復旦大学で「小説学」と題する講義²を半年間担当したことがある。その講義の中でも、ユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』を取りあげた。このことから、王安憶が『長恨歌』を執筆するにあたり、ユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』に大きな影響を受けたと考えられる。本稿では、まず、弄堂とノートル＝ダム大聖堂が存在するそれぞれの都市、上海とパリにおいて果たす役割とその性質について考察し、続いて『長恨歌』と『ノートル＝ダム・ド・パリ』のそれぞれの主人公が担っている都市を代表する建物の隠喩としての役割について分析していきたい。

2. 小市民の生命、弄堂と聖母マリアたるノートル＝ダム

王安憶は、ユゴーの描く都市の細緻な描写に感銘を受け、ユゴーが『ノートル＝ダム・ド・パリ』の中で、「ノートル＝ダム」と独立させて章立てをし、ノートル＝ダム大聖堂を描いたように、王安憶は『長恨歌』の中で、同じように「弄堂」を一つの章に独立させて弄堂を描いている。『長恨歌』の舞台は上海弄堂であり、弄堂は上海人の代表的な居住空間である。王安憶にとって弄堂は、上海という都市の背景そのものである³。

弄堂とは北京でいう胡同、路地の意味である。北京の伝統的な家屋である四合院に対して上海は里弄⁴、北京のいくんだ路地、胡同に対して上海は弄堂という。上海弄堂は、小刀会の上海県城占拠、太平天国軍による蘇州、南京の占領によって、租界に逃げてきた避難民を受け入れるために建築された。そして、そこに暮らす人びとの需要に応じて、さまざまなタイプの弄堂がうまれた。つまり、弄堂は上海という都市の生命、そして拠り所でもあり、上海というこの都市が存在し発展する基礎になっている。

一方、ノートル＝ダムとはフランス語で「われわれの貴婦人」という意味で、これは聖母マリアを指す。つまり、ノートル＝ダム大聖堂とは、聖母マリアに捧げられた聖堂なのである。ノートル＝ダムといえば、フランスの代名詞のようになっているが、ノートル＝ダムという名前がつかなくても、ゴシック大聖堂の全てはノートル＝ダム、聖母マリアに捧げられているのである⁵。そして、ノートル＝ダム大聖堂は、外敵から守る構造をしており、罪人に至っては、そこに逃げ込むことができれば法律の手から逃れることができる⁶、罪人のための避難所でもあった。ノートル＝ダム大聖堂は12世紀から14世紀にほぼ200年かけて建造された、一定の時代の形式を持たない「雑種の建築」⁷である。聖母マリアに捧げられるために建造されたノートル＝ダム大聖堂は、パリの中心であり、パリの魂、パリの誇りであり、同時にパリの人びとに見られる事物としての対象であった。

王安憶は、弄堂は壊れ果てているのに、『長恨歌』の中で、なぜ弄堂をこんなにも華麗に描いたのかというと、弄堂は上海の典型的な居住地、大部分の市民はここで生活し、王琦瑶の中流家庭出身のような人びとがここで生活している、彼らこそが、我々が小市民⁸と称する人びとであるからだ⁹と述べている。『長恨歌』の冒頭において弄堂は次のように描写される。

高い見晴らしの利く場所に立って上海を眺めると、上海の弄堂は壮大な風景である。それは(杉江注：弄堂の壮大な風景)この都市の背景と同じである。通りと建物は弄堂からつき出ている、これは点であり線である。しかし弄堂のほうは中国画の山や岩を描くのに用いるタッチで、空白をいっぱいにうめている。(『長恨歌』 p.3)

このように俯瞰する視点から描くことによって、弄堂が上海という都市を辺り一面に埋め尽くしている様子がわかる。これは、ユゴーが「パリ鳥瞰」の章において、大聖堂の塔の頂から15世紀の美しいパリの眺めを俯瞰する視線を通して、眼の下に広がるパリを綿密に描写したことからの影響による。外面がどんなに朽ち果てようとも時代を乗り越えて、これまで生きてきた弄堂は、90年代に入って時代遅れの象徴として消えつつある。王安憶は、弄堂の外面がどんなに変化しても弄堂の内なる精神は変わらないと叙述した。弄堂は1860年代末から1870年代にかけて建築が始まり、その後、様々なタイプの弄堂が存在し、歴史のあらゆる変化を、そこで生活してきた多くの小市民と共に経験してきた。王安憶は『長恨歌』の中で、弄堂の変わることをない内なる精神を描き出そうとした。それは、変化する上海の中にある不変の存在である、それぞれの異なる弄堂で日常生活を営む小市民を描くことである。つまり、上海という都市にあって、弄堂は小市民と一体なのである。上海の弄堂には、それぞれ異なった表情や声があり、小市民の生活の中にあつて、小市民と共に感動も共有する。さらに王安憶は、弄堂には人間と同じように身体感覚器官もあり、冷たさや暖かさを感じ取ることができるという。

上海の弄堂は性的な魅力があり、男女の間のような親密さがある。実際に触れてみると冷たさと暖かさをもっており、それは感じ理解することができ、そこにはある種の私心がある。(『長恨歌』 p.5)

とりわけ、平安里の古い弄堂を例にとっても、どうして倒れないのか驚くだろう。……〔中略〕……弄堂は形がばらばらになっても、精神はばらばらにはならず、押さえつけられている心の声がする。この心の声は、この都市の騒ぎで沸き返る中であつては、たいしたものではない。……〔中略〕……この心の声は何だろう。それは二文字「活着」〔生きている〕ということだ。(『長恨歌』 p.322)

王安憶は弄堂の庶民的な風景の中に生きる人びとを『長恨歌』の中で描き出し

た。ヒロイン王琦瑶は、李主任に与えられた愛麗絲マンションでの愛人生活、李主任と死別して傷心を癒すために上海を離れて暮らした鄔橋での生活以外、人生の大半を上海弄堂で過ごした。

王安憶はノートル＝ダム大聖堂を、「多くの打ちこわしや改革を経た後でも、こんなにも多くの試練を経ても、ノートル＝ダム大聖堂はまるで一本の大木のように、葉っぱは毎年、すべて落ちてしまっても木の幹は永遠なのです。」¹⁰と形象した。ノートル＝ダム大聖堂が、時代の変遷を経て外見がめまぐるしく変わろうとも、内なるものは変わらないという点に、王安憶は上海の弄堂を重ね合わせ、『長恨歌』を描く際に、ユゴーの描くノートル＝ダム大聖堂の描写に影響を受けたのではないか。

3. 王琦瑶とカジモド

次に、王安憶が描いた『長恨歌』の弄堂で暮らす王琦瑶と、『ノートル＝ダム・ド・パリ』のせむしの鐘番・カジモドの作品の中で果たす役割について分析していきたい。

『長恨歌』は、冒頭の「弄堂」に始まり、「流言」〔うわさ話〕「閨閣」〔女子の部屋〕「鴿子」〔鳩〕という描写の後に、主人公・王琦瑶が登場する。

王琦瑶は典型的な上海弄堂の女の子だ。毎朝、弄堂の裏口がガタンと開くと、そこに模様のついたかばんをさげているのが王琦瑶である。午後、隣の蓄音機にあわせて、「四季調」を口ずさんでいるのが、王琦瑶である。連れだって映画館でヴィヴィアン・リー主演の「風と共に去りぬ」を見に行くのが、王琦瑶たちであり、写真館に写真をとりに行くのが二人の特別に仲良しの王琦瑶である。どの厢房〔正房(母屋)の前方の両側の部屋〕、又は亭子間〔上海の二階建て住宅の中二階にある部屋〕のどこにでも王琦瑶は坐っている。(『長恨歌』 p.19)

ここで描かれている王琦瑶は、上海の弄堂なら誰もが目にすることができる典型的な上海弄堂の女の子であり、上海の雰囲気である。この物語の主人公である王琦瑶が、ごく普通の家庭の出身で、上海の弄堂ならどこにでもいるような典型的な女の子であることを強調するために、王安憶は上海の生活空間である「弄堂」「流言〔うわさ話〕」「閨閣〔女子の部屋〕」「鴿子〔鳩〕」に続けて、上海の雰囲気として「王琦瑶」という章をもうけた。劉怡は、王琦瑶を上海の「典

型的な上海弄堂の娘」に設定したのは、恐らく彼女に「都市の換喩としての女性」という役割を担わせているためである¹¹と述べている。王琦瑶は上海そのものの、王安憶の心の上海であり、大きな目標の決意にあたっては妥協することなく、目の前に道がなくとも生きていく道を探して歩いていくことができる¹²人物として描かれている。

そんな王琦瑶であったが、60年代の程先生の死は、同じ時代の理解者の消失、つまり、新しい時代を一人で生きていかなければならないことを意味した。40年代、古き時代の上海小姐だった王琦瑶は80年代に入り、恋人であった老克腊には共に生きていくことを拒否され、物語の最後では長脚に殺されてしまう。上海という都市は、王琦瑶にとって愛すべき場所であったのに、王琦瑶は今の上海を生きる若者たちとともに生きていくことができなかつたのである。90年代へと向かう時代、上海も古い時代から新しい時代への容赦ない変革を経験し、王琦瑶も暮らした小市民の住処であり、上海の形象であった弄堂は、旧上海の時代遅れの象徴として次々に取り壊されていくこととなった。王安憶は『長恨歌』の中で、王琦瑶の生きる時代の終わり、王琦瑶の死を、上海弄堂の消失に重ね合わせ、主人公・王琦瑶を通して上海という都市の経験を表象したのである。

また、王安憶は『ノートル＝ダム・ド・パリ』の精神世界の構造¹³にも注目し、その精神世界を朽ちた世界、現実の世界、神の世界の三つに分類した。王安憶は、第一の朽ちた世界を衰亡の世界、まさに人間の権力社会であるとし、『ノートル＝ダム・ド・パリ』の登場人物では聖職者クロード・フロロが属すると論じた。第二の現実の世界には、『ノートル＝ダム・ド・パリ』の中で、最も旺盛な生命力をもっている市民集団が属し、エスメラルダに命を助けられた詩人ピエール・グランゴワールがこの代表的人物だと述べる。第三の世界、現実の中では愛情という名の永遠なる神霊の世界には、『ノートル＝ダム・ド・パリ』の主人公であるせむしの鐘番カジモドと、孤児である魅力的なジプシーの娘エスメラルダが属するのだと解釈した。さらに、彼らの中で本当のノートル＝ダム大聖堂の美しさを理解しているのはクロード・フロロとカジモドであるが、クロード・フロロは虚無の世界にあり、この世界の周縁にあつて足を踏み外して落ちてしまったために、もう一人のカジモドこそ、ノートル＝ダム大聖堂の本当の美しさを理解しているのだと指摘する。そして、カジモドとノートル＝ダム大聖堂とのその深い関係は、カジモドの精神がノートル＝ダム大聖堂の美

に引きつけられているために成り立つのである¹⁴と論じた。

パリの民衆は、カジモドからは一種の不思議な放射物が出ていて、それがノートル＝ダムすべての石に生气を与え、この古い大聖堂の奥まった場所を息づかせているらしいと噂した。カジモドがこの聖堂に住んでいるのを知っただけで、回廊や正面玄関にある無数の彫像が生きて、動いているように見えてきた。事実、彼の手にかかると、この大聖堂も、おとなしい、すなおな生き物みたいにみえてくるのだった。大聖堂は彼の命令を待って初めて大声をあげた。大聖堂は、ちょうど守り神につかれているみたいに、カジモドにとりつかれ、満たされていた。彼がこの巨大な建築を息づかせているのだ、とも言えそうだった。じっさい、彼はこの建物のどこにでもいた。建築のあらゆる場所に神出鬼没に現われた。(『ノートル＝ダム・ド・パリ』 p.157)

エスメラルダはクロード・フロロの策略にはまり死刑に処せられることが確定したが、カジモドは清らかな愛情を抱くエスメラルダを何とかして助け出したかった。エスメラルダが死刑台まで引きまわされる途中、ノートル＝ダム大聖堂の境内に逃げ込むことだけが、彼女の生命を助けることができるたった一つ方法であった。なぜなら、「大聖堂は安全地帯であり、人間のあらゆる裁きの手は、この敷居の上では、すべて消え去ってしまう」¹⁵からであった。ノートル＝ダム大聖堂は、避難民を受け入れるための住居でもあった弄堂と同じ、罪人のための避難所であったのである。『ノートル＝ダム・ド・パリ』の最後は、鐘番のカジモドが彼女を救おうとする努力もむなしく、エスメラルダはクロード・フロロの策略によって絞首刑に処せられる。悲嘆にくれるカジモドは育ての親のクロード・フロロを殺し、そして自らモンフォーコンの納骨堂に赴き、エスメラルダの死骸を抱いて死ぬという結末で物語は終わる。ユゴーは『ノートル＝ダム・ド・パリ』で、カジモドが死んでしまった後のノートル＝ダム大聖堂をこのように描写した。

こんなわけで、カジモドがここに住んでいたことを知っている者の目には、今日のノートル＝ダムは、さびれた、活気のない、死んでしまっているような場所にみえるのだ。何か歯のぬけたようなさびしい感じがする。この巨大な肉体はからっぽなのだ。骸骨なのだ。魂がとび去って、ぬけがらだけが残っている。ただそれだけなのだ。目がおさまっていた穴はまだ残っているが、もうまなざしというものを失った、されこうべみたいなも

のなのだ。(『ノートル＝ダム・ド・パリ』 p.158)

王安憶はユゴーが描写した、第三の世界に属するカジモドとエスメラルダこそ、完璧な美しい人物であり、彼らには時代を超えた豊富な内包があると主張する。彼ら二人は平民生活の最も低層にあり、人物自体に複雑な思想があるわけでもなく、自分の運命を自覚しているわけでもないが、この二人の人物が属する第三の世界、すなわち神の精神世界、永遠の世界にこそ、ユゴーの思想となる材料が注がれているのだ¹⁶と解釈した。つまり、ユゴーが描いたカジモドは王安憶がいう愛という名の神霊世界、永遠の世界そのものであり、ノートル＝ダムの守護霊、この大聖堂の魂であった。

新しい時代の変革によって、旧上海の時代遅れの象徴として次々に消失していく上海弄堂は、同時にそこで生きた王琦瑶の生きた時代の終わり、王琦瑶の死を意味した。王安憶は『長恨歌』の中で、鳩を上海の全てを俯瞰することができる都市の精霊として、鳩の視点から見た上海弄堂の景観を描写している。これは、ユゴーが『ノートル＝ダム・ド・パリ』の中で、パリの人びとに見られる事物としてのノートル＝ダム大聖堂を、パリを眺めることができる塔の頂に視点を移行させ、パリの景観を描いたことからの影響である。王安憶は鳩を「この都市の最も奥深く隠れて現れることがない罪と罰、禍と福、すべて彼ら（杉江注：鳩）の目をごまかすことはできない。」¹⁷、この無神論の都市にある神の全知全能¹⁸として、鳩だけに、王琦瑶の最後の息をひきとるその瞬間までを見届けさせたのである¹⁹。

注

- 1 王安憶「王安憶解読『悲慘世界』」『王安憶説』 p.351。
- 2 この講義録は後に、王安憶『心霊世界 ——王安憶小説講稿』に収められている。なおユゴーについて述べているのは「第5節」 pp.110-141 である。
- 3 王安憶『長恨歌』 p.3。
- 4 1860年代末から1870年代にかけて盛んに建築されるようになった、上海独自の庶民用の住宅で、当時は、イギリス人に「rowhouse」と呼ばれていた。
- 5 馬杉宗夫『パリのノートル・ダム』 p.24。
- 6 ヴィクトル・ユゴー『ノートル=ダム・ド・パリ』 p.365。
- 7 ユゴーは、ノートル=ダム大聖堂を『ノートル=ダム・ド・パリ』の中で、「雑種の建築」、つまり、一定の時代の建築形式を持たない、過渡的様式の一種、その姿は噴火獣(キマイラ)のようなものだと形象した。
- 8 小市民については、本論 p.91 注 38 で解説している。
- 9 2004年11月、来日した王安憶に直接、筆者がインタビューした内容より。拙稿 2005年名古屋大学大学院修士学位論文『通過女主人公身体所表現出来的都市経験 ——王安憶「長恨歌」』。
- 10 王安憶『心霊世界 ——王安憶小説講稿』 p.114。
- 11 劉怡 2002年 p.155。
- 12 前掲 注1「形象与思想——关于近期長篇小説創作的對話」 p.89。
- 13 前掲 注10 p.130,p.133,p.137,p.140。
- 14 前掲 注10 p.123。
- 15 前掲 注6 p.353。
- 16 前掲 注1「兩個六九届初中生的即興對話——与陳思和對話」 p.6。
- 17 前掲 注3 p.17。
- 18 前掲 注3 p.18。
- 19 前掲 注3 pp.349-350。

付論 2

以下は、2004 年 11 月来日した王安憶に直接、筆者がインタビューしたものである。本論『長恨歌』には引用の一部として扱っているため、ここにインタビューの全文を掲載し、付論として添える。

王安憶インタビュー

1. 杉江：女性の身体は女性の運命にどのような影響を与えるのでしょうか？

王安憶：私は個人的に、性別が人生にそれほど影響するとは強調していません。女性の身体はもちろん男性と同じというわけではありませんが、それはただ表面的な違いであり、実際、結局のところ、同じであると考えています。身体が運命に与える影響は、それほど直接的な関係はなく、それほど重要ではありません。私は女性主義者だとよくいわれますが、自分ではそのような認識はないのです。なぜなら、現在、世界的に女性主義について語られていますが、女性主義とはある流行なのです。ある研究者たちは女性主義という名称を好んで用いますが、実際、女性主義はもっと複雑なものです。

杉江：あなたがいう研究者は、李小江のことですか？

王安憶：そうです。李小江です。李小江の女性主義の思想とは、西洋の女性主義思想と同じではありません。彼女が中国の実際の状況の中で、やや強調していることは、中国の現在は生産力が立ち遅れ、男女の間には不平等がやはり存在しているということです。彼女は社会学の角度から分析し、生理的な角度で分析しているわけではないのです。

2. 杉江：女性の愛情と社会的環境はどんな関係があって、都市の社会的環境は女性の愛情にどのような影響を与えますか？

王安憶：中国の実際の状況として、中国の資本主義化、中国の市場経済化、消費主義化は、すべてが十五年あるいは、二十年のことでしょう。そのため、我々がこの問題について余裕をもって考察する時間はなかったのです。1949 年以降、政府は法律で女性と男性の平等の地位を保護し、非常に多くの手段で男女の平等を保証してきたのです。これには、婚姻を保証する婚姻法も含まれます。市場経済、自由経済の段階になって、この状況下で、確実に非常に大きな変化がうまれたのです。女性はある方面では男性による消費の対象となりはじ

めたのです。つまり、我々は常に現在の自由な状況下において、女性の尊厳は以前と比べると保護されていないと考えます。なぜなら、自由経済の基本は男性によって作り出されたからです。これは経済モデルでもあり、社会モデルでもあります。こうして女性は、現在、保護されていた状況を失った社会において、彼女の尊厳、地位などはすべて脅かされ、損害を受けているのです。

3. 杉江：都市のイメージは、市民のどんなところに表現されるのでしょうか？

王安憶：実際、こうした状況ははっきりしていることですが、例えば、都市にはあらゆる生活様式があるのです。この生活様式はまず、市民生活に影響を与え、市民の心理に影響を及ぼし、外部のふるまいや言葉遣い、価値観など、すべてに影響を与えます。例えば、上海という都市であれば、北京とは全く異なり、北京は政治の中心だと人はいいますが、私は北京に住んでいるわけではないので、私の北京の描写は、おそらく比較的粗雑になってしまいます。上海はこれまで経済の中心とされ、人の貧富に対しては敏感でありました。北京のように政治の中心都市は、貧富に対しておそらく比較的敏感ではないでしょう。例えば、上海は人がおしゃれか、おしゃれでないということに敏感であり、この反応はわりあい過激であると私は考えます。都市が生活の質を強調すれば、往々にして社会の評価を得るのです。つまり、(何というのか) 人は比較的利益を求めるのです。しかし、別のいい方をすれば、あなたの出身の善し悪しや、社会の地位についてあまり関心はないけれど、生活レベルについて論じることには比較的現実的にあることです。この都市構造が成り立つ中心的な基礎はすべて、市民生活の価値観に影響を与えているのです。

4. 杉江：都市の市民には様々な階層がありますが、普通の市民は都市においてどんな存在なのですか？

王安憶：私は都市の歴史を研究しているわけではないので、おそらく、この問題に関して多くを述べることはできません。実際、市民の生活というのは、一般的に自分の立場を守って、自分の毎日を楽しく過ごしていこうとするものです。私は、都市で生活する市民は、わりあい物質化していると思います。彼らの生活は物質社会において、比較的物質主義です。この物質主義は彼を現実的に変化させます。彼は多くの虚無の考えがあるわけではありませんが、彼らの目線はわりあい浅はかです。しかし、往々にして目線が浅はかな人は、非常に実務に励み、多くのことをやってのけます。

現在の問題は、あなたが長恨歌を用いて原本とするのであれば、長恨歌はあ

る虚構であり、その後あなたが長恨歌を分析することで、実際の社会学の観点を得るでしょう。長恨歌は非常に個人的ですが、客観的ではないのです。王琦瑶は虚構の人物であり、彼女を通して現実的な問題を客観的に説明することが可能であるのかどうか、私は、これはあなたの研究にとって非常に重要になると思います。私が少し危険に思うのは、長恨歌は非常に主観的なもので、あなたがこれを用いて、客観的な理論を出したら、それは科学的ではありません。

5. 杉江：長恨歌の程先生は、あなたの中でどのような存在ですか？

王安憶：ここでの登場人物は、小説の環境において考えます。小説では、程先生は、王琦瑶の生活の中で非常に重要な人物です。彼が重要な点は、第一に王琦瑶を虚構の舞台へ向かうように押し上げたことです。もし、彼の強力な勧めがなければ、王琦瑶の写真が世に出ることはなかったし、ミス上海コンテストに参加することもなかったのです。王琦瑶の物語のすべてはミス上海に選ばれたことから始まったのです。程先生にはこうした役割があったのです。そして他の役割もあります。程先生は王琦瑶をずっと保護し、彼は用心棒として護衛しました。最後になって、彼自身が自分のことを負えなくなったので、彼は王琦瑶を捨て、自殺したのです。程先生の自殺後、王琦瑶はたった一人で孤独に生きていくことになったのです。これは私の物語で、完全なる虚構であるので、あなたは都市の特徴を見出さないでください。あなたはただ、王安憶の小説の舞台とはどのようなものか述べることはできます。私はあなたが誤解することを恐れています。小説から、文学的な角度にたつと、程先生の性格は非常に素晴らしく、非常に紳士的あり、優美です。一見すると、彼は世間からかなりかけ離れているところもありますが、感情を外に出さない、内側に意見を秘め、非常にきっぱりとしていましたが、彼はこの時代に固執していました。しかし、彼は王琦瑶のように進取の気性でもなければ、王琦瑶のようにひたすら死まで突き進むことはできず、自ら滅亡を招いたけれど、程先生はとても冷静であり、自分がどの時代に属すべきか知っていて、どの時代に属すべきでないか知っていたので、最後は自殺してしまいました。程先生の自殺は一つの非常に大きな事柄です。彼が自殺した後は、王琦瑶は孤独で寂しく一人で生きていかなければなりませんでした。そして、彼女には二度と再び同情してくれる人は現れませんでした。だから、私は『長恨歌』の第三部を書くにあたって、程先生が自殺した後に、あなたは気がついたかどうか分かりませんが、王琦瑶は一人で若者たちと交流し、彼女と同年齢の人は再び現れず、すべては薔薇の同級生やその友達でした。私がその小説を構成している時、もちろん、時代や社会のすべてが私に資料となりますが、小説の中で、それらは実際の状況

とは違っています。

6. 杉江：李主任、康明遜、老克腊は、王琦瑶の人生において、結局のところどんな存在だったのですか？

王安憶：事実、李主任と康明遜は最後に老克腊を出現させるための準備であります。この物語のもっとも重要なポイントは、私にとって、彼女が老克腊と出会うことであります。最初の出来事はすべて準備であり、彼女は李主任と出会ってから、彼女の生活はついにこのような境遇が可能になった、その微妙な錦衣玉食〔ぜいたくな生活をする〕ともいえる生活が与えられて、ここから彼女は普通に育ってきた女の子の生活から離脱したのです。身分がない、完全に名づけることができない生活です。ここから先の彼女の生活は曖昧になっていくのです。こうした曖昧な状況下において、彼女は康明遜と出会ったのです。こう解釈すべきなのですが、彼女と康明遜との恋愛は、最も正常な、最も健康的な、男女の年齢とすべてが非常に正常であったので、彼らは普通に妊娠して子供をもうけましたが、彼女の人生は曖昧なので、康明遜と実を結ぶことは不可能でした。彼女には子供・薇薇ができて、薇薇は非常に重要なのです。どこが重要なのかというと、私はこの作品を書いている時に、考えたのです。私は必ず、王琦瑶と若い世代と一緒にさせようと思いました。どのようにしたら彼女と若い人たちと一緒にすることができるのでしょうか。もっとも相応しい、もっとも自然な方法は、彼女に一人子供をもうけさせることで、彼女の子供が、若い人を彼女の家の客間に連れてきたのです。

杉江：彼女の子供からはじまったということですか。

王安憶：そうです。彼女の子供からはじまったのです。だから、この二人、李主任と康明遜はとても重要ではありますが、しかし、すべては最後に老克腊と出会うための準備でした。王琦瑶は老克腊と出会った後に、彼女の本当の悲劇がはじまったのです。前の二人は彼女の本物の悲劇ではありません。すべて悲劇のための準備です。彼女の本物の悲劇は老克腊なのです。だから、『長恨歌』、この物語のすべては王琦瑶と老克腊の悲劇のために書いたのです。これは非常に重要なことです。これは私の主観的な見方であり、作品ができあがり、他の人がどう評論しても、私には自分を弁護する方法はないのです。

杉江：『香港的情与愛』この作品はどこで最初に掲載しましたか？

王安憶：『香港的情与愛』は随分前の作品です。最初は1993年の『上海文学』の9月号か10月号ですね、10月号に間違えないです。私もすでに記憶が曖昧なのです。かつて、台湾の麦田出版から、単行本が出ています。

杉江：あなたのお父様の生まれた年と亡くなった年を教えてくださいませんか？

王安憶：私の父が生まれたのは1919年で、亡くなったのは2003年ですね。

私はこれを普遍の現象だと考えるのは、あなたが虚構の小説を資料とし、最後に社会的客観的な見方で結論を出すのは、これは、非常に容易に曖昧な産物になってしまいます。あなたが女性作家の作品から都市の経験を見出すことができるのは、女性作家が小説を叙述する過程は虚構であります、女性作家の作品は事実であるからだと私は考えます。事実から事実が生まれるということでしょう。また、女性作家が書いた作品からあなたは美的経験を得ることができ、それは文学の経験であったり、創作の経験であったりします。都市の虚構の状況下とは、どんな状態でしょう。私が出会ったあらゆる状況下にも、多くの場合があります。例えば、李小江が書いた一冊の本があり、彼女は非常に多くの女性作家の小説を用いて、最後にある結論を出していますが、中国女性の生存状態との誤差は非常に大きいのです。なぜなら、作品は非常に客観的ではなく、私は都市の研究をしているわけではないので、私には理論を用いて説明する準備は無いし、私の回答も正確ではありません。小説とは、虚構の産物であり、それは現実に関係を負うものではありません。長恨歌は個人の虚構の産物であり、それに私が非常に多くの主観的な色彩を与えました。例えば、あなたは十人の上海の女性作家を研究して、彼女たちの虚構の上海がどんなものかみることができます。長恨歌は真実ではなく、虚構の産物であり、あなたが上海を長恨歌から見ようとするのなら、都市を見るに、その偏差は非常に大きいでしょう。

王琦瑶の性格は上海市民の性格であり、これは王安憶の重視する性格です。あなたが十人の上海作家を探したら、彼らの十通りの性格を説明することができます。そして、性格から作家の世界観を見て取ることができ、これは作家の価値観とも関係があります。ところが、それは都市の真実の性格ではなく、これは問題を研究すべきで、分析が必要となります。都市を研究したければ、小説は信頼できる見解を与えているわけではないと私は思うのです。誤解しないで欲しいのですが、文学と歴史は審美的なものです。あるいは、あなたが「長恨歌の上海」について書くのなら、これは、虚構の物語の上海なのです。そういうことなのです。私がいいたいのは、「王安憶の上海」ならかまいません。あ

あなたは、文学とは虚構の産物である、真実ではないと記憶していなければいけません。あなたは小説の上海と真実の上海の比較をすることはできるでしょう。長恨歌は 1940 年代から 80 年代について書かれた、多くの人に読まれた小説で、私も 40 年代の上海についてはよく理解していません。実際、私は全く理解していないのかもしれませんが。もし、第 2 部の康明遜の段落は、私は多少、見たこともあれば、聞いたこともあるので、少しの資料で十分なのですが、40 年代に関しては、私がすべて知らないことで、すべてが空想で、ただ資料を少し見ただけで書いたのです。

現在、上海を研究するという流行は、旅行や経済などもそうですが、上海が非常に発展したからです。実際、上海の発達歴史に関しては、まだ日が浅いので、上海だけでなく、現代史とも関わりがあるでしょう。

彼らは現在、長恨歌は上海を描いているというけれど、実際には上海と長恨歌は基本的に同じではありません。弄堂は非常に朽ち果てているのに、あなたは、私が弄堂を華麗に描いていると思うでしょう。だから、長恨歌は非常に主観的であるといえるのです。私はどうして弄堂をこのように描いたのかというと、弄堂は上海の典型的な居住地であるのです。大部分の市民の居住地であり、王琦瑶のような家庭、中流家庭、私がいう小市民はここで生活していました。彼女は非常に貧しいというわけではありませんが、もし、彼女が貧民窟に住んでいたなら、彼女には別の世界観があったといえるでしょう。彼女は金持ちの蒋麗莉でもなければ、普通の中流家庭の人で、弄堂は小市民の居住地だったのです。

吴佩珍は香港に行き、比較的良い結婚をしました。彼女の家のような小市民の女の子は、その将来は比較的保証されています。王琦瑶のような人は、一般の小市民ではあるけれど、出身がそんなによくないでも、人よりぬきんでるのはとても難しいけれど、彼女にはある条件がありました。それは彼女の美しさであり、彼女の悲劇の原因にもなったのです。これは私が設定した物語の悲劇的な条件なのです。こうした物語は非常に多くの条件があり、私が条件を設定する場合に、現実とかけ離れることはしないし、私はそれを合理的にしました。しかし、こうした合理的な条件から歴史や事実を見ることはできません。この中には、客観的なものがあり、ちょっとだけ枠からはみ出したということです。

杉江：李主任が亡くなった時、王琦瑶に金棒を与えましたが、これも条件ですか？

王安憶：王琦瑤が生活していく時、ご飯も食べなくてはいけない、経済的な条件が必要なのですが、これは、彼女が殺される条件にもなった、一つのとても重要な原因なのです。だから、我々は小説とは、物語を配置して、出来事を通して最後に完成させるのが、私の観点です。

付論 3

地図

ここでは、論文の中に出てくる場所の地図を添える。

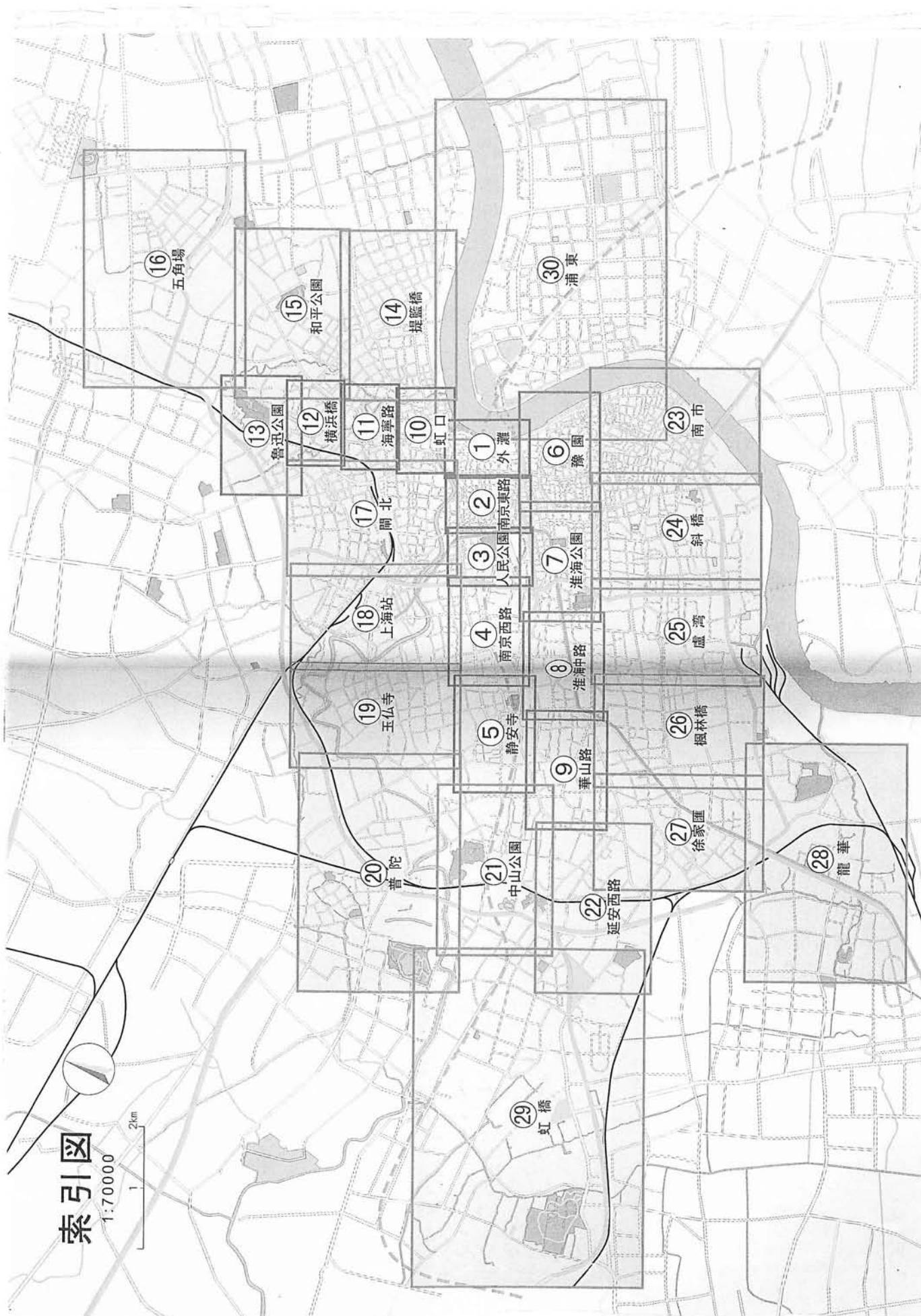
pp.177-192：木之内誠『上海 歴史ガイドブック』1999年6月。

（p.177 は、p.178 以降の索引図である。）

pp.193-195：平凡社編『ベーシックアトラス 中国地図帳』2008年7月。

p.196：地球の歩き方編集室『地球の歩き方 香港 2008～2009』2008年7月。

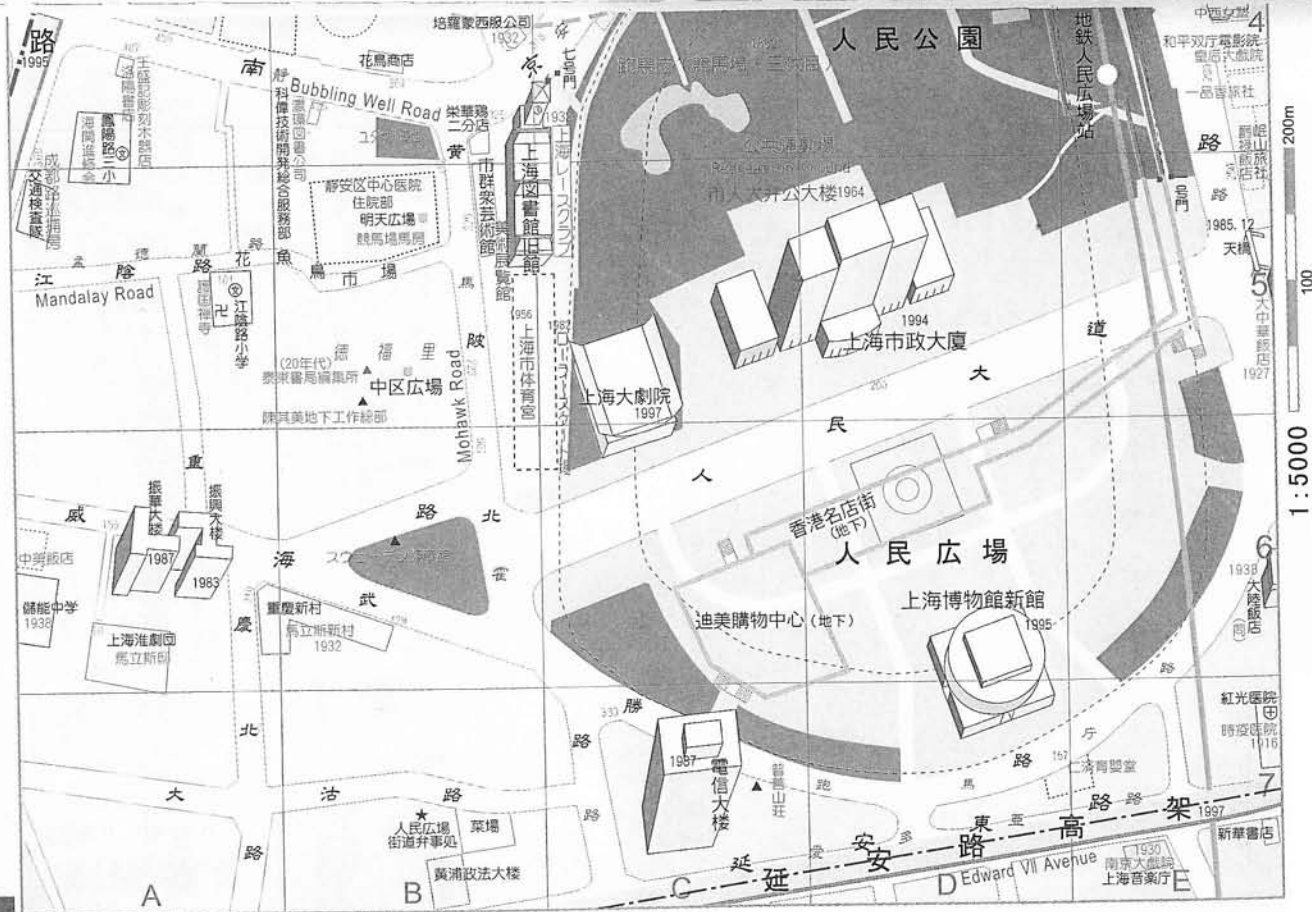
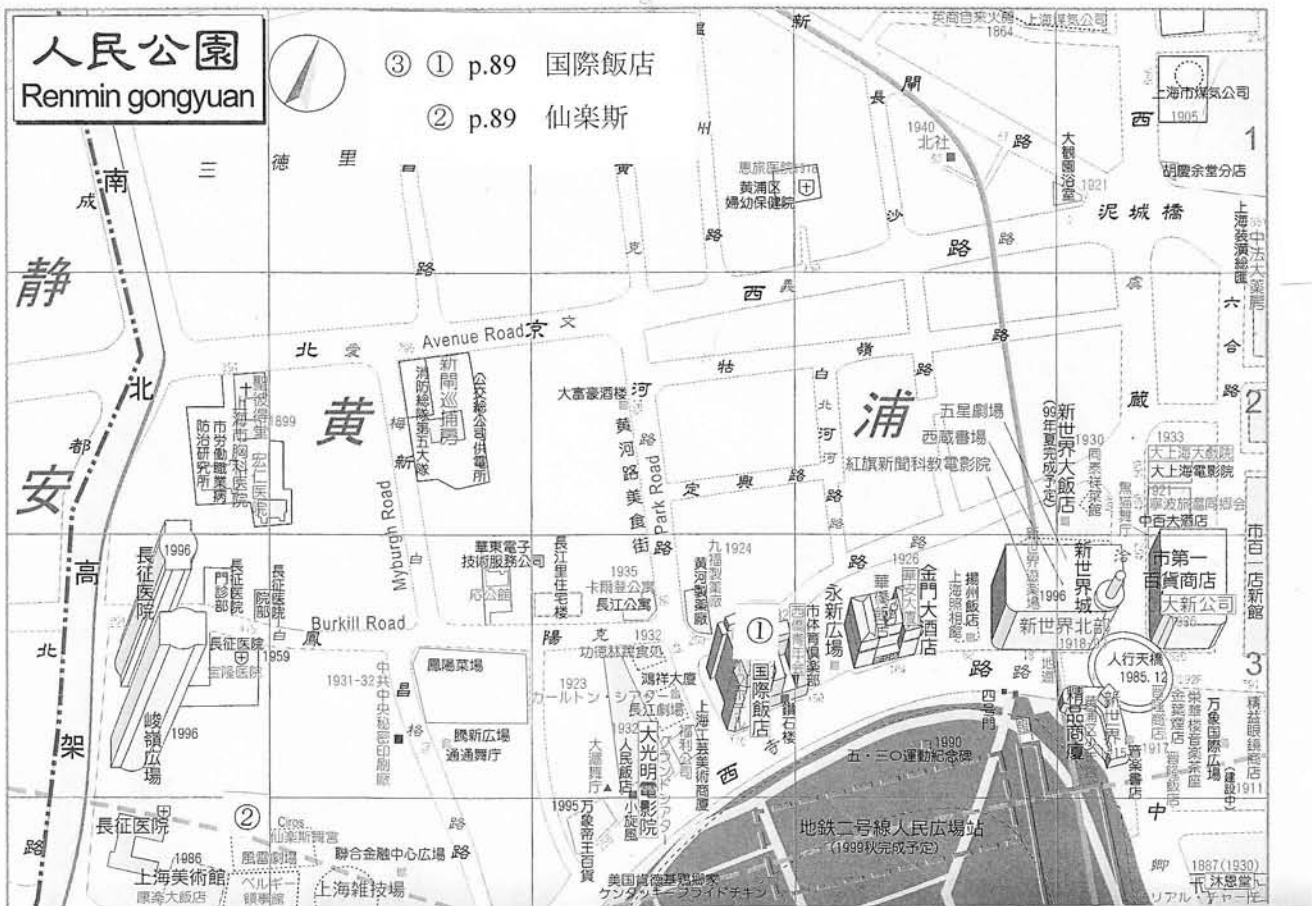
p.197：通用図書有限公司『香港街道大厦詳図』第三版 1996年12月。



索引图

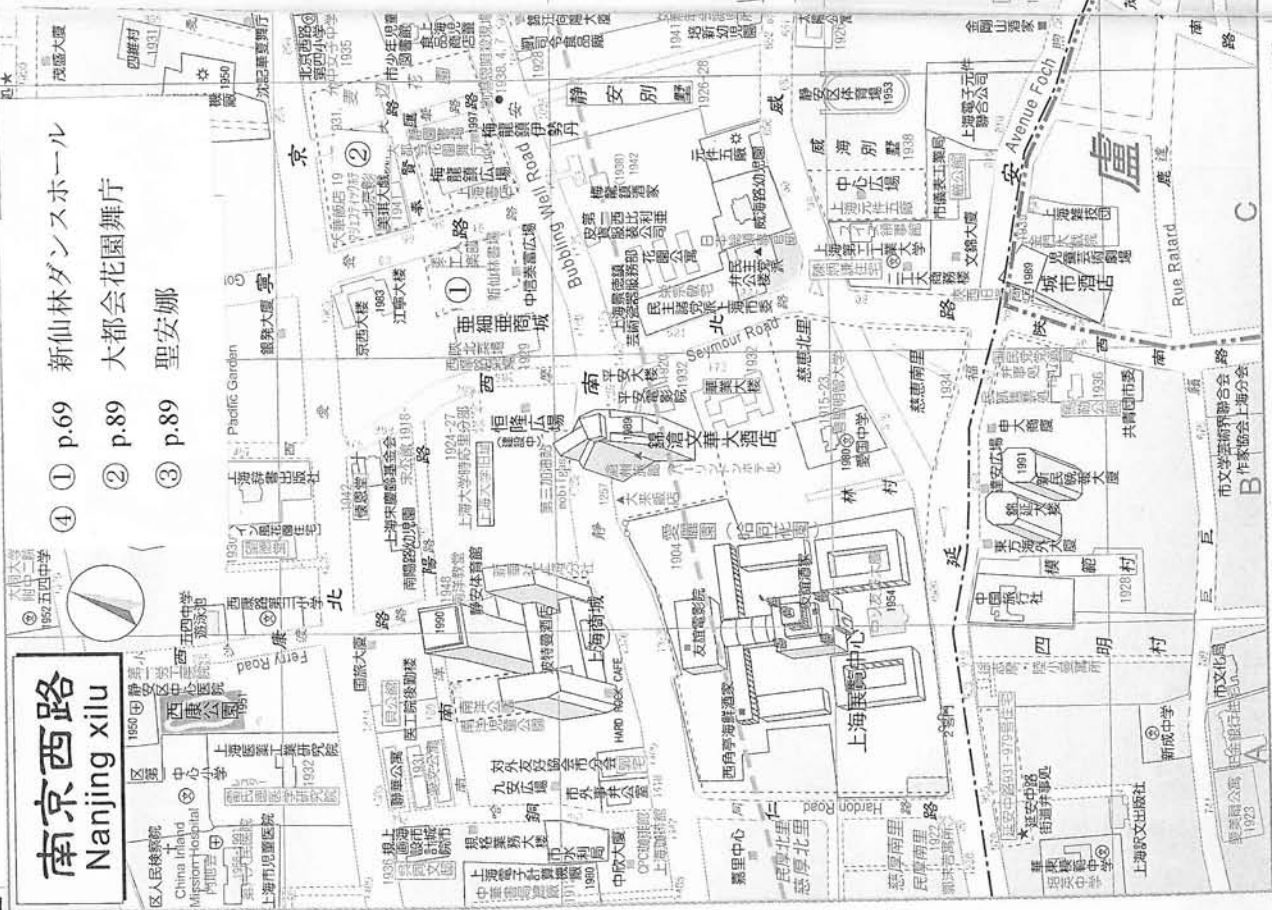
1:70000

2km



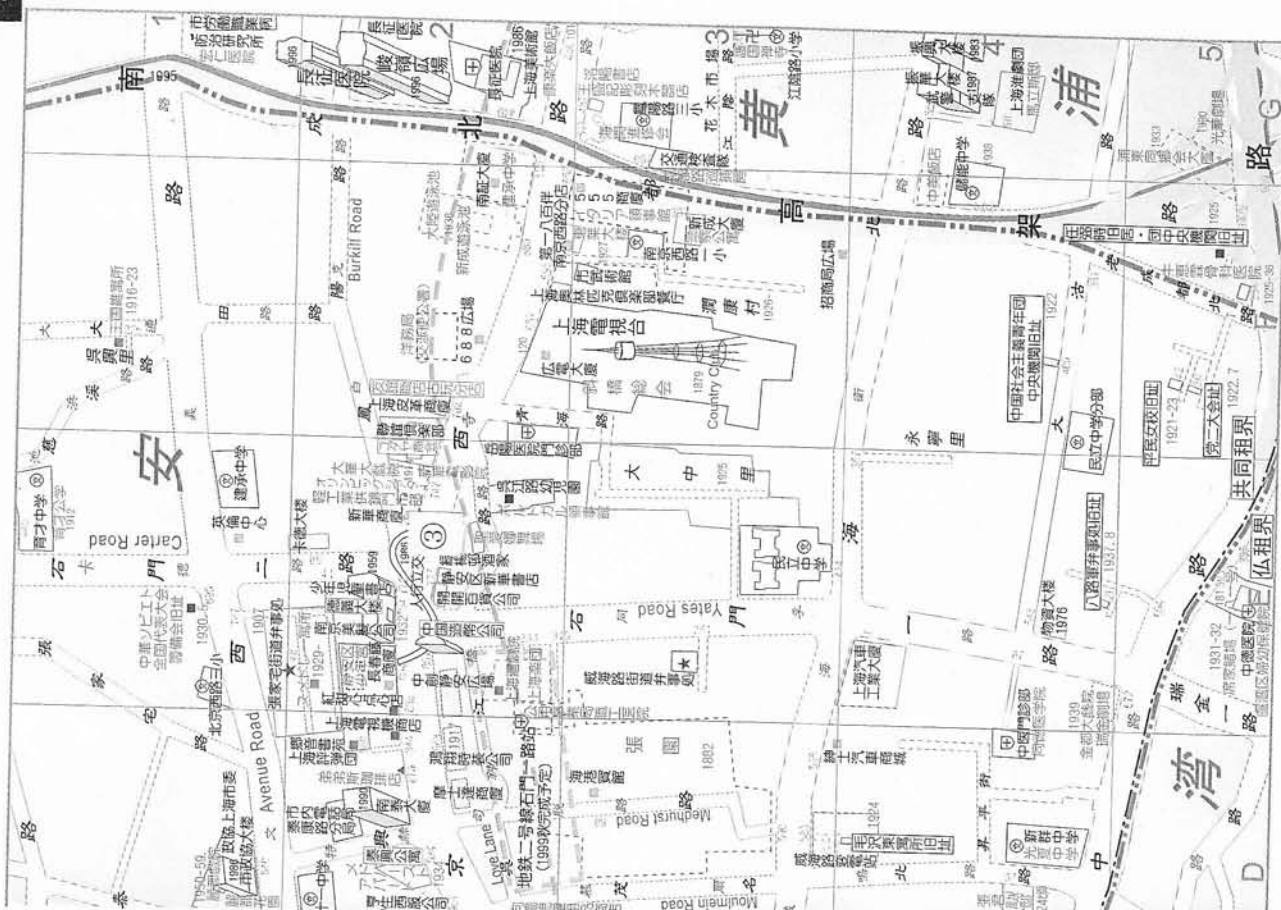
南京西路 Nanjing xilu

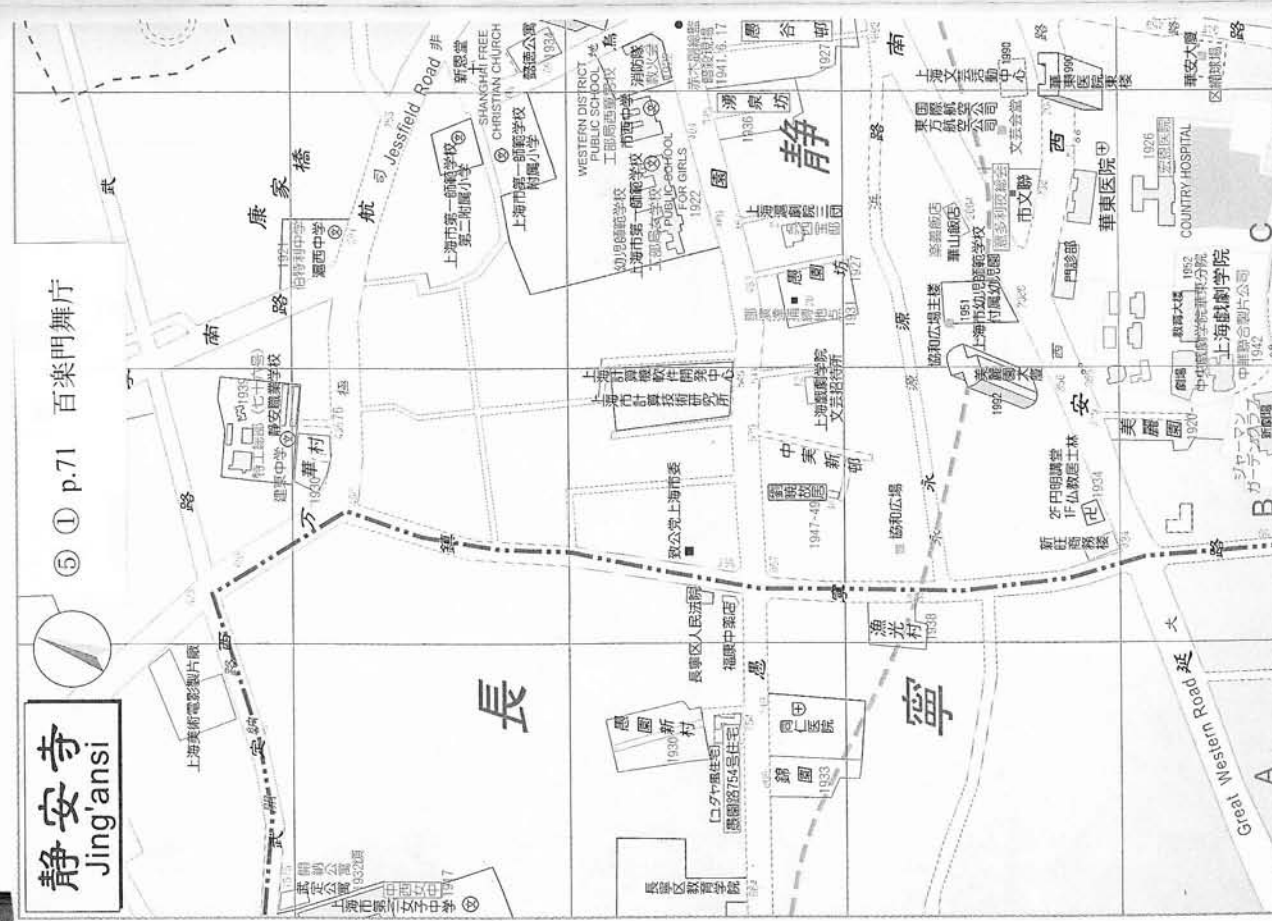
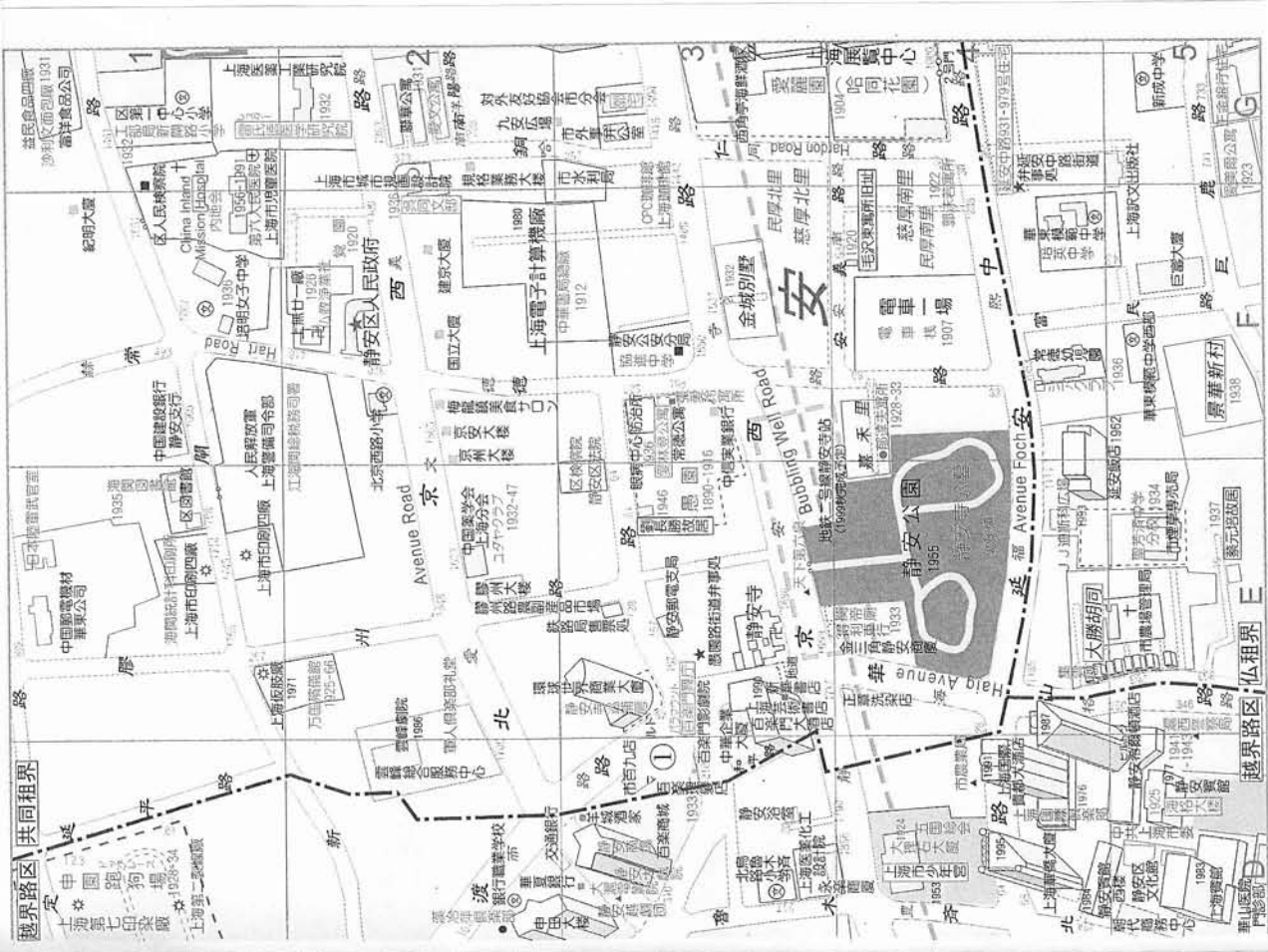
- ④ ① p.69 新仙林ダンスホール
② p.89 大都会花園舞厅
③ p.89 聖安娜



1:7000

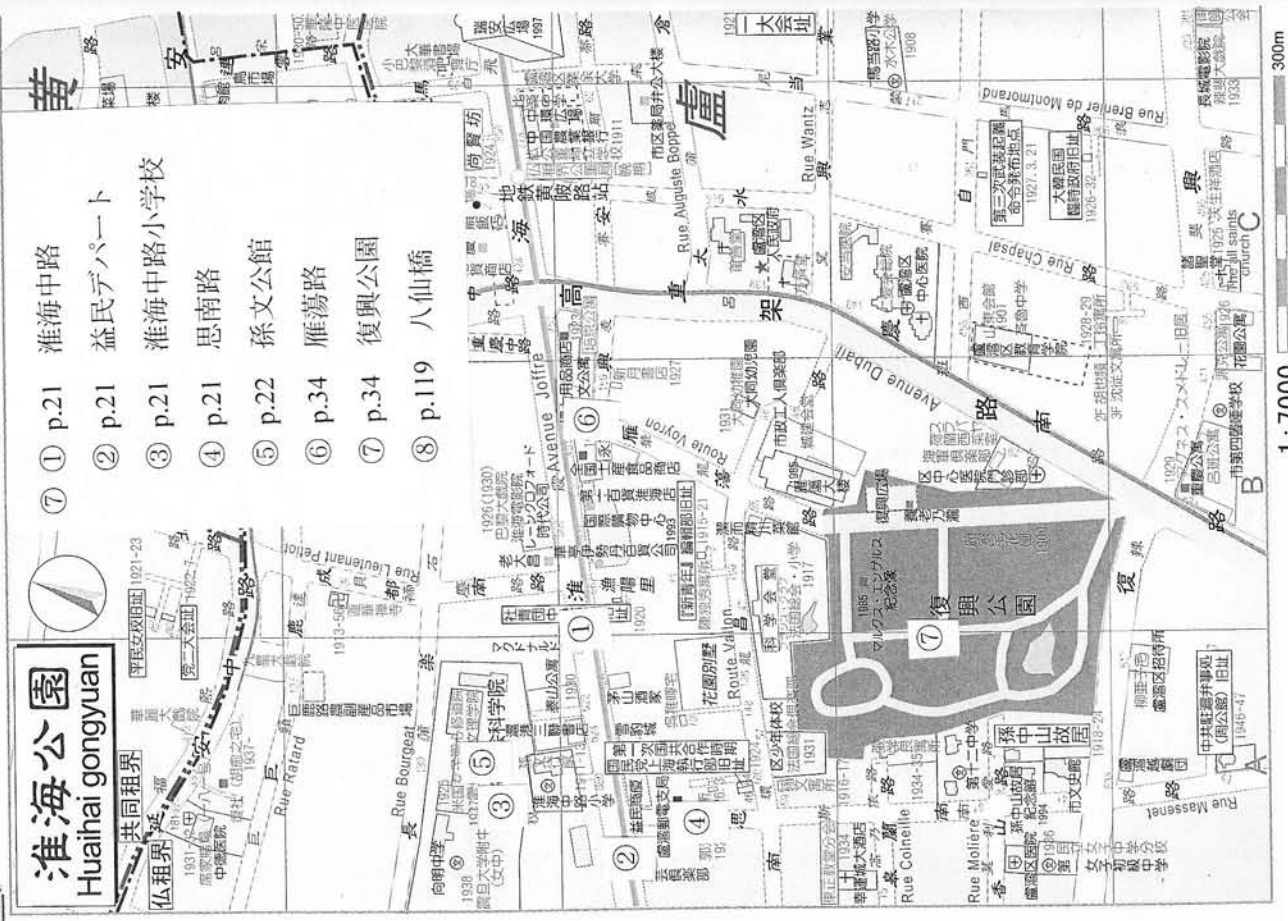
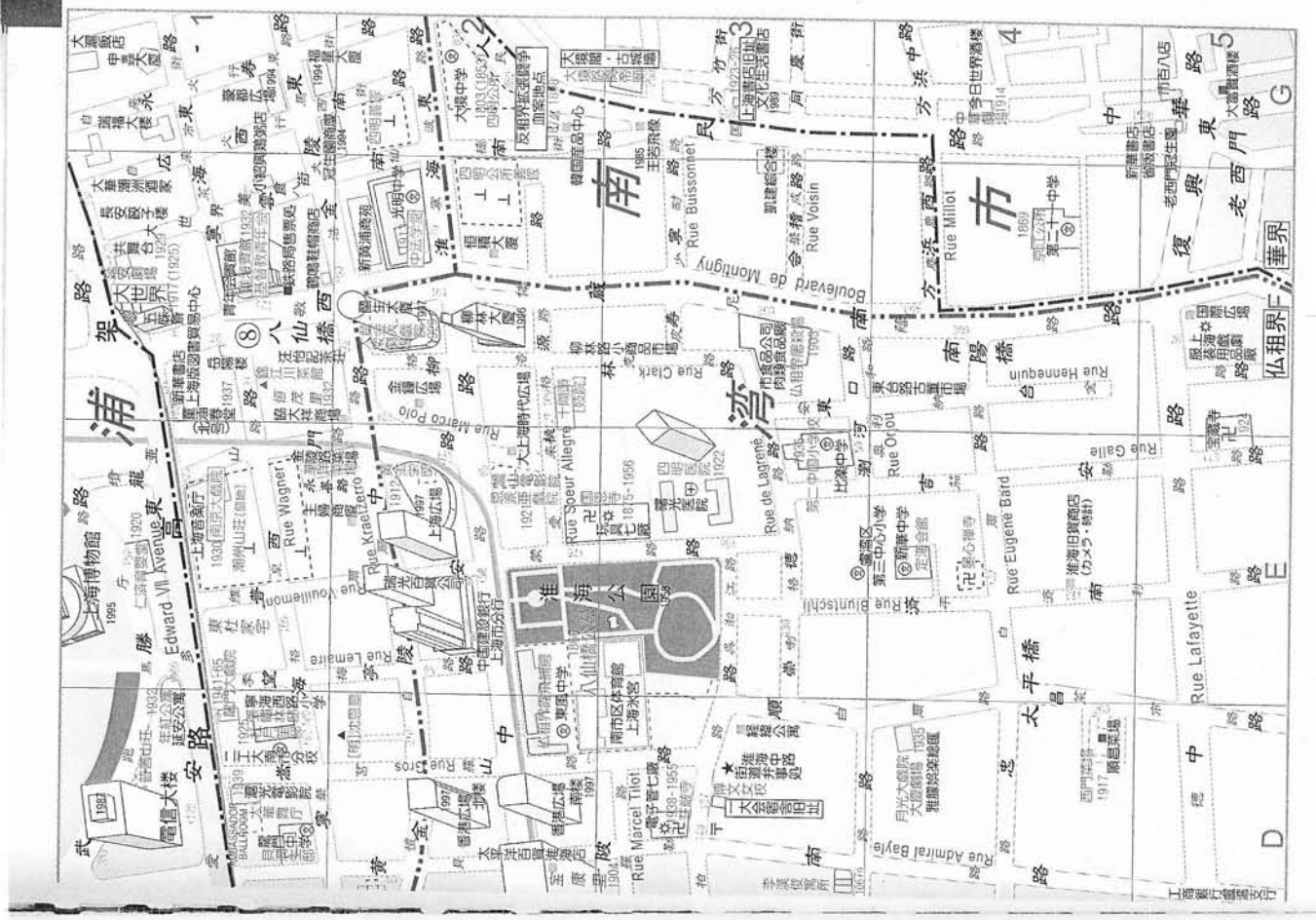
100 200 300m





静安寺
Jing'ansi

⑤ ① p.71 百樂門舞厅

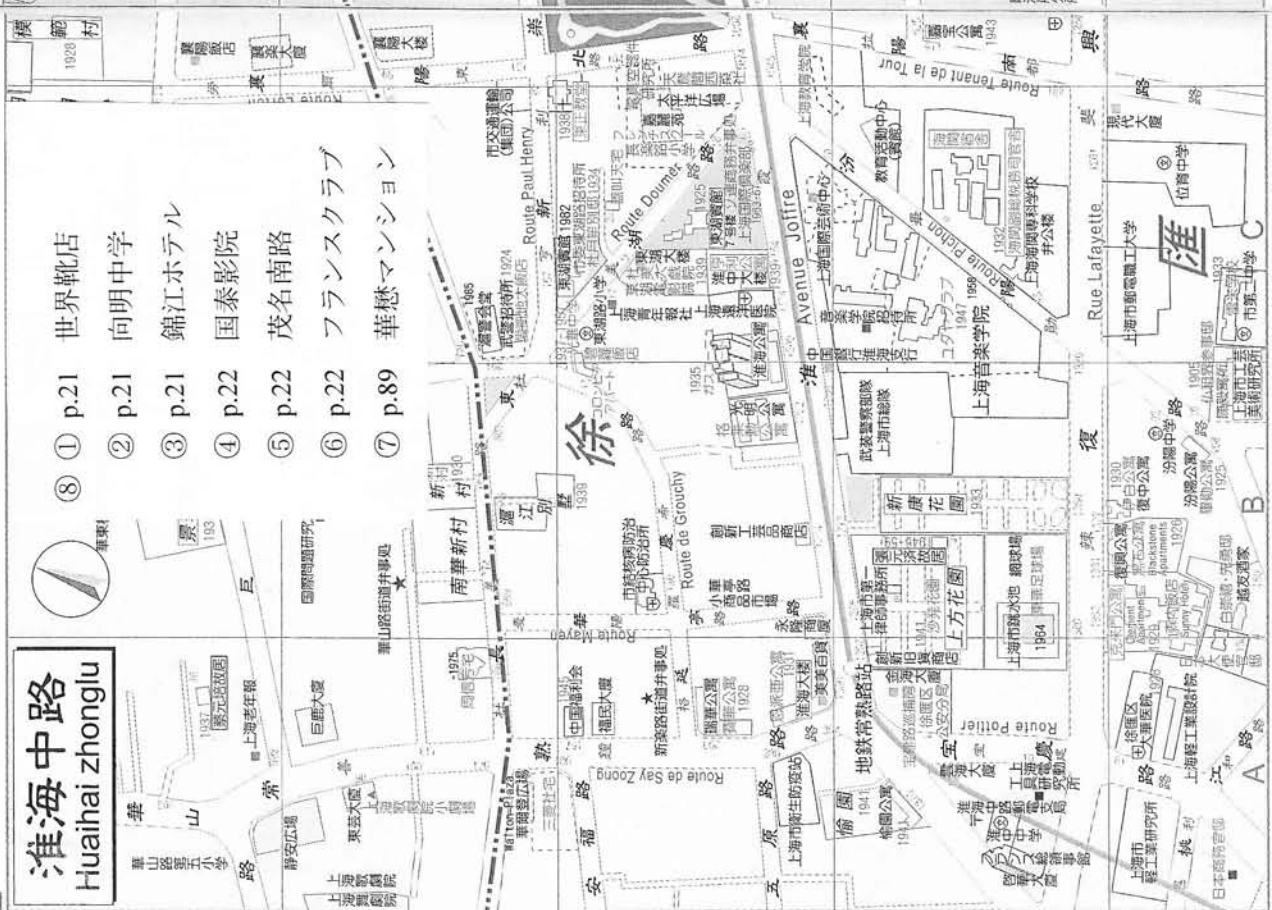


- 淮海公園
Huaihai Gongyuan
- ⑦ ① p.21 淮海中路
② p.21 益民デパート
③ p.21 淮海中路小学校
④ p.21 思南路
⑤ p.22 孫文公館
⑥ p.34 雁蕩路
⑦ p.34 復興公園
⑧ p.119 八仙橋

淮海中路 Huaihai zhonglu

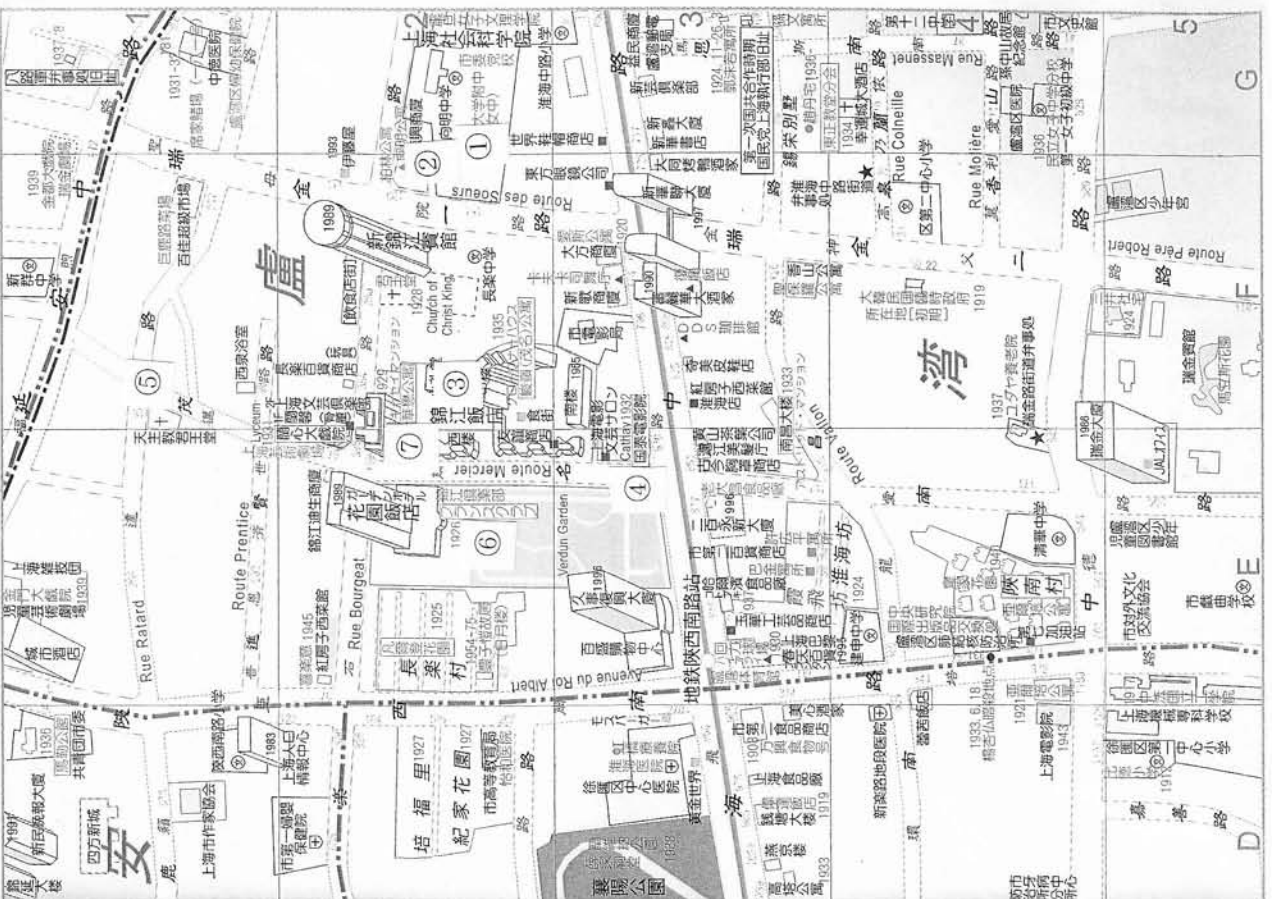


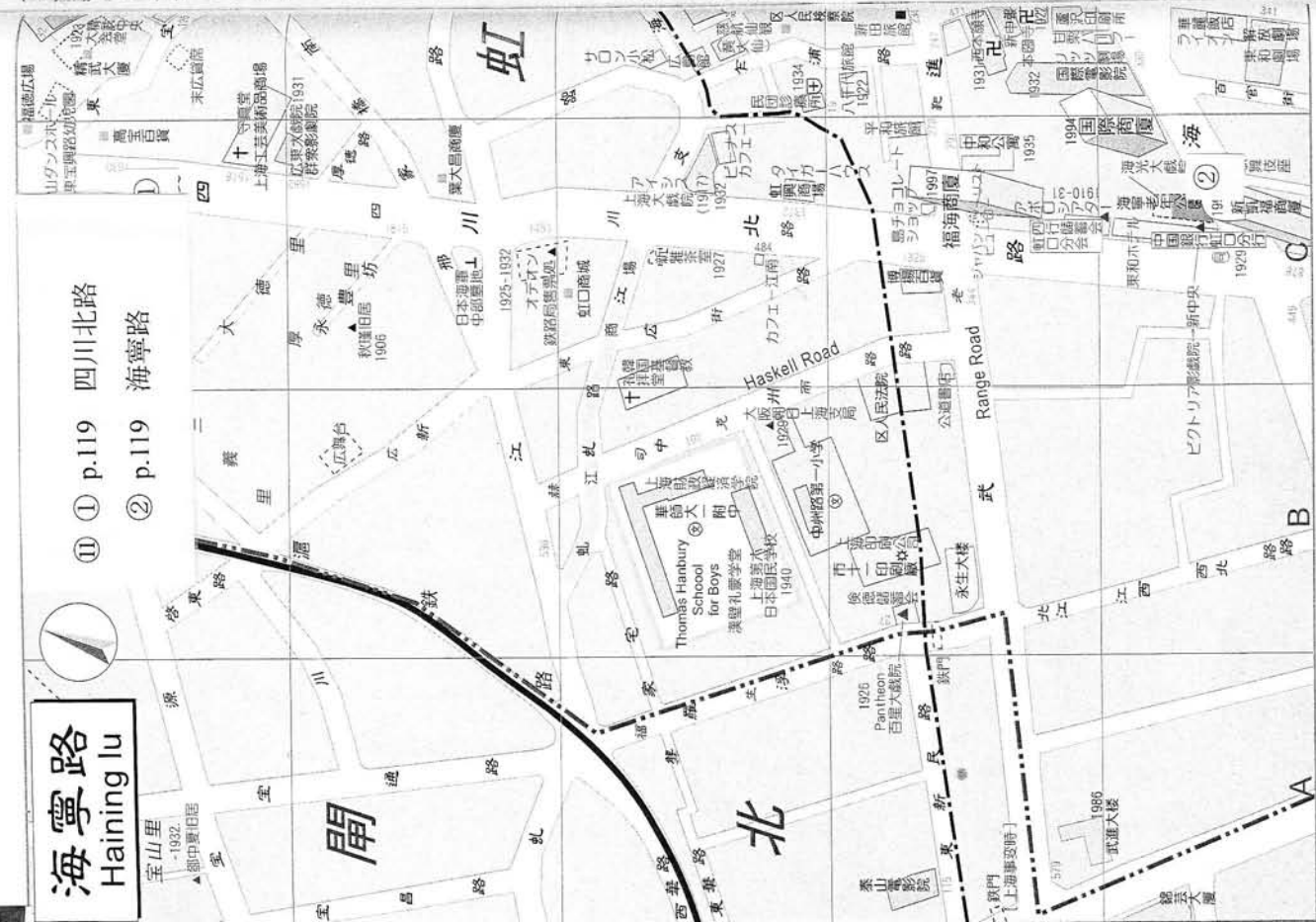
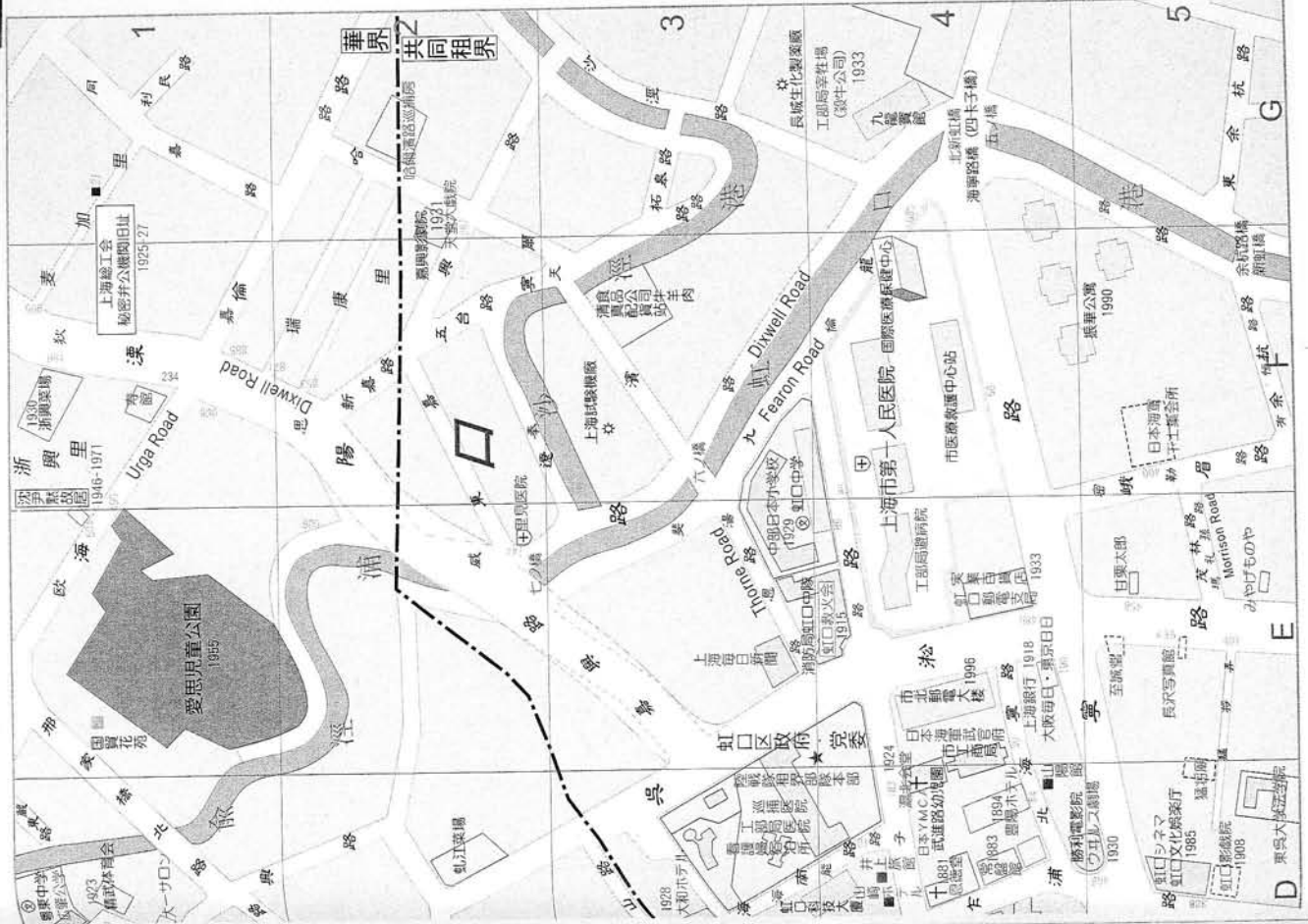
- ⑧ ① p.21 世界靴店
- ② p.21 向明中学
- ③ p.21 錦江ホテル
- ④ p.22 国泰影院
- ⑤ p.22 茂名南路
- ⑥ p.22 フランスクラブ
- ⑦ p.89 華懋マンション



1:7000

100 200 300m

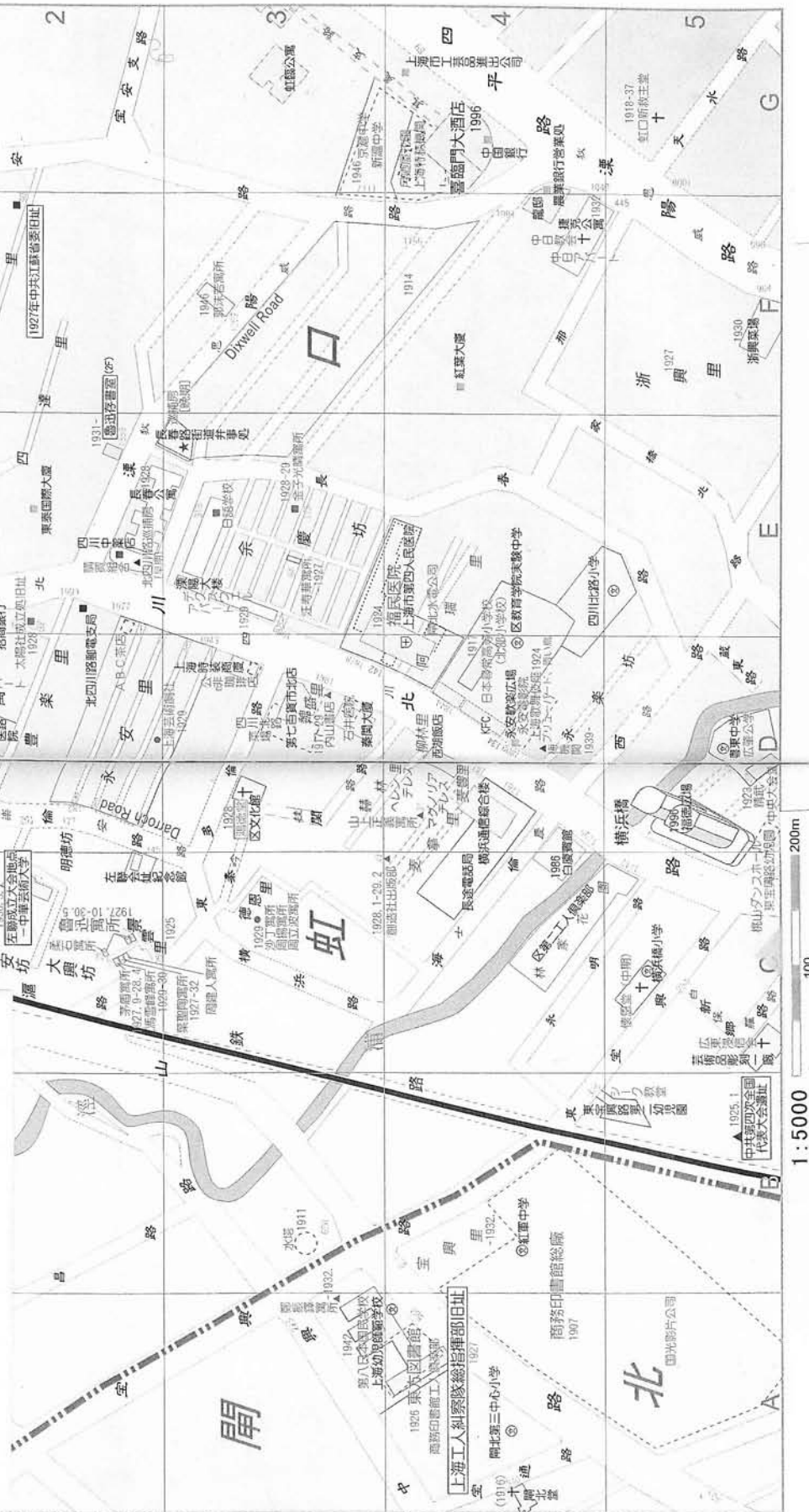




1:5000 100 200m

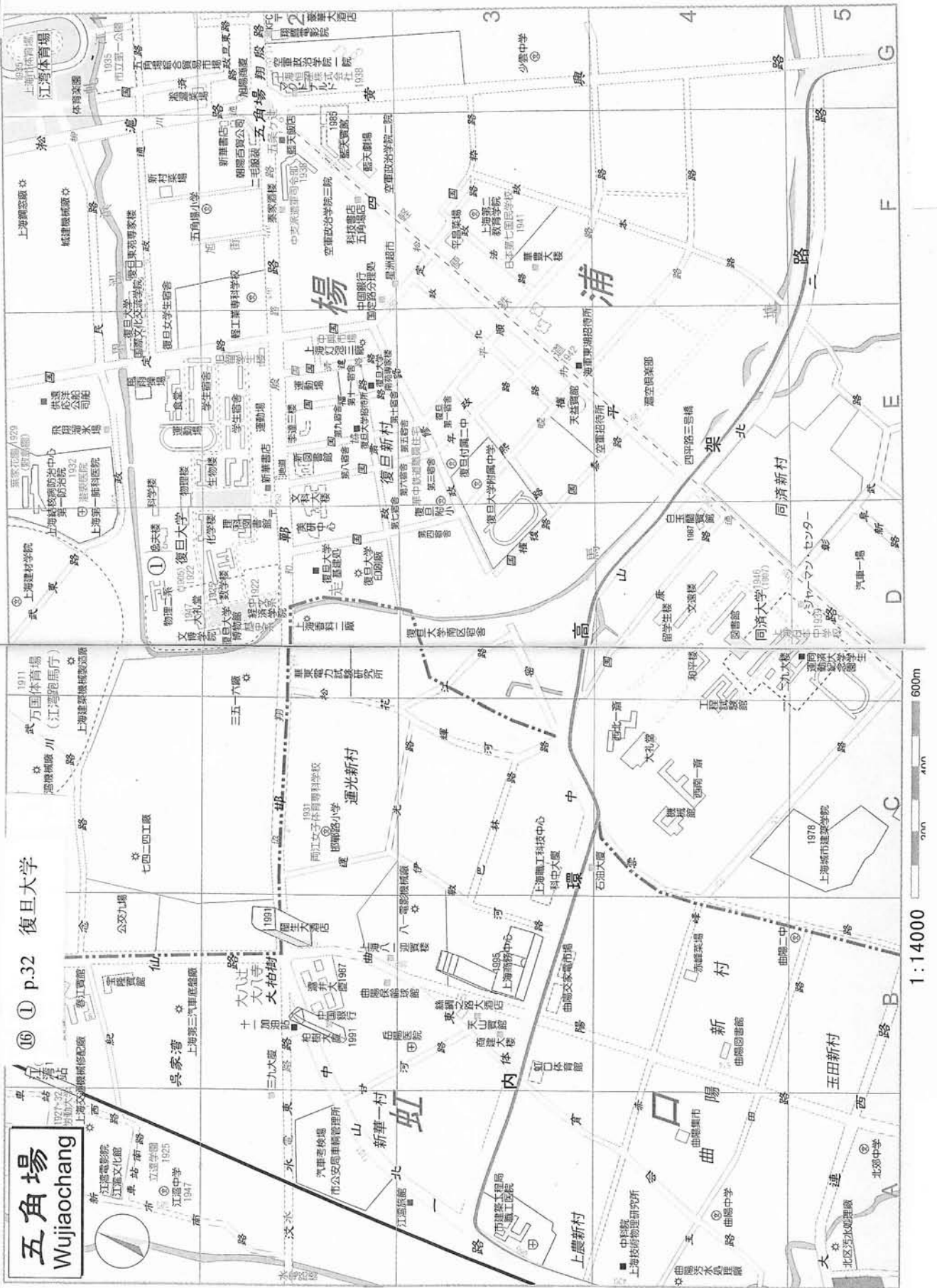
横浜橋 Hengbangqiao

- ⑫ ① p.24 魯迅の大陸新村の故居
② p.40 魯迅の閘北景雲里23号
③ p.40 魯迅の北四川路のラモスアパート



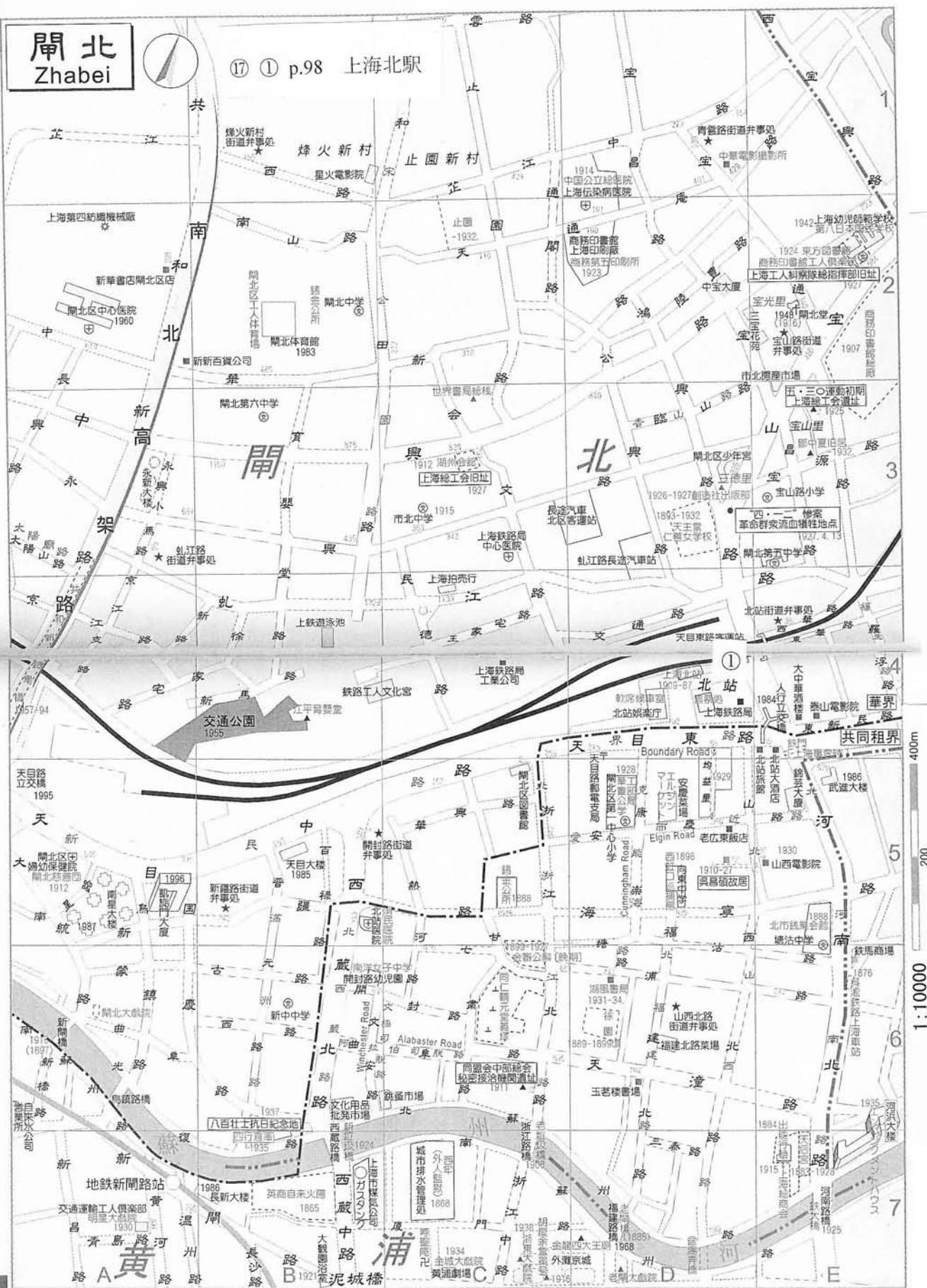
五角場 Wujiaochang

⑩ ① p.32 復旦大學



閘北 Zhabei

17 ① p.98 上海北駅

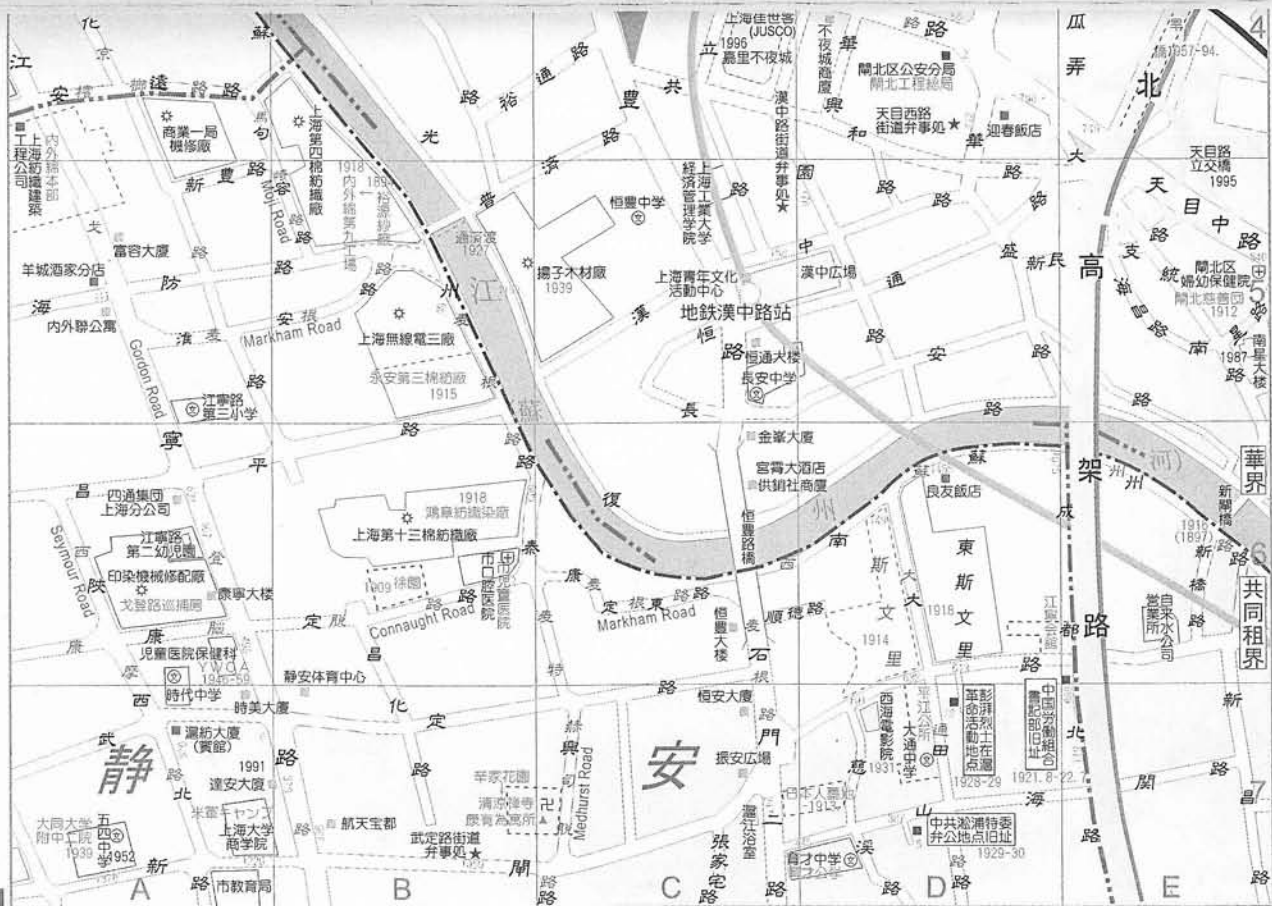


上海站 Shanghai zhan



⑬ ① p.107 蕃瓜弄棚戶區

② p.117 上海東駅

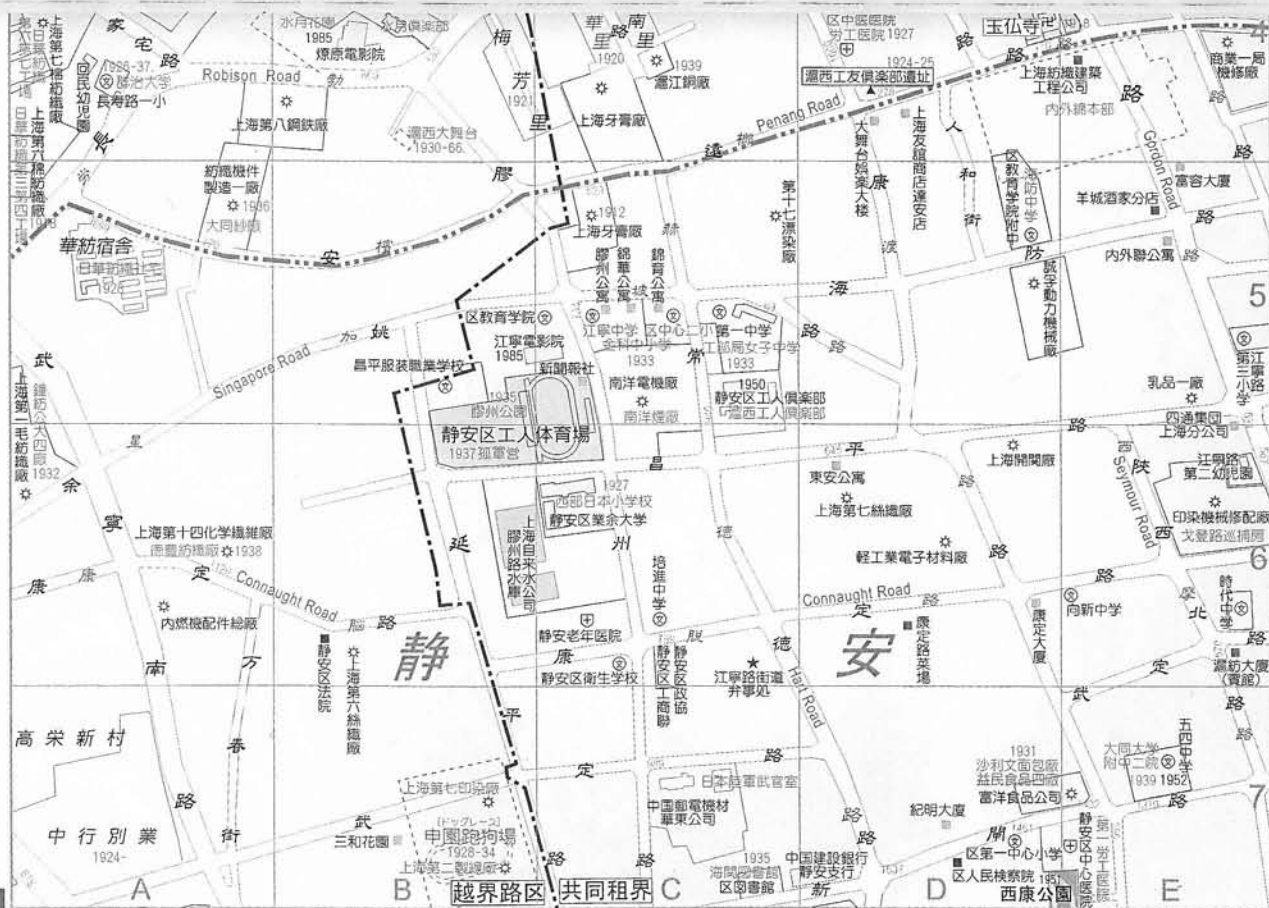


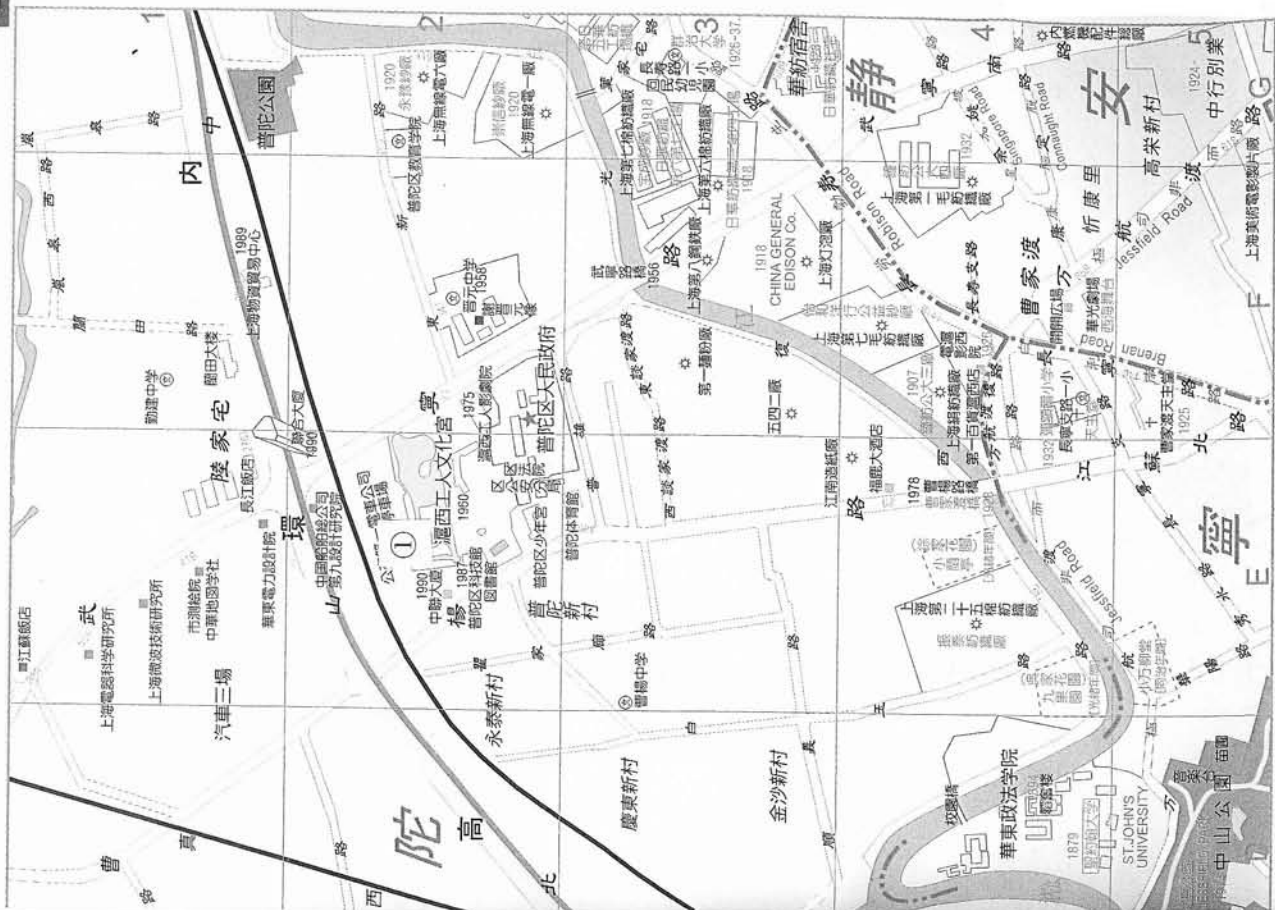
400m

1:10000

玉仏寺 Yufosi

① ② p.106 薬水弄棚戸区

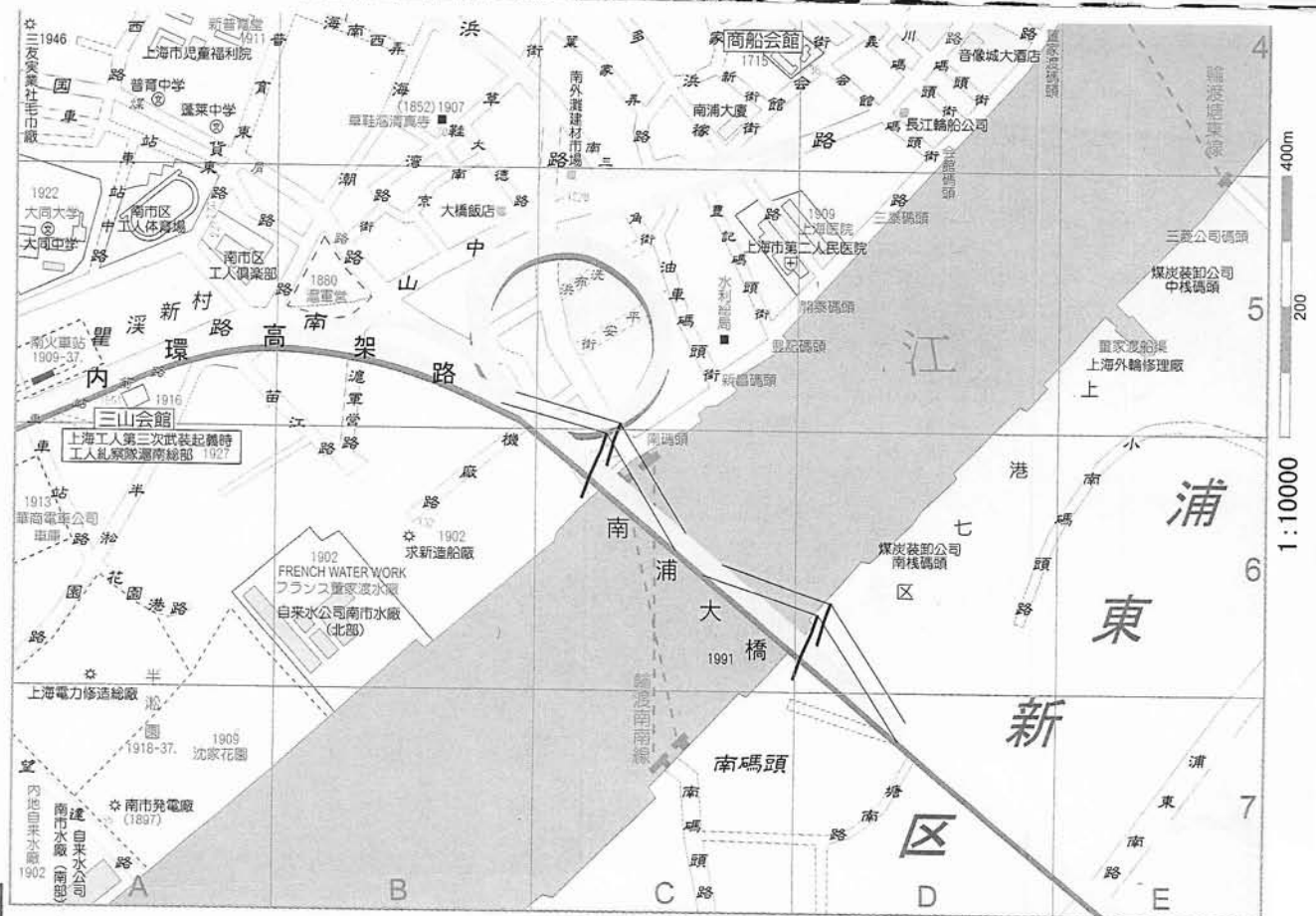




南市

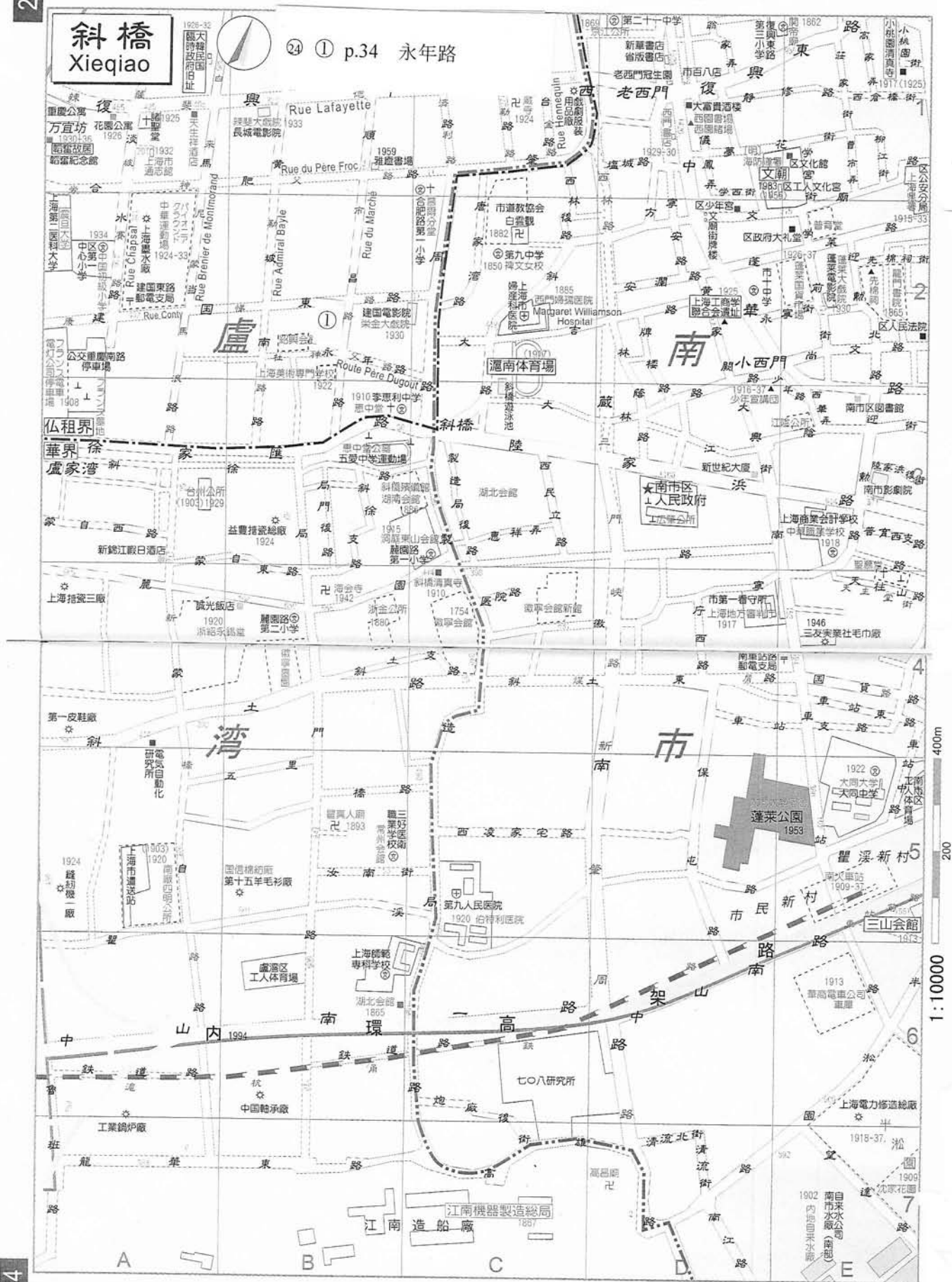
Nanshi

②③ ① p.34 清心女中旧舎



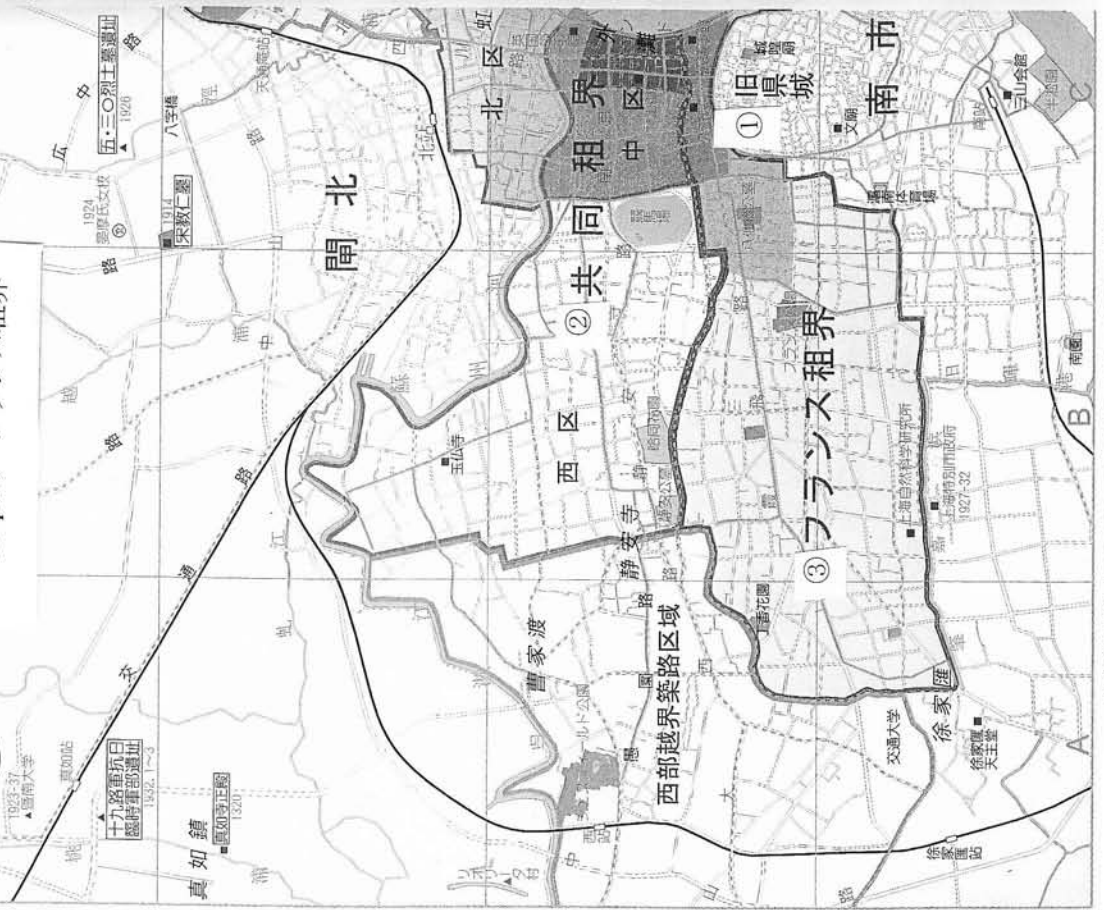
斜橋 Xieqiao

②④ ① p.34 永年路



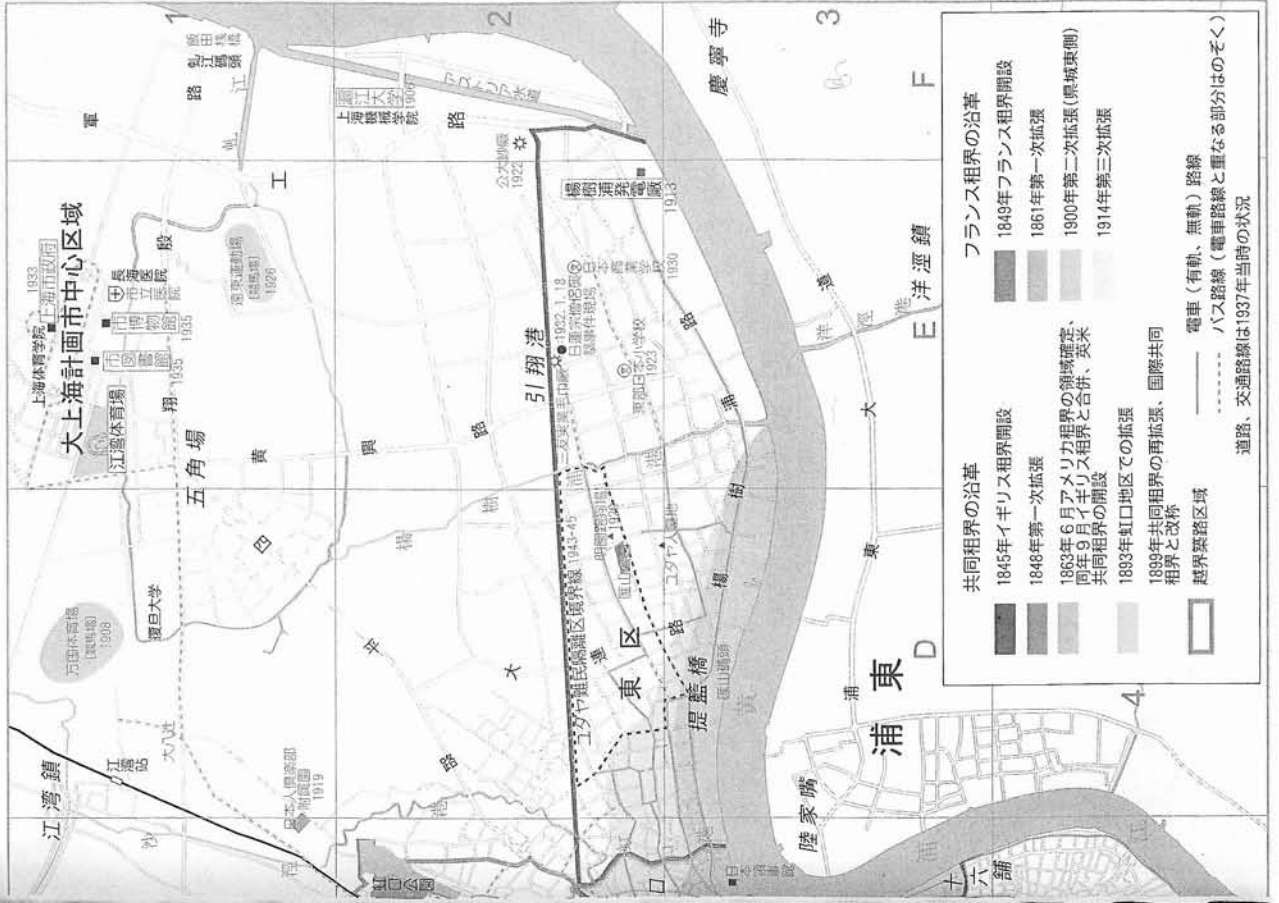
租界全図

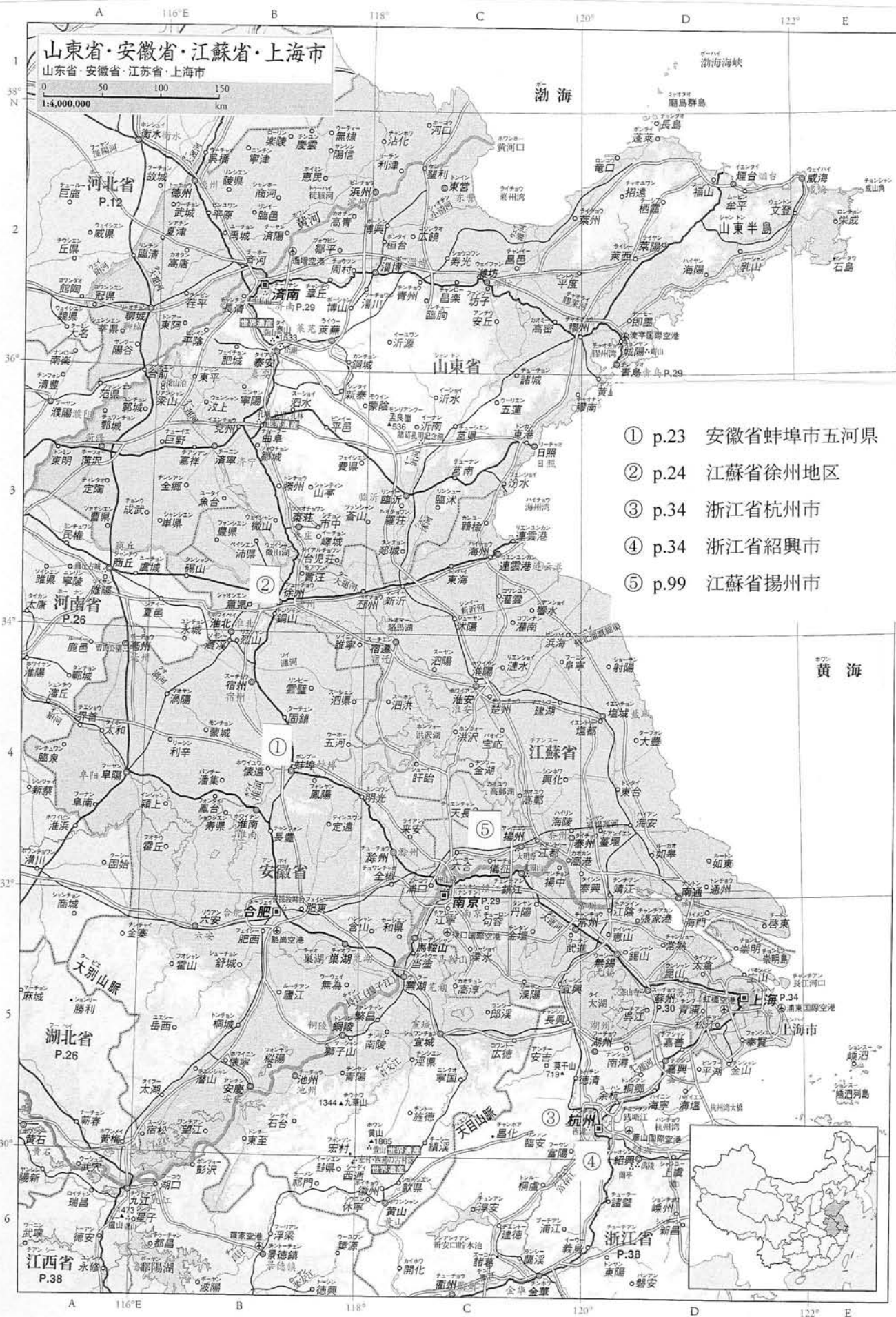
- ① p.65 旧上海租界
- ② p.96 共同租界
- ③ p.96 フランス租界

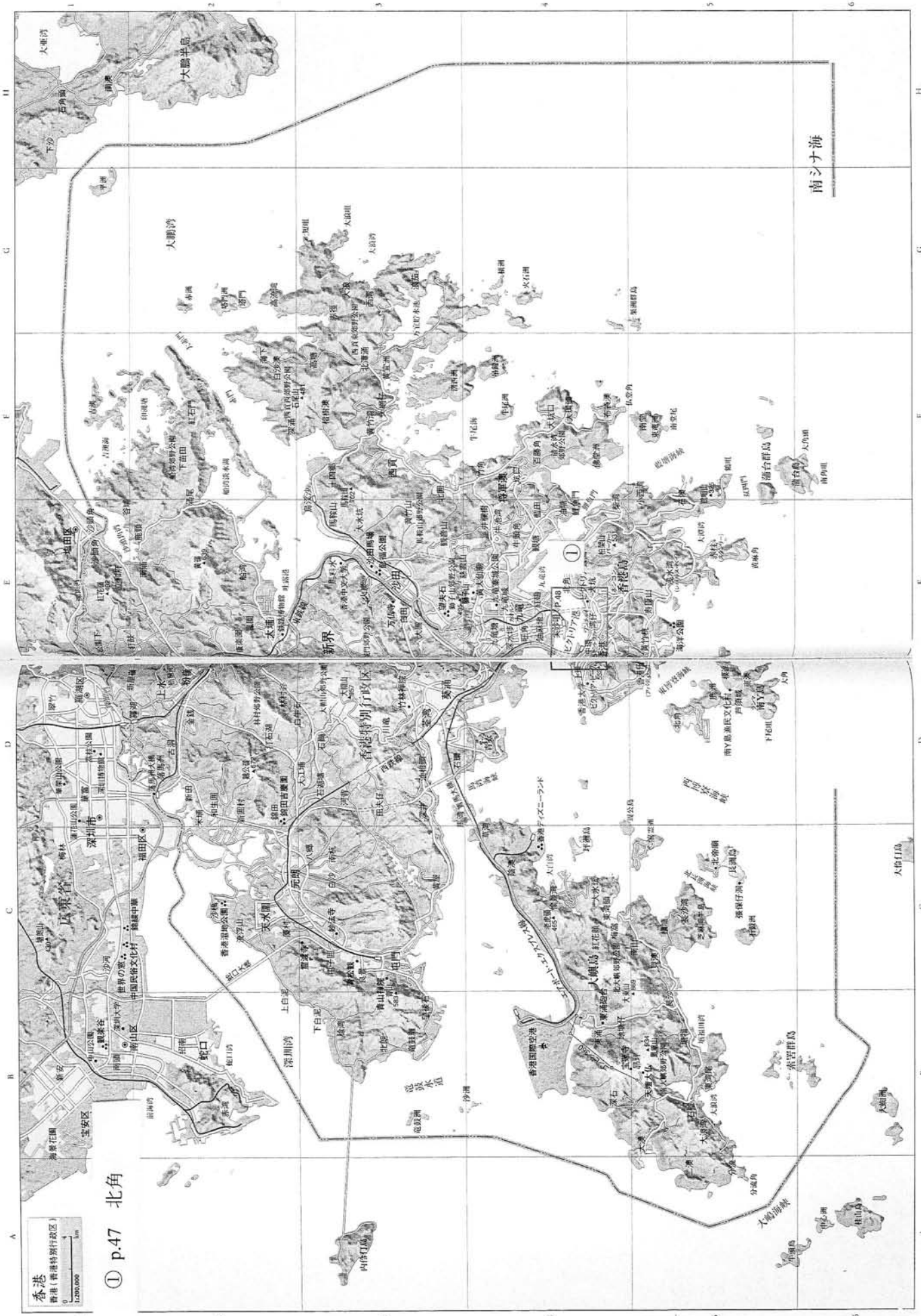


1:60000

3km



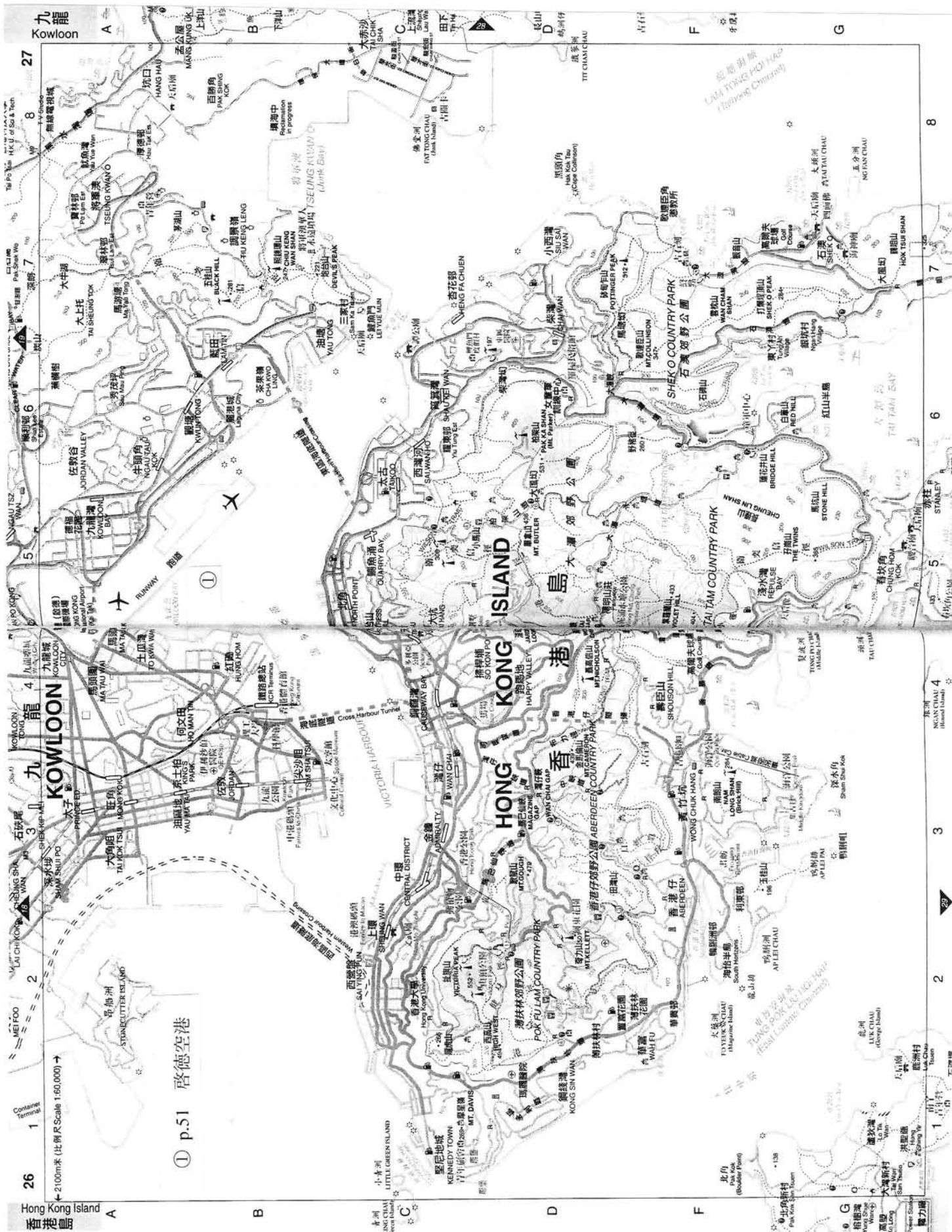




香港
香港（香港特别行政区）
1:200,000
1 km

① p.47 北角





参考文献

日本語参考文献（年代順）

- 日本経済新聞社編『華僑』日本経済新聞社 1981年7月
- 添谷育志「ノスタルジアの解剖」『埼玉大学紀要総合篇（埼玉大学教養部）』
第3巻 pp.37-65 1985年2月
- 大阪市立大学経済研究所編『世界の大都市2 上海』東京大学出版会 1986年2月
- 高島俊男「王安憶のいる弄堂——あわせてこの美人作家のルーツについて」
『季刊中国』vol7 季刊中国刊行委員会 pp.58-67 1986年冬季
- 『週刊東洋経済』4737号 1987年7月18日
- 丸山昇『上海物語』集英社 1987年10月
- 釜屋修「夢追い作家の蛻変——王安憶の『小鮑荘』」『日本の科学者』vol23 No2
日本科学者会議編集 水曜社 p.47 1988年2月
- 佐伯慶子「王安憶の『小鮑荘』」『中国文学論叢』第14号 桜美林大学 pp.187-216 1989年3月
- 王安憶著 佐伯慶子訳『現代中国文学選集 7 王安憶』徳間書店 1989年5月
- F・デーヴィス著 間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳『ノスタルジアの社会学』
世界思想社 1990年3月
- 金城辰夫他「6 記憶・思考・言語（認知心理学Ⅱ）」『図説現代心理学入門』
培風館 pp.141-160 1990年4月
- 村松伸『上海・都市と建築 1842年——1949年』PARCO出版 1991年4月
- 『月刊 しにか 特集 香港——その歴史と現在』vol.2 第7号 大修館書店
1991年7月
- イーファー・トゥアン著 小野有五・阿部一訳『トポフィリア——人間と環境』
せりか書房 1992年1月
- 前田愛『都市空間のなかの文学』ちくま学芸文庫 1992年8月
- 中山文「「三恋」試論」『野草』第52号 中国文芸研究会 pp.44-61
1993年8月
- 前田愛『増補 文学テキスト入門』ちくま学芸文庫 1993年9月
- 石井恵美子「茹志鵲作品年譜および解説」『鳥取大学教養部紀要』第27号

- pp.49-61 1993 年 11 月
 イーファー・トゥアン著 山本浩訳『空間の経験』筑摩書房 1993 年 11 月
 宮入いずみ「王安憶の『叔叔的故事』」『人文学報』253 東京都立大学人文学会
 pp.169-183 1994 年 3 月
 葛城明子・荒木猛「王安憶作品研究」『長崎大学教養部紀要(人文科学篇)』
 第 35 巻 2 号 pp.147-164 1995 年 1 月
 可児弘明・游仲勲『華僑華人——ボーダレスの世紀へ』東方書店 1995 年 3 月
 高橋孝助・古廐忠夫『上海史』東方書店 1995 年 5 月
 関根政美「多元化社会オーストラリアと中国系オーストラリア人」『オーストラ
 リア研究紀要』第 21 号 1995 年 12 月
 戸張東夫・劉文甫『台湾・香港 Q&A 100』亜紀書房 1996 年 2 月
 中山文「王安憶「神聖祭壇」論——孤立と自立——」『野草』第 57 号
 中国文芸研究会 pp.63-80 1996 年 2 月
 宮入いずみ「王安憶『紀実与虚構——創造世界方法之一種』について」
 『人文学報』273 東京都立大学人文学会 pp.163-177 1996 年 3 月
 前田比呂子「中国における戸籍移転政策——農村戸籍から都市戸籍へ——」
 『アジア経済』第 37 巻題 5 号 pp.66-91 1996 年 5 月
 中野謙二他『香港返還：その軌跡と展望』大修館書店 1996 年 12 月
 ハリー・ウー『労改』TBS ブリタニカ 1996 年 12 月
 渡辺浩平『上海路上探検』講談社現代新書 1997 年 1 月
 日本上海史研究会『上海人物誌』東方書店 1997 年 5 月
 藤井省三・大木康『新しい中国文学史』ミネルヴァ書房 1997 年 7 月
 中山文「王安憶「神聖祭壇」の女性たち」『神戸学院大学人文学部紀要』pp.55-64
 1997 年 10 月
 楊東平著 趙宏偉・青木まきこ訳『北京人と上海人 攻防と葛藤の 20 世紀』
 日本放送出版協会 1997 年 12 月
 『月刊 しにか 中国現代文学案内』vol.9 第 4 号 大修館書店 1998 年 4 月
 『週刊東洋経済』5486 号 1998 年 4 月 18 日
 阪本ちづみ「王安憶『長恨歌』——可愛的上海小姐」『季刊中国』53 号
 「季刊中国」刊行委員会 pp.69-76 1998 年 6 月
 木村尚三郎『世界の都市物語 パリ』文春文庫 1998 年 12 月
 ゲオルク・ジンメル著 北川東子編訳 鈴木直訳『ジンメル・コレクション』

- 筑摩書房 1999 年 1 月
- 根橋正一『上海——開放性と公共性』流通経済大学出版会 1999 年 2 月
- エドワード・レルフ著 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学』
筑摩書房 1999 年 3 月
- エドワード・W・サイード著 板垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳『オリエンタリズム』上下 平凡社 1999 年 6 月
- 木之内誠『上海 歴史ガイドブック』大修館書店 1999 年 6 月
- ハインツ・ゴルヴィツァー著 瀬野文教訳『黄禍論とは何か』草思社
1999 年 8 月
- 石井恵美子「大躍進時期における茹志鵬のルポタージュ」『鳥取大学教養地域科学部紀要』第 1 巻 第 1 号 pp.253-264 1999 年 9 月
- 和田博文・大橋毅彦・真銅正宏・竹松良明・和田桂子『言語都市・上海 1840-1945』藤原書店 1999 年 9 月
- 『月刊 しにか 上海歴史探検』vol.11 第 7 号 大修館書店 2000 年 7 月
- 和田知久・森岡優紀・上村香織・新谷秀明「中国作家紀行 99 インタビュー四編・人への回帰 ——王安憶」『野草』第 66 号 中国文芸研究会 pp. 50-74
2000 年 8 月
- 小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店 2001 年 4 月
- 中森志乃「王安憶論 ——作品分析に見る近代都市上海——」東京大学修士学位論文 2001 年
- 劉小俊「王安憶『我愛比爾』の意義」『野草』第 69 号 中国文芸研究会 pp. 134-146
2002 年 2 月
- 劉怡「王安憶の描く上海 ——『長恨歌』を中心に——」『人文学報』331 東京
都立大学人文学会 河出書房 pp.143-160 2002 年 3 月
- 馬杉宗夫『パリのノートル・ダム』八坂書房 2002 年 6 月
- 松丸道雄他『世界歴史大系 中国史 5』山川出版社 2002 年 6 月
- 菊池敏夫・日本上海史研究会編『上海職業さまざま』勉誠出版 2002 年 8 月
- フィリップ・ミシェル＝チリエ著 保苺瑞穂監修 湯沢英彦・横山裕人・中野知
律訳『事典 プルースト博物館』筑摩書房 2002 年 8 月
- ガストン・バシュラール著 岩村行雄訳『空間の詩学』ちくま学芸文庫
2002 年 10 月
- 石井恵美子「沈之瑜と家族 ——王安憶の随筆から」『日本中国当代文学研究会

- 会報』第 17 号 pp.66-72 2003 年 10 月
- 松村志乃「王安憶『香港の情と愛』論」『日本中国当代文学研究会会報 第 17 号』
日本中国当代文学研究会 pp. 1-7 2003 年 10 月
- 王曉明著 千野拓政・中村みどり訳「上海はイデオロギーの夢を見るか？王安憶
の小説創作の変化から」『接続』接続刊行会 pp.36-79 2004 年 1 月
- 劉小俊「保姆たちの家への渴望——王安憶『富萍』と『鳩雀一戦』について」
『ジェンダーからみた中国の家と女』関西中国女性史研究会編 東方書店
pp.251-273 2004 年 2 月
- ヴィクトル・ユゴー著 辻昶・松下和則訳『ヴィクトル・ユゴー文学館 第五巻 ノ
ートル=ダム・ド・パリ』潮出版社 2004 年 2 月
- 張小紅「都市とは華やかな衣装なり」『野草』第 74 号 中国文学研究会 pp.30-57
2004 年 8 月
- 本橋哲也『ポストコロニアリズム』岩波書店 2005 年 1 月
- 関西中国女性史研究会編『中国女性学入門』人文書院 2005 年 3 月
- 劉小俊「都会の周縁に生きる女性たち——文学作品にみる保姆のありかた——」
『中国 21』vol.25 愛知大学現代中国学会編 2006 年 9 月
- 松村志乃「『西洋』への追求——王安憶『我愛比爾』試論」『日本中国当代文学
研究会会報 第 20 号』日本中国当代文学研究会 pp. 1-13 2006 年 11 月
- 劉小俊「王安憶の再評価——『我愛比爾』と『上種紅菱下種藕』を中心に」
『同志社女子大学 学術研究年報』第 58 巻 pp.43-51 2007 年 2 月
- 小柳淳・田村早苗『現代の香港を知る KEYWORD 888』三修社 2007 年 7 月
- 恵谷修「収容所大陸『労改』——収容所リスト全リスト」『サピオ』19 pp. 5-7
2007 年 8 月
- 二宮克美他「2 学習・記憶」『ベーシック心理学』医歯薬出版株式会社 pp. 16-26
2008 年 1 月
- 松村志乃「王安憶と「尋根」」『中国研究月報』vol.62 No.4(No.722) pp.32-45
2008 年 4 月
- 地球の歩き方編集室『地球の歩き方 香港 2008～2009』ダイヤモンド社
2008 年 7 月
- 應雋「中国都市における「移民」の多層構造の様相とその形成要因——上海市
に居住する「移民」の事例を中心に——」『環日本海研究年報』第 16 号
pp.123-139 2009 年 2 月

西本武彦他「第 11 章 記憶」『テキスト現代心理学入門』川島書店 pp.213-229

2009 年 5 月

松村志乃「転換期における王安憶の文学観——『心靈世界 王安憶小説講稿』

を中心に」『中国研究月報』vol.64 No.2(No.744) pp.17-31 2010 年 2 月

ジョナ・レーラー著 鈴木晶訳『プルーストの記憶、セザンヌの眼——脳科学を
先取りした芸術家たち』白揚社 2010 年 6 月

濱田麻矢「『野草』85 号合評 王安憶『香港的情与愛』における老魏のトポフイ
リア」『野草』第 86 号 中国文芸研究会 pp.135-137 2010 年 8 月

王安憶参考文献（年代順）

王安憶『紀実与虚構』人民文学出版社 1993 年 6 月

王安憶『傷心』華芸出版社 1995 年 1 月

王安憶『心靈世界 ——王安憶小説講稿』復旦大学出版社 1997 年 12 月

王安憶『我愛比爾』南海出版公司 2000 年 1 月

王安憶『富萍』湖南文芸出版社 2000 年 9 月

王安憶『文工団』文化文芸出版社 2001 年 9 月

王安憶『尋根上海』学林出版社 2001 年 11 月

王安憶『上種紅菱下種藕』南海出版公司 2002 年 1 月

王安憶『茜紗窓下』上海文芸出版社 2002 年 10 月

王安憶『長恨歌』南海出版公司 2003 年 8 月

王安憶『王安憶説』湖南文芸出版社 2003 年 9 月

茹志鵬著 王安憶編『她從那條路上來』上海文芸出版社 2005 年 4 月

王安憶『街灯底下』山東画報出版社 2005 年 5 月

王安憶『悲慟之地』文匯出版社 2006 年 6 月

王安憶『上海女性』中国盲文出版社 2008 年 2 月

王安憶『王安憶短編小説編年』卷 1～4 人民文学出版社 2009 年 1 月

中国語参考文献（年代順）

馬超「王安憶小説の時空背景」『天水師專学報』1997 年 第 4 期 第 17 卷

徐坤「重重簾幕密遮灯 ——九十年代的中国女性文学写作」『作家』

- 1997 年 8 月
 南帆「城市的肖像——讀王安憶的『長恨歌』」『小說評論』 pp.66-73
- 1998 年第 1 期
 陳思和「營造精神之塔——論王安憶 90 年代初的小說創造」『文學評論』 pp.50-60
- 1998 年 6 月
 王干「老遊女金：90 年代城市文學的四種敘述形態」『廣州文芸』 pp.63-68
- 1998 年 9 月
 戴雲雲『上海小姐』上海畫報出版社 1999 年 7 月
 李歐梵「當代中國文化的現代性和後現代性」『文學評論』 pp.129-139
- 1999 年 12 月
 汪政 曉華「論王安憶」『鐘山』 2000 年 第 4 期
 唐曉丹「解讀『富萍』，解讀王安憶」『當代文壇』 2001 年 第 4 期
 倪文尖「上海／香港：女作家眼中的“雙城記”」『文學評論』 pp. 87-93
- 2002 年第 1 期
 王曉明「從“淮海路”到“梅家橋”——從王安憶小說創作的轉變談起」
 『文學評論』 2002 年 第 3 期
 俞潔「上海城市的當代解讀——對王安憶的兩個長篇：『長恨歌』『富萍』
 『杭州師範學院學報』 pp.68-71 2002 年 7 月
 羅曉靜「論王安憶『長恨歌』的文化意蘊」『邵陽師範高等專科學校學報』 pp.21-22
- 2002 年第 24 卷第 3 期
 李小紅「王安憶 VS 劉金冬 我是女性主義者嗎？」『文學、藝術與性別』江蘇人民
 出版社 2002 年
 高秀芹「都市的遷徙——張愛玲與王安憶小說中的都市時空比較」『北京大學學
 報』 2003 年第 1 期
- 李靜「不冒險的旅程——論王安憶的寫作困境」『當代作家評論』 2003 年第 1 期
 王德威「香港情與愛——回歸後的小說敘事與欲望」『當代作家評論』 pp.91-99
- 2003 年 5 月
 王德威「記憶的城市，虛構的城市 I：海派文學，又見佗人」『現代中國小說十講』
 pp.278-298 2003 年 10 月
 王德威「記憶的城市，虛構的城市 II：香港的情與愛」『現代中國小說十講』
 pp.300-321 2003 年 10 月
 陳思和「懷舊傳奇與左翼敘事：『長恨歌』」『中國現當代文學名篇十五講』北京大

學出版社 2003 年 12 月

吉素芬「『富萍』：人生的另一種審美形式」『商丘師範學院學報』 2004 年 2 月

許洪新『上海老弄堂』 上海科學技術文獻出版社 2004 年 5 月

滕朝軍「王安憶小說的移民書寫」『哈爾濱學院學報』 2004 年 6 月

田廣文「試析王安憶的“雙子星座”小說」『綏化學院學報』 第 25 卷 第 1 期

2005 年 2 月

鄭國慶「全球化時代的自我認同——論王安憶『我愛比爾』」『中華讀書報』

2005 年 10 月 12 日

王進「第三章『長恨歌』：雙重“歷史”視野下的“上海”書寫」『魅影下的“上海”書寫』 廣西師範大學出版社 2006 年 4 月

吳義勤主編 王志華 胡健玲編選『王安憶研究資料』山東文芸出版社

2006 年 5 月

施福康主編『上海社會大觀』 上海書店出版社 2006 年 5 月

羅蘇文『近代上海 都市社會與生活』中華書局 2006 年 7 月

向心韻「城與人——淺析新都市小說的幾種類型模式」『全球化語境下的當代都市文學』 社會科學文獻出版社 pp.265- 276 2007 年 8 月

未名主編『永遠的 1977』北京大學出版社 2007 年 8 月

李淑霞『王安憶小說創作研究』中國海洋大學出版社 2008 年 5 月

李歐梵『上海摩登』上海三聯書店 2008 年 6 月

李洪華『上海文化與現代派文學』秀威資訊科技股份有限公司 2008 年 10 月

徐華龍主編『上海風俗』上海文芸出版社 2009 年 5 月

沈瓊「快城與快客——文學創作中的新上海人形象」『上海文學發展報告 2009』

上海人民出版社 2009 年 6 月

張笑川『近代上海閘北居民社會生活』上海辭書出版社 2009 年 6 月

張新穎 金理編『王安憶研究資料』上下 天津人民出版社 2009 年 7 月

華霄穎『市民文化與都市想象——王安憶上海書寫研究』上海文化出版社

2009 年 10 月

任學剛主編『上海歷史人文地圖』上海人民出版社 2010 年 1 月

事典類

山下主一郎他『イメージ・シンボル事典』大修館書店 1984 年 3 月

『中国文化大革命事典』中国書店 1996 年 12 月

金光仁三郎他 『世界シンボル大事典』大修館書店 1996 年 12 月

『岩波中国現代事典』岩波書店 1999 年

日本林業技術協会編『森林・林業百科事典』丸善 p.782 2001 年 5 月

邑田仁『新訂 原色樹木大図鑑』北隆館 p.800 2004 年 4 月

地図

通用図書有限公司『香港街道大厦詳図』第三版 通用図書有限公司

1996 年 12 月

上海市測繪院編制『2003 年版上海城市交通図』上海科学技術出版社

2003 年 4 月

平凡社編『ベーシックアトラス 中国地図帳』平凡社 2008 年 7 月

『中華人民共和国省級行政単位系列図浙江省』中国地図出版社 2009 年 4 月